

岡本綺堂日記

昭和八年一月～昭和九年十二月

岡本綺堂日記

昭和八年一月～昭和九年十二月

昭和八・九年の岡本綺堂について	横山泰子	2
岡本綺堂日記研究会の活動について	赤井紀美	6
凡例		10
昭和八年		14
昭和九年		153

昭和八・九年の岡本綺堂について

横山泰子

演劇博物館には大正十二（一九二三）年七月から昭和十三（一九三八）年十二月までの岡本綺堂の自筆の日記が所蔵されている（昭和十三年十月～十二月は岡本経一氏の筆）。ノートに縦書きで記されており、一年で一冊、計三十冊ある。関東大震災により多くの蔵書と、それまで書き続けてきた日記を焼失した綺堂だが、震災時に持ち出した荷物のなかに書きかけの日記を見つけ、書き継ぐことにしたという。大正十二年から昭和五（一九二七）年までの日記は、岡本経一氏が『岡本綺堂日記』『岡本綺堂日記・続』（青蛙房）として、翻刻し出版したが、残りの昭和六（一九三一）年から昭和十三年までの八年間分は未公開・未翻刻であった。

日記の未公開部分は、高齢となった綺堂の生活や、当時の劇壇の様子を知る上で貴重な資料である。そこで、岡本綺堂日記に関心のある研究者を中心に「岡本綺堂日記研究会」を組織し、二〇二五年中に日記の全部をデジタル化した。さらに未公開部分の翻刻作業を開始し、昭和六・七年分の翻刻は完了している。成果として、紙版『岡本綺堂日記 昭和六年一月～昭和七年十二月』（二〇二五年七月）を作成した。同時に、早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点の web ページ上に翻刻分のデジタルデータも公開している（URLは十二頁を参照）。

その後も日記の翻刻作業は継続され、昭和八・九年分の翻刻が完了し、本書を作成する運びとなった。ここで、昭和八・九年当時の岡本綺堂について簡単に記しておきたい。明治五（一八七二）年生まれの岡本綺堂は既に還暦を過ぎ、齒痛や風邪、頭痛、腹痛など様々な体調不良に苦しめられながらも、新作戯曲を書き、随筆集『猫やなぎ』を上梓するなど、執筆活動を続け、後進の指導にあたっていた。本書収録分の綺堂の人生のトピックとして、注目を三つ挙げる。

- ① 上目黒への転居 昭和八年五月三十日、住み慣れた元園町の家を引き払い、上目黒に移転した。昭和八年五月二十九日の日記には「今の元園町は昔の元園町ではない。大東京の中央区となってしまうて、私等の住むべき土地ではなくなったのであるから仕方がない」と心境を記している。『綺堂年代記』（岡本経一）によると、病気がちの自分と妻の静養安息所を郊外に持ち、姉の隠居所ともしたいと建てたのが、上目黒の別宅（西郷山房）であった。別宅は七年四月に落成したが、二拠点居住はかえって面倒が増えてしまった。そこで、別宅に建て増しをして、引き移ったのだが、ここが終焉の家となる。昭和八・九年の日記には新生活の様子が克明に記されており、興味深い。元園町時代も散歩をしていた綺堂は、転居後もよく歩き「道玄坂を第一の区域としていた」（『綺堂年代記』）。目黒の家の庭は広く、園芸趣味を満喫していた。劇作の困難 この頃の綺堂の新作戯曲を挙げてみると、昭和八年は「大久保彦左衛門」（史劇）、「鎌」（現代劇）、九年は「第一日の午前」（史劇）、「狐の皮」（現代劇）、「菅丞相」（史劇）、「書畫屋の半時間」（ラジオドラマ）である。新しい分野に挑戦し、
- ②

戯曲にエネルギーを注いだ綺堂だが、一方でその困難を感じていたことは日記にも現れている。昭和九年一月二十九日には「戯曲をかきつゞける。此頃になつて、戯曲のむづかしい事がだん／＼に判つて来たやうな気がする」と書いている。綺堂は随筆「大劇場を憂ふ」（『藝術殿』九年四月）で、当時の劇界の問題を列挙し、特に演劇の映画化を問題視している。老作家綺堂が感じた劇作の困難は、当時の演劇の状況を如実にあらわしている。綺堂はこの頃、後進の指導に尽力していたが、それは当時の大劇場の状況に不安を感じていたからであろう。

③ 『半七捕物帳』執筆再開 大正六年に雑誌『文芸倶楽部』で連載を開始した「半七捕物帳」は綺堂の読物の代表作であるが、一時中断していた。昭和九年に『講談倶楽部』で続編を書き始める。「十五夜ご用心」「ズウフラ怪談」等を執筆し、同年十二月二十七日の日記には、「材料は幾らでもあるが、これにばかり因はれてゐると他の仕事の邪魔になつて困る」と書いている。その後書き継がれた「半七」は二十数篇であるから、まさしく材料に事欠かなかったのである。

なお、客を愛し、筆まめだった綺堂だけに、日記には多くの人名が記されている。交遊関係に着目しても、多くの発見があると思われる。岡本綺堂日記の公開によって、さらなる研究がすすめられることを期待する。

岡本綺堂日記研究会の活動について

赤井紀美

岡本綺堂日記研究会は早稲田大学演劇博物館演劇映像連携研究拠点 (<https://pj-kyodo-empaku.waseda.jp/index.html>) の公募研究チームとして活動するものであり、研究課題「岡本綺堂旧蔵資料に関する基礎的研究」(代表者：横山泰子)として、二〇二四・二〇二五年度の二年間、活動を行った。

岡本綺堂日記研究会の参加者は次の通りである(五十音順、敬称略、肩書は二〇二六年二月現在)。

赤井紀美(東北大学文学研究科准教授)、阿部菜々香(中央大学大学院文学研究科博士後期課程)、今藤晃裕(日本女子大学附属高等学校教諭)、加瀬桃子(中央大学大学院文学研究科博士後期課程)、勝倉明以(名古屋市立東丘小学校教諭)、小松史生子(早稲田大学文学学術院教授)、杉本裕樹(法政大学大学院人文科学研究所科日本文学専攻博士後期課程)、鈴木彩(愛知教育大学国語教育講座講師)、鈴木優作(鹿児島大学法文学部附属「鹿児島近代」教育研究センター特任助教)、田茂山史恵(東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化コース)、原辰吉(世田谷文学館学芸員)、東雅夫(文芸評論家、アンソロジスト)、中坪有羽(中央大学大学院文学研究科博士前期課程修

了生）、松田祥平（大谷大学文学部任期制助教）、三浦達尋（文学研究者）、横山泰子（法政大学理工学部教授）、脇坂健介（学習院高等科教諭）

このうち、若手を中心としたメンバーで翻刻を行い、二〇二五年七月には昭和六年一月（昭和七年十二月）の日記を公開した。早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点のHPより全文のダウンロードが可能であり、URLは十二頁に掲載している。綺堂日記の来歴や、岡本綺堂日記研究会についての詳細もそちらに詳しく記載している。

この日記公開を記念して、「岡本綺堂の日常生活―「岡本綺堂日記」昭和6・7年公開記念シンポジウム」（二〇二五年八月二十三日（土）、早稲田大学三号館四〇一教室）を怪異怪談研究会との共催で行った。

原辰吉「岡本綺堂における昭和6・7年―『綺堂全集』と『独吟』―」、赤井紀美「指導者としての岡本綺堂―嫩会と雑誌『舞台』―」、松田祥平「捕物帳ジャンルの再編と岡本綺堂」、鈴木優作「歴史を相対化する民衆のまなざし―岡本綺堂「西郷星」論―」の四つの研究報告に加え、東雅夫、横山泰子、小松史生子による鼎談を行い、綺堂作品の魅力や新たな意義について検討した。

対面会場、オンライン配信併せて百名近くが参加し、質疑応答では様々な意見が交わされた。小説家の京極夏彦氏からも、岡本綺堂や探偵小説に関する興味深いコメントがあり、綺堂とその作品が幅広い興味関心を喚起し得る存在であることを、改めて確認することができた。

昭和六・七年に続き、このたび昭和八年一月、昭和九年十二月の日記を公開することになった。前回同様、翻刻は一か月ごとに担当し、担当者については各月の末尾に記載している。

横山泰子「昭和八・九年の岡本綺堂について」（二頁）に詳しいが、当時の綺堂は住み慣れた麹町区元園町から上目黒の別宅に移転しており、日記には東京の郊外の生活の様子がよくわかる記述が多い。また昭和八・九年に続いて後進の育成にもつとめ、門下生の集まりである嫩会や、雑誌『舞台』の編集を行っている。

なお、嫩会は大正六年に発足した門下生の集まりで、月一回綺堂の自宅で会合を持った。誰でも加入できるわけではなく、綺堂による審査があった。昭和五年より刊行の雑誌『舞台』の編集は嫩会のメンバーが行っており、雑誌刊行のために会費制が導入されている。この雑誌『舞台』は昭和五年一月創刊で、昭和十五年十二月までに全百三十二冊を刊行した。創作戯曲や劇評の発表の場として機能しており、創刊号は千部を超える売れ行きだった。誌友会が組織され、東京・関西で活動が行われた。終刊時、誌友会は三百人を超えていたという。終刊号の「社告」よれば、『舞台』に掲載された八百四十作のうち、二百四十作が実際に劇場で上演されたという。若手劇作家の育成の場として、優れた成果をあげたといえる。

昭和八年四月三十日には綺堂のもとを小田原在住の飯野秀二という人物が初めて訪れ、以後熱心に綺堂の指導を仰ぐ。これはのちに、劇作家として商業演劇界で活躍する北條秀司である。雑誌『舞台』をはじめ、綺堂の後進育成は確実に実を結んでおり、劇界に果たした功績は大きい。

最初に述べたように、岡本綺堂日記研究会は二〇二四年、二〇二五年と活動を行った。二年という短い活動期間に、綺堂の四年間分の日記の翻刻・公開を行ったことは大きな成果であり、研究会メンバーの協力によるものである。残り四年分の日記は未翻刻だが、綺堂の最晩年が記されたこれらの日記の重要性は言うまでもない。今後も継続して翻刻を行なう機会が得られるよう、研究会の活動について検討していきたい。

なお、本書の校正作業を阿部菜々香氏、加瀬桃子氏にお手伝い頂いた。記して感謝申し上げる。

【凡例】

・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に所蔵されている岡本綺堂の自筆の日記を底本とした。当該資料の資料番号は 8114-001～8114-030 であり、そのうちの 8114-015 以降が未翻刻となっている。今回は 8114-019・020（昭和八年）、8114-021・022（昭和九年）の翻刻を行った。

・原則として、一部の人名や作品名をのぞいて漢字は新字・通行の字体に改めた。原文を損なわないよう、表記の統一のために漢字を改めることはせず、漢字の置き換えは最小限に留めた。仮名遣いは原文に従った。人名や綺堂独自のくずし字の翻字については岡本経一編『岡本綺堂日記』（青蛙房 昭和六十二年）、岡本経一編『岡本綺堂日記続』（青蛙房 平成元年）を参照。明らかな間違いと認められる字句や、「巖」「岩」のように、人名に対して複数の字体が用いられている場合は、ルビでママを入れ、字体の統一は行わなかった。送り仮名の場合は基本的にママを入れないなど、ママの記載は最小限に留めた。

・改行、句読点は原則として底本に従った。ただし、行の空白は適宜省略し、日付ごとに読みやすいようにレイアウトを行った。

・本文中で用いられている「」（○）の二種類の記号に関しては原文に従い記した。書籍・雑誌名に括弧が付されていない場合があるが、これらの表記も原文に従った。

・句点と読点の判別がつかない箇所があったが、文脈に従い判断した。

・欄外に鉛筆書きで記号（○や×など）が記されている箇所があったが、綺堂の筆によるものか判断がつかないため記載しなかった。

・判読不能、削除、加筆については次の通り記号を用いた。

■ ↓判読不可能な文字を示す。

◇ ↓加筆された表現を示す。削除箇所の訂正や挿入のために、行間や欄外に書き加えられた表現を示す。

□ ↓削除された表現を示す。削除に際し文字が塗りつぶされることが多いが、可能

な限り表記した。削除した文字が判読できない場合は「■」とした。

「〈〉」は加筆後に削除された表現を示す。

・翻刻された日記の文中には現在から見れば人権擁護の観点から不適切な表現も含まれるが、日記が書かれた当時の事情を考慮し、そのまま記載した。

『岡本綺堂日記 昭和六年一月～昭和七年十二月』

【目次】

横山泰子 「昭和六・七年の岡本綺堂について」

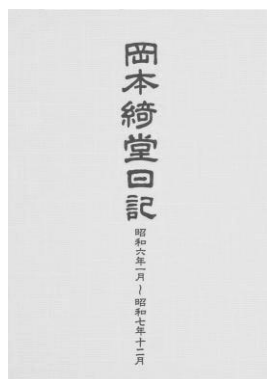
赤井紀美 「早稲田大学演劇博物館旧蔵岡本綺堂日記および綺堂日記研究会について」

凡例

昭和六年

昭和七年

奥付



■ URL : https://pij-kyodo-enpaku.waseda.jp/publication/report-2025-Kobol_okamoto.html



昭和八年（一九三三年）六十二歳

昭和八年一月

一日（日曜）晴（五十四度）

午前八時起床。晴れて風無く、寒気も強からず、先は申分のない元旦である。

年賀郵便六百余通到着。

例に依て、私とおえいと、森部、おさき、おせんの家五人、屠蘇と雑煮餅を祝ふ。森部を代理として近隣廿一軒に回礼させる。

十時半頃に山下が来た。ついで岸井が来た。

渡辺の愛子が来て午飯を食ふ。午後には中島、鈴木余志子、中野、三橋、佐久間が来た。四時頃までに相前後して去る。ほかに年賀客十一人、いずれも門口で帰る。

午後に年賀郵便二百余通到着。午前の分をあはせて八百余通。そのうちに当方より賀状を発送させるもの二百三十余通あるので、一々整理して森部に発送させる。大東京編入のために、旧郡部の居住者で町名番地の変更したのも沢山ある。その訂正もしなければならぬので、元旦早々なか／＼煩はしい。

七時ごろ入浴。読書。九時半就寝。

二日（月曜）陰（五十度）

午前八時起床。けふは朝から陰つて寒い。

年賀状郵便百六十通余到着。そのなかには未知の人が多い。

十時半頃に山崎が来て三十分ほど語る。

東京劇場初日で、昼の部は午前十一時開場といふのであるが、午後一時半頃から支度して出ようとする、恰も上松君が年賀に来た。

東劇には岸井、三橋、佐久間がもう来てゐた。初日満員。こゝで知人大勢に出逢つて、新年の挨拶をする。昼の部は五時頃に終つて、食堂で晚餐。夜の部は第一「吉利支丹信長」第二「大功記十段目」第三「尾上伊太八」まで見物。第四の「吉原雀」を見残して帰宅したのは十一時十五分。

留守中に年賀客八人、年賀郵便八十六通到着。入浴。午前零時廿分ごろ就寝。

三日（火曜）晴（五十三度）

午前八時起床。きのふの空模様では雨か雪かと危ぶまれたが、けふは快晴。万歳の鼓の音などが聞える。

旧臘起稿の戯曲を訂正し終る。あはせて四十七枚、題は「夢」

おえいは午後から小林君と大野君方へ年礼にゆく。それと入れちがひに、大野君の細君が年礼に来て、門口で話して去る。

三時頃に佐久間が上野つぎ子同道で来た。つぎ子は冬季休暇で帰京したといひ、三十分ほど話してゆく。ついで林君が来て、これも三十分あまり話して去る。ほかに年賀客六人。

読書。年賀郵便八十三通到着。

七時半ごろ入浴。十時半就寝。

夕刊をみると、山海関に於て日支軍衝突、我軍遂に城内を占領したといふ。

四日（水曜）陰（五十度）

午前八時起床。

おえいは浦岡君方へ年賀にゆく。

十時半頃からおえいと森部と三人連れで目黒へゆく。

姉に年玉を持参、おえつにも年玉をやる。

森部に名刺を持たせて、近隣三軒に回礼させる。午後二時頃から森部同道で道玄坂へゆき、応接間用の火鉢を買ふ。陰つて寒い日であるが、流石は新年早々だけに道玄坂付近は頗る賑はつてゐた。

三時頃帰宅すると、小林と佐久間が来ておえいと話してゐた。二人は四時頃まで話して去る。

四時五十分頃におえいと森部は麴町へ帰る。私は二三日滞在の筈で居残る。

読書。六時半ごろ入浴。十時就寝。

五日（木曜）晴、陰（四十七度）

午前八時起床。

別に仕事もないので、朝から読書。いさゝか暢やかな心持になる。

姉は午後から麴町方面へ年始に出て、三時半ごろ帰宅。終日陰晴定まらず、底冷えのする日である。

六時半ごろ入浴。七時頃から雨の音。十時就寝。

六日（金曜）雪、雨（四十八度）

午前八時半起床。

あかつきに雪が降出して、庭先の芝生は一面に白くなつたが、やがて又雨となつた。

十時頃に森部が来たので、西洋間の暖炉を囲んで語る。寺尾幸夫君（玉虫孝五郎）告別式が午後二時から上目黒七丁目の自宅で営まれるので、森部を代理に出してやる。寒い雨が降りつゞいてゐる。二時半頃に森部帰宅。寺尾君は住宅を新築して旧臘移転、まだ歳月を経ずして突然に仆れたのである。

電話で麴町から自動車を呼び寄せ、三時頃から森部と共に麴町に帰る。

留守中に大野君父子、東儀、額田、奥田君、浦岡君等が年賀に來たといふ。ほかに年賀郵便百十通ほど到着。

七時半ごろ入浴。読書。宵から雨晴れて薄月が出た。
十時就寝。

七日（土曜）晴（五十二度）

午前八時半起床。

額田から郵書が来て、本家の後継問題も一先づ落着いたといふ。返書。

朝から晴れて暖い。森部は知人方へ年賀に出てゆく。

午後、神田を散歩。古書と文房具などを買つて三時頃帰宅すると、額田の細君が来てゐた。細君の話によると、後継問題が又もやグラ付き出したといふ。どうも困つたもので、これも一種のお家騒動である。細君は四時半頃まで話してゆく。

五時頃に佐久間が来て、これから嫩会の七日会にゆくといひ、六時頃まで話して去る。年賀郵便廿四通到着。読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

八日（日曜）晴（五十六度）

午前九時起床。けふも暖い。

日曜報知の中代君から寄稿依頼の郵書が来たので、承諾の返書。

辻村澄江の戯曲「手児奈と恋と」を編集。

午後一時頃に蒲田の渡辺君が年賀に来て、三十分余り

話してゆく。

三時過る頃に岸井が来て、四時半頃まで語る。おえいと森部は五時頃から東劇見物に出てゆく。

読書。年賀郵便十八通到着。八時ごろ入浴。

おえい等は十時半ごろ帰宅。十一時半就寝。

おえい等の話によると、東劇は満員であつたといふ。この春は各劇場いづれも好成績であるらしい。

九日（月曜）晴（五十七度）

午前八時半起床。風はあるが、今朝も暖い。

森部に命じて三橋に電話をかけさせる。舞台広告の件である。

午後に慶応劇研究会の内田君と河合君が来て、研究会の座談会に出席してくれと云ひ、一時間ほど話してゆく。三時頃に三橋が来たので、日本橋横山町梅開堂の広告を取つて来るやうに頼む。蒲田の渡辺君の紹介である。三橋は四十分ほど話して去る。

「新派はどうなる」といふ雑文三枚をかいて、岸井に郵送。年賀郵便八通到着。額田から郵書が来て、修善寺温泉にゆくといふ。

高梨花人君から「句と評論」新年号を送つて来た。私の「独吟」の批評が掲載されてゐるのである。返書。八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十日（火曜）晴（五十七度）

午前八時半起床。

今朝はおえいと銀座へ買物にゆく筈であったが、机の前に座ると俄に眩暈を感じたので、私は外出を見合せ、おえいと森部を出してやる。

十一時頃におえい等帰宅。吉岡医師へ贈るべき内祝の品は三越から直接に配達させることにしたといふ。森部は昼餐の後、黒川君移転祝の品をたづさへて赤坂へ出てゆく。今度の移転先は仲ノ町廿七番地。

十二時頃に大村が年賀に来て、六日以来感冒で引籠つてゐたといふ。大村は舞台の広告（ポリドール）を置いてゆく。

つゞいて津沢の寿子が子どもを連れて年賀に来た。寿子は午餐を喫して二時頃に去る。

私の眩暈はその後差したることも無い。やはり感冒の気味であるらしい。晴れて風なく、春めいた日である。森部は知人宿所帳を訂正浄書し終る。森部の計算によれば、当方から旧冬発送の年賀状郵便六百通、新年に入つて追加発送二百五十通余、あはせて八百五十余通である。

今夜は入浴せず、服薬して七時半頃から臥床。

十一日（水曜）雨（五十三度）

午前八時半起床。

森部に命じて、湯島の山崎君方へ年賀の品をとゞけさせる。

岸井から郵書が来たので、返書。あはせて大村持参の広告紙型を速達便で発送。修善寺の額田方から郵書が来たので、返書。宮森君から俳句英訳について長文の郵書が来たので、返書。

大野君から鯛一籠をとゞけて来た。

けふも頭が少しく痛む。終日細雨。陽気は寒くない。小出君の戯曲「銀座無宿」を編集。

四時半頃に佐久間が来て、六時頃まで話してゆく。八時ごろ入浴。今夜も服薬、九時半就寝。

十二日（木曜）晴、陰（五十八度）

午前九時起床。

十時半頃に俵木が来て、三十分あまり話してゆく。

おとくが大丸鬚に結つて年賀に来た。先頃までのおとくで無く、立派な細君になり済まして仕舞つた。おとくは午饭を食つて、一時頃に去る。大村が来て伊豆の椎茸をくれ、門口で帰る。

二時頃から四谷を散歩。晴れて暖い。三時半ごろ帰宅。留守中に新潮社の婦人記者が来たといふ。

町内の永田理髪店へ髪を刈りに行つて、五時ごろ帰宅

すると、三橋が来てゐた。三橋は渡辺の広告を持参したが、その広告文が余りに長くて、とても一ページには載せ切れないので、何とか訂正して貰ふやうに云ひ聞かせる。歴史公論の湊元君が来て、修禪寺物語の写真を貸してくれといひ、演芸画報を借りてゆく。

中島の戯曲「恋と非常時」を訂正。それから読書。
八時頃入浴。今夜も服薬。十時半就寝。

十三日（金曜）陰（四十八度）

午前八時半起床。陰つて寒い風が吹く。
午後に読売新聞社の平林君が美術社の下山君同道で来た。下山君の用向は私に短尺をかいとくれといふ依頼である。

つゞいて新潮社の婦人記者が来て、同社の探偵倶楽部に私の談話を掲載したいと云ふので、探偵小説について三十分ほど雑談。

二時半頃に額田の細君が来て、四時頃まで語る。額田実家の後継問題は相変らず紛糾してゐるらしい。つゞいて山下が来て、三十分あまり話してゆく。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十四日（土曜）晴（四十二度）

午前八時半起床。晴れてはゐるが、今朝は殊に寒い。

浅草の出陣座から「城山の月」の本読をしたいと云つて来たので、承諾の返書。

十二時半頃に慶応の河合君が迎ひに来たので、一緒に出てゆく。会場は新橋駅前の東洋軒で、来会者廿余名、茶菓を喫しながら劇談、四時四十五分散会。自動車に送られて五時頃帰宅。

留守中に黒川君が来て先日のお礼をいひ、新歌舞伎の二の替りに「曾我物語」を上演したいと云つて行つたさうである。ほかに小林宗吉の細君が年賀に来て、小林の妹と佐久間との縁談が再燃したと話して行つたといふ。

五時頃に三橋が来て、いよ／＼大木梅開堂の広告を取つて来たといひ、一時間ほど話してゆく。

けふは終日寒い日であつた。八時ごろ入浴。額田から伊豆の椎茸を送つて来た。

読書。十時半就寝。

十五日（日曜）晴（四十三度）

午前九時起床。

文芸家協会から文芸年鑑の原稿を催促して来たが、昨年中発表の戯曲に四十枚程度の短い物がないので、その旨を断つてやる。

正午頃に文芸春秋社の武内君が来て、二時頃まで語る。つゞいて額田が来て、一昨夜帰京したといひ、四時頃ま

で話してゆく。

五時頃に慶応の内田君と菅沼君が来て、昨日の礼をいひ、六時頃まで話してゆく。七時頃に海野が来て、別府のみやげをくれ、九時頃まで話してゆく。

それから入浴。けふもなか／＼寒い日であつた。十時半就寝。

十六日（月曜）晴（四十八度）

午前九時起床。

けふは園池公功君の帰朝歓迎会が大阪ビル地下室のレイン・ボウで開かれるので、十一時頃支度して出ようとする処へ、上松の武雄が年始に来た。

歓迎会の来会者七十余名、十二時頃から食卓につき、大谷、山本、小林、露国大使、松居の諸君と私のテーブル・スピーチあり。それから園池君の挨拶、松本幸四郎の挨拶あり。一時四十分ごろ散会。すぐに帰宅。

戯曲「夢」を訂正。

六時頃に小林宗吉君が来た。佐久間縁談の件である。七時過る頃まで話してゆく。それと入れちがひに佐久間が来た。佐久間は目下病氣治療中であるので、内約は兎もあれ、差当り直ぐに結婚といふことには運ばぬらしい。佐久間は九時過る頃まで話してゆく。

入浴。十一時半就寝。

十七日（火曜）雪、雨（四十二度）

午前九時起床。あかつきに雪、やがて雨となる。

おさきは宿下りで朝から出てゆく。

日曜報知の小説をかくために、材料を調査。どうも面白いものが見当らない。兎もかくも午後から二三枚書いてみる。

終日細雨、寒気も強い。新聞によると、各地方風雪。夕方から読書。八時ごろ入浴。九時半頃におさき帰宅。大磯の蒲鉾をみやげに持つて来た。

十時半就寝。雨晴れて夜半から月が出た。

十八日（水曜）晴（四十六度）

午前九時半起床。晴れて風吹く。寒気弛む。

目黒の出火について内田君から見舞状が来たので、返書。出火は上目黒八「■」丁目、私の別宅は一丁目、よほど懸け離れてゐるのである。

日曜報知の原稿をかきつゞける。けふはおせんが宿下りに出る。

午後三時頃に実践女子専門学校の女生徒二人が来て、廿九日に歌舞伎座観劇会を催す筈であるから、その際同座へ来て講演を試みてくれといふ。それは昨年頼まれて、一度断つたことがあるので、今度は承諾。

五時頃に岸井と三橋が来て、七時過る頃まで話してゆ

く。

新聞の夕刊に、共産党第三次大検挙が発表された。今度は検挙者も多数で、その中には名家の子女も多い。

八時ごろ入浴。読書。九時頃におせん帰宅、みやげに鯨をくれた。

十時半就寝。夜半に眼がさめて、世事憂ふべきこと多く、それに連れて若かりし日の事なども色々思ひ出された。

十九日（木曜）陰（四十八度）

午前九時起床。

おえいは早朝から目黒にゆき、十一時過るころ帰宅。

日曜報知の原稿をかきついける。

けふは来客無し。夕方より読書。終日寒い。

八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十日（金曜）晴、陰（四十六度）

午前九時起床。けふより大寒に入る。

目黒のおえつが宿下りに出るので、おさが朝から目黒へ手伝ひにゆく。

日曜報知の原稿をかきついける。

午後一時頃に山梨の河野君が来て、二時過る頃まで語る。淀橋のおさだが子供を連れて年礼に来た。

二時半頃から四谷を散歩。喫茶。三時半ごろ帰宅。

日曜報知の原稿をかき終る。あはせて廿二枚。題は「怪談一夜草紙」

読書。六時頃におさき帰宅。おえつが実家から梅の花を持つて来たので、紀尾井町の小林君方へ持たせてやる。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十一日（土曜）陰、雪（四十五度）

午前八時半起床。

額田から郵書が来たので、返書。

午後一時頃に正岡君が来て珈琲をくれ、一時間あまり話してゆく。正岡君は杉並区の馬橋町に移転したといふ。読書。五時頃に研文社から「舞台」二月号の製本をとぎて来た。

六時頃に三橋が来て、七時十五分頃まで話してゆく。その帰る頃から雪がちら／＼と降り出して来た。

八時ごろ入浴。読書。十一時就寝。

二十二日（日曜）雪（四十六度）

午前八時半起床。

昨夜の雪は夜半に一旦止んだが、暁から又降りしきる。

二階から雪を見ながら読書。目黒の雪げしきは定めて好からうなどと云ひながら、さすがに出てゆく元気もな

かつた。

午後二時過る頃から雪やんで陰る。六寸以上も積つたらしい。

三時頃に岸井が来て、四時頃まで話してゆく。

夕刊をみると、けふの雪で代々木の原、戸山が原にはスキーの人々が沢山に出たといふ。此頃はスキー大流行である。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（月曜）晴（四十八度）

午前九時起床。快晴。

森部は目黒の雪かきに出てゆく。

町内の田中の細君が来て、慶応大学の学生小沢といふ人が卒業論文をかくに付、何か私に聞き合せていふことがあるといふ。

「新青年」の横溝君が来て、四月号に五六枚の随筆をかいてくれと云ひ、三十分ほど話してゆく。田中の細君はおえいを相手に午後二時頃まで話してゆく。

三時頃に鶴岡君が来て、五時頃まで語る。栃木地方は昨日少しも雪を見なかつたといふ。そのあひだに森部帰宅。目黒へは大工が来て雪をかいて行つたさうである。

読書。額田から郵書が来た。

八時ごろ入浴。十時半就寝。夜半に醒めて眠られず、

四時過る頃から再び眠る。

二十四日（火曜）晴、陰（四十六度）

午前九時起床。

十二時頃に松竹の黒川君が来て、新歌舞座の上演料をくれ、一時間ほど話してゆく。岸井から郵書が来た。

それから四谷を散歩。喫茶。二時半ごろ帰宅。

慶応の学生小沢博純君が来て、卒業論文（へのため）に江戸時代の劇場の入場料と俳優の給料等について問合せあり。四時頃まで話してゆく。そのあひだに中野が来て、数馬英一君が絵馬の展覧会を開くに付、私にも一枚揮毫してくれと頼んでゆく。

つゞいて堀川肇子が年礼に来て、四十分ほど話してゆく。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

二十五日（水曜）陰（四十五度）

午前八時半起床。

小林から郵書が来た。佐久間縁談の件である。横浜の高橋からも郵書が来た。

午後一時半頃に額田が来て、実家の後継問題も無事に解決したといひ、三時頃まで話してゆく。陰つて寒く、をり／＼に雪ちら／＼と降る。

五時頃までに「新潮」の随筆七枚をかき終る。題は「雪の一日」

今夜は嫩会例会で、五時半頃に山崎が先づ来た。ついで大村、小林、中島、岡田、岸井、三橋、山下、佐久間が来た。鈴木余志子も久しぶりで出席。額田は文芸家協会の評議員会に出席したとて、八時頃におくれて来た。私の江戸講話、劇談、雑談。十時五十分ごろ散会。幸に雪とも雨ともならなかった。

それから入浴。十二時就寝。

二十六日（木曜）晴（四十六度）

午前九時起床。快晴。

十一時頃に額田の細君が来て鶏肉をくれ、十二時頃まで話してゆく。

午後一時頃に額田が岸井同道で来て、今朝松竹会社の訪問、大谷君に面会して来たといふ。岸井入社に伴う。

ついで中村孝子が年礼に来た。又そのあとへ中野が来て、揮毫の絵馬を受取つてゆく。晴天の雪、間もなく止む。

寺田君が来て、一昨日帰京したとて桜島の大根をくれた。

それからそれへと来客つきで、午後六時頃までに漸

く片付く。それがために、けふは一日丸潰れになつてしまった。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十七日（金曜）晴（四十五度）

午前九時起床。寒い風が吹く。

池田君の戯曲第三幕を受取つたので、礼状を発送。新潮社へ「雪の一日」を郵送。

「読書雑感」六枚をかいて、阿佐ヶ谷の書物展望社へ郵送。

池田君の「九州の為朝」藤田君の「音楽と法律」長野君の「琵琶縁起」を編集し終る。けふは来客がないので、仕事は抄取る。

サンデー毎日の新妻君に郵書を送る。寺田君の原稿採用の礼状である。高橋から舞台の礼状が来た。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十八日（土曜）晴（四十二度）

午前九時起床。けふも寒い。

栃木の鶴岡君から電報が来て、本日午後参上するといふ。実践女子専門学校の劇研究会から郵書が来て、明日午前十一時から相違なく歌舞伎座へ来てくれといふ。難波から「舞台」の礼状が来た。

明日講演の材料を調査。午後三時頃に鶴岡君が栃木支部の神岡検事、栃木刑務支所長の藤井藤蔵氏と三人連れで来訪。免囚保護事業の副事業として、免囚保護実話を一部に纏めて発行したいといふ相談あり。五時過る頃まで話してゆく。

読書。茅ヶ崎の中島から戯曲「街のバッド・ガール」を郵送して来た。田中良君の父君死去の通知が来た。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十九日（日曜）晴（四十五度）

午前八時起床。

けふは歌舞伎座へ講演に行かなければならないので、十時半頃から出かけてゆく。実践女子専門学校の女生徒五十余名来会。別館三階の精養軒食堂で一時間半ほど講演。それから昼餐。二三の質疑応答などあつて、二時頃に解散。

帰途、銀座の伊東屋で文房具などを買ひ、三時頃帰宅すると、上松のおすゑが来てゐた。渡辺のあい子も来たといふ。

中島の戯曲を訂正しながら編集。

七時半ごろ入浴。読書。大阪の新妻君から返書が来た。十時就寝。

三十日（月曜）晴（四十七度）

午前九時起床。

おえいは十一時頃から目黒へ晦日勘定にゆく。

午後一時頃に額田の細君が来て、二時頃まで語る。郷里の相続問題について何かまだごた／＼してゐるやうである。

二時半頃に岸井が来たので、「舞台」三月号の戯曲原稿を渡してやる。そこへ又、大村が来た。大村は先づ去り、岸井は残つて話してゐると、更に佐久間が来た。岸井は五時頃に去り、佐久間は六時頃まで話してゆく。そのあひだに、おえい帰宅。

読書。八時ごろ入浴。十時半ごろ就寝。

三十一日（火曜）晴（四十八度）

午前九時起床。大村に貰つた椎茸を大野君と小川君方へ分配。

「新青年」の原稿五枚をかいて郵送。題は「昔のギャング」

田中良君の父君告別式に付、午後二時頃から出てゆく。青山墓地斎場で禰をさへげ、二時四十分ごろ帰宅。

三時頃に豊田君が来て、四時五十分頃まで語る。そのあひだに、おえいと森部は新橋演舞場見物に出てゆく。読書。七時半頃入浴。おえい等は十時半ごろ帰宅。

十一時半就寝。

本月の仕事は怪談一夜草紙（日曜報知、廿二枚）雪の
一日（新潮、七枚）読書雑感（書物展望、六枚）昔のギ
ヤング（新青年、五枚）ほかに喜劇「夢」の訂正、舞台
戯曲の編集など。

（翻刻担当…赤井紀美）

昭和八年二月

一日（水曜）晴（四十七度）

午前八時半起床。

額田から郵書が来たので、返書。中島にも郵書を送る。

池田君から先日のお礼状の返書が来た。

午後一時頃から四谷を散歩。二時半頃帰宅。

春秋社の婦人記者が二宮君の紹介状を持参、中里介山氏が三月から「隣人の友」といふ雑誌を発行するに付、私にも四五枚のものを寄稿してくれといふ。

岸井の喜劇「下手な嘘つき」を編集。更に津村君の戯曲「七時は過ぎた」を一読。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二日（木曜）晴（五十度）

午前八時半起床。

おえいは十一時頃から青山へ墓参にゆく。

演芸画報社の堀川君が来て、郷土の友といふ玩具雑誌の原稿にするとして、私の談話を聴いてゆく。ついで中央公論社の松本君が来て、何か戯曲を書いてくれと云ひ、午後二時頃まで話してゆく。

額田方で勝間田人の新年会を開くといふので、森部も午後から出てゆく。

「隣人の友」の原稿五枚をかく。題は「隣人」

おとくの郷里から伊勢蝦を送つて来たので、返書。

六時半頃に三橋が来て、東劇昼興行を見物して来たといひ、八時頃まで話してゆく。それから入浴。読書。

九時半頃に森部帰宅。十時半就寝。

三日（金曜）晴（四十八度）

午前九時起床。

町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。こゝで大野君に逢つた。留守中に麹町一丁目の中川の細君が菓子くれたといふ。

午後二時頃に岸井が来て、三十分ほど語る。ついで武内君が来て、一時間ほど話してゆく。

津村君の戯曲を編集。横浜の岡本君から郵書が来たので、返書。

けふは節分であるといふ。寒気やゝ弛む。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

四日（土曜）晴（五十度）

午前八時半起床。

鈴木余志子から毛糸のあみ物をおえいに送つて来たので、返書。

午後一時半頃から四谷を散歩。

二時半ごろ帰宅すると、額田が待つてゐて、松竹の黒川君から岸井に一度来てくれといふ郵便書が来たといひ、一時間ほど話してゆく。この様子では岸井の松竹入社も纏まるのではないかと思はれる。

読書。新聞をみると、昨夜は各寺社の節分会が大いに賑はつたといふ。かういふことも矢はり廃らないと見える。

八時ごろ入浴。十一時就寝。

五日（日曜）晴（四十八度）

午前九時起床。

日曜報知から原稿料を送つて来たので、返書。高梨花人君から俳句評論を送つて来たので、返書。

読書。午後一時頃に横浜の岡本君が来て、二時四十分頃まで話してゆく。

それから四谷を散歩。三時半ごろ帰宅。風は寒いが、春めいて来た。

五時半頃に佐久間が来て、七時頃まで語る。
八時ごろ入浴。読書。十一時就寝。

六日（月曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。

おえいは世田谷の上松方へ出てゆく。

読書。午後零時半頃に岸井が来て、これから松竹へゆくと云ひ、三十分ほど話してゆく。二時半頃におえい帰宅。

三時頃に岸井が再び来て、松竹本社で城戸君に面会したが、入社の件は体よく断られたといふ。断るならば手紙でも済むことで、わざ／＼岸井を呼び付けるにも及ぶまいと、少しく不快を感じたが、どうも仕方がない。岸井は三十分ほど話して去る。

読書。七時半ごろ入浴。十一時就寝。

七日（火曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。

雄山閣から異説日本史十五冊をとぎけて来たので、取りあへず読んでみる。知れ切つたことも書いてあるが、中には異説もある。

十二時頃から四谷を散歩。一時半ごろ帰宅すると、目黒の姉が来てゐた。姉は三十分ほど話して去る。

鹿児島にある寺田君から桜島産の蜜柑を送つて来た。寺田君の母は脳溢血で先月末死去したといふので、悔み状に添へて礼状を発送。その蜜柑は小粒であるが頗る美味、近藤君方へも分配。

大村から歌舞伎座の劇評を送つて来たので一読、すぐに岸井に郵送。浦岡の細君が感冒臥床中といふので、お

えいが見舞にゆく。

三時頃に中島が来て、一時間ほど語る。ついで三橋が来た。いづれもこれから「舞台」の誌友会例会で、銀座グリルへ行くのであるといふ。

読書。八時ごろ入浴。十一時就寝。

八日（水曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。

読書。秋元君から英文マンチユリア・シーンの著作を送ってくれたので、返書。鵜沼にある気賀君子から郵便が来たので、返書。

午後一時ごろ四谷を散歩。二時過る頃帰宅。

四時頃に岡田が来て、三十分ほど話してゆく。

読書。六時頃に岸井が来て自作の戯曲をとげ、門口で帰る。

八時ごろ入浴。おえいは感冒の気味で早く寝る。

十時半就寝。

九日（木曜）晴、陰（五十二度）

午前九時起床。けふは初午であるといふ。

日独文化協会から私の戯曲「大阪城」の出版元を問ひ合せて来たので、返書。川原小枝子から郵便が来たので、返書。

午後、番町辺を散歩。一時ごろ帰宅。やがて岸井が来て、二時半頃まで話してゆく。

森部は初午の強飯を持つて目黒へゆき、三時頃帰宅。読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十日（金曜）晴（五十六度）

午前八時起床。晴れて暖い。

宮森君の英訳俳句選集完成記念会を神田錦町の学士会館に開くといふ通知が来たので、不参の返書。その代りに祝物を贈ることとし、十時頃からおえいと森部と三人連れて銀座の松屋へ出てゆく。

宮森君へ贈るべき祝物の発送をたのみ、更に横浜の鈴木余志子への贈物の発送をたのみ、ほかに雑品数点を買つて昼餐。直ぐに自動車に乗つて、十二時ごろ帰宅。

一時半頃に実践女子専門学校の女生徒三人が来て、過日講演の謝礼をとげ、色紙短尺などの揮毫を求めて、一時間ほど話して去る。

三時頃に長田秀雄君が来て、早川雪洲との脚本問題について種々説明あり、五時頃まで話してゆく。そのあひだに三橋も来た。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十一日(土曜)陰(四十八度)

午前八時半起床。けふは紀元節。

読書。終日陰つて寒い。

夕刊をみると、けふの建国祭は廿万人以上の人があつたといふ。

八時ごろ入浴。十時半就寝。

十二日(日曜)陰(四十八度)

午前九時起床。けふも陰つて寒い。

読書。額田嘉晴君から甥の五十日祭配り物を送つて来たので、返書。

戯曲「大久保彦左衛門」を起稿する積りで、その腹稿をやうやく纏まる。

午後四時頃に鶴岡君がその甥白沢君同道で来訪、五時過るまで話してゆく。つゞいて佐久間が来て、六時頃まで語る。

読書。八時頃入浴。十時半就寝。

十三日(月曜)晴(四十八度)

午前八時起床。庭は一面の霜である。

寺田君から返書が来た。宮森君からも祝物の礼状が来た。

戯曲を起稿、草稿であるから幾枚書けたか判らない。

長田君と早川雪洲問題につき、午後六時半頃から文芸家協会へ出てゆくと、長田君は待合せてゐた。つゞいて中村吉蔵君も来た。今夜の会合は幹事と評議(員だけの)会合であるが、中村君と私とは劇作家として列席したのである。

協会では狭いので、今夜は内幸町のレイン・ボウに集まることになつてゐるといふので、八時頃から長田君等と出てゆく。来会者廿余人、已に出版法改正に関する協会を終つた所であつた。それから雪洲問題の協議に移つたが、纏まつた議論もなく、兎に角わが協会として彼れ是れ干渉するよりも、仲裁者をたのんで和解の策を「■」講ずべしといふ意見が多きを占め、その仲裁者を長崎英造氏と仮定して、十一時ごろ散会。但し長崎氏が仲裁を引受けぬ晩にはどうか、それらの意見は決定しないのである。

十一時十五分ごろ帰宅。留守中に山下と三橋が来たといふ。鈴木余志子から贈物の礼状が来た。

入浴。十二時半ごろ就寝。暮れて寒気やゝ弛む。

十四日(火曜)晴(五十二度)

午前八時半起床。

けふは晴れて暖いので、十一時頃から森部同道で神田を散歩。古本、原稿紙などを買つて、三省堂で昼餐。

一時十五分ごろ帰宅。留守中に大村が自作の戯曲を持参、ほかに比翼雛をくれた。雛は目黒の比翼塚になぞらへて、栗と竹の子を女びな男雛に作つたものであるが、こんな趣向も大東京となつては判るまいと思はれる。取りあへず礼状を発送。額田は昨夜不参であつたので、雪洲問題の経過を通知して遣る。

おえいは浦岡の細君の病氣見舞にゆく。近藤君から神戸の煮凝りをくれた。

三時頃から戯曲をかきつゞけて、五時半頃にやめる。それから大村の戯曲を一読。

八時ごろ入浴。読書。暮れていよく暖くなる。十時半就寝。

十五日(水曜)晴(四十八度)

午前八時半起床。寒い風が吹く。

戯曲をかきつゞける。額田から「舞台」の戯曲原稿五種を送つて来たので、返書。大村の戯曲に批評を添へて返送。

午後三時頃に時事新報社の粕谷君が来て、廿八日時事講堂で劇に関する講演会を開くから、私にも出演してくれといふことであつたが、断る。

風が終日吹きつゞけて寒い。

坪内士行君の舞踊劇「水仙」と吉田武三君の戯曲「羅

生門」を編集。額田から再び郵書が来た。

七時頃に山下と三橋が来て、三月号の校正も明日で終るといひ、八時過る頃まで話してゆく。それから入浴。読書。十時半就寝。

十六日(木曜)陰(四十八度)

午前九時起床。けふも陰つて寒い。

額田から又もや戯曲原稿を送つて来たので、返書。

安延秀子の戯曲「御領主様はお偉い」鈴木余志子の喜劇「蔵前駕籠」を編集。

午後一時過る頃に高塚の母が年札に来て、三十分あまり話してゆく。

読書。六時半頃に岸井が来て、三月号の校正を終つたといひ、八時過る頃まで話してゆく。それから入浴。

十時半就寝。

十七日(金曜)雪(四十六度)

午前九時起床。暁から雪。

下座敷に降りて、金子君の喜劇「お父さんの唄」小野君の戯曲「お百明暗道」を編集。舞台四月号は陽春特別号とするために、原稿が多くなつたのである。

雪は終日降りやまず、五六寸ぐらゐは積つたらしい。

八時ごろ入浴。読書。大村から原稿うけ取りの返書が

来た。

八時過る頃から雪やむ。十時半就寝。

十八日（土曜）陰、晴（四十七度）

午前八時半起床。庭は一面の雪である。

朝は陰、十一時頃から晴れる。森部は目黒へ出てゆく。

戯曲をかきつゞける。森部は午後二時ごろ帰宅。

四時頃に菅野君が来て、一時間ほど語る。つゞいて佐

久間君が来て、六時過る頃まで話してゆく。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十九日（日曜）晴（四十八度）

午前八時起床。風吹く。

戯曲をかきつゞける。大村から訂正の原稿を送つて来

たので、返書。

十二時半頃に岸井が妹同道で来て、三十分ほど話して

ゆく。午後から風が衰へたので、二時頃から四谷を散歩。

三時ごろ帰宅。

夕方まで戯曲をかく。それから大村の戯曲を一読。

七時頃に玉屋印刷所の主人が来て、舞台三月号の表紙

は紅色であるべきの処、あやまつて朱色に印刷して仕舞

つたから勘弁してくれといふ。已に全部を印刷した以上、

今更どうすることも出来ないのので、以後を注意して置く。

少しく感冒の気味であるので、今夜は入浴を休み、服薬。

読書。十時半就寝。

二十日（月曜）晴（四十九度）

午前九時起床。

岸井に郵書を発して、三月号の表紙変更のことを通知

して置く。入れちがひに、岸井からも郵書が来た。

戯曲をかきつゞける。午後一時頃に大野君が来て、き

み子さん安座、今度は女の子であるといふ。

舞台四月号の原稿締切り、今度は戯曲十編である。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十一日（火曜）晴（五十度）

午前八時半起床。

十時半頃に三井保険会社の中西俊介といふ青年が来

て、一時間ほど話してゆく。文学者志願の青年である。

けふは晴れてやゝ暖い。十一時頃からおえいは目黒へ

出てゆく。

水谷八重子からその著「舞台の合間に」を送つて来た

ので、返書。山崎に会費滞納の催促状を発送。

戯曲をかきつゞける。三時過る頃におえい帰宅。

四時頃から近所を散歩。帰つて読書。

八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十二日（水曜）晴（五十八度）

午前九時起床。私の起きないうちに山崎が来て、三月分の会費をとどけてゆく。

帝国劇場から昭和八年度の優（待）券を送つて来たので、返書。山崎にも受取証を発送。

戯曲を書きつづける。南風強く、温度昇る。

午後一時過る頃に市川寿美若（寿美蔵門人）が来て、三月下旬飛行会館で新しい舞台の会といふを開催、わたしの「切支丹屋敷」を上演したいといふ。承諾。寿美若三十分ほど話してゆく。

おえいは大野君方へ誕生の祝物を持参。山本の未亡人來訪、息子が三月卒業して、正金銀行へ入ることになったに付、私に保証人になつてくれと云ひ、一時間あまり話して去る。

四時頃から近所を散歩。俄に暖くなつたので、頭が重い。

「舞台」三月号の製本をとどけて来たので、高橋、難波、清水、池田、林、原田、東儀の諸家へ発送。

夜は読書。八時ごろ入浴。暮れて又寒くなる。

十時半就寝。

二十三日（木曜）晴（四十八度）

午前九時起床。きのふに引きかへて、寒い風が吹く。戯曲をかきつづける。

午後一時頃に浦岡の細君が病氣見舞の返礼に来て、おえいと一時間ほど話してゆく。

「人情風俗」の武俠社から原稿料を送つて来たので、返書。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十四日（金曜）陰、雨（四十八度）

午前八時起床。

朝食後、二階へあがると脳貧血の気味、葡萄酒をのんで暫時休息。それから戯曲をかきつづける。

十時頃から細雨。大村からサンデー毎日を送つて来た。それには大村の当選脚本「堂島繁盛記」が掲載されてゐるのである。

戯曲も大かた纏まつたので、午後三時頃から第一幕を訂正、浄書。夕方までに六枚。

夜は読書。八時ごろ入浴。雨やんで星が出た。十時半就寝。

二十五日（土曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。森部は目黒にゆく。

戯曲を訂正しながら浄書。

午頃から四谷を散歩。一時半ごろ帰宅。晴れて春めく。四時頃までに浄書十一枚。訂正しながら浄書するので、捗取らない。

けふは嫩会例会で、五時半頃に鈴木が先づ来た。ついで大村、岸井、額田、小林、三橋、中島、佐久間が来た。山下は感冒で欠席、岡田、山崎も欠席。例に依て私の江戸講話、劇談、雑談など。十一時散会。

それから入浴。十二時半就寝。

二十六日（日曜）晴、陰（五十度）

午前九時半起床。

朝から快晴。森部同道で十一時頃から家を出で、浅草の吾妻橋まで自動車で行く。

それから隅田川公園を散歩。公園となつてから向島付近の姿はまったく変つてしまつた。もう斯うなつては、江戸時代、明治大正時代の隅田川のおもかげを忍ぶことは出来ない。今昔の感に堪へずとは此事であらう。晴れてはゐるが、川風が寒い。

帰途、浅草公園へ廻ると、観音堂は今や改築中で、四月上旬には落成するといふ。中清へ立寄つて昼餐、こゝも店の構へが全く變つてゐた。

地下鉄道に乗つて、上野の松坂屋前で下車。松坂屋へ

も立寄つたが、あまり混雑してゐるので、早々に出る。それから自動車に乗つて、午後二時三十分ごろ帰宅。午後から陰つていよゝ寒くなる。

渡辺の愛子が来てゐて、恰も帰るところであつた。ほかに留守中、来客無し。

読書。四時半頃から俄に雪紛々と降り出したが、間もなく止む。

八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十七日（月曜）晴（五十度）

午前九時起床。晴れてはゐるが、風が寒い。

おえいはおさきとおせんを連れて、銀座へ買物に行く。

戯曲を訂正しながら浄書。二時過る頃におえい等帰宅。富塚方への贈物を三越に頼んで来たといふ。

三時過る頃に岸井が来て、舞台四月号の原稿をうけ取り、三十分あまり話してゆく。ついで黒川君が来て、四月興行に何か一幕物をかいてくれといふ相談があつたが、これといふ思ひ付もないので断る。黒川君は六時近い頃まで話して去る。

新潮社から原稿料を送つて来たので、返書。

八時頃に佐久間が来て、九時過る頃まで話してゆく。それから入浴。読書。十時就寝。

二十八日（火曜）雪、晴（五十四度）

午前九時起床。

暁方に雪が降り出して、庭の花壇など白くなつたが、やがて止んで晴れる。

戯曲を訂正しながら浄書。午後一時ごろ四谷を散歩。

二時ごろ帰宅。けふは風なく、寒気も弛む。

夕方までに浄書十枚。どうも捗取らない。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

本月の仕事は隣人（隣人の友、五枚）戯曲（中央公論、未完）ほかに「舞台」の編集など。

（翻刻担当…鈴木優作）

昭和八年三月

一日（水曜）陰（五十度）

午前九時起床。

戯曲三枚を浄書、これにて第一幕三十七枚脱稿。更に第二幕をかきつづける。

丸尾君から木太刀社中の句集「雲雀笛」を送つて来たので、返書。中島から郵書が来て、痔疾に悩んでゐるといふので、返書。

三時過る頃に目黒の姉が来た。朝から陰つて寒い。

夕方までに原稿浄書七枚。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。夜半から眼がさめて、三時頃まで眠られなかつた。

二日（木曜）晴（五十三度）

午前八時半起床。

正岡君から「舞台」原稿を送つて来たので、返書。原田君から「芸天」再興の通知が来たので、返書。高梨君にたのまれた色紙二葉に揮毫返送。

三時頃に額田が来たので、中島の痔疾の話をする、日本橋辺に良医があつて、佐久間がよく識つてゐるといふので、取りあへず中島に通知してやる。額田は四時頃まで話してゆく。

夕方までに戯曲の訂正浄書七枚。
夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。今夜も眠られず。

三日（金曜）晴、陰（五十度）

午前二時三十二分、近来の強震、家内の者もみな起きた。それから引きつづいて眠られず、六時頃から漸く眠る。

十時頃に眼をさますと、新聞号外がもう出てゐた。今晩の地震は奥州金華山沖で、青森、岩手、仙台、福島 of 海岸地方は一丈余の海嘯に襲はれたといふ。

目黒からおえつが来て、雛祭の赤飯を食ひ、白酒飲んでゆく。姉にもみやげを持たせて遣る。

二時頃から四谷を散歩。三時ごろ帰宅。海嘯の被害十万户、死傷千五百人に達したといふ号外が再び出た。地震国の災害頻々、痛嘆に堪へない。

夕方までに浄書六枚。夜は読書。

八時ごろ入浴。十時半就寝。今夜は安眠。

四日（土曜）晴、陰（五十五度）

午前九時起床。

戯曲を訂正しながら浄書。

午後十二時頃から四谷を散歩。一時半ごろ帰宅。

四時頃に浜村君が来て、色紙と短尺の揮毫をたのみ、五時廿分頃まで話して去る。そのあひだにサンデー毎日の小野君が来て、随筆の寄稿をたのんでゆく。

夕方までに浄書十枚。夜は読書。

八時ごろ入浴。新青年から原稿料を送つて来たので、返書。

十時半就寝。

五日（日曜）雨、陰（五十五度）

午前九時起床。細雨。

額田から郵書が来て、慶応病院に専門の肛門科はないといふので、その旨を中島に通知、額田にも返書。正岡君の原稿を一読、岸井に郵送。

戯曲を訂正しながら浄書。午頃から雨やむ。

午後二時半頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。

こゝで大野君に逢つた。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

六日（月曜）陰（五十度）

午前九時起床。

戯曲を訂正しながら浄書。

午後一時半頃にゾオ・ペンリントン夫人が通訳の酒井君同道で来訪。夫人は「修禪寺物語」「長柄の人柱」

を英訳した人である。日本現在の劇壇について種々質問あり。一時間ほど話して去る。

つゞいて大村が歌舞伎座の劇評を持参、三十分ほど話してゆく。つゞいて俵木と岸井が来て、五時半頃まで話してゆく。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。今夜は午前五時頃まで眠られず。

七日（火曜）晴（四十八度）

午前八時起床。晴れてはみるが、寒い。

津沢の寿子が病氣だといふので、おえいは十一時頃から見舞に出てゆく。

サンデー毎日の随筆をかく。昨夜不眠のために頭が重い。

小寺融吉君に郵書を送る。ペンリントン夫人紹介の件である。

午後二時頃に三橋が来て、三時過る頃まで話してゆく。そのあひだにおえい帰宅。寿子はもう起きてゐたさうである。

午後八時頃までに随筆五枚をかき終る。題は東京の花入浴。読書。十時半就寝。

八日（水曜）雪、晴（四十八度）

午前八時半起床。

サンデー毎日の随筆を訂正して発送。

十時頃から雪晴れる。

三時頃に岸井が来て、四時頃まで語る。朝鮮人にたのまれた短尺十枚に揮毫。森部は前進座の初日を見物にくく。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

九日（木曜）晴（五十度）

午前八時半起床。

小寺君から郵書が来て、来週火曜日にペンリングトン夫人に面会するといふので、その旨を夫人に通知。小寺君にも返書。

書物展望社から原稿料を送つて来たので、返書。額田から舞台の戯曲五編を送つて来たので、返書。

午前一時頃に三橋が来て、北村小松君の住所を問合せ、門口で帰る。

戯曲をかきつゞける。案外に長くなるので困った。中村孝子から郵書が来て、「舞台」所載の「旅鳥」が昭和座で上演されることになったといふので、返書。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十日（金曜）陰（四十八度）

午前十時起床。けふは陸軍記念日、朝から花火の音がきこえる。

山下の細君から郵書が来て、山下は去る六日チブスと決定、中根岸の下谷病院に入院したといふ。半月ばかり消息が絶えてゐると思つたらこの始末、まことに意外であつた。取りあへず細君に返書。

午後一時頃に額田が来て、これから病院へ山下を見舞にゆくと云ひ、三十分ほど話してゆく。

つゞいて岸井が来て、これも山下の入院に驚いてゐた。明日は小出君の結婚披露会がレインボウ・グリルに開かれる筈であるが、私は不参、その祝物の花束をとゞけて呉れるやうに岸井に頼む。

隣人の友社から原稿の礼として三越の商品券を送つて来たので、返書。嫩会員一同に山下入院のことを通知。夜は読書。七時半ごろ入浴。九時頃から雪まじりの雨。十時半就寝。

十一日（土曜）雪（四十九度）

午前九時起床。夜半から雪降りしきつて、一面に白くなつてゐる。この春は雪が多い。

横浜の岡本薫君から郵書が来て、舞台二月号所載の「木枯」が小石川劇場で上演されることになったといふ。

返書。

元園町会から三陸震災義捐金を募集に來たので、寄付。午後一時頃に中野が來て、一時間ほど話してゆく。

戯曲を訂正、浄書。午頃から雪やんで、やがて日が出た。

四時頃に額田と岸井が來た。小出君結婚披露会の帰途である。額田の話によれば、山下は目下のところ熱度三十九度、さしたる重態でもないらしいといふ。二人は五時半頃まで話してゆく。

中村孝子が來て、自作上演記念の服紗をくれ、門口で帰る。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十二日（日曜）晴（五十四度）

午前九時起床。晴れて寒気弛む。

戯曲を訂正、浄書。訂正が多いので、一向に抄取らない。

午後一時頃から四谷を散歩。二時ごろ帰宅。大野の細君が來て、孫娘誕生の祝物をくれた。

南柯吟社の渡（辺）君から寄稿の依頼状が來たが、断りの返書。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十三日（月曜）雪、晴（五十度）

午前九時半起床。雪紛々と降つてゐる。

大村、小林、鈴木から郵書が來た。いづれも山下入院の件である。

戯曲を訂正、浄書。午頃から雪やんで晴れる。

大阪の山上から神戸の牛肉を送つて來たので、返書。

額田から郵書が來た。大阪の鼎会の懸賞脚本を舞台社で募集する件である。額田に返書。岸井にもその旨を通知。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十四日（火曜）晴（五十二度）

午前十時起床。晴れて風吹く。

戯曲を訂正、浄書。

午後一時ごろ四谷を散歩。二時ごろ帰宅。

留守中に松沢雪松君來訪、例に依て吉祥寺のウドをくれたので、そのウドを小川君と中川君方へ分配。

おえいは吉岡医師方へ行つて診察を受けると、例の病氣にて血圧二百十五、当分服薬して安静にしてゐると云ひ渡された。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十五日（水曜）晴（五十一度）

午前九時半起床。

十一時頃に山崎が来て、二月分の会費をとり、十分ほど話してゆく。

山下の細君から郵書が来たので、返書。山下の経過は余り良好でないらしい。つゞいて山下の父からも郵書が来た。

戯曲を訂正、浄書。第三幕が面白くないので、書きかへることにした。

午後二時半頃に岸井が来て、四時頃まで語る。今夜は長谷川君の「臉の母」の会が帝国ホテルに開かれるのであるが、私は欠席、代理として森部を出してやる。

四時半頃に小林と鈴木が来た。二人は山下の見舞に行つた帰途であるが、その報告によつても山下の容態はよくないといふ。困つたものである。

春陽堂から「異妖新編」新版五部をとゞけて来た。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時過る頃に森部帰宅、なか／＼の盛会であつたといふ。

十一時就寝。

十六日（木曜）雨、晴（五十度）

午前九時起床。

十一時頃に大阪の山上が坂東弥「五」〈三〉郎君同道

で来た。山上はその監督する家庭劇の脚本を東京の作家に依頼するために上京したのであるといふ。昼餐を喫して一時頃まで話してゐたが、額田はまだ来ないので、電報を発送。

二時半頃に額田が来たので、私は入れ代つて市会議員の選挙投票に出てゆく。投票場は元園町小学校である。恰も雨降りしきる。帰宅すると、三橋が来た。

額田、山上等は文芸家協会へゆくとて、三時過る頃に去る。三橋は研文社へゆくとて去る。やがて三橋は岸井同道で引返して来て、玄関で話して去る。

茅ヶ崎の中島から（郵書が来て、）痔疾は快方に向つたといふ。返書。

夕より雨やむ。おえいは頭痛がするとして早く寝る。読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十七日（金曜）晴（五十一度）

午前九時起床。風吹く。

十一時頃に久保田米斎君が来て、桜町大膳の事蹟について種々の参考記録を示され、十二時半頃まで話してゆく。

松沢君に頼まれた短尺十枚、浜村君に頼まれた色紙二枚、短尺二枚に揮毫、それ／＼に発送。更に森部の短尺十枚をかく。

三橋の父が来月六日出発、伊太利へ向ふといふので、郵書を送る。本間君から郵書が来たので、返書。あはせて「異妖新編」一部を発送。

岐阜の岡田といふ人から門下生にしてくれといふ郵書が来たので、断りの返書。あはせて「舞台」一部を発送。鈴木小春浦君から郵書が来たので、返書。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十八日(土曜)晴(五十五度)

午前七時半起床。

けふは彼岸の入りであるが、おえい病中に付、森部が代理として青山へ墓参にゆく。目黒の姉も青山で待合せてある筈である。

南柯吟社に返書。十二時過る頃に森部帰宅、姉と共に目黒へ行つたが、西郷山の赤兎埋没事件で、見物人が群集してゐたといふ。

十二時半頃から四谷を散歩。帰途、麴町八丁目で三橋に出逢つたので、打連れて帰宅。三橋は一時間ほど話して去る。そのあひだに浦岡の細君がおえいの見舞に来てくれた。

文芸時報社の婦人記者が来て、劇に関する談話を聴いてゆく。

四時頃に額田の細君がおえいの見舞に来了。つゞいて

岸井が来た。

六時頃に松竹の黒川君が来て、東京劇場の四月興行に「修禪寺物語」と「正雪の二代目」を上演するといひ、三十分ほど話してゆく。

大阪毎日新聞社の新妻君から郵書が来て、大阪の福助魁車、寿三郎が組織する鼎会演劇会を大阪毎日新聞後援の下に、来る廿七、廿八、廿九の三日間、中座で開演するに付、私の喜劇「能因法師」を上演したいといふ。承諾の返書。

湯川君の宅から百日忌の配りものを届けて来たので、返書。旧友の一人、今は寒月〈院〉純観一道居士となつて仕舞つたのである。往時を追懷して、覚えず帳然。

辻山春子の戯曲「アパート小景」奥田久司君の「喜劇」戯曲「四面楚歌」を編集。舞台五月号の原稿である。八時ごろ入浴。十一時就寝。

十九日(日曜)晴、陰(五十八度)

午前九時起床。

晴れて春めく。午後、近所を散歩。千鳥ヶ淵公園の桜も蕾はまだ堅い。

野村好之助君の戯曲「密偵」を編集。三時頃に上松のおすゝが来て、おえいの枕もとで三十分あまり話してゆく。

森部は夕から飛行会館の地球座演劇を見物にゆく。
夜は読書。夕から陰つて折々に雨。八時ごろ入浴。
十時過る頃に森部帰宅。十一時就寝。

二十日（月曜）陰、晴（五十六度）

午前九時起床。

隣家の地揚げ工事で、土突きの音が二階にひびくので、
下座敷に降りて読書。

午後、一時頃から四谷を散歩。二時頃帰宅。留守中に
川崎の原君が来て菓子をくれた。

菅原君の戯曲「霧の夜」を編集。四時頃に原君が再び
来て、いよ／＼政法大学を卒業することになったと云ひ、
一時間ほど話してゆく。

つゞいて佐久間が来て、六時過る頃まで語る。松沢君
と浜村君から短尺揮毫の礼状が来た。
読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十一日（火曜）晴（五十五度）

午前八時起床。風吹く。

おえいは吉岡医師にゆく。

午後一時頃に森田と中野来訪。森田は新声劇の用件で
昨日出京、今夜帰阪するといひ、三時半頃まで話してゆ
く。

西尾君の喜劇「黄薜寺門前」を編集。風は終日吹きや
まず。

五時頃に渋谷の大工倉持が来たので、目黒の庭の西隅
に書庫の増築をたのむ。倉持は六時過る頃まで話してゆ
く。

夜は読書。十時半就寝。午前四時頃まで眠られず。

二十二日（水曜）晴、陰（五十八度）

午前十時起床。

おえいは目黒へ行つて月末まで静養する筈で、森部と
私と三人連れで、十一時頃から出ようとする処へ、額田
の細君が強飯を持つて来た。細君は門口で話して去る。

十一時半頃に目黒へ行き着くと、大工はもう来てゐた。
現場について書庫の位置などを相談、大工は午頃に去る。
昼餐後、姉とおえいと森部と四人連れで、坂下の川端
を散歩。目黒川の兩岸には桜を栽えてあるので、花時の
眺めは好からうと思はれる。西郷邸の付近の山では嬰兒
殺しの供養があるとして、参詣人が混雑してゐた。姉とお
えいも花を供へて帰る。

三時頃帰宅すると、佐久間が来た。けふも風が吹いて、
午後から陰る。佐久間と森部と三人で雑談、晚餐を喫し
て六時頃に目黒を出る。

六時（半）頃帰宅。読書。八時頃入浴。やがて雨の音。

十時半就寝。夜半に風雨の音が強く聞えた。

二十三日（木曜）雨、晴（六十度）

午前八時起床。細雨。

山形の本間君と旭川の渡辺博から郵書が来た。

十一時頃から雨やむ。紀尾井町の小林の細君が来て、老母三回忌の配りものをくれ、一時間ほど話してゆく。ついで東京火災保険会社員が来て、目黒の宅の保険金五千元に対して保険料十一円を受取つてゆく。

午後一時から銀座の三越へゆき、小林君方へ贈るべき供へ物を買ひ調べ、一時四十分ごろ帰宅。晴れて春めく。

森部は職業紹介所へゆき、三時ごろ帰宅。紹介所には求職者が群集してゐたといふ。

額田から郵書が来たので、返書。渡辺博に返書。下谷病院の山下にも見舞の郵書を送る。

夜は読書。八時ごろ入浴。暮れて温度いよ／＼昇る。十時半就寝。

二十四日（金曜）晴、陰（五十四度）

午前九時起床。朝は雨、やがて晴れる。

森部は私よりも先に目黒へ出てゆく。

十時頃から家を出て、紀尾井町の小林君方を訪問、老母の霊前に供物をさしげ、一時間あまり話して去る。

それから目黒に向ひ、十一時四十分ごろ着。きのふに引きかへて風が寒い。大工三人が来て、書庫の切組みに着手。植木屋が来て、糸瓜の柵を移し、書庫の敷地の樹木など栽へかへる。私も庭に出て、その指図などする。四時過る頃に岸井が来て、おえいの見舞に西瓜をくれた。ついで佐久間も来た。

森部は六時頃に帰り、岸井と佐久間は晚餐を喫して九時過る頃まで話してゆく。私は目黒に一泊。

「それから」入浴。十一時就寝。

二十五日（土曜）陰、雨（五十三度）

午前八時起床。

けふも大工三人来て、切組みをする。十時頃から細雨。午餐を喫して、十二時半ごろ帰宅。留守中に水谷君が来たといふ。

ペンリントン夫人から長谷川伸君を紹介してくれと云つて来たので、返書。

読書。雨はやまない。

嫩会例会で夕刻から山崎が先づ来た。ついで大村、岸井、鈴木、三橋、額田、佐久間が来た。小林、岡田、中島は欠席。私の江戸時代講話があつて、それから劇談、雑談。十時半ごろ散会。

入浴。十二時就寝。夜半風雨の声。

二十六日（日曜）雨、陰（五十度）

午前九時起床。雨やまず、温度も降る。まことに不順の氣候である。

十一時頃に水谷君が来て、八重子の芸術座の九州四国巡業に私の「お七」を上演したいと云ひ、一時間ほど話してゆく。

一時過る頃に目黒から電話がかゝつて、大工はこれから書庫の建前にかゝるといふので、森部同道で出てゆく。午頃から雨やむ。

一時四十分頃に目黒に行き着くと、やがて上松のおすじが来た。つゞいて大村がおえいの見舞に来た。大村は廿分ほど話して去り、おすじは四時頃に去る。

五時過る頃に建前を終つたので、大工と石屋に祝儀をやる。

六時頃に佐久間が来た。七時頃に森部は麴町へ帰り、佐久間は九時過る頃まで話して去る。私は一泊。

十時ごろ入浴。十一時就寝。

二十七日（月曜）雨（五十二度）

午前八時起床。

昨夜半から降り出した雨はやまないので、職人等は来ない。

九時頃に森部が迎ひに来了。おえいも帰宅するといふ

ので、三人同道で午後二時頃から目黒を出る。

二時半ごろ帰宅。山下の父から郵書が来て、山下の容態又もや悪化、廿五日の午後に輸血を行つたといふ。まことに困つたことである。その旨を取りあへず額田にも通知。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十八日（火曜）晴（五十四度）

午前九時起床。雨は晴れたが、風が強い。

十一時頃から森部同道で山下の見舞にゆく。下谷病院には山下の父、弟、細君が居合せて、父と弟には初対面の挨拶をする。この人々の話によれば、山下の経過いよ／＼不良、けふも第二回の輸血を行ふ筈であるといふ。私の見たところでは、差したる重態とも思はれないのであるが、医師が危険を宣告した以上、なんとも致方のないことである。

廿分ほどでこゝを出で、十二時半ごろ帰宅。

一時頃に新青年の横溝君が来て、七月号に廿枚ほど「■」の翻訳物を寄稿して貰ひたいといふ。但しその訳者は誰でもよいから、私にその前書きを付けてくれといふのである。兎も角も承諾。

つゞいて佐久間が来て、祖父は一昨夜湯河原から帰つたとて、その土産物をくれた。風は吹きやまない。

佐久間は一時間あまり話して去ると、入れ代つて岸井が来て、これも一時間ほど話して去る。

六時過る頃に俳画堂の紹介で、中山久一といふ学生が来た。今度日大の芸術科を卒業した人で、演劇研究者である。なか／＼の話好きで、八時過る頃まで話して去る。それから入浴。九時過る頃に額田が来て山下の病状を問ひ、十時過る頃まで話してゆく。山下が初めて私の宅へ来たのは、大正十年十一月である。爾来あしかけ十三年、今や永別となるべき運命に迫つてゐるかと思ふと、黯然。

十一時就寝。さなきだに不眠勝の此頃、山下のことなど色々思ひ出されて、午前四時頃まで眠られなかつた。

二十九日（水曜）晴（五十八度）

午前九時起床。

十一時頃から森部同道で目黒へ出てゆく。大工三人、石工二人、ほかに植木職も来てゐた。

二時過る頃に小林が来たので、新青年の翻訳物を相談する。小林は一時間あまり話して去る。やがて額田から電話が来て、唯今山下を見舞つて来たが、いよ／＼絶望であるらしいといふ。

四時半ごろ帰宅。宮内百水君の「相馬大作」を編集、舞台の原稿である。中島から郵書が来たので、返書。

八時ごろ入浴。夕より陰る。十一時就寝。

三十日（木曜）晴（六十度）

午前九時起床。

大村に郵書を発して、山下危篤の旨を通知。坂上君から郵書が来たので、返書。高橋と難波から「舞台」の礼状が来た。

〈市川小太夫の細君告别式、森部を代理に出してやる。〉

十一時頃に水戸の山田信立君が来た。曾て東京日日新聞社に在つた人で、別後三十年、十二時半頃まで話してゆく。そのあひだに中野が来て、これも山下危篤を報告してゆく。

小林の戯曲「神と人との愛」を編集。あまり面白くない。

三橋の父が洋行の暇乞ひに来て、門口で話して去る。いよ／＼来月六日、白山丸で出発するといふ。

五時過る頃に佐久間が来て、舞台昨年の合本をとゞけ、おえいと森部を相手に七時頃まで話して行く。

八時ごろ入浴。九時ごろに小林の戯曲を編集し終る。十一時就寝。

三十一日（金曜）雨（五十五度）

午前八時起床。春らしい雨がしと／＼と降る。この雨の音を山下はどんなに聞いてゐるかと思ふ。

中島から郵書が来て、自分の痔疾は快方に向つたが、細君の容態がよろしくないといふ。いづ方でも多事、困つたものである。山下の父から郵書が来て、山下の病状は先づ持合の姿で、依然危険状態を脱しないといふ。

東京劇場から初日の入場券を送つて来たので、佐久間と三橋に郵送。

午後二時頃に倉持が来て、目黒の書庫の工事半金を受取り、一時間ほど話してゆく。つゞいて岸井が来て、舞台五月号の戯曲原稿をうけ取り、これも一時間ほど話して去る。岸井にも東劇の入場券をやる。

午後から風が吹き加はつて雨やまず、温度も降る。兎角に不順の氣候である。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

本月は戯曲をかきつゞけて中止。ほかに、東京の花（サンデー毎日、五枚）舞台の編集など。殆ど纏まつた仕事をしなかつた。

（翻刻担当…鈴木優作）

昭和八年四月

一日（土曜）晴（六十度）

午前八時起床。朝から快晴、気候も春めく。

十時半頃に黒川君が来て「正雪の二代目」の上演料をくれ、門口で話して去る。森部は十一時頃から目黒へ出てゆく。

けふは東劇の初日であるので、午後二時頃から家を出て銀座を散歩。伊東屋で文房具と短冊などを買ひ、それから東劇へゆく。三時廿分開演。岸井、佐久間、三橋もついでに来た。

岸井は下谷病院を見舞つて来たが、山下は昨日頃から少しく持ち直して、この分ならば或は回復の曙光を認めるかも知れないといふ。どうかさうあつて貰ひたいものである。

狂言は第一「髑髏尼」第二「正雪の二代目」第三「修禪寺物語」第四「恋飛脚」第五「歌舞伎踊」であるが、初日といひ、歌舞伎座掛持の俳優の都合で幕間も長く、第四を演じ終つたのは十一時十五分頃であつた。第五を見残して帰宅。

留守中に大阪毎日の新妻君から竹の子一籠を送つて来た。先日のかねへ会で「能因法師」を上演した礼であ

るらしい。山下の父から郵書が来たが、これも岸井の報告と同様で、山下は持ち直したらしいといふ。

入浴。午前一時就寝。六時頃まで眠れなかつた。此頃は例の不眠症が兆して来たらしい。

二日（日曜）晴（六十度）

午前八時半起床。快晴。けふは日曜は大当りである。山下の父と新妻君に返書。

十一時頃から森部同道で目黒へゆく。昨夜不眠のために頭が重い。

左官職が来て、書庫の外壁を塗つてゐた。四五日中には全部落成するといふ。佐久間もあとから来た。

二時頃に目黒を出て、二時半頃帰宅。留守中に渡辺のあい子が来たといふ。それから町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。

中島と京都の森ほのほ君から郵書が来た。中島の細君は結核が脳を犯したので、最早回復の見込みはないといふ。どこにも病人の多いのは困つたものである。取りあへず返書。額田にもその次第を通知。森君にも返書。

夕刊をみると、けふは各所の人出おびたく、潮干狩りなども頗る賑はつたといふ。

夜は読書。八時ごろ入浴。十時就寝。今夜は安眠。

三日（月曜）晴、陰（六十五度）

午前八時起床。神武天皇祭。

隣家の近藤君方では本日建前をするといふので、朝から仕事師など大勢あつまつて賑かである。

午後から靖国神社付近を散歩。それから千鳥ヶ淵公園へ廻つてみたが、英国大使館前の桜はまだ咲かない。今年の花は頗る後れたやうである。一時半ごろ帰宅。

読書。大阪の大西君に郵書を送る。伊豆に帰郷中の大村から生椎茸を送つて来たので、返書。

五時頃に三橋が来て、父はいよ／＼明朝東京を出発するといひ、四十分ほど話してゆく。つゞいて佐久間が来て、七時過る頃まで話してゆく。

八時頃入浴。読書。九時頃に鶴岡君が来て、万平ホテルに於ける結婚披露会に列席した帰途であるといひ、門口で帰る。

十一時就寝。

四日（火曜）雨（六十二度）

午前八時起床。

おえいは吉岡医師へゆく。血圧百八十五に降下したさうである。

西尾君の喜劇「黄蘗寺門前」を編集し終る。更に先頃来中止してゐた戯曲の第一幕と第二幕を訂正。

（植木屋が来て、目黒の植木代と手間賃を受取つてゆく。）

終日雨やまず。夜は読書。八時頃入浴。十一時就寝。

五日（水曜）雨（六十五度）

午前九時頃起床。けふも雨。

岸井から「舞台」原稿の件について郵書が来たので、返書。鈴木余志子から自作の喜劇を送つて来た。

目黒の書庫が近日落成するに付、不用の書籍はそちらへ送ることとし、二階の書物部屋の書籍を整理。午頃から森部に指図して荷造りをする。おさきもおせんも手伝ふ。午後五時頃までに先づ書物部屋の半分を整理し終る。震災以後、碌々に書籍を買はぬやうであるが、何か雑書が堆積してゐるのである。

そのあひだに、浦岡の細君がおえいの見舞に来て、塩鱈をくれた。大村から返書が来て、昨日帰郷したといふ。

晴れんとして晴れず、終日細雨。

夜は読書。八時ごろ入浴。十一時就寝。

六日（木曜）雨、陰（六十二度）

午前九時起床。

けふも森部が二階の書庫を整理。

十一時過る頃に岸井が来て、これから茅ヶ崎の中島方へ見舞にゆくと云ひ、十二時半頃まで話してゆく。「舞台」の古雑誌のうちに岸井の戯曲掲載の分があるので、岸井はそれを貰つてゆくと云ふ。

鈴木は戯曲に批評を添へて返書。あはせて鈴木は戯曲掲載の「舞台」を小包み便にして発送。中村孝子にもその戯曲掲載の「舞台」を郵送。ついでに額田、中島、小林等の戯曲掲載の「舞台」を折り分ける。古雑誌の整理もなか／＼面倒である。

書籍の整理があらかた済んだので、今度は玩具の整理にかゝる。いつの間にか瓦楽多が溜まつて、これも頗る面倒であつた。

夜は読書。八時ごろ入浴。

九時過る頃に岸井が再び来て、今が茅ヶ崎の帰りであるといふ。岸井は小林を誘つて中島方へ見舞に行つたが、細君はいよ／＼容態悪く、もはや二三日の余命であるとのことであつた。何分にも病症が病症であるから、これは諦めるの外はあるまいと思はれる。岸井は一時間ほど話して去る。

十一時就寝。

七日（金曜）陰（六十度）

午前八時起床。陰つて寒い。氣候不順である。

平河町の下村君が来て、短尺の揮毫をたのみ、三十分ほど話してゆく。

午後から折々に晴れて、やゝ暖くなる。十二時半頃に大村が来て鉢植の草花をくれ、明治座の劇評を置いてゆく。

二時半頃に小林が翻訳の原稿「別荘の幽霊」を持参、四時頃まで話してゆく。その原稿を添削、更に前書を添へて博文館へ郵送。

読書。八時ごろ入浴。十一時就寝。

八日（土曜）陰（六十一度）

午前九時起床。

大阪の大西君からおえい見舞の郵書が来た。

十一時過る頃から森部同道で目黒へゆく。書庫は大抵出来して、左官職二人が外囲の壁を塗つてゐた。壁もけふで終るといふ。

それから散歩。目黒川の岸の桜も紅らんでゐた。これが満開になつたら中々の美観であらうと思はれた。

四時頃に目黒を出で、同三十分ごろ帰宅。留守中に津沢の寿子と岸井が来たといふ。

七時頃に岸井が再び来て、「舞台」五月号の編集について相談あり、八時過る頃まで話してゆく。そのあいだに改造社の使が来て、改造文庫「修禪寺物語」の増版五

百部の捺印を求めてゆく。

入浴。読書。十一時就寝。夜半に雨の音。

九日（日曜）雨（五十八度）

午前九時起床。

下村君に頼まれた短尺十五枚に揮毫。

森部は午後から額田方へ出てゆく。雨降りしきる。けふの日曜はさんぐである。

津沢の寿子に郵書を送る。小林にも郵書。森部の兄から郵書が来たので、返書。

佐久間から郵書が来て、祖母納骨のために下阪したといふ。鈴木余志子と中村孝子から「舞台」受取の礼状が来た。北海道の小林俊之といふ人から俳句の選をたのみ、併せて木ぼりの熊を送つて来た。

四時頃に森部帰宅。暮れても雨はやまない。

夜は読書。八時頃から入浴。十一時就寝。

十日（月曜）雨、陰（六十一度）

午前九時起床。朝は細雨、やがて止んで陰る。

「甲子楼劇談」六枚をかいて、岸井に郵送。北海道から頼まれた句集を選了、あわせて短尺四枚をかく。

中島から郵書が来て、細君は依然重態ながら小康を保つてゐるといふ。返書。

夜は読書。八時ごろから入浴。十一時就寝。

十一日（火曜）陰、晴（六十四度）

午前八時半起床。

額田から郵書が来た。「舞台」編集に関する件である。

山下の父から郵書が来て、山下の容態はやゝ快方に向つたが、何分にも衰弱が激しいので心配してゐるといふ。

午後、四谷を散歩。一時頃帰宅すると、津沢のひき子が来てゐた。

二時頃に額田が来て、四時過る頃まで話してゆく。そのあひだに植田の細君も来た。下山君が来て、揮毫の短尺を受取つてゆく。

五時頃に寺田君が来て、六時過る頃まで話して去る。読書。八時ごろ入浴。午後から晴れて明るい月が出た。十一時就寝。

十二日（水曜）晴、雨（六十二度）

午前八時半起床。おえいは吉岡医師へゆく。

おさきとおせんは花見にゆくとて朝から出る。二人に小づかひを遣る。

岸井から原稿をうけ取りの郵書が来た。藤嶋君から郵書が来たので、返書。山下の父にも返書。

十一時頃から神田を散歩。堀ばたの桜も漸く開き出し

た。一時ごろ帰宅。午後から陰つて、四時頃から雨。やがておさき、おせん帰宅。

読書。雨はます／＼強くなる。渡辺のあい子が菓子を持って来た。

八時ごろ入浴。十時半就寝。

十三日（木曜）陰（六十四度）

午前九時起床。

十時過る頃に秋元俊吉君が久しぶりで来訪。十二時頃まで話してゆく。

午後一時頃に岸井が来て、二時頃まで語る。それから近所を散歩。こゝらの桜も七分通りは開花、例年よりもほど後れた。

おえいと森部は東京劇場見物のために、三時四十分から出てゆく。

午後七時から麴町中学校で春季種痘があるので、おさきとおせんは種痘にゆく。～

読書。八時ごろから入浴。十時廿分頃におえい等帰宅。十一時三十分頃就寝。

十四日（金曜）晴、陰（六十四度）

午前八時半起床。

十時頃に大工の倉持が小僧同道で来て、二階の本部屋

の棚を取外しに「取」かゝる。森部も手伝ふ。十二時頃に終つて、小僧は荷車に積んでゆく。私は森部と倉持と三人で後から出る。

十二時廿分ごろ目黒着。森部と近所を散歩。目黒川兩岸の桜も七分通り開いてゐた。

二時頃に小僧が荷車を挽いて来たので、大工は棚の取付けにかゝる。五時半ごろまで大抵は出来あがつたので、森部を残して私は一足先に帰宅。

小林から郵書が来た。留守中に来客無し。

七時過る頃に森部帰宅。八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。夜半大雨。

十五日（土曜）雨（六十五度）

午前九時起床。今朝も細雨。花時の習といひながら、兎角に不天気づくきである。

実践女学校卒業生の神谷とも子が三木春雄君の紹介状を持参、「舞台」の誌友である。自作の戯曲を見てくると、一時間ほど話してゆく。つゞいて山崎が来て、三月分の会費をとめてゆく。

茅ヶ崎の中島から郵書が来て、細君は十四日午前一時廿分遂に死去したといふ。告別式は十六日午後二時から荏原区中延町の法連寺に於て執行。覚悟の上とはいひながら、中島の苦悲痛ひやられた。

午後二時頃に井上良平君が久しぶりで来訪、四時頃まで語る。雨は時々に晴れかゝつて又振りつゞく。
読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十六日（日曜）陰（六十三度）

午前八時起床。今朝も陰つて薄寒い。九日といひ、けふと云ひ、花時の日曜はさん／＼である。

巢鴨の馬橋といふ青年から門下生にしてくれと云つて来たので、断りの返書。三橋にも郵書。植田の細君が来た。

けふは中島の細君の告別式であるので、森部を代理として香典を持たせて遣る。天気のせみか、頭が重いので、近所を散歩。

四時頃に森部帰宅、額田、岸井、小林の細君、中野等も会葬したといふ。

読書。夕刊をみると、けふは曇天ながら花見場所はいづこも雑踏したといふ。ことしの花もこれが名残りであらう。

八時ごろ入浴。九時頃に倉持が来て、目黒の書庫の残金を受取り、十時過る頃まで話してゆく。

十一時就寝。

十七日（月曜）陰（五十八度）

午前八時起床。

九時半頃に関運送店からトラツクをまはして来たので、天候がやゝ覚束ないと思ひながら、不用の書物を目黒へ積み出す。

森部はトラツクに同乗して、一足先に出てゆく。おえいと私はあとから出てゆくと、赤坂一ツ木の通りで私等の自動車が他の自転車に衝突、少しく自転車を破損したので、その悶着に廿分ほど暇取り、十時半頃に目黒着。人に怪我などさせないで仕合せであつた。

おえい、おえつも私も手伝つて、書籍類を書庫に積み込み、午頃に全く終る。

午後、森部と目黒川のほとりを散歩。桜は今や満開であつた。こゝの桜は近年植え込んだものであるといふ。

三時半頃におえい、森部と帰途に就く。姉も途中まで同道、渋谷駅付近の植木屋で桜、椿、芍薬などを買ひ、目黒へとゞけてくれるやうに頼む。

こゝで姉に別れて、四時五十分ごろ帰宅すると、恰も三橋が来た。三橋の祖母は本年八十歳で、昨日その寿筵を開いたといひ、六時頃まで話してゆく。森部は六時半頃から新橋演舞場見物にゆく。

七時頃に小林が来て、舞台誌友の草場医師から届けてくれと頼まれたとて、生きてゐる鯉一尾を持参したので、取りあへず庭の池に放して置く。小林は綺堂戯曲集（自

分の分四冊、堀川肇子の分九冊）を受取り、九時頃まで話してゆく。明日は逗子の堀川方で舞台誌友会を開き、額田、岸井等も出席するといふ。

中村邦主君は八十五歳を以て十六日午前七時三十分死去の通知が来た。かけちがつて近年久しく逢はなかつたが、英国大使館に四十年以上も勤続した人である。九時半入浴。十時頃に森部帰宅。十一時就寝。

十八日（火曜）晴、陰（六十度）

午前八時起床。

森部に命じて、雑司ヶ谷の中村君方へ香典を届けさせる。

午後一時頃に中島が来て、細君病中の挨拶を述べ、その遺骨をたづさへて近日帰阪するといふ。つゞいて岸井が来て、大村戯曲集の用紙をみせ、一時間ほど話してゆく。それから近所を散歩。

四時頃から帰宅すると、下谷病院から電報が来て、山下は本日午後一時三十分死去したといふ。衰弱が甚しいとは聞いてゐたが、突然にこんな異変があらうとは思はなかつたのである。取りあへず嫩会一同に電報を發して、山下死去を通知。森部を下谷病院へ走らせる。

それと入れちがひに、中野と岸井が来た。葬儀万端は印刷局官報課の人々が取計らつてくれると云ふのであ

るが、兎も角も助力して遺漏なきやうに注意してやる。伝染病であるために、山下はすぐに死体収容室へ移されて仕舞つたといふので、私は出てゆくのを止める。

七時半頃に三橋が来た。電報におどろかされて駆けつけたのである。直ぐに病院の方へ手伝いに行くやうに云ひ聞かせる。

やがて森部が歸つて来て、葬儀は明日午後二時から落合火葬場に於て執行、更に郷里に於て本葬を営むといふ。大村、山崎等は已に病院に来てゐるといふので、再び電報を發して遠方の人々に其旨を通知。

九時ごろ入浴。十時頃に岸井が来て、明日葬儀のことは一切決定、病室は手狭であるので、今夜は家族だけで通夜することとし、一同引揚げて来たといひ、十一時過る頃まで話してゆく。

十二時就寝。

十九日（水曜）晴、陰（六十二度）

午前八時起床。

けふは山下の葬儀、天氣が好くて幸である。起床すると、間もなく額田の細君が来て、これから病院へゆくといふ。

つゞいて山崎が来た、額田が来た。みな打連れて病院へゆく。

十一時頃に山崎が再び引返して来て、棺に入れて送る

のであるから、山下の戯曲掲載の「舞台」一部をくれといふので、昨年十一月号を渡してやる。

十一時半頃に佐久間が来て、昨夜大阪から帰京したといふ。ついで鈴木余志子が来た。

午後一時頃から佐久間、鈴木、森部と私と四人連れで家を出で、四谷駅から省線電車に乗込んで、東中野駅下車。それから十分余り徒歩して、落合火葬場に着く。近年暫らくこゝへ来たことは無かつたが、葬場なども新築されて、なか／＼に設備も整つてゐた。

会葬者約四十名、嫩会も小林を除いて全部参列。岡田の宅からは本人帰郷中で不参といふ速達便が来た。

三時頃に式を終つて、三時（半）頃に火葬。あとは額田夫婦と佐久間に頼んで、嫩会員等は思ひ／＼に退散。帰途は同じく東中野駅から省線に乗込んで、新宿駅で下車。同駅楼上の食堂で山崎、三橋、森部と四人晚餐。こゝで山崎、三橋に別れて五時過るころ帰宅。

七時半ごろ入浴。やがて岸井が来て、大村戯曲集の表紙をみせ、甘分ほど話してゆく。

ついで小林が来て、けふの葬儀に不参の弁解があつたが、どうも要領を得ない。ついで又、額田が来て、山下の遺骨はとゞこおりなく自宅へ送り届けたといふ。二人は九時過る頃に去る。

十時半就寝。

二十日（木曜）陰、雨（六十一度）

午前八時起床。

早朝から植木屋二人が来て、庭の樹木を堀りにかゝる。目黒へ移す為である。あひにくに九時頃から細雨。

官報課長の原精氏に郵書を発送、山下葬儀その他について種々の厄介になつた挨拶である。田郷君と林君にも会葬の礼状を発送。

午後四時頃にトラツクが来たので、植木屋と共に木石を積み出してゆく。同時に佐久間が来て、一時間あまり話してゆく。

六時過る頃に額田の細君が小林の細君同道で来て、おいに面会、小林が葬儀不参について種々弁解があつた。細君等は八時頃まで話してゆく。ついで中野が来て、山下の葬儀は昨日終つたが、その追悼会のやうな意味で、明廿一日午後七時から山下宅で通夜をするといひ、九時頃まで話してゆく。

それから入浴。十一時就寝。

二十一日（金曜）晴、陰（六十四度）

午前八時起床。

けふは植木屋が目黒の庭へ植込みをするので、森部は

早朝から出てゆく。おえいと私も十時過る頃から出てゆく。

植木屋に指図して、木石を適宜に按排させる。午後佐久間も来た。空は時々陰つたが、温度はやゝ昇る。

植木屋は五時半頃に去る。おえいと森部は麴町へ帰宅。私は佐久間と六時頃から出て、渋谷駅から省線に乗込んで新宿駅で下車。駅内の食堂で晚餐。それから円タクに乗つて、杉並区成宗一丁目三十八の山下方へゆく。知れにくい所であると聞いてゐたが、横町の角に原氏や額田が立つてゐてくれたので、容易に知れた。

来会者は廿余人、それに家族や手伝ひの人々をあはせて、狭い家内は頗る混雑してゐた。嫩会は額田、岸井、中島、大村、岡田、佐久間の六人。神官の祝詞が終つて、記念の撮影があつた。

額田等は通夜する筈であるから、あとを宜しく頼んで、私は佐久間と共に十時過る頃にこゝを出る。新宿で佐久間に別れて、十時四十五分ごろ帰宅。

留守中に山上から吊電が来てゐた。鈴木からは速達便が来て、感冒のために今夜は欠席するといふ。

入浴。十二時半就寝。眼が冴えて、午前五時頃まで眠られなかつた。

二十二日（土曜）陰、雷雨（六十一度）

午前八時起床。

おえいが床あげの「贈」〈祝〉物を買ふために、これから三越へ出かけようとする処へ、額田の細君が来て、昨夜の通夜の報告があつた。

十時半からおえいと森部と三人連れで、日本橋の三越本店へゆき、大村と岸井へ贈るべき祝物の配達をたのみ、近所の分は持つて帰ることにする。食堂で昼餐、十二時半ごろ帰宅。

山上に返書。大村と岸井に祝物の送り状を発送。

一時頃から俄に陰つて驟雨、雷鳴。

二時頃に山下の細君が父と弟同道で挨拶に来た。過日中は混雑に取紛れてゐたが、かう差向ひになつてみると、気の毒が先に立つて言葉も出ない。細君等は一時間ほど話してゆく。おえいから餞別の品を贈る。雨はまだ止まないで、新宿駅まで自動車ですらせてやる。

三時頃から雨やむ。大村が来て、床あげの祝物がもう届いたといひ、戯曲集の自序と戯曲の原稿を置いてゆく。廿五日の嫩会例会を廿六日に延期して、山下の追悼会を営むこととし、その旨を嫩会員一同に通知。

五時半頃に佐久間が来て、一時間あまり話してゆく。八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（日曜）晴、陰（五十八度）

午前八時半起床。

一昨日目黒へ移植した樹木類がどうなつてゐるか心許ないので、十時頃から森部同道で出てゆく。

きのうの雷雨後、氣候が又もや薄寒くなつた。

目黒の樹木はみな無事であるらしい。来たついでに、森部は花壇に草花の種を播く。

四時ごろ帰宅。岸井から祝物の礼状が来た。慶応の内田君は今度卒業、松竹興業会社に入社して歌舞伎座詰になつたといふ通知が来た。

五時頃に植村君が来て、烟草と若狭のワカメをくれ、二時間ほど話してゆく。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十四日（月曜）晴（六十五度）

午前八時起床。

読書。いかなる日も読書を廃し得ないのが私の癖であるが、此頃はどうも身にしめない。一つには氣候のせゐと、二つには山下の死である。

午後一時頃に額田の細君が来て、山下の宅も大抵片付き、荷物は廿三梱として郷里へ発送したといふ。

三時頃に三井信託会社の中山久夫君が来て、三十分ほど話してゆく。麴町の現住宅を売却して目黒へ引移るに

付、その相談に來たのである。地所家屋の値も二三年前に比すれば頗る下落したといふ。

四時頃に長田秀雄君が来て、例の雪洲問題も無事に解決したとの挨拶なり。六時頃まで話してゆく。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十五日（火曜）晴、陰（六十五度）

午前八時起床。

内田君に返書。額田から速達が来て、山下一家の後始末はすべて終了したといふ。

けふは山下の遺族が遺骨をたづさへて帰郷するので、十一時四十分頃から森部同道で東京駅に向ふ。官報課の人々、ふたば会員、知人、近隣の人々等五十余名が見送りに来た。午後零時四十五分発の特急列車「さくら」で出発。それを見送つて、思はず涙ぐまれた。山下の遺骨をかうして送らうとは思はなかつたのである。

午後一時過る頃帰宅。それから町内の理髪店へゆくと、けふは廿五日の休日であつたので、空しく帰る。

五時頃に佐久間が来て、山下の写真の複写をとゞけ、六時頃まで話してゆく。晚餐後、森部と平河天神の縁日へゆく。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。夜半大雨。

二十六日（水曜）雨、陰（六十四度）

午前八時起床。風まじりの雨。

早朝に植田の細君が女中を連れて来たので、おえい同道で目黒へ出てゆく。目黒のおえいが縁付くことゝなつたので、その代りに雇ひ入れるのである。新しい女中の名は君枝、先年わたしの家に奉公してゐたおなかの妹であるといふ。九時半頃におえい帰宅。

やがて山下の父から「郵書」〈電報〉が来て、無事到着したといふ。いかに特急とは云ひながら、昨日午後に東京を出発したものが、今朝は已に長州の山村に到着、思へば早いものである。取りあへず返書。

十一時頃から雨少しく衰へる。額田の細君が山下の霊前へとて剪花を持参、あはせて山下宅に於ける通夜の写真をとゞける。

十二時半頃に岸井が来て、大村戯曲集の表紙をみせる。今度のは出来がよいやうである。岸井は二時頃に去る。雨やむ。

それから町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。

今夜は私の宅で山下の追悼会を営むので、四時半頃に山崎が来た。つゞいて額田が来た。大村、岡田、鈴木、岸井、三橋、佐久間も来た。大村は霊前に菓子供物、鈴木は白藤の鉢植を持参。六時過る頃から下座敷で晚餐。床の間に山下の写真をかざり、柿と生花などを供へて、

一同礼拝。

それから種々の昔話などに移りて、九時半ごろ散会。午後から雨の止んだのは幸であつた。

入浴。十一時半就寝。夜半に風の音。

二十七日（木曜）晴（六十五度）

午前八時起床。今朝も風が吹きつゞけてゐる。

靖国神社臨時大祭、朝から花火の音がきこえる。

高橋と難波から「舞台」の礼状が来た。内田君から返書が来た。

森部は午後から目黒へゆく。私も十二時頃から四谷を散歩。一時過る頃帰宅。風やんで、気候も夏めく。

伊藤松雄君の戯曲「天龍一葉舟」を編集。

大阪の山上から郵書が来て、山下の一行が京阪通過の際、森田、中島等と出迎ひをしたといふ。取りあへず返書。

四時頃に森部帰宅。目黒の花壇の草花もおひ／＼に発芽したといふ。

読書。八時ごろ入浴。十時就寝。

二十八日（金曜）晴、驟雨（六十四度）

午前八時起床。

山口竹美君の笑劇「早桶」を編集。大村と額田から一

昨夜の礼状が来た。

山崎の俳句を訂正して返送。おとくから郵書が来たので、返書。朝鮮人に頼まれた短尺五枚に揮毫。

十二時半頃に岸井が来た。一時半頃に佐久間が来た。岸井は二時頃に去り、佐久間は二時四十分頃に去る。

三時過ぎ頃から俄に陰つて驟雨。一時間余で晴れる。晚餐後、おえいと千鳥ヶ淵公園を散歩。帰つて読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十九日(土曜)晴(六十五度)

午前七時に起床。天長節。快晴。

額田から山下の遺稿「聚楽物語」を送つてきたので、返書。

目黒のおえつが暇乞ひに来た。

伊藤松雄君の「天龍一葉舟」を編集し終り、更に関根勝太郎君の「あをぎり」を編集。

午頃から四谷を散歩。一時過る頃帰宅。更に山下の「聚楽物語」を訂正、遺稿として「舞台」六月号に掲載の筈である。

晚餐後、近所を散歩。帰つて読書。

八時ごろ入浴。夕刊をみると、けふはいづこも非常の人出であつたといふ。十時就寝。

三十日(日曜)陰、晴(六十五度)

午前七時半起床。五月人形を飾る。

九時半頃に小田原の飯野秀二といふ人が、中村武羅夫君の紹介状を持参、劇を研究したいといひ、二時間ほど話してゆく。

飯野君は小田原の蒲鉾をくれたので、近所へ分配。目黒の植木屋が手間賃を取りに来た。

午後一時頃に岸井が来て、「舞台」六月号の戯曲原稿を受取「■」へり、二時過るまで話してゆく。

気賀君子から富山の鱒鮓を送つて来たので、大野君方へ分配。福島石井から郵書が来て、父が重病であるといふ。中島といひ、山下といひ、石井といひ、嫩会の災厄頻々たるには驚かされる。取りあへず見舞状を發送。五時頃に倉持が来たので、目黒の宅に四畳半建増しのこと及び風呂場改築のことを頼む。倉持は六時頃まで話してゆく。

それから近所を散歩。千鳥ヶ淵公園には大きい柳が栽えられた。

読書。八時ごろ入浴。十時就寝。

本月は何や彼やごた／＼して、殆どは何の仕事もなかった。来月は少しく勉強しなければならないと思ふ。

(翻刻担当…原辰吉)

昭和八年五月

一日（月曜）陰、晴（七十度）

午前七時半起床。朝はをり／＼に細雨。

けふは目黒へ行く筈になつてゐるので、九時頃からお
えい同道で出てゆく。花壇の草花はみな芽を噴いた。チ
ューリップ、躑躅、八重桜など満開である。

十時過る頃に倉持が来たので、実地について工事の相
談をする。つゞいて佐久間も来た。

おえいは十一時頃から西品川の津沢方へ向ひ、十二時
頃に佐久間等も去る。晴れて、俄に夏らしくなる。

私は目黒で午餐を済ませて、午後一時過る頃帰宅。森
部に指図して、朝顔の種を鉢に播かせる。

山下の父から礼状が来て、本月七日に本葬を行ふとい
ふ。海野から郵書が来て、二日つゞきの休日で熱海に來
てゐるといふ。いづれも返書。

四時頃におえい帰宅。読書。

晚餐後、近所を散歩。八時ごろから入浴。十時就寝。

二日（火曜）陰（七十一度）

午前七時起床。森部は九時頃から目黒へゆく。

額田から郵書が来たので、返書。おえつから帰郷の通
知が来たので、返書。気賀君子にも礼状を発送。

十一時頃から渡辺のおしげが来て、午後二時頃まで話
してゆく。陰晴定まらず、南風強く吹き暴れる。

三時過る頃に森部帰宅、目黒の八重桜や躑躅などを折
つて来た。

読書。七時半ごろ入浴。九時半就寝。風の音が強い
ので、午前二時過る頃まで安眠できなかった。

三日（水曜）風雨、晴（六十八度）

午前八時起床。風まじりの雨、湿度騰る。

十一時頃に岸井が来て、自作「幽魂の移転」の添削を
求め、午後一時頃まで話してゆく。

鈴木余志子の喜劇「初夏の微笑」山崎の戯曲「蒼き秋
の海」を一読、その批評を添へて返送。

四時頃から雨晴れる。

岸井の戯曲を一読。八時ごろ入浴。読書。

九時頃に佐久間が来て、森部と近所の喫茶店へ出てゆ
く。

十時半就寝。

四日（木曜）晴（七十度）

午前八時起床。

新青年から六月号の原稿料を送つて来たので、返書。
すぐにその小為替を逗子的小林方へ郵送。

十一時頃から神田を散歩。昼餐。古本五冊を買つて二時頃帰宅すると、額田の細君が来てゐた。細君は鮓をくれ、三時四十分頃に去る。つゞいて佐久間が来て、五時頃まで語る。

森部は午後一時頃から田郷君母堂の告別式に赴き、その帰途、目黒へまはつて五時過るころ帰宅。昨日の風雨で目黒の庭の椎の大樹が倒れたといふ。

読書。七時半ごろ入浴。

九時頃に大工の倉持が来て、目黒の建増しの見積書（四畳半と戸棚）四百十円をみせる。倉持は十時半頃まで話してゆく。

十一時就寝。

五日（金曜）陰、晴（六十八度）

午前八時起床。けふは端午、軒に菖蒲を葺く。

上松武雄から時候見舞の郵書が来たので、返書。

俳優学校の使が来て、綺堂戯曲集十二冊を受取つてゆく。

午後、四谷を散歩。大村の戯曲「熱海の一夜」に批評を添へて返送。

麹町一丁目の小川の細君が来て、菓子をくれた。

読書。六時半頃に鶴岡君が小菅刑務所長谷内氏同道で来訪、八時頃まで話してゆく。

それから入浴。読書。十時半就寝。

六日（土曜）晴（六十九度）

午前七時起床。

おえいは九時頃から世田ヶ谷の上松方へゆく。

九時半頃に小林君が来て、色紙に揮毫をたのみ、一時間ほど話してゆく。小林君は丸山晚霞氏揮毫の滝と辛夷の半折くれたので、森部が経師屋に持参、その表装をたのむ。

十二時半頃に額田が来て、富山房発行の「日本芝居物語」の製本出来したとて、その二部をとゞけ、一時間あまり語る。

二時過る頃におえい帰宅。改造社から「修禪寺物語」増版の印税を送つて来たので、返書。鈴木からも原稿受取りの返書が来た。

三時頃に浜村君が来て、渥美君の日本戯曲全集歌舞伎編が全部完成したので、その記念会を催すこととなり、私にも発企人の一人になつてくれといふ。承諾。浜村君は四時半まで話して去る。

それから近所を散歩。帰つて読書。七時半ごろ入浴。十時就寝。

七日（日曜）晴（七十度）

午前七時起床。

けふは山下が本葬の当日であるので、郷里の父に宛て、電報を發送。

大村が来て、演舞場の劇評を置いてゆく。

十二時半頃に岸井が来て、自作の戯曲を受取り、一時間あまり話してゆく。小林から原稿料うけ取りの返書が来た。

橘高広君が神楽坂署長を辞して、大阪時事新報社に入社したといふ通知が来たので、返書。

四時ごろ近所を散歩。その留守中に大野君が来て、菓子くれた。

五時頃に佐久間が来た。今夜は Grill・銀座に舞台誌友会の例会があるので、佐久間は森部同道で六時頃から出てゆく。

晚餐後、再び散歩。留守中に小田原の飯野君が来て、自作の戯曲を置いて行つた。

読書。八時頃入浴。

九時半頃に森部帰宅。今夜の来会者十一名であつたといふ。

十時半就寝。

八日（月曜）晴（七十三度）

午前七時起床。

山下の父から葬式無事に済んだといふ返電が来た。飯野君に戯曲受取りの郵書を出して置く。

けふから目黒へ大工が来るといふので、九時過る頃から出てゆくと、大工は裏の空地で材木の切組みにかゝつてゐた。まだ四五日は切組みを続けるさうである。

天気快晴、庭一面の若葉「■」への色も夏らしくなつて来た。午後、近所を散歩。二時頃にこゝを出て、帰宅。

留守中に岸井が来て、森部同道で活版所へ行つたといふ。三橋が「舞台」の編集をやめたので、森部が代るこゝになつたのである。

四時頃に森部帰宅。四時半ごろ近所を散歩。やがて俄に陰つて驟雨、間もなく止む。

読書。七時ごろ入浴。十時就寝。

九日（火曜）晴、驟雨（七十三度）

午前七時起床。

目黒の大掃除は十二日だといふので、森部とおさきは下掃除に出てゆく。

文芸春秋社の武内君から郵書が来て、「話」に何か寄稿してくれといふので、日露戦争当時の思ひ出話をかく。

黒幕座の佐々木君から「正雪の二代目」を朗読したい

と云つて来たので、承諾の返書。

午後三時過る頃に額田の細君が来て、四時過る頃まで話してゆく。そのあひだにおさき帰宅。

四時半頃に遠雷、驟雨。六時過る頃にやむ。七時頃に森部帰宅。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十日（水曜）晴、驟雨（七十一度）

午前七時起床。

十一時頃から森部は研文社へ校正に出てゆく。

十一時頃におとくが来た。二月以来、疾病で帰郷してゐたといふので、おえいから見舞の金をやる。おとくは午飯を食つて、十二時頃に去る。

それから十五分ほど過ぎると、雷鳴、驟雨、一時間ほどで止む。

一時半頃に佐久間が来て、自作の戯曲「新もぢずり石」の一読を求め、暫らく話してゐるうちに、額田が来た。額田はその作「釣天井」が六月の歌舞伎座に上演されることに決定したといひ、佐久間と共に三時半頃まで話して去る。それから間もなく、再び雷鳴、驟雨。まことに不定の天候である。

「話」の原稿八枚をかき終わる。題は「龍王廟付近」といふ。直ぐに武内君に郵送。それから佐久間の戯曲を

よむ。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

十一日（木曜）陰、晴（七十二度）

午前七時起床。

大村戯曲集の出版届捺印を求めるために、森部は朝から額田と大村を歴訪、それから内務省へ廻るとて、出てゆく。

十一時頃に「現代」の鮫島君が来て、七月号には「夏の夜話」といふ題名で諸家の談話をあつめるに付、私にも十枚ほど書いてくれといふ、十二時半頃まで話してゆく。

一時頃に岸井が来て、フランス人形をくれ、一時間あまり話してゆく。九州巡業中の水谷君から博多の菓子を送つて来た。

大西君から郵書が来て、眼病のために帰郷。白内障で右眼殆ど失明したといふ。まことに気の毒なことである。直ぐに見舞状を発送。

四時頃に三橋「■」が来て、自作の戯曲の添削を求め、一時間ほど話してゆく。

晚餐後、近所を散歩して帰ると、森部は佐久間同道で帰宅。佐久間は森部と共に誌友名簿を訂正して、九時過るころに去る。

七時半入浴。読書。十時半就寝。

十二日（金曜）晴（七十二度）

午前七時起床。

目黒では大工が切組みを終つて、けふは柱建てをするといふので、九時頃からおおい同道で出てゆく。けふから三日間、交通安全デーで、第一日の十二日はタキシールの流しを禁止したので、市中は何となく寂しかった。

今度の工事は建増しで、別に建前といふわけでもないが、鳶の者等も来て働いてゐるので、一同に祝儀をやる。

五時半頃におえいと共に目黒を出る。佐久間もそれまで遊んでゐたので、渋谷駅まで同伴、こゝで三人が晚餐を食つて別れる。それから自動車に乗つて、七時ごろ帰宅。

留守中に大村が来て、自分の戯曲出版の礼を云つて去つたといふ。大村の戯曲集は舞台叢書第三巻として発行したのである。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十三日（土曜）晴（七十三度）

午前七時起床。

けふも八時半頃から森部同道で目黒へ出てゆく。晴れて夏めく。

建増しの工事を見廻り、更に花壇の手入れなどして、午後二時半ごろ帰宅。やがて雨谷君の未亡人が娘同道で来て、門口で帰る。

留守中に三井信託の紹介で、富岡徴兵保険会社の窪田といふ人が、私の家を見に来たといふ。

森部は東劇見物に出てゆく。私は町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。

五時頃に佐久間が来て、六時頃まで話して去る。

七時ごろ入浴。読書。十時過る頃に森部帰宅。東劇で佐久間の来るに逢ひ、更に転じて歌舞伎座見物に行つたが、両劇場ともに頗る不入であつたといふ。

十一時就寝。

十四日（日曜）晴（七十五度）

午前七時起床。森部は朝から研文社へ校正にゆく。

読書。午後一時半頃に佐久間が自作の戯曲を持参。けふは「舞台」の誌友会であるので、二時半頃から佐久間同道で日比谷の三信ビル地下室の東洋軒へ出てゆく。岸井、小林、「三」〈山〉崎、三橋等はもう来てゐた。森部も来てゐた。つゞいて、大「橋」〈村〉、岡田、鈴木、額田も来た。

三時開会の予定であるが、例に依て来会者が揃はないので、四次開会。私が先づ開会の辞を述べ、つゞいて額

田、岩谷、飯島、川村氏等の講演あり。来会者七十余名、なか／＼の盛会であつた。

六時半頃から食卓に着いて晚餐。それから雑談。

あとは額田等に頼んで、私は森部と八時頃にこゝを出る。朝から快晴、温度は俄に騰がつた。

入浴。十一時就寝。

十五日（月曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

早朝に山崎が来て、嫩会の会費をとめてゆく。

「現代」の原稿をかく。十一時過る頃に津沢の寿子が子供をつれて来て、おえい同道で日比谷公園へ出てゆく。

森部は午後から研文社へ校正にゆく。二時頃に大工の倉持が来て、建増し工事の半金を貰ひたいといふことであつたが、おえい不在であるので出直して来るやうに云ひ聞かせる。倉持は一時間ほど話して去る。

入れちがひにおえい帰宅。つゞいて三橋が来て、廿分ほど話してゆく。

夕刻までに原稿十一枚をかく。題は「蝸と狗」

晚餐後、散歩。雨がばら／＼降り出して又やむ。

七時頃入浴。やがて佐久間が来た。つゞいて倉持が再び来たので、おえいから建増しの半金二百円を渡す。九時頃に森部帰宅。

佐久間と倉持は十時半頃まで話して去る。
十一時半就寝。

十六日（火曜）晴（七十七度）

午前七時起床。

八時半頃から森部同道で目黒へゆく。大工二人、瓦屋四人、左官屋三人が来てゐた。わづかの工事であるが、なか／＼の混雑。

森部に指図して、花壇を整理。晴れて暑い。午後そこらを散歩すると、単衣を着てゐる女などが見える。二時頃に佐久間が来た。

三時過る頃にこゝを出て、四時頃帰宅。静岡の山本君から例に依て新茶を送つて来た。

読書。六時頃に佐久間が来て、森部の部屋で九時頃まで話してゆく。

七時半頃入浴。十時半就寝。

十七日（水曜）陰、雨（七十三度）

午前七時起床。

鼎会の懸賞脚本が締切となつたので、その整理のために、森部は朝から額田方へ出てゆく。

北尾君の戯曲「画師と猿廻し」を編集し終る。

大阪の独逸人ドクトル・ヘルマン・ボーネハ氏が私の

戯曲「大阪城」を独語に翻訳、その製本五部を送つて来たので、返書。岐阜豊岡町の畑良雄といふ人から奥人エーデル氏と「修禪寺物語」を共訳したいと云つて来たので、これにも返書。静岡の山本君に礼状を発送。

神谷とも子の戯曲「但馬の春」を一読、その批評を添へて返送。

午後から雨。午後一時半頃に文芸春秋社の武内君が来て、「話」の誌上に綺堂一夕話といふものを連載したいといふ相談があつた。二時頃に額田同道で森部帰宅。同時に岸井も来た。

二時半頃に武内君去り、額田と岸井は三時半頃に去る。雨やむ。

宇野信夫君の戯曲「雪の夜がたり」を編集。

暮れて又もや雨の音。吉田暎二君の子供が死んだといふ通知が来たので、悔み状を発送。

七時半ごろ入浴。八時頃に佐久間が来て、九時頃まで話してゆく。

十時半就寝。

十八日（木曜）陰（七十三度）

午前七時起床。けふは大掃除。

その混雑の最中、九時頃に三井信託の中山君が来て、社会局の中野といふ人が私の家屋を見たいといふので、

こゝで待合せてゐる筈であるといふ。中山君と雑談中、やがて中野氏が夫婦づれで来訪。家内を一覧した上で雑談、十時頃に中山君と共に去る。

午後、四谷辺を散歩。一時半頃帰宅すると、青山の人といふ夫人が家屋を見に来た。六時頃に中野が来て、一時間ほど話してゆく。

関根君の「あをぎり」続稿を編集。渥美君の歌舞伎全集完成祝賀会の通知が来たので、出席の返書。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

十九日（金曜）陰、晴（七十五度）

午前七時起床。をり／＼に細雨。

九時半頃「■」（へから）森部同道で目黒へ出てゆく。

建増し工事もよほど進行してゐた。

渋谷駅付近の植木屋から紫つゝじ二株を買つて、庭先に栽える。そのほかに花壇の手入れをする。午後から晴れて又陰る。

午後二時頃に佐久間が来た。

五時頃に目黒を出ると、佐久間も一緒に来た。森部と三人で駅前で晚餐。こゝで佐久間に別れて、六時過るころ帰宅。

鎌倉の神谷とも子から原稿うけ取りの礼状が来た。東京玩具商報社から廿五年記念の扇を送つて来た。中村主

美君から亡父三十五日の配りものを届けて来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十日（土曜）陰、晴（七十八度）

午前七時起床。

報知新聞のダイヤモンド記事三十行、政界往來の随筆四枚をかいて郵送。随筆の題は「亡びゆく花」

明治神宮壁画集頒布会の森君が来て、壁画集購入を勧誘するので、承諾。一冊廿五円である。

三橋の戯曲「幸は白き窓掛に」を編集。更に「舞台」のアントラクト三枚をかく。中村正美氏に昨日の礼状を発送。

晚餐後、散歩。風が強い。温度俄に騰る。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。風の音。

二十一日（日曜）晴（八十二度）

午前七時半起床。

今朝も南風吹きつけて、蒸暑い。

十時頃に渡辺の愛子が来た。十時半頃に小田原の飯島君が来て菓子をくれ、十一時四十分頃まで話してゆく。

午後一時頃に山本の未亡人が息子同道で来訪、息子の辰治君は四月から正金銀行へ勤めることになったといふ。先はめでたい。

佐久間が来る。つゞいて岸井が来る、つゞいて中島が来た。中島は昨日帰京したとて、亡妻三十五日の配りものを呉れた。佐久間と岸井は三時頃に去り、中島は三時廿分頃に去る。

浅草金龍館の竹柴春鷺が来て、「相馬の金さん」を書きかへて上演したいと云ひ、その台本を置いてゆく。

坂本君から郵書が来て、例の通話会で「鳥辺山心中」を上演したいといふので、承諾の返書。

六時頃散歩。風吹きやまず、温度いよ／＼騰る。夕刊をみると、例年よりも七八度高いといふ。

金龍館の台本を一読。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

二十二日（月曜日）雨（七十二度）

午前七時起床。暁から雨。

三井信託の中山君が来て、先日わたしの家屋を見に来た中野といふ人がいよ／＼譲り受けるといふ。価格一万二千円。少しく安いとは思ふが、早く決着した方がいゝ。「と思ふ」ので、承諾。中山君は種々の打合せをして、十時半頃に去る。

つゞいて鎌倉の神谷とも子が来て蝦をくれ、一時間ほど話してゆく。

金龍館の台本を速達で返送。原作者の名を出さないな

らば差支へないと云ひやる。

明治神宮奉賛会から壁画集をとびけて来た。

田村襄二君の「俳諧寺一茶」を編集し終る。

自宅譲り渡しが決まりければ、近日こゝを引払はなければならぬので、そろ／＼書棚などの整理にかゝる。

夜は読書。七時半入浴。十時半就寝。

二十三日（火曜）晴（七十六度）

午前六時起床。

おえいは森部同道で、九時頃から目黒へ出てゆく。

書齋の書棚を整理。

昨夜睡眠不足のためか、朝から頭が重いやうであつたが、午後から激しく痛んで来て、脳貧血の気味であるので、葡萄酒を飲んで、しばらく寝転ぶ。今夜は渥美君の日本戯曲集歌舞伎編五十巻完成の記念祝賀会が下谷池の端の雨月荘に行はれ、私も発企者の一人であるが、右の始末で出席も覚束ないので、速達便で欠席の通知を出して置く。

四時頃におえい等帰宅。五時頃に額田が鼎会の懸賞脚本を持参。これから雨月荘へゆくと一時間ほど語る。

かなへ会の脚本は額田の第一予選を通過したものの十八編。宵から頭の工合がだん／＼によくなつたので、取りあへず二編ほど読んでみる。どれも一幕物であるから、

案外に早く片付きさうである。

八時頃入浴。十時半就寝。

二十四日（水曜）晴（七十四度）

午前七時起床。今朝は気分もよい。

九時頃から森部同道で目黒へゆく。あとから佐久間が来た。

午後には額田も来た。四人で近所の草原へゆき、萩やコスモスなどを採つて来て、庭に栽える。

職人は大工だけで、左官屋は「まだ」来ない。あら壁が乾かないせゐである。

四時頃に麴町から電話がかゝつて、三井信託の中山君が五時頃に来るといふので、森部と共に早々帰宅。

五時頃に中山君が来て、いよ／＼彼の中野といふ人が私の地所家屋をゆづり受けることに決定したといひ、その契約書に捺印を求め、あはせて火災保険の名義変更、水道の名義変更等に就て、それ／＼に捺印を求め、三十分あまり話してゆく。売買契約のこんなに早く纏まつたのは近來めづらしいとの事であつた。

そのあひだに佐久間が来て、六時半頃まで話してゆく。かなへ会の脚本三種をよみ終る。八時ごろ入浴。

渥美君と大村から病氣見舞の郵書が来た。私からも取りあへず礼状を送送。

十時半就寝。

二十五日（木曜）晴（七十五度）

午前七時半起床。

九時頃に中野善敦氏が来た。私の地所家屋の買主で、内務省社会局の書記官である。清水虎雄君も同局に勤めてゐるので、その噂なども出て、一時間ほど話してゆく。伊藤松雄君から郵便が来たので、返書。かなへ会の脚本をよむ。

午後、四谷を散歩。三時頃に中野氏の細君も挨拶に来た。

五時頃までに勉強して脚本全部を読み終る。私のところで第二子選を通知したもの十編、それを大阪へまはして最後の決定を見る筈である。

岡田禎子から電報が来て、今夜は欠席するといふ。今夜は嫩会例会で、額田が先づ来た。つゞいて岸井が来たので、転居の通知ハガキ八百枚の印刷をたのむ。

大村、中島、三橋、鈴木、佐久間、山崎も来た。例に依て私の江戸講話、それから劇談、雑談。十時散会。そのあひだにおえいは平河天神の縁日に参詣、百合の花を買つて来た。

入浴。十一時半就寝。

二十六日（金曜）晴（七十五度）

午前八時起床。

朝から森部と共に二階の書斎を整理。

静岡の法月君から新茶を送つて来た。

いよ／＼三十日に麹町を引払ふことに決定したので、おえいは紀尾井町的小林君と吉岡医師方へ暇乞ひの挨拶にゆく。午後には町内の浦岡君方へもゆく。午後一時頃に目黒の姉が来て、移動について打合せてゆく。

四時頃に中山君が来た。どういふわけか、区役所の帳簿に私の住宅は廿七番地、地所は三十二番地と記載されてゐるので、三十二番地と一定するために、番地変更届を提出するのださうである。何かと面倒であるが、仕方がない。登記その他の手続は手数料十円で、すべて信託会社で引受けてくれるといふ。

山下の父から郵便が来て、山下の弟が兄の後釜を引受けて内閣官報課に出勤することになり、近日上京するといふので、返書。難波から「舞台」の礼状が来た。

書斎の書物だけは荷造りを終つたが、反古の整理がまだ終らないうちに、此頃の長い日も暮れてしまつた。

七時半入浴。読書。十時就寝。

二十七日（土曜）陰、晴（七十度）

午前七時半起床。陰つて風が冷たい。

九時頃からおえいと森部同道で四谷へゆき、筆筒町で茶筆筒、置床、小机、用筆筒などを買って、十時半ごろ帰宅。

おえいは麴町一丁目の小川君方へ暇乞ひにゆく。三井信託の賀谷君が来て、最新の火災保険受領証を受取つてゆく。

けふも引きつゞいて書斎の反古の整理。不用の反古が紙屑籠に七杯も出たには驚いた。午後から晴れる。

十二時半頃に津沢の寿子が菓子を持参。おえいから移転を通知した為である。おえいは午後にも町内の中川君方へ暇乞ひにゆく。

古道具屋が来て、不用の家具類を買ってゆく。勿論、捨売同様である。

五時頃に佐久間が来て、一時間ほど話してゆく。そのあひだに植木屋も来て、庭石を運ぶ相談をしてゆく。

晚餐後、おえいは大野君と永田理髪店へ暇乞ひにゆく。八時頃入浴。読書。十一時就寝。

此頃は不景気のために、地所家屋の売買が捗取らない私の地所が案外に早く片付いたのに、どこでも驚いてゐるといふ。私の運が好いのと、もう一つには思ひ切つて安く手放した為であらう。

二十八日（日曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

おえいはおさき同道で目黒へ出ていく。

十時頃に小林君が菓子を持参、三十分ほど話して去る。つゞいて中島が来て、これも三十分ほど話してゆく。

午後一時半頃におえい帰宅。それから町内の近藤、田中、畑、坂元の諸家へ暇乞ひの挨拶にゆく。

静岡の山本君から郵書が来たので、返書。森部は二時頃から東劇の通話会演劇会を見物に出てゆく。

晚餐後、散歩。若葉を吹く風が冷たい。

読書。八時頃入浴。大野の細君が文吾君同道で来訪、十時過ぎ頃まで話してゆく。そのあひだに森部帰宅、岸井は不快のために不参であつたといふ。十一時廿分頃就寝。

二十九日（「日」〈月〉曜）晴（七十五度）

午前六時半起床。

八時頃に植木屋二人がトラックに乗つて来たので、庭石と家具類を積み出させ、私は別に自動車に乗つてゆく。トラックは再び麴町へ引返して、書籍類を積んで来る。森部もつゞいて来る。植木屋二人とトラックの運転手等四人に祝儀をやる。

目黒の宅には経師屋、建具屋などが来て、混雑してゐた。建増しの仕事はまだ片付かないのである。その混雑

の中で、私と森部は書籍の整理をする。佐久間も来て手伝ふ。植木屋は庭石を据え、生垣の刈込みをする。いつもながら引越しは煩はしい。

三時頃に俵木が来た。三時半頃に目黒を出る。

留守中に町内の大野君、永田君、へ鈴木余志子、へ浦岡の細君等が暇乞ひの挨拶に来たといふ。

いよ／＼明日は移転する筈であるので、机辺の諸道具を取片付ける。おえいは女中等を指図して家内の道具を片付ける。大混雑。

それも大かた片付いたので、おえいは六時半頃から浜町の山本方へゆく。息子の就職祝と移転の通知をかねて挨拶に行つたのである。

家内が全部片付いてしまつたので、今夜は流石に読書も出来ない。唯ぼんやりと坐つてゐる。七時半頃に佐久間が来て、森部の部屋で話してゐる。八時ごろ入浴。やがておえい帰宅。

九時頃に佐久間は去る。十時半就寝。

麹町一丁目からこゝへ引移つたのは、大正十五年十一月三日、数ふれば六年半余の月日をこゝに送つたのである。取立てゝ思ひ出もないが、この元園町には幼年時代から住んでゐて、こゝで父を送り、母を送つたので、いよ／＼移転となれば何だか懐かしいやうな気もする。而も今の元園町は昔の元園町ではない。大東京の中央区と

なつてしまつて、私等の住むべき土地ではなくなつたのであるから仕方がない。

三十日（火曜）晴（六十八度）

午前六時起床。けふ「■」（へも）幸に快晴であるが、朝の風が冷たい。

七時半にトラツクが来た。つゞいて俵木が来て手伝ふ。先づ第一のトラツクに荷物を積み出し、俵木がそれに付添つてゆく。

八時頃に佐久間が大工二人と同道で来た。あとから中島も来た。

あとを譲り受けの中野氏が来て、けふは天氣が良いから万年青の鉢を置かせてくれといふ。

第二のトラツクには付添つてゆく。大野君が挨拶に来た。

十時四十分頃に第三のトラツクが出る。これで荷物「は」へ（へ）全部積み込みを終つたので、佐久間、中島、おえい、おさき、おせんはみな付添つて出てゆく。森部と私があとに残る。

十一時半頃に中野氏の細君が来た。最初の約束では、森部が留守番ながら一泊、中野氏は明日移転して来る筈であつたが、当方がもう片付いてゐるのを見て、午後から後掃除に来るといふ。

十二時頃から森部と交代でベーカリーへ午飯を食ひにゆく。

午後一時頃に三井信託の賀「谷」〈屋〉君が来て、中山君は他に所用あつて、けふは来られないといふ。それが帰ると、やがて後から中山君が来て、中野氏の都合で登記は明日に延期したから承知してくれといふ。

二時頃に中野の細君が手伝ひの男と女中を連れて来て、今夜は自分たちの方で泊るといふので、そのまゝ引渡して森部「■」と私はこゝを引揚げる。後來の主人に幸あれと、心ひそかに祈つた。

二時半ごろ目黒に着くと、俵木、中島、佐久間、三橋、額田の細君等も手伝ひに来てゐた。ほかに大工二人、植木屋二人、こゝもまた混雑してゐた。ガラクタ道具がなか／＼多いので、けふは先づ好加減に納めて置くこととし、三時頃に俵木が先づ去り、五時頃に他の人々も去る。

けふは岸井が病氣不参であつたので、中島、三橋等は帰途に見舞にゆくと云つてゐたが、七時頃に額田の細君から電話がかゝつて、岸井の病氣は皮膚癬であるといふ。別に危険な病氣ではないが、平癒の遅いもので、岸井も難儀であらうと思ひやられた。

山下の弟から郵書が来て、廿八日上京したといふ。取りあへず返書。額田にも郵書を送る。能島君と堀川君が来て、廿分ほど語る。

夜に入つて、佐久間が再び来て、九時頃まで話してゆく。八時ごろ入浴。

荷物は積み入れたまゝで、まだ本当に片付かないが、十一時就寝。

目黒の宅は今まで姉と女中の君枝の二人であつたが、けふからは私夫婦と森部、おさき、おせんが入り込んだので、併せて一家七人、俄に賑やかになつたわけである。

三十一日（水曜）晴（七十度）

午前七時起床。

今度の家は十畳の座敷を書斎兼応接用にも宛てる――別に八畳の洋室もあるが――筈であるので、朝から床の間や書棚の整理にかゝる。建増しの四畳半は壁がまだ乾かないので、道具類を持ち込むことが出来ず、茶の間などは大混雑である。

十時頃に大村が来て、祝物をくれた。同時に畑氏の細君が来て、同じく祝物をくれた。けふも大工が来て、棚を吊り、郵便受箱を作る。

午後二時頃に佐久間が来て、四時頃まで話して去る。座敷の整理だけは一先づ片付く。

五時頃から森部は水をまく。私も手伝ふ。今度は庭が広いので、水まきが一仕事である。

倉持が来たので、建増し工事の残金二百十円を渡す。植木屋も勘定を取りに来た。研文社から移転通知のハガキ八百枚と名刺二百枚をといて来た、ハガキはハガキ代を併せて十四円五十銭、名刺は一円三十銭。森部に命じてその宛名を書かせる。

七時頃に佐久間が再び来た。七時半ごろ入浴。佐久間は森部の部屋で九時半頃まで話して去る。

十時半就寝。

本月は移転騒ぎで殆ど何の仕事もしなかった。龍王廟付近（話、七枚）蝸と狗（現代、十一枚）ほかに「舞台」の編集など。

（翻刻担当…原辰吉）

昭和八年六月

一日（木曜）陰、晴、陰（七十二度）

午前七時起床。

九時頃に天野馨君が久しぶりで来訪、玄関先で話してゆく。「母性愛」といふ雑誌を発行するに付、私にも会員になれといふのである。

けふも手回りの道具を片付ける。どうも当分は落付きさうもない。

午後四時頃に佐久間が来た。五時頃に三井信託の中山君が来て、昨日無事に地所の登記手続きを終つたといひ、売却代金の内から既定の手数料、印紙代、その他雑費三百七十八円四十銭を差引いて、支払小切手を渡してくれた。これで売買の手続も結了したのである。中山君は記念に短尺をかいてくれと云ひ、三十分ほど話して去る。佐久間もついで去る。

晚餐後、森部と道玄坂を散歩。古書をかひ、更に緋鯉、へちまの苗などを買つて、八時ごろ帰宅。やがて佐久間が再び来た。

入浴。佐久間にゴム印と封筒の印刷をたのむ。佐久間は九時過る頃まで森部の部屋で話してゆく。

十時半就寝。夜半に雨の音。

二日（金曜）陰（六十五度）

午前七時起床。

八時頃から中目黒付近を散歩。九時ごろ帰宅。森部は移転通知のハガキの宛名をかき終る。七百六十枚余である。まだ追加があるだらうと思はれる。

森部は午頃から佐久間同道で岸井の見舞に出てゆく。私は花壇の手入れをして、それから書庫の整理。二時過る頃に森部と佐久間帰宅。岸井は蕁麻疹の上に疥癬を發したのであるが、最早よほど快方に向ひつゝあるといふ。佐久間は明治座見物にゆくとて去る。

読書。四時半ごろ森部に指図して庭の石を置きかへてみると、「現代」の鮫島君が来た。家内は混在してゐるので、池のほとりに床几を持ち出して語る。鮫島君は原稿料をくれ、一時間ほど話してゆく。

晚餐後、近所を散歩。帰つて読書。

麹町郵便局から付箋を添へた郵便物が続々来る。当分は郵便局に手数をかけて気の毒である。

七時半ごろ入浴。十時就寝。

三日（土曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

環状線の大通りへ出て、高橋といふ理髪店で髪を刈る。

晴れて暑くなる。池のほとりに床几を出して森部と話してゐると、佐久間が来た。

十時過る頃から佐久間、森部と三人連れで道玄坂へゆき、夏帽その他の雑品数点をかひ、昼餐、十二時四十分ごろ帰宅。佐久間は二時頃に去る。

読書。転居の通知に対する返書十六通到着。五時頃に佐久間が再び来て、六時頃に去る。佐久間は近所であるので、朝夕に立寄るのである。

五時半頃に額田の細君が山下の弟正美君同道で来訪。細君は草花をくれ、山下君は郷里のみやげ物をくれた。山下君は一日から印刷局官報課に通勤することになったと云ひ、三十分ほど話して去る。

七時頃から森部同道で中目黒を散歩。夜店で草花の苗数種を買つて来て、花壇に栽え込む。

八時過るころ入浴。読書。十時半就寝。

四日（日曜）晴（六十八度）

午前七時起床。庭を散歩。

川村君から郵書が来たので、返書。十時頃に額田が来て、一時間ほど話してゆく。

佐久間が右の耳に包帯して来た。軽病の中耳炎に罹つたのであるといふ。

「喜劇時代」二枚をかく、「新演芸」の原稿である。

「掘出し物」三枚をかく、「日の出」の原稿である。森部は友人をたづねるとて、午後四時頃から出てゆく。転居通知に対する返書十一通到着。

晚餐後、近所を散歩してゐると、佐久間が来た。

七時半ごろ入浴。八時頃に森部帰宅。読書。十時半就寝。

五日（月曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

鉢のあき顔がやうやく伸びたので、森部は竹を立てる。九時頃に佐久間が来た。函館の鳥飼登志子から鈴蘭を送つて来たので、返書。

先月廿三日以来、連日晴天、気候もめつきりと夏めいて、付近の森の青葉が日増しに色濃くなつて来た。やはり旧市内では見られない夏げしきである。

手まはりの文庫などを整理、家内がまだ本当に片付かない。

十時頃に大村が来て新歌舞伎の劇評をみせ、併せて枇杷をくれた。大村は渋谷から来たバスの動揺が激しいのに驚いてゐた。途中に坂路が多いせゐである。その批評を一読、すぐに岸井に郵送。

午後、おえいは佐久間同道で道玄坂下の第一銀行支店へゆく。近所であるから、こゝと取引をする筈である。

二時頃におえい帰宅。更に四時頃から森部同道で新橋演舞場見物に出てゆく。

晚餐後、目黒川の付近を散歩。葉桜を吹く夕風が涼しい。

風呂の金を修繕に遣ったので、今夜は入浴を休む。

飯野君の戯曲二編をよむ。九時半頃に佐久間が来て、先日頼んで置いたゴム印をとどけてくれた。二円である。佐久間は一時間あまり話してゐると、十時四十分頃におえい等帰宅。

十一時半就寝。

六日（火曜）晴（七十六度）

午前七時半起床。

佐久間が来たので、中山君にたのまれた短尺四枚と三越の商品券をとどけてくれるやうに頼む。今度の地所売買について、中山君の世話になつた謝礼である。

岡君から郵書が来たので、返書。大阪の堀にも返書。ほかに転居祝の郵書廿一通到着。

午後一時頃に岸井が来て、病氣も大抵平癒したといひ、一時間あまり話してゆく。晴れて風吹く。

森部は目黒川付近の店からさつき七株を買つて来て、池のほとりに栽え込む。

中島から自作の戯曲を送つて来たので、返書。住友銀

行員が移転の挨拶に来た。放送局の小林君から電話。

風呂の金がまだ出来ないので、今夜も入浴を休む。晚餐後、森部と目黒の大通りを散歩。雨がはら／＼と降つて来たが、又やむ。八時ごろ帰宅。中島の戯曲を一読。九時頃に佐久間が来て、中山君へ届け物に行つたといひ、三十分ほど話して去る。十時半就寝。夜半風雨の音。

七日（水曜）雨（七十三度）

午前七時起床。半月ぶりの雨である。

中島に返書。山崎の俳句を選して返送。

読書。午後一時頃に佐久間が来て、四時頃に去る。転居祝の郵書十一通到着。

今夜は「舞台」の七日会で、森部は五時半頃から出てゆく。

読書。七時半ごろ入浴。中山君から昨日の礼状が来た。九時過る頃に森部帰宅。十時半就寝。

八日（木曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

新居もやうやく落付いたので、戯曲の起稿に取りかかる。二月から三月へかけて起稿中、何や彼やの混雑に取りまぎれて一旦中止してゐたのを、更に書きつゞけるこ

とにしたのである。

十時半頃に佐久間が来て、おえいや森部を相手に雑談、十二時頃に去る。

午後三時頃に麹町一丁目の小川君の細君が果物をたづさへて新宅祝ひに来た。ほかに転居祝ひの郵書八通到着。

四時頃から近所を散歩。晴れんとして晴れず、若葉の森は暗い。

帰つて読書。森曉紅君から郵書が来たので、返書。
七時半ごろ入浴。十時就寝。

九日（金曜）晴（七十五度）

午前七時半起床。

戸棚を整理すると、岸井の旧稿を発見したので、郵送。
十一時過る頃に鈴木余志子が母同道で新宅祝に来て、三十分ほど話して去る。

十二時頃に水谷君が来て、「お七」地方巡業の上演料をくれ、併せて鹿児島のみやげをくれ、一時間ほど語る。
午後二時頃に植松のおすゝが来て菓子をくれ、四時頃に去る。

五時頃に菅野君が転居祝の品を持参、六時頃まで話してゆく。

晚餐後、森部と道玄坂を散歩。草花類を買つて、八時

ごろ帰宅すると、佐久間が来てゐた。森部は佐久間同道で、再び中目黒へ出てゆく。

入浴。九時頃に森部等帰宅。佐久間は十時頃まで話して去る。転居祝の郵書十七通到着。

佐久間が帰ると、やがて雨の音。十時半就寝。

十日（土曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

八時半頃に大工の倉崎が来て、佐久間の不始末について種々訴へる。聞き捨てにならぬことが多い。

額田から郵書が来て、大阪方の鼎会脚本審査が一向に捗取らぬといふ。取りあへず返書。

十一時過る頃に津沢の寿子が愛子と子供同道で来て、祝物をくれ、午餐を喫して二時頃まで話してゆく。

戯曲をかきつゞける。晚餐後、森部と中目黒から大橋辺を散歩。八時ごろ帰宅。入浴。

九時半頃に佐久間が来て、おえいや森部と話してゆく。
倉崎の訴へに対する弁解である。

十時半就寝。

十一日（日曜）晴（七十五度）

午前八時起床。

早朝に大野君が来て菓子をくれ、一時間あまり語る。

つゞいて小田原の飯野君が来て、おなじく菓子をくれ、これも一時間ほど話してゆく。そのあひだに佐久間が来たといふ。

けふは入梅といふのであるが、朝から快晴。

午後から戯曲をかきつづける。岸井から原稿うけ取りの返書が来た。ほかに転居祝の郵書八通到着。

晚餐後、森部と道玄坂を散歩。草花などを買つて、七時半ごろ帰宅。

入浴。読書。十時就寝。

十二日（月曜）晴（七十六度）

午前七時起床。

戯曲をかきつづける。十一時頃に岸井が来た。つゞいて額田が来た。かなへ会の懸賞脚本の件である。舞台社では五月中に予定の如く選評を終つたのであるが、大阪側が抄取らないので、六月十五日発表はおぼつかなく、惹いては「舞台」の編集締切がおくれるので、十五日発表を断然延期することに決定。その打合せを済ませて、十二時頃に二人は去る。

午後一時頃から森部は研文社へ校正に出てゆく。佐久間が先月以来の状袋の印刷六百枚をとびけて来た。

一時半頃に浦岡の細君が来て、新宅祝の品をくれ、三十分ほど話してゆく。つゞいて小林蹴月君が祝物を持参、

三時（半）頃まで語る。

けふは森部がゐないので、女中等を指図して水まきをしてゐると、四時過る頃に竹下英一君が木村修吉郎君同道で来訪、三十分あまり話してゆく。

六時半頃に額田から電話が来て、大阪から鼎会脚本審査の回答が到着したといふ。さうすると、又もや編集の方針を変更しなければならぬ。なか／＼面倒である。

おさきとおせんは七時半頃から道玄坂へ出てゆく。八時ごろ入浴。やがて森部帰宅。

読書。十時半就寝。

十三日（火曜）陰、雨（七十五度）

午前七時起床。風吹く。

戯曲をかきつづける。

十二時頃に歌舞伎座の内田君が慶応の歌舞伎研究会員同道で来訪、研究会で雑誌を発行するに付、私にも寄稿してくれといひ、三十分あまり話してゆく。

つゞいて額田が大阪の鳥江君同道で来た。岸井もあとから来た。例の鼎会懸賞脚本の件で、当選の三編は「近松とおさん」（村井富男）「夏葵の頃」（吉川虎牡）「貰つた仇討」（杉長）と決定。取りあへず七月号には「近松とおさん」を掲載することとし、それらの打合せを済ませて、二時過る頃に三人帰る。その頃から雨はら／＼

と降り出した。

おえいは道玄坂の第一銀行にゆく。森部に銘じて当選脚本のコピーを作らせる。

八時頃入浴。読書。十時就寝。

十四日（水曜）晴（七十八度）

午前七時起床。

戯曲をかきつゞける。どうも捗取らない。

十時半頃に「舞台」の誌友和田方君が来た。リウマチのために歩行不自由、自動車に乗り、細君に背負はれ、親族の娘に手をひかれて来たが、頗る元氣のよい人で、一時間ほど話してゆく。

岸井方の女中が湯河原の干うどんを届けに来た。

立教大学の英語会で私の作「自来也」を上演したいと云つて来たので、承諾の返書。川原小枝子から転居の通知が来たので、返書。

おえいは姉と道玄坂へ買物にゆく。氣候が暑くなつたので、セルを脱いで単衣に着かへる。「現代」の鮫島君が来た。

七時半ごろ入浴。八時頃に佐久間が来たので、訓戒を加へる。佐久間は九時頃に去る。

森部は鼎会懸賞脚本を謄写し終る。

十時半就寝。夜半に雨の音。

十五日（木曜）陰（七十二度）

午前七時半起床。けふは又セルを着る。

九時頃に額田の細君が来た。額田は先月以来、微熱が去らないので、慶応病院の診察を受けるとのことであつた。

庭の芒があまりに繁茂したので、森部が根分けをして他に栽えかへる。午後一時頃から森部は研文社へ出てゆく。

戯曲をかきつゞける。どうも最後の場が巧く纏らない。前橋の藤嶋君から郵書が来たので、返書。

四時過る頃から散歩に出ると、恰も佐久間の来るのに逢つたので、打連れて八幡通りを散歩。放送局の小林君が来た。

七時半ごろ入浴。やがて森部帰宅。

読書。十時半就寝。

十六日（金曜）雨（七十二度）

午前七時起床。

松居君の使が来て、果物の籠をくれた。森部が額田方へ見舞に行くといふので、その果物を持たせてやる。入れば違ひに山崎が来て、五月分の会費をとゞけ、三十分ほど話してゆく。

十一時頃に森部帰宅、額田夫婦は病院へ行つて留守で

あつたといふ。午後、雨が小歇みになつてので、おえいと庭へ出てゐると、佐久間が来た。

額田の細君から電話が来て、額田は病院で診察の結果、他に異状なく、やはり血圧上騰のため、百七十五を越えてゐるといふ。血圧ではおえいが多年の経験もあるもので、それに対する注意二三を書いて額田に郵書。松居君にも礼状を出して置く。

森部は二時頃から研文社へ出てゆく。

戯曲をかきつゞける。七時半ごろ入浴。九時半頃に森部帰宅。

十時半就寝。

十七日(土曜)陰(七十四度)

午前七時起床。

戯曲をかきつゞける。

十一時頃に文芸家協会の林田君が来て、協会への催しで大阪の三越に文芸家の揮毫展覧会を開くに付、私にも半折、色紙類に揮毫してくれといひ、午後まで語る。そのあひだにエビスビル会社の杉君が来て、かなへ会脚本当選の挨拶があつた。つゞいて岸井が来た。

杉君先づ去り、次に林田君去り、岸井はあとに残つて一時過る頃まで話してゆく。

森部と庭に出て、花壇を整理。晚餐後、森部同道で道

玄坂を散歩。草花と緋鯉などを買つて、八時ごろ帰宅。入浴。読書。十時半就寝。

十八日(日曜)陰(七十五度)

午前八時起床。

おえいは九時過る頃から上松方へ出てゆく。額田から郵書が来た。

九時半頃に薄金兼次郎君がその兄雨田禎之君同道で来訪、故鈴木鼓村君の昔話などして、一時間あまり語る。

戯曲をかきつゞける。林田君に頼まれた色紙八枚と半折三枚に俳句を揮毫。三時頃におえい帰宅。

晚餐後、森部と中目黒辺を散歩。七時半ごろ入浴。

読書。庭に蛍が飛んで来た。

十時半就寝。

十九日(月曜)晴(七十六度)

午前七時起床。

十時頃に杉原が来て菓子をくれ、一時間あまり話してゆく。つゞいて津沢の寿子が子どもを連れて来て、午後二時頃まで語る。

晴れて暑くなる。小林宗吉の細君が菓子を持参、おえいと三十分ほど話してゆく。

林田君から又もや短尺八枚を送つて来たので、揮毫。

晚餐後、女中等三人は連れ立つて中目黒の縁日にゆく。
七時半ごろ入浴。読書。
十時半就寝。

二十日（火曜）晴（七十三度）

午前七時起床。

慶応の歌舞伎研究会に頼まれた原稿をかく。午後二時頃までに十二枚、題は「歌舞伎劇様式の変遷と其将来」といひ、直ぐに内田君に発送。

星野君から十句選をたのんで来たので、選了。

四時半頃に研文社から「舞台」七月号の製本をとどけて来たので、例に依て池田、高橋、難波、東儀、清水、原田、林、津沢、渡辺に発送。林田君が来て、色紙短尺等を受取つてゆく。

五時頃に佐久間が来た。晚餐後、佐久間、森部と中目黒を散歩。草花などを買つて来た。

七時半頃入浴。読書。十時就寝。

二十一日（水曜）陰（七十四度）

午前七時半起床。朝は微雨、やがて止む。

星野君から十句選の短尺を送つて来たので、十五枚揮毫。

十一時頃に佐久間が来た。額田は慶応病院で背部の瘤

の手術を行ひ、昨日から引きつゞき入院してゐるといふので、佐久間は森部同道で午後から見舞にゆく。小林宗吉が魚を持参。

戯曲をかきつゞける。依然として捗取らない。

晚餐後、中目黒へ髪刈りにゆく。その留守に三橋が来たといふ。をり／＼に細雨。

七時半頃入浴。佐久間が再び来て、九時頃までおえいと話してゆく。

十時半就寝。

二十二日（木曜）雨、陰（七十五度）

午前七時起床。

朝から折々に細雨、漸く梅雨らしい天候となつた。

戯曲をかきつゞける。

午後一時過る頃に富塚秀子が母同道で来て、祝物をくれ、四十分ほど話してゆく。つゞいて佐久間が来た。

額田から郵書が来て、手術の経過よろしく、心配することはないと云ふ。山形の渡辺君から桜桃を送つて来たので、返書。大村から嫩会出席の通知が来た。

七時半ごろ入浴。三橋が来て、「舞台」発送の封筒を受取つてゆく。杉三郎君から郵書が来たので、返書。

読書。十時半就寝。

二十三日（金曜）雨、陰（七十四度）

午前七時半起床。をり／＼に雨。

十時頃からおえいと森部同道で銀座の三越へゆき、松居、小林、杉原、津沢、渡辺、浦岡の諸家へ鯉節の配達を頼む。移転祝の返礼である。

更に松屋へ回つて晚餐。白樺の腰かけの面白いのを見つけたので買ふ。ほかにチャブ台、浴衣地、その他雑品数点を買つて、午後一時半ごろ帰宅。

やがて岸井が来た。つゞいて佐久間が来た。岸井はこれから額田を見舞ふとて、三時頃に去り、佐久間は三時半頃に去る。

静岡の山本君に浴衣地を発送。松居君その他に鯉節の送り状を発送。

読書。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。十二時頃から眼がさめて、三時頃まで眠られなかつた。

二十四日（土曜）陰（八十度）

午前七時起床。

菅野君から須賀川の桜桃を送つて来たので、返書。更にその桜桃を大野君方へ発送。

森部は午後から額田方へゆく。三輪君（旧奥田）から郵書が来たので、返書。

戯曲をかきつづける。陰晴定まらず、温度俄に騰る。

晚餐後、散歩に出ると、恰も森部の帰るに逢つた。額田は経過よろしく、二三日中には退院するといふ。

七時半ごろ入浴。読書。日が暮れても暑い。

九時頃に佐久間が来て、三十分ほど話してゆく。佐久間も面部に腫物を生じたので、医師の治療を受けに行つたさうである。

十時半就寝。

二十五日（日曜）晴（八十二度）

午前七時起床。森部は池の水をかへる。

大阪の吉川君から鼎会脚本当選の礼状が来たので、返書。永田衡吉君にも郵書を送る、舞台原稿の件である。

梅雨中にも似ず、晴れて温度いよ／＼騰る。

戯曲をかきつづけたが、どうも捗取らない。十一時頃に佐久間が来た。

（午後一時頃に麹町の下山君が来て、短尺三枚の揮毫をたのみ、三十分ほど話してゆく。）

けふは嫩会例会で、四時過る頃から三橋が来た。つゞいて山崎、大村、岸井、鈴木、佐久間、中島、岡田が来た。額田は入院中で欠席。一同は庭に床几を出して雑談。七時ごろ晚餐。それから雑談。九時頃に婦人組は去り、男子組は九時半頃まで話して去る。

入浴。再び庭に出て納涼。十一時半ごろ就寝。

二十六日（月曜）晴（八十三度）

午前七時起床。八時半頃に佐久間が来た。

松居君病臥のことを昨夜岸井から聞いたので、電話で桃多郎君を呼び出して問ひ合せると、持病の腎臓病に神経痛を併発したもので、腎臓の方はもう心配することもないが、神経痛がまだ癒えないといふ。

大村から電話で昨夜の礼を云つて来た。小林蹴月君から祝物の返礼受取りの返書が来た。高橋と難波から「舞台」の礼状が来た。

植木屋が来て、植木の註文を聞いてゆく。洋室の窓の外に一本、池のほとりに二本である。けふも暑い。

戯曲をかきつゞける。午後三時頃におさだが子供を連れて来て、四時半頃まで話してゆく。

晚餐後、〈散歩〉。額田から明日退院の通知が来たので、返書。

七時半ごろ入浴。佐久間が再び来て、九時頃まで話してゆく。

十時半就寝。

二十七日（火曜）晴（九十一度）

午前七時起床。南風が吹いて朝から暑い。佐久間が来

た。

永田君から返書が来て、舞台の原稿は近日発送するといふ。

戯曲をかきつゞける。温度いよ／＼騰る。梅雨期間に降雨なく、しかもこれほどに温度の高いのは珍しいことである。

午後四時頃に額田の細君が来て、額田の退院は二三日延期するといひ、三十分ほど話してゆく。松竹の使が来て、永田君の原稿をとゞける。

七時ごろ入浴。八時頃から森部と中目黒を散歩。

十時半就寝。十二時頃から眼がさめて蒸暑く、午前三時頃まで安眠できなかった。

二十八日（水曜）陰、雨（八十一度）

午前七時起床。

山梨の河野君から郵書が来たので、返書。静岡の山本君から浴衣の礼状、津沢の寿子から鯉節の礼状が来た。

戯曲をかきつゞける。午後二時半頃に佐久間が来た。四時頃に戯曲を脱稿し終る。四幕、百四十一枚である。

まだ大いに訂正しなければなるまいと思はれる。

その頃から雨はら／＼と降り出して、温度少しく降下。額田の細君から速達便で川村花菱君の戯曲原稿を郵送して来た。歌舞伎座七月興行上演脚本である。

七時半ごろ入浴。読書。雨は降りやまない。
十時就寝。

二十九日（木曜）雨、陰（七十八度）

午前六時半起床。細雨。

川村君の戯曲「心闇軒蝙蝠」を編集。

午後一時頃に細野多智子が来て、大森の海苔をくれ、
三十分あまり話してゆく。午後から雨やむ。

三時頃に佐久間が来た。四時頃に正岡君が来て果物を
くれ、五時半頃まで話してゆく。佐久間が神田へゆくと
いふので、文房堂の原稿料を買つて来るやうに頼む。

七時頃から森部と中目黒を散歩。今夜は馬頭観音の縁
日で、例よりも賑はつてゐた。おえいもおさきを連れて、
あとから来た。

八時ごろ帰宅。入浴。読書。

十時半就寝。

三十日（金曜）陰、晴（七十八度）

午前七時半起床。

九時頃に佐久間が文房堂の原稿紙をとりに来て、三
十分ほど話してゆく。

十時半頃に岸井が来たので、舞台八月号の戯曲原稿を
わたしてやる。やがて又、佐久間が塩瀬のアイスクリー

ムを持参したので、岸井と一緒に食ふ。二人は十二時頃
に去る。

午後一時頃に植田の細君が来て、三時頃まで語る。そ
れから姉とおえいと三人連れ立つて、渋谷駅方面へ出て
ゆく。

読書。五時頃におえい等帰宅。

晚餐後、森部と道玄坂を散歩。古本と金魚などを買つ
て、八時半ごろ帰宅すると、佐久間が来てゐた。

暮れても暑いので、庭先に床几を出して納涼、佐久間
は九時半頃まで話して去る。

十時半就寝。

本月も移転早々で、殆ど纏まつた仕事をしなかつた。
戯曲の追加五十枚余を始めとして、掘出し物（日の出、
三枚）舞台戯曲の編集など。

（翻刻担当…松田祥平）

昭和八年七月

一日（土曜）晴（八十二度）

午前七時起床。朝から晴れて暑い。

額田から郵書が来て、まだ退院は出来さうもないといふので、森部は十時頃から見舞にゆく。

午後二時頃までに戯曲を訂正し終る。題は「浪人時代」第一幕三十七枚、第二幕三十三枚、第三幕廿九枚、第四幕四十一枚、あはせて百四十枚である。ちと長過ると思ふが、どうにも仕様がなない。

四時過る頃に森部帰宅、病院から阿佐ヶ谷の自宅へ回つて来たさうである。終日南風が強い。新潮社の婦人記者が来た。

晚餐後、近所を散歩。帰つて読書。

飯野君から郵書が来たので、返書。十時半就寝。

二日（日曜）晴（八十二度）

午前七時起床。けふも朝から暑い。

三田村君からその著「江戸の白浪」を送つて来たので、礼状を発送。正岡君依頼の綾岡画がく恋猫の図に俳句をかいて返送。

十一時頃に佐久間が来て、これから額田を病院に見舞ふといふ。

午後一時頃に清水君が来て移転の祝物をくれ、三時頃まで語る。三時半頃に植村君が来て中元の品をくれ、五時過る頃まで話してゆく。

豊田君から中元の品をとゞけて来たので、礼状を発送。市川猿之助から浴衣地をとゞけて来た。読書。七時ごろ入浴。十一時半就寝。

三日（月曜）雨、陰（七十九度）

午前七時起床。細雨。

十時頃からおえいと森部同道で銀座の三越へゆき、正岡君、清水君、おさだに祝物の返礼、豊田、富塚、小林、額田、赤堀、黒川、小林徳二郎の諸家に贈るべき中元の品々をかひ、銀座の竹葉亭で昼餐、十二時十五分ごろ帰宅。自動車で往復したとは云ひながら、往復あはせて二時間余に過ぎず、流石に便利の世となつた。

留守中に大村が来て、家内一同に中元の品をくれたので、礼状を出して置く。森部は中元の品々をたづさへて、額田方へゆく。

一時頃に渡辺のおしげが来て、三時頃まで語る。それからおえいと連れ立つて渋谷まで出てゆく。

三時半頃に佐久間が来て、これから歌舞伎座見物にゆくと云ひ、廿分ほど話して去る。つゞいて大阪の堀正旗が来て土産をくれ、宝塚の女歌劇団と共に上京したとい

ひ、五時頃まで話してゆく。

そのあひだに、おえい帰宅。ついで森部帰宅して、額田は本日午後いよ／＼退院したといふ。

晚餐後、森部同道で中目黒を散歩。夜店なども出ているが、こゝらは道玄坂にくらべると如何にも郊外らしい感じである。

八時ごろ帰宅。入浴。空は晴れて月が出た。
十時半就寝。

四日（火曜）陰、雨（七十八度）

午前七時起床。をり／＼に雨。

額田から電話がかゝつて、大阪の鼎会では懸賞脚本の「貰った仇討」を八月上演に決定したといふので、「舞台」でも八月号に掲載することとし、直ぐにその編集にかゝつてみると、佐久間が歌舞伎座の劇評を持つて来た。十二時過る頃に岸井も来た。

「貰った仇討」の原稿を岸井に渡し、来る七月の誌友会には掘も出席のことを云ひ聞かせる。岸井は三十分ほど話して去る。

一時半頃に中央公論の松本君が来て「浪人時代」の原稿をうけ取り、三時過る頃まで話してゆく。

佐久間の劇評を添削、更に「舞台」のアントラクトの原稿四枚をかいて、岸井に郵送。黒川君から電話で中元

の礼を云つて来た。

読書。中央公論の原稿が片付いたので、少しく落付いた。

七時半ごろ入浴。十時半就寝。

五日（水曜）晴（八十二度）

午前七時起床。

おえいはおさを連れて、麴町へ出てゆく。三越から額田の中元の品々をとどけて来た。晴れて暑くなる。

読書。十二時半頃におえい等帰宅。おえいは吉岡医師の診察を受け、更に紀尾井町の小林君方へ中元の礼に回つて来たといふ。

三越から盆景をとどけて来た。これも額田の贈り物である。取りあへずその礼状を出すと、二時頃に額田夫婦が来て、退院の祝ひものをくれ、三時過る頃まで話してゆく。

読書。五時頃に佐久間が来た。

七時半ごろ入浴。月が明るい。十時半就寝。

六日（木曜）晴、雨（八十五度）

午前七時起床。

中央公論の松本君から郵書が来て、「浪人時代」は九月号に掲載するといふので、返書。堀から郵書が来たの

で、返書。「日の出」から原稿料を送つて来たので、返書。

昨日額田夫婦の話では、松居君の病状がどうも好くないらしいといふので、桃多郎君宛に問合せの郵書を発送。大村から明治座の劇評を送つて来たので、一読の上、岸井に郵送。それと行きちがひに、岸井からアントラクトの原稿うけ取りの郵書が来た。

十一時過るころ強震。

読書。一時頃に豊田君が来て、二時頃まで話してゆく。けふも終日暑い。三時頃から四十分ほど仮睡。

晚餐後、森部と道玄坂を散歩。栄屋百貨店で喫茶。女中等のみやげにアイスクリームを買つて帰る。

八時ごろ入浴。暮れても蒸暑く、九時頃から雨。

十時四十分就寝。

七日（金曜）陰、驟雨（八十二度）

午前七時起床。

額田から郵書が来て、舞台社にあづかつてゐる服部秀君の原稿を先方へ返送してくれといふので、森部に命じて郵送。

福富君から関直彦氏喜字「歓迎」祝賀会について郵書が来たので、返書。私も発企者の一人である。森部の兄から郵書が来たので、これにも返書。

読書。午後二時頃に石井が来た。石井は今朝上京、明日帰郷するといひ、四時頃まで話してゆく。

石井が帰ると、間もなく驟雨、雷鳴。一時間ほどで晴れた。

五時半頃に佐久間が来たので、森部と三人づれでグリル銀座へ出てゆく。舞台社の七日会である。例月私は出席しないのであるが、今夜は堀も出席することになつてゐるので、私も出席したのである。出席者は堀のほかに嫩会員と誌友とを併せて十五人、石井もあとから来た。茶をのんで一同雑談、八時半ごろ散会。

それから佐久間、森部と銀座を散歩。雨あがりのせゐか、余り人出もなかつた。九時過るころ帰宅。空には明るい月が出た。

入浴。十時四十分就寝。

八日（土曜）晴、驟雨（八十一度）

午前七時半起床。

新聞をみると、昨夕は市内八ヶ所に落雷したといふ。読書。ペンキ屋二人が来て、屋根の庇や樋を塗りかへる。

森部は午後から岸井方へ「舞台」八月号の校正にゆく。午後二時頃に榎本健一（エノケン）一座の支配人加藤君が来て、次回興行「インチキ太閤記」のうちへ「小栗

栖の長兵衛」を少しく取入れるから承諾してくれと云ひ、一時間ほど話してゆく。

左団次の使が来て、中元の品をとどけて行く。左団次の細君は腎臓炎で先月来臥床中であるといふ。

五時半頃から驟雨、雷鳴。一時間あまりで止む。

七時ごろ入浴。八時頃に森部帰宅。

森部、おさき、おせん、君枝の四人に中元の金をやる。読書。十時半就寝。

九日（日曜）晴、陰（八十二度）

午前七時起床。けふもペンキ屋が来た。

妹とおえいは早朝から青山へ墓参にゆく。

九時半頃に中野が中元の礼に来「た。」て、十一時半頃まで話してゆく。そのあひだにおえい等帰宅。佐久間も来た。おさだも来た。

陰晴定まらず、をり／＼に細雨。正岡君と富塚君から先日の礼状が来た。

午後一時頃に上松君が中元の礼に来た。二時頃に大野君が中元の礼に来た。三時頃に両君前後して去る。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

十日（月曜）晴、陰（八十一度）

午前六時半起床。

九時半頃に福富君が来て、関直彦氏喜字祝賀会の醸金について相談があつたので、私も相当の醸金をする事を承諾。福富君は三十分あまり話してゆく。

豊田君の戯曲集「仇討輪廻」の序文三枚をかいて発送。午後、読書。三十分ほど仮睡。森部は岸井方へ校正にゆく。

二時半頃に市川升六君が移転の祝物を持参、一時間あまり話してゆく。そのあひだに、俵木が中元の礼に来た。大谷君、杉君、市川寿美蔵、岡田禎子から中元の品をとどけて来た。

六時頃から道玄坂を散歩。その帰途、佐久間に逢つた。七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。十二時半ごろ大雨。

十一日（火曜）陰、晴（八十一度）

午前七時起床。をり／＼に細雨。

おえいは森部同道で七時半頃から麴町方面へ中元の礼にゆく。

八時半頃に植木屋二人が来て、庭の椿、桜を佐久間の空地に移し、更にモチ、スイカケ、モクレンを栽え込む。

九時半頃におえい等帰宅。麴町では吉岡、大野、浦岡、小川、畑の諸家を歴訪して来たさうである。

佐久間の空地には草花が咲いてゐるので、森部が当方

の花壇に移植。晴れて暑くなる。

午後、読書。二時頃に丸尾の細君が中元の礼に来た。ついで鈴木のみ亡人も中元の礼に来た。

岸井の使が中元の品をといけに来た。ほかに和田君、平山君からも中元の品をといけて来た。

晚餐後、目黒の大通りへ髪を刈りにゆき、帰途散歩。八時ごろ帰宅すると、佐久間が来てゐた。

おさきの粗相で風呂の釜を損じたので、今夜は入浴を休む。佐久間は九時半頃まで話してゆく。

十時半就寝。

十二日（水曜）晴（八十二度）

午前七時起床。

田村三治君から郵書が来て、このたび多摩川を引払つて山口県徳山町へ隠退したといふ。返書。

読書。十二時頃に岸井が来て話してゐるうちに、海野の細君が中元の礼に来た。ついで中村孝子も中元の礼に来た。宮内君が市川鶴之助の中元を持参。中村が最後に残つて、一時半頃に去る。中村の依頼で扇子三本に俳句を揮毫。森部は岸井と研文社へ出てゆく。

二時頃に津沢の寿子が子供をつれて、中元の礼に来た。寿子は二時頃まで話してゐると、三橋が中元の礼に来た。けふもまだ風呂を焚くことが出来ないので、四時半頃

から近所の銭湯へゆく。カルシウム湯ださうで、構造はなか／＼綺麗である。

読書。七時半頃に森部帰宅。

十時半就寝。

十三日（木曜）晴（八十一度）

午前七時起床。

読書。山崎の俳句三百句を添削、よくも作つたものである。

十一時半頃に額田の細君が精霊棚に供へる野菜類を持参、ついで東儀が中元の礼に来て、三十分ほど話してゆく。

森部に命じて、四谷の丸尾君と麻布の海野方へ中元の品をといけさせる。森部は午後から研文社へ出てゆく。読書。今夜は入浴を休む。初めて日ぐらしの声を聞く。七時頃に佐久間が中元の品を持参、七時半ごろに森部帰宅、三人打連れて中目黒を散歩。佐久間は九時過る頃に去る。

十時半就寝。

十四日（金曜）晴、陰（八十二度）

午前七時起床。

関直彦氏喜寿祝賀（金醵）金壹百円を振替郵便にて発

送、あはせて福富君に郵書を送る。

君枝の郷里から祖父死去の電報が来たので、九時頃から出てゆく。丸尾君から昨日の礼状が来た。

読書。三時頃に三橋から電話がかゝつて、松居君は今午前三時十分遂に死去したといふ。だん／＼快方に向ふと聞いて、少しく油断してゐる処へ、突然の訃音におどろかされた。取あへず其次第を額田へも電話で通知してやる。それから間もなく、桃多郎君からへも電話がかゝつて、父は今曉死去したといふ。

五時頃に花田房子が中元の礼に来て、門口で話して帰る。つゞいて東京朝日新聞記者が来て、松居君死去について私の感想談を聴いてゆく。七時頃に額田から電話がかゝつて、松居君の告別式は明十五日午後三時半から青山北町四丁目高德寺で執行するといふ。

風呂の釜の修繕が出来上つたので、七時半ごろ入浴。九時頃に読売新聞の文芸部記者と社会部記者が来て、これも松居君に関する談話を聴いてゆく。

十一時就寝。

十五日（土曜）晴（八十二度）

午前七時起床。

八時半頃から森部同道で家を出で、下落合二丁目の松居君方へ悔みにゆく。朝から晴れて暑い。

子息桃多郎君の話によれば、松居君の死因は痼疾の糖尿病でもなく、腎臓病でもなく、移動性膿瘍といふ難病であつたさうである。霊前に焼香、香典と果物を供へて帰る。

十時過るころ帰宅すると、佐久間が来てゐた。留守中に山崎も来て、中元の品をくれたといふ。

気の早い暑中見舞の郵書六通到着、その返書をかく。午後一時半頃に岸井が来た。二時四十分頃に佐久間が来た。三人同道で三時頃から松居君の告別式に出てゆく。寺は青山北町四丁目の高德寺である。さすがに知名の人だけに、劇壇文壇各方面の会葬者は頗る多く、寺内は混雑してゐた。額田、三橋も会葬、舞台社から花環を贈つた。

帰途、青山大通りの青柳喫茶店で休息。岸井、三橋、佐久間と自動車に乗つて帰宅。岸井と三橋には渋谷で別れ、佐久間は私の家まで一緒に来た。暑いので、汗びつしよりになる。

今明の両夜、中目黒の空地に素人相撲の催しがあるといふので、佐久間と森部は晚餐後から見物にゆく。

七時過るころ入浴。八時頃に岸井が自作の戯曲「世之介」をたづさへて再び来「■」へて、九時過る頃まで話してゆく。九時半頃に佐久間等帰宅。佐久間は十時頃まで話して去る。をり／＼に雨。

十時四十分就寝。

十六日（日曜）陰、雨、陰（八十度）

午前七時起床。をり／＼に細雨。

九時過る頃に上松武雄が中元の礼に来て、一時間ほど話してゆく。つゞいて小林蹴月の細君が中元の礼に来た。細君は午餐を喫して、一時半頃に去る。

読書。暑中見舞の郵書五通到着、返書。

七時半ごろ入浴。八時頃に佐久間が来た。九時頃に君枝帰宅、郷里から西瓜を持つて来た。

十一時就寝。

十七日（月曜）晴、驟雨（八十六度）

午前七時起床。

朝から暑い。読書。

十時半頃に改造社の塩谷君が来て、同社では九月から日本文学講座を発行するに付、私にも執筆してくれといひ、十二時頃まで話してゆく。塩谷君の話によれば、この春以来、出版物も少しく景気を持ち直したといふ。

午前一時頃に松居桃多郎君が来て、葬儀前後の挨拶を述べ、一時間ほど話してゆく。桃多郎もこれから独立奮闘しなければならぬのである。

読書。三十分ほど仮睡。三時頃から遠雷の音、三時半

頃から驟雨。但しこれらは差したる降雨もなくて止む。晚餐後、森部と中目黒を散歩。八時ごろ入浴。おさきは朝から宿下りに出て、九時過るころ帰宅。みやげに大磯の蒲鉾と虎子饅頭を持つて来た。十一時就寝。

十八日（火曜）晴（八十八度）

午前七時半起床。おせんは宿下りに出てゆく。

十時頃に逗子の小林の細君が来て暑中見舞の菓子をくれ、おえいと三十分ほど話してゆく。

読書。午後一時頃から二時過る頃まで午睡。

中島から郵書が来て、目下大阪に帰省中であるといふ。ほかに暑中見舞の郵書五通到着、いづれも返書。

七時ごろ入浴。森部は佐久間と新宿武蔵野館の映画を観にゆく。

八時過る頃に俵木が来て、十時過る頃まで話してゆく。そのあひだに、おせん帰宅。十時半頃に森部帰宅。

十一時就寝。

十九日（水曜）晴（八十九度）

午前七時半起床。

十時頃に岡君来訪、十二時頃まで話してゆく。

午後森部に命じて、駒沢の鈴木未亡人方へ暑中見舞の

品をとげさせる。暑中見舞の郵書三通到着、返書。

三時頃に佐久間が来て、水まきの手伝ひなどする。五時半頃からおい、佐久間、森部と四人づれで道玄坂を散歩、晚餐。草花などを買つて、七時半ごろ帰宅。入浴。

佐久間は十時頃まで話して去る。

十一時就寝。

二十日（木曜）晴（八十九度）

午前七時起床。

本年度第一期所得税六十七円七十一銭を区役所に納入。花田房子に暑中見舞の品を郵送。

暑中見舞の郵書十通を発送。おなじく郵書七通到着、これにも返書。

午後一時頃に岸井が来て、二時間あまり話してゆく。けふは土用の入、朝から暑い。日ぐらしが鳴く。

「舞台」八月号の製本をとげて来たので、高橋、難波、池田、原田、林、清水、津沢、渡辺、東儀の諸家に発送。

七時半ごろ入浴。佐久間が来て、十時頃まで話してゆく。

十時半就寝。更けても暑い。

二十一日（金曜）晴（九十二度）

午前七時起床。

読書。川崎第百銀行麹町支店員二人が暑中見舞に来て、おいと話してゆく。

午後二時頃に佐久間が来た。山村魏君から郵書が来たので、返書。小田原の飯野君から登山電車券を郵送して来たので、返書。

六時ごろ入浴。七時頃に佐久間が再び来た。

十一時就寝。

二十二日（土曜）陰（九十一度）

午前七時起床。陰つて蒸暑い。

森部は徴兵点呼で中目黒小学校へ出てゆく。

岸井の戯曲「世之介」を編集し終る。小林宗吉から郵書が来て、京都の新興キネマに入社することになったといふ。

横浜の小島から邦之助三回忌の配り物を郵送してきた。

岡君から郵書が来たので、返書。ほかに暑中見舞の郵書八通到着。いづれも返書。

読書。午後には雷鳴、但しこゝらには一滴も降らない。六時頃に改造社の使が来て、「修禪寺物語」増版の捺印を求めてゆく。森部は七時頃から額田方へゆく。

六時半ごろ入浴。読書。八時頃に佐久間が来た。

九時頃に森部帰宅、阿佐ヶ谷辺は大雷雨であつたといふ。

十一時就寝。夜半に眼をさませば汗びつしより、起きて寝衣を着かへる。

二十三日(日曜)晴(九十二度)

午前七時半起床。

伊勢亀山町の安永といふ人から俳句の選をたのんで来たので、選了。暑中見舞の郵書八通到着、いづれも返書。

読書。午後一時半頃に上松のおすゝが来て、一時間ほど話してゆく。

三時頃に佐久間が来て、森部に手伝つて池をかへる。六時ごろ入浴。六時半頃に和田君が来て、門口で話して去る。

森部と中目黒を散歩。団扇を買つて来る。

十時半就寝。

二十四日(月曜)晴(九十五度)

午前七時起床。

九時半頃に中野が来て、来月の歌舞伎座での自作の「明治太平記」を上演するに付、その脚本を「舞台」に掲載してくれといふ。つゞいて富田秋香君が久しぶりで

来訪。富田君は一時間ほどで去り、中野は十一時頃まで話してゆく。

読書。午後、一時ほど午睡。けふも暑い。

横浜の小島方へ香典を発送。ほかに暑中見舞の返書六通を発送。

午後から風強く、暮れても吹き止まない。

六時半ごろ入浴。やがて佐久間が来た。

読書。十時半就寝。

二十五日(火曜)晴(九十三度)

午前七時起床。おえいは早朝から上松方へゆく。

岡君から明治三十四年の演芸世界の切抜きを送つて来た。それには私の写真が掲載されてゐるのである。三十年前の写真に対して、一種懐旧の情を催さないでもない。とりあへず返書。ほかに暑中見舞の返書十五通をか

く。十二時過る頃におえい帰宅。朝から南風吹き暴れて砂塵を巻きあげる。頗る不愉快の日である。

読書。三時半頃から水まきにかゝる。五時ごろ入浴。

今夜は嫩会例会で、六時頃に額田が先づ来た。つゞいて鈴木、岸井、佐久間、三橋が来た。他は不参。例に依て劇談、雑談。九時頃に鈴木が先づ去り、他は九時半頃に帰る。風はまだ止まない。

十一時就寝。

二十六日（水曜）陰、雨（九十度）

午前七時半起床。風は止んで蒸暑い。

暑中見舞の郵書十八通到着、いづれも返書。

読書。十時半頃に佐久間が来た。

午後一時頃に常盤座の斎藤君が来て、「笑の王国」一座が松竹座へ出演するに付、「権三と助十」を上演したいと云ひ、三十分あまり話してゆく。

二時過る頃から細雨「。」へ、／＼に止む。六時半ごろ入浴。

中野から自作の戯曲「明治太平記」を速達便で送つて来たので、灯下で一読。

十時半就寝。

二十七日（木曜）雨、陰（八十度）

午前七時起床。雨。

大村から七月分会費を送つて来たので、返書。中野にも原稿うけ取りの返書。

九時五十分、森部同道で出る。先づ神楽坂の第一銀行支店へ行つて、富士印刷の配当金を受取り、それから銀座の三越へ回つて、市川升六君へ贈るべき鯉節の配達をたのむ。更に松坂屋へまはつて、冷蔵庫と雑品をかひ、

銀座で昼餐。十二時半ごろ帰宅。

雨はをり／＼に止んで又降りつゞける。暑気も俄に減た。

暑中見舞の返書八通をかく。一時過る頃に岸井が来て、三時頃まで話して去る。その頃から雨やんで陰る。

中野の戯曲「明治太平記」神尾みつ子の戯曲「命の笹飴」を編集し終る。五時半頃に佐久間が来た。六時半ごろ入浴。

十時半就寝。

二十八日（金曜）陰（八十度）

午前七時半起床。朝は細雨、やがて止む。

おえいは朝から麹町へゆき、十時半ごろ帰宅。

吉田武三君の戯曲「映画王国」を編集。「舞台」九月号に現代劇の原稿が少いので、その旨を電話で額田に云ひやる。

魚屋が鯉を持つて来たので、二尾を買つて池に放してやる。けふも陰つて凌ぎよい。

暑中見舞の返書十五通をかく。それから読書。

六時半ごろ入浴。八時頃から森部と中目黒を散歩。電灯に取付ける虫捕器を買つて来た。

改造社の塩谷君から速達便が来て、森部の入社試験を行ふに付、三十日午前七時までに入社しろといふ。出版

部で二人を募集するのであるが、それに対して四百八十余人の応募があつたさうである。今更ではないが、就職難が思ひやられた。

十時半就寝。

二十九日（土曜）晴（八十五度）

午前七時起床。

「芸術殿」八月号を送つて来たので一読、そのアトラダムに掲載されてゐる河竹繁俊君の「厄攘ひ」記事について、少しく疑問の点があるので、それに対する原稿四枚をかいて、大村君に発送。

大村君が電話がかゝつて、歌舞伎新報一千六百七十号を以て終刊になつてゐると教へてくれたので、その旨を大阪の和氣君に通知。ほかに暑中見舞の返書十一通をかく。

午後佐久間が来た。改造社の件に付、森部は丸善で寺田君に逢ふ約束になつてゐるとて、二時頃から出てゆく。

読書。けふは森部がゐないので、佐久間が水まきの手伝ひをする。水まきの済んだ頃に森部帰宅。

六時半ごろ入浴。七時半頃に川崎の原君が来て、九時頃まで語る。佐久間が再び来て、渋谷区内では今夜十時廿分から防空の予行演習を行ふといふ。私の家へも今朝

（上）目黒一丁目の町会員が来て、帝都防護団（の）防衛費を募集して行つた。目黒区内でも近日予行演習を行う筈である。十時頃に佐久間は帰つたが、その頃已に渋谷区の街灯には黒い布が被せてあつた。やがて喇叭の音もきこえた。

十一時就寝。

三十日（日曜）陰（八十四度）

午前七時半起床。明治天皇祭。

森部は早朝から改造社の入社試験を受けに行つて、十時ごろ帰宅。

石角君から自作の戯曲を送つて来たので、返書。ほかに暑中見舞の郵書に対する返書八通をかく。

十一時頃に雨はら／＼と降り出して、間もなく止む。読書。午後佐久間が来た。

森部は四時頃から再び改造社へ出てゆく。晚餐後、近所を散歩。

六時ごろ入浴。七時頃に佐久間が再び来た。梟が頻りに鳴く。

九時頃に森部帰宅、けふの試験は先づ通過、それから銀座の松屋で寺田（君）に逢ひ、そこらを散歩して来たといふ。

十時半就寝。

三十一日(月曜)陰(八十五度)

午前七時半起床。

森部は早朝から改造社へ口頭試験を受けにゆき、九時半ごろ帰宅。

十時頃に岸井が来て、「舞台」九月号の戯曲原稿をうけ取り、一時間あまり話してゆく。岸井が去ると、間もなく驟雨。

大西君から郵書が来て、眼病はまだ癒えないといふ。気の毒なことである。すぐに返書。雨は忽ち止んで、又陰る。

読書。午後一時頃から一時間ほど午睡。

額田から「舞台」誌友の原稿三種を送つて来たので、返書。ほかに暑中見舞の返書十一通をかく。

誌友の原稿の中、前田喜朗君の喜劇「瓦斯料請求」を編集。

晚餐後、中目黒を散歩。目黒区詳細地図を買ふ。それから高橋理髪店で髪を刈る。帰途、又もやばら／＼と降り出したが、すぐに止む。

七時半ごろ入浴。佐久間が来た。

「瓦斯料請求」を編集し終つて、岸井に郵送。十時半就寝。

本月は殆どこれぞといふ仕事もしなかつた。読書、舞台の編集、漢詩十五六首。

昭和八年八月

一日（火曜）晴（八十五度）

午前七時半起床。姉とおえいは青山へ墓参にゆく。

暑中見舞の返書十八通をかく。額田から郵書が来て、いよ／＼昨日かぎりて病院通いを止め、四十一日目で入浴したといふ。返書。

午後一時頃から森部同道で、目黒の祐天寺へゆく。それから同所の正覚寺へまはつて三沢初子（芝居でいふ先代萩の政岡）の墓に参詣。初子の墓は東京府指定の史蹟となつてゐるにも拘らず、頗る荒れてゐた。

更に五反田行のバスに乗つて、不動前で下車。角伊勢や大国家は依然としてゐるが、その付近にはカフエーや芸妓屋の見番なども出来て、むかしの姿を失つたやうである。不動境内の掛茶屋に休息、境内を一巡して帰途に就く。空はをり／＼に陰つて、日中も左のみ暑くなかつた。

帰途は行人坂下からバスに乗つて、中目黒下車。三時半ごろ帰宅。留守中に常盤興行株式会社の斎藤君が来て、「権三と助十」の上演料をとゞけて行つたといふ。

読書。六時頃から森部と八幡通りを散歩。角の空地に掛け小屋をして納涼演劇といふのを催してゐた。なんとなく田舎めいた風情である。

七時ごろ帰宅すると、佐久間が来た。つゞいて岸井が松居君の遺稿「時平の大臣」を持参。庭さきに床几を出して涼みながら話してゐると、朝日グラフの首藤君が写真班同道で来訪、私が浴衣がけで散歩してゐる処を撮影したいと云ふことで、中目黒の通りまで連れ出された。八時ごろ帰宅して、入浴。

佐久間と岸井は九時半頃まで話して去る。中央公論社から「浪人時代」の校正刷を送つて来た。十時半就寝。

二日（水曜）陰（八十一度）

午前七時起床。けふは母の命日、仏前に香花を供へる。

「浪人時代」七十八ページ校了、速達便で返送。

十一時頃に神谷とも子が来て、鎌倉の自宅で作つたといふトマトをくれ、三十分ほど話してゆく。朝から陰つて、をり／＼に雨。

午後一時頃から一時間ほど午睡。暑中見舞の返書十五通をかく。

三時頃に佐久間が来た。

読書。森部は松居君の遺稿「時平の大臣」を謄写し終る。二幕五十三枚である。

七時ごろ入浴。読書。

八時頃に町内の防護団員が来て、今夜九時から燈火管

制の予行演習を試みるから、門燈その他を消してくれといふので、座敷の燈火だけを残して、雨戸をしめる。庭に出てみると、諸方の燈火みな消えて四面暗黒。一種悽愴の感があつた。

九時廿分頃に非常警戒を解くといふ通知があつたので、あたりは再び明るくなる。

十時四十分就寝。

三日（木曜）陰（八十度）

午前七時起床。細雨、間もなく止む。

松居君の戯曲「時平の大臣」を編集し終る。暑中見舞の返書十七通をかく。山崎の俳句を添削して返送。

読書。三時頃に佐久間が来た。けふは陰つて、やゝ凌ぎよい。

六時半ごろ入浴。森部と中目黒を散歩。晴れて、月が出た。

読書。十時半就寝。

四日（金曜）晴、陰（九十度）

午前七時半起床。けふは朝から暑い。

読書。暑中見舞の返書廿一通をかく。

午後一時頃に雨はら／＼と降り出して、すぐに止む。此頃の天気癖で、降るかと思えて降りもせず、蒸暑いに

は閉口である。

四時頃から水まき、六時過るころ入浴。

読書。宵から晴れて月が出た。

十時半就寝。蒸暑いので、幾たびか眼がさめた。

五日（土曜）陰、晴（九十度）

午前七時起床。けふも例の如き天気、朝から蒸暑い。

八時頃に佐久間が来て、三十分ほど話して去る。九時過る頃に岸井が来て、松居君の戯曲を受取り、十一時頃まで話してゆく。

河竹繁俊君から郵書が来たので、返書。ほかに暑中見舞の返書廿二通をかく。午後一時頃から一時間ほど午睡。読書。おえいは姉同道で道玄坂へ買物にゆき、五時ごろ帰宅。そのあひだに水まきを終る。

六時半ごろ入浴。七時半頃に額田が来てアイス・クリムをくれ、九時頃まで話してゆく。

十時半頃から雨。十一時就寝。

六日（日曜）雨、陰（八十四度）

午前七時半起床。大雨。

その大雨を冒して、九時頃に佐久間が来た。

塩谷君から郵書が来たので、返書。高平君にも郵書を送る、森部入社に伴である。ほかに暑中見舞の返書十二

通をかく。

雨は十時頃から止む。読書。

午後には波多謙治君の喜劇「世相断片」多田よしゑの「寄山殿争ひ」林鉄之介君の「春暮れぬ」を編集、いづれも「舞台」の原稿である。佐久間はおえい、森部などと話して、三時頃に去る。

陰晴定まらず、をり／＼に雨。池の大鯉（一尺六七寸）が病気に罹つたらしいので、掬ひあげて別の瓶に移してやる。

六時半ごろ入浴。雨が止んだので、森部と中目黒を散歩、伊勢脇通りの喫茶店で喫茶。九時半頃から晴れて月が出た。

十時四十分就寝。夜半に又もや大雨。

七日（月曜）晴（八十八度）

午前七時半起床。けふは土用明けといふのであるが、朝から晴れて暑い。

おえいは森部同道で品川の津沢方へ出てゆく。瓶に移した大鯉は今朝遂に死んだ。

暑中見舞の返書九通をかく。大阪の山上から例に依て奈良漬の大樽を送つて来たので、返書。九時半頃に森部帰宅。

午後、一時間ほど午睡。一時半頃におえい帰宅。

山形の本間君から郵書が来たので、返書。読書。けふは水まきをしない。

舞台社の七日会で、森部は五時半頃から出てゆく。

六時半ごろ入浴。読書。宵から晴れて月が出た。庭に床几を出して涼む。九時過る頃に森部帰宅。今夜の七日会は出席者十人に過ぎなかつたといふ。

十一時就寝。

八日（火曜）晴（八十五度）

午前七時起床。けふは立秋。

豊田君からその著「仇討輪廻」を送つて来たので、返書。これには私の跋が付いてゐる。ほかに暑中見舞の返書八通をかく。

午後一時頃から一時間ほど午睡。読書。

おえいは森部同道で三時半頃から東京劇場見物にゆく。

四時頃から水まき、六時半ごろ入浴。

読書。十時過る頃におえい等帰宅。東京劇場は満員であつたといふ。

十一時半就寝。

九日（水曜）陰、雨（八十五度）

午前七時起床。

けふは関東防空演習第一日、朝から少しく陰る。

午前八時頃から演習開始の半鐘の音がきこえる。こゝらは旧郊外であるから、総て半鐘を以て報知するのである。

をり／＼に飛行機の音、砲撃の音。こゝらは差ほどでもないが、市の中央部は定めて混雑のことであらうと思ひやられた。

十一時頃に佐久間が来た。十二時頃に小林が来て、いよ／＼新興キネマに入社することになったと云ひ、一時間ほど話してゆく。

読書。陰つて蒸暑い日である。竹田敏彦君の戯曲「巡查」村田千秋君の戯曲「姉さんの馬鹿」を編集し終る。

晚餐後、中目黒方面へ出てみると、こゝらの防護団員も制服を着けて奔走してゐた。六時ごろ入浴。

夕からいよ／＼陰つて、をり／＼に電光ひらめく。砲声にまじつて遠雷の声もきこえる。

八時から燈火管制で消燈、西洋室を閉め切つて読書。九時頃から細雨。十一時就寝。

十日（木曜）晴（九十度）

午前七時起床。

新聞をみると、関東北部は雷雨、この方面の敵機は襲来し得なかつたといふ。

森部は九時頃から「舞台」の広告料を取りにゆく。やがて佐久間が来て十一時頃まで話して去る。

けふは防空演習第二日、飛行機がしきりに飛んで来る。読書。暑中見舞の返書八通をかく。

四時頃から水まき。六時ごろ入浴。

魚屋が鯉二尾を持つて来て、池に放つ。六時半頃に森部帰宅、岸井方へまはつて九月号の校正をして来たといふ。

八時から燈火管制。九時頃から驟雨、間もなく止む。西洋室に閉ぢ籠つて読書。夜も蒸暑い。

十一時就寝。夜半にも飛行機の音、半鐘の音、砲声がつづけて聞えた。

十一日（金曜）晴、陰（八十八度）

午前七時半起床。

姉とおえいは九時半頃から世田ヶ谷の上松方へ出てゆく。

十時過る頃に岸井が来て、松居君の追悼文十六編、松翁戯曲年表、松翁年譜等の原稿をみせ、十二時過る頃まで語る。

改造社から森部にあてゝ入社不調の通知が来た。これも致方がない。森部の失望はさる事ながら、なにしろ三人の募集に対して四百八十余人の応募者であるから、容

易に合格入社は出来ないのである。こゝにも就職難の片影が窺はれて、さびしい。

午後一時過る頃に、おえい等帰宅。

松居君の年表、年譜を一読、私も追悼文三枚をかく。それから読書。

四時頃から水まき。六時頃から森部は岸井方へ原稿をとどけにゆく。

七時頃入浴。夕刊をみると、今朝九時三分、中村福助は葉山の別荘で死去、三十四歳。この頃「■」おひ／＼に頭角を露はして来たのに、惜いことであつた。

七時半頃に佐久間が来て、九時頃まで話してゆく。入れちがひに、森部帰宅。

十時半就寝。

十二日（土曜）晴（八十八度）

午前七時起床。

森部は九時頃から研文社へ校正に出てゆく。

額田に郵書。ほかに暑中見舞の返書十一通をかく。

読書。午後一時間ほど午睡。三時頃に森部帰宅。

四時頃から水まき。六時半ごろ入浴。

森部は宵から田端の塩谷君と寺田君をたづねて、十時ごろ帰宅。

読書。十時半就寝。

十三日（日曜）晴（八十七度）

午前七時半起床。

中村福助の告別式は午前十時から千駄ヶ谷の自宅に行はれるので、森部を代理に出してやる。

十時頃に渡辺の愛子が来て、十一時頃に去る。ついで森部帰宅、さすがに歌右衛門の倅だけに、おびたしい会葬者であつたといふ。

読書。午後一時間ほど眠る。四時頃から水まき。

六時ごろ入浴。八時頃から森部と中目黒を散歩。九時ごろ帰宅すると、佐久間が来てゐた。佐久間は十時頃に去る。

十一時就寝。蒸暑いので、午前四時頃まで安眠できなかった。

十四日（月曜）驟雨、晴（八十八度）

午前七時起床。八時過る頃から驟雨、やがて晴れる。

読書。暑中見舞の返書五通をかく。額田から返書が来た。

高田尚亮君から「近代日本史」といふ大冊を送つて来た。やがて同君から電話がかゝつて、右一部を寄贈するといふ。一部の定価三十円である。高価の著書は無償で貰つては気の毒、いづれは何かの返礼をせねばなるまいと思ふ。

六時ごろ入浴。読書。八時頃から庭へ出て涼む。

相変らず蒸暑いが、仰げば満点の星、なんとか秋らしい空である。

十時半就寝。夜半大雨。

十五日（火曜）晴（八十八度）

午前七時起床。

高田君に近世日本史の礼状を発送。三橋から郵書が来て、木曾から帰京したといふので、返書。ほかに暑中見舞の返書五通。

十一時頃に津沢の寿子が来て、西大崎一丁目に転居するに付、私に保証人になつてくれといひ、午後一時頃まで話してゆく。

読書。二時半頃に中央公論の松本君が来て、私の「浪人時代」は十月頃に掲載するといひ、四時過る頃まで話してゆく。

それから水まき。六時半ごろ入浴。

森部は朝から研文社へ校正にゆき、七時半ごろ帰宅。読書。十時半就寝。

十六日（水曜）晴（八十五度）

午前七時「帰」起床。森部は朝から研文社へゆく。

十時頃に中野と石井が連れ立って来た。石井はいよ

／＼上京して、一先づ市ヶ谷薬王寺町の友人の宅に落付いたといひ、十二時頃まで話して去る。

十二時（半）頃に森部は岸井同道で帰宅。九月号の校正も全部終つたといひ、岸井は一時間あまり話してゆく。読書。暑中見舞の返書四通をかく。

四時頃から水まき。五時頃に松居桃多郎君が来て、「舞台」九月号に松居君の遺稿、年譜、著作年表、追悼記事に掲載することになった礼をいひ、三十分あまり話してゆく。桃多郎君は父のあとを継いで松竹に入社することになったといふ。先づは結構である。

六時半頃に佐久間が来た。七時ごろ入浴。佐久間は九時頃まで話して去る。

十時半就寝。夜半に雨の音。

十七日（木曜）雨、晴、陰（八十四度）

午前七時半起床。あかつきに大雨、やがて止む。

暑中見舞の返書三通をかく。斎藤梅雪君から俳句の選をたのんで来たが、千句以上の大集であるので、選句に暇取る。

姉とおえいは森部同道で、午後から目黒不動へ出てゆく。

俳句を選了。更に短尺十二枚、色紙五枚に揮毫。三時頃に佐久間が来た。三時半頃におえい等帰宅。祐天寺、

正覚寺、不動堂等に参詣して来たといふ。

四時頃に三橋が来て、五時頃まで雑談、佐久間と共に去る。

晩餐後、森部と道玄坂を散歩。七時半ごろ帰宅、入浴。

読書。庭には虫の声がきこえる。

十時半就寝。

十八日(金曜)晴(八十八度)

午前七時半起床。

佐久間の戯曲「新もぢずり石」を訂正。午後二時頃に終る。

読書。四時頃から水まき。

小林覚太郎君から郵書が来たので、返書。ほかに暑中見舞の返書五通をかく。

六時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十九日(土曜)晴(八十九度)

午前六時半起床。あかつきに雨、やがて晴れる。

森部は日光へゆくとて、五時半頃から出て行つたといふ。

紀州の毛利君から郵書が来たので、返書。岸井からも郵書が来て、葉山へ行つてあるといふ。これにも返書。山崎から嫩会欠席の郵書が来た。ほかに暑中見舞の郵書

三通、いづれも返書。

おえいは九時頃から世田谷の上松方へゆく。渡辺の愛子から電話がかゝつて、岡本といふ人が明朝私をたづねて来るから、逢つてくれといふ。

けふも相変わらず暑い。二時頃におえい帰宅。

三時頃までに随筆「蠍」八枚かき終る。随筆雑誌「文休」の原稿である。

四時頃から水まき。六時頃入浴。やがて佐久間が来た。研文社から「舞台」九月号の製本をとりつけて来た。佐久間は八時半頃に去る。

読書。残暑はまだ去らないが、虫の声は宵々ごとに繁くなつて来た。

十時半ごろに森部帰宅。日光から鬼怒川へ回つて来たとして、みやげ物などを買つて来た。

十一時半就寝。

二十日(日曜)晴(八十八度)

午前七時起床。けふも朝から暑い。

「舞台」九月号を池田、高橋、難波、林、東儀、原田、清水、渡辺、津沢の諸家へ発送。

暑中の返書五通をかく。十時頃に麻布の岡本栄七といふ人が尋ねて来て、佐久間縁談の件について問合せてゆく。恐らく不調に終るらしく察せられた。

午後、石角君の戯曲「信仰の跡」を編集。

四時頃から水まき。けふは森部とおせんが池の水をかける。

六時半ごろ入浴。佐久間が来た。七時過る頃から佐久間同道で中目黒を散歩。西瓜を食つて、八時半ごろ帰宅。読書。十時半就寝。

二十一日（月曜）晴（八十八度）

午前八時起床。

十時過る頃に津沢の寿子が来て、借家の契約書に私の捺印を求め、十一時過る頃まで話してゆく。

午後、読書。けふも暑い。おさは麴町へゆく。

神田の小学館から新築記念の服紗を送つて来たので、返書。ほかに暑中見舞の返書三通をかく。

四時頃から水まき。六時半ごろ入浴。

読書。機織虫がしきりに飛び込む。

十時半就寝。

二十二日（火曜）晴（八十九度）

午前七時半起床。

新聞をみると、本年の残暑は例外に強く、寝苦しい夜が当分続くであらうといふ。

十時頃に小田原の飯野君が梅干を持参、十二時頃まで

話してゆく。

午後、読書。三時半頃に三橋が一二三君同道で来て、六時頃まで語る。

七時ごろ入浴。読書。虫の声がしきりに聞える。十時半就寝。

二十三日（水曜）晴（八十八度）

午前七時半起床。

「西郷山房随筆」七枚をかく。舞台の原稿である。読書。四時ごろ水まき。相変らず暑い。

晚餐後、中目黒へ髪刈にゆく。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十四日（木曜）晴（九十度）

午前七時起床。鉢の朝顔が今を盛りと咲き出した。柵のへちまも沢山に実を着けた。

姉とおえいは青山へ墓参にゆき、九時ごろ帰宅。

大村から会費を送つて来て、病気のために明夜不参するといふ。返書。ほかに暑中見舞の返書三通をかく。

塩谷君の戯曲「落武者」を編集し終る。

十二時半頃に佐久間が来て、二時頃に去る。読書。四時頃から水まき。五時頃に黒川君が来て、中央公論

にまはしてある「浪人時代」のグラ刷をみせて貰ひたい

入浴。十一時就寝。

と云ひ、六時過る頃まで話してゆく。そのあひだに岸井が来たので、待たせて置いて晚餐。岸井は昨日葉山から帰ったといひ、八時頃まで話して去る。

それから入浴。読書。森部は道玄坂へ行つて、鶏頭と蝦夷菊を買つて来て、花壇に栽える。

十時半就寝。

二十五日（金曜）晴（九十度）

午前七時起床。

中央公論社の松本君に速達便を発送、「浪人時代」の原稿を松竹の黒川宛に発送してくれるやうに頼んで遣る。

読書。午後、一時間ほど眠る。

二時頃に海野が来て、北海道のみやげをくれ、三時過る頃まで話してゆく。それから水まき。

ふたば会例会で、五時半頃に額田が先づ来た。ついで石井、三橋、中島が来た。中島は昨日帰京したさうで、大阪のみやげをくれた。それから佐久間、鈴木、岸井が来た。

七時頃に放送局の小林君が来て、三十一日の夜に猿之助が「小栗栖の長兵衛」二幕を放送するといひ、三十分あまり話してゆく。

ふたば会は例に依て、劇談、雑談。九時十分散会。

二十六日（土曜）晴（九十度）

午前七時起床。

松居桃多郎君から来る三十一日上野寛永寺に於て松居君四十九日法要を営むとの通知があつたが、不参の返書。ほかに暑気見舞の返書二通をかく。

読書。午後二時頃におとくが来た。三時頃に蒲田の渡辺君が来て、四時頃まで話してゆく。

ついでにおとくも帰るといふので、姉とおえいは道玄坂まで一緒に出てゆく。

それから水まき。今年の残暑は例外である。五時半頃に姉とおえい帰宅。

六時半ごろ入浴。読書。をり／＼に庭へ出て涼む。虫の声だけは秋らしくなつたが、暮れても蒸暑い。

十時半就寝。

二十七日（日曜）晴（九十度）

午前七時起床。

大崎の津沢方では今日いよ／＼移転するといふので、森部は朝から手伝ひにゆく。

中央公論の松本君から郵書が来て、同社からシエークスピア全集の普及版を発行するに付、推奨の辞を一枚ほ

ど書いてくれといふので、取りあへず起稿して郵送。神戸の前田君から郵書が来たので、返書。

十時頃に岸井が来て、額田から大阪の松竹入社との相談があつたといひ、十一時半頃まで話してゆく。相談が纏まれば、岸井は下阪してもいいとのことであつた。

午後、読書。けふも暑い。新聞によると、四十一年振りの暑気であるといふ。

三時半頃から水まき。けふは森部がゐないので、女中に手伝はせる。

六時半ごろ入浴。読書。九時頃に佐久間が来て、長谷川君の戯曲「別れ囃子」をとどける。九時半頃に森部帰宅。

十一時就寝。

二十八日(月曜)晴(九十度)

午前八時起床。

長谷川君の戯曲を編集、これで「舞台」十月号の戯曲編集を終る。今度は増大号である。長谷川君にも礼状を発送。

午後、読書。一時間ほど眠る。

三時半頃から水まき。六時半ごろ入浴。

八時頃に佐久間が来て、九時半頃に去る。

十時半ごろ就寝。寝苦しい夜がいつまで続くか判らな

い。

二十九日(火曜)晴(八十九度)

午前七時半起床。

読書。午後二時頃、新潮社の篠田君から電話がかゝつて、「日の出」十月号に三枚ばかりの漫談をかいてくれといふ。

四時頃から水まき。晚餐後、森部と中目黒を散歩。馬頭観音の縁日で賑はつてゐた。雞頭三株を買つて帰る。姉とおえいも女中をつれて、入れ代りに縁日へ出てゆく。七時半ごろ入浴。八時頃に岸井が来て、長谷川君の原稿を受取り、九時過る頃まで話して去る。暮れても暑い。十一時就寝。夜半に起きて涼む。

三十日(水曜)陰、晴(九十度)

午前七時半起床。

河竹繁俊君から「芸術殿」九月号を送つて来たので、返書。

午後、読書。寝ころんで漢詩など作る。ことしの残暑にはかなりに疲れた。これも年のせみかも知れない。

四時頃から水まき。六時ごろ入浴。読書。

十一時就寝。

三十一日（木曜）晴（八十九度）

午前七時半起床。

石井から郵書が来て、父重態の報に接して直ぐに帰郷するといふ。取りあへず郷里にあてゝ見舞状を発送。

読書。四時頃から水まき。六時半ごろ入浴。

今夜は七時半から猿之助が「小栗栖の長兵衛」二幕を放送するといふので、佐久間がラヂオの機械を持参。家内打寄つて聞く。九時過る頃に終つて、佐久間は十時ごろに去る。

十一時就寝。夜半に眼がさめて暁まで安眠できなかった。ラヂオを長く聴いてゐた為ではないかと思はれる。

今月は大暑のために、殆ど何の仕事もせず、読書に日々を送つてしまつた。僅に西郷山房随筆（舞台、七枚）のみ。

（翻刻担当…脇坂健介）

昭和八年九月

一日（金曜）晴（八十六度）

午前六時起床。おえいと近所を散歩。今朝はやゝ涼しい風が吹く。

震災十週年、今更のやうに月日の早いのに驚かされる。八時半頃に俵木が来て、叔母の浦岡の細君が昨夜房州から帰京したとて、みやげの蝦をとじけ、十時頃まで話してゆく。

浦岡の細君に礼状を発送。館山のおとくから梨を送つて来たので、これにも返書。岡田から「舞台」の戯曲二種を送つて来たので、これにも返書。

読書。午後、一時間ほど眠る。四時頃から水まき。

夕刊をみると、震災十週年について、本所被服廠跡の参拝者六十万人に達したといふ。

六時半ごろ入浴。読書。

けふの二百十日は平穩無事、陰曆七月十二日の月が鮮かに出た。

森部は宵から神田へ行つて、九時半ごろ帰宅。その途中、小林君をたづねると、蹴月君は八月初旬から胃腸を痛めて、寝たり起きたりしてゐるといふ。どこにも病人が多い。

十時半就寝。

二日（土曜）晴（八十八度）

午前七時半起床。

姉とおえいは早朝から井ノ頭公園にゆく。

十時頃に能島君が来て、いよ／＼「新演芸」の初号が出来したといひ、一時間ほど話してゆく。やはり「演芸画報」類似の雑誌であるが、一般受けのするやうに出来てゐる。

川原小枝子から郵便書が来たので、返書。額田にも返書。小林君に見舞状を発送。

おえい等は十二時ごろ帰宅。公園は流石に涼しかったといふ。

「日の出」の随筆三枚をかく。題は「へちま礼讃」
三時頃に佐久間が来て、四時頃に去る。それから水まき。

五時半頃に三橋が来て、これから津沢の新家へゆくといふので、おえいが梨をとどけてくれるやうに頼む。三橋は六時半頃まで話してゆく。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三日（日曜）雨、陰、晴（八十七度）

午前七時半起床。細雨、やがて止んで陰る。

読書。午後、一時間ほど眠る。

三時頃に佐久間が来て、四時頃まで話して去る。

六時半頃入浴。読書。

十時半就寝。夜半大雨。

四日（月曜）雨、晴（八十五度）

午前七時半起床。をり／＼に驟雨。

九時半頃に文芸春秋社の武内君が来て、松岡映丘君筆「靈山の顕家」の図をとどけてくれたので、その代金を支払ふ。武内君は十一時頃まで話して去る。

午後から雨はやんだが、風が強い。台風が襲来したとみえる。どうでも一度暴れなければ残暑は去るまい。

一時頃に中野が来て、歌舞伎座の十月狂言を頼まれたといひ、それに就て色々相談あり、二時半頃まで話して去る。

読書。何分にも風が強いので、森部と庭へ出て、草花に竹の杖をやる。静岡の山本君から梨を送つて来た。

六時半入浴。七時頃に佐久間が来たので、梨を持たせてやる。

読書。夜に入つて、風はます／＼烈しくなる。
十時半就寝。

五日（火曜）晴（八十五度）

午前七時半起床。今朝も風吹く。

読書。福島石井から郵書が来て、父は四日の午前零

時四十五分遂に死去したといふ。取りあへず悔み状に香典を添へて発送。大阪の山上から嫩会の会費を送つて来たので、返書。上州の橋本といふ人から門下生にしてくれといふ郵書が来たので、断りの返書。

四時頃から水まき。風は午後から衰へて、夕から止む。それでも砂町方面では七八千戸の浸水をみたといふ。

六時過る頃から森部と道玄坂を散歩。帰途、バスの乗り場まで来ると、恰も岸井の来るのに逢つたので、同道して帰宅。岸井は九時頃まで話して去る。

夕刊をみると、岩谷小波君は今朝八時廿四分、赤十字社病院で死去、六十四歳。お伽噺の開祖、岩谷のをぢさんとして知られてゐたが、今や斯人を失つてしまつた。松居君逝き、岩谷君逝き、さびしい秋である。

九時半入浴。暮れてやゝ涼しくなる。
十時半就寝。

六日（水曜）晴（八十度）

午前七時半起床。けふも風、温度降る。

九時頃に佐久間が来て、十時半頃に去る。改造社から「修禪寺物語」増版の印税を送つて来たので、返書。森部の兄から郵書が来たので、返書。

読書。岩谷君告別式で、三時頃から青山会館へゆく。交際の広い人だけに、おびたゞしい会葬者であつた。

こゝで額田に逢つたので、近所の喫茶店へ同行して廿分ほど語る。渋谷で額田に別れて四時ごろ帰宅。

六時半ごろ入浴。そのあひだに放送局の小林君が来て「小栗栖の長兵衛」の放送料をといけ、門口で帰つたといふ。

森部は顔や手に何かのカブレが出来たので、薬局へ行つて塗薬を貰つて来た。

暮れていよ／＼涼しく、縁側のガラス戸をしめて読書。十時半就寝。夜半に起きて搔卷をかへる。

七日（木曜）晴（八十度）

午前七時起床。朝は七十度、寝巻のまゝで庭を散歩するとヒヤ／＼する位である。

文学社の社員が来て「修禪寺物語」について問合せてゆく。教科書編入の為である。

森田から郵書が来て、新興キネマで「おさだの仇討」を撮影したいといふ。承諾の返書。宇治山田の神山君から俳句の選をたのんで来たので、選了。

読書。四時頃から水まき。佐久間が来て、これから「舞台」の誌友会にゆくと云ひ、五時半頃に去る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

八日（金曜）晴（八十三度）

午前七時半起床。

森部のカブレはまだ癒えないので、紀尾井町の吉岡医師方へ診察を受けにゆく。

けふは弥次喜多上演五週年記念会が午前十一時半から京橋明治座ビルディングの中央亭で開かれ、私も発企人の一人であるので、その支度をしてゐると、十時半頃に佐久間が来て、自分も同行するといふので、十一時頃から出る。

中央亭はなか／＼の盛会で、作者の木村錦花君を主賓として、来会者百五十名。十二時半から食卓につき、私が第一にテーブルスピーチを試み、つゞいて十余人のスピーチがあつた。二時ごろ散会。

帰路、佐久間と銀座の伊東屋へ立寄つて文房具を買ふ。日中はやはり暑いので、すぐに自動車に乗つて帰宅。三橋が来てゐた。

中央亭で木村君に逢つた時、弥次喜多の芝居に因んで私が所持の十返舎一九筆の画幅を贈ることを約束したので、小包み便で発送。

三橋は三時頃に去り、佐久間は五時半頃に去る。

森部のカブレは毛虫にカブレたのであるといふ。虫に螫されたのでなく、カブレることもあるのださうである。私の庭のやうに草木の茂つてゐるところでは注意しなければならぬ。

七時半ごろ入浴。八時ごろ岸井が来て、十月号の戯曲が不足であるから、三十枚ぐらゐの物をくれといふので、藤嶋君作の現代劇を渡してやる。森部病氣のために、今月の校正は中島がスけることになったといふ。岸井は九時頃まで話して去る。

読書。十時半就寝。残暑が又あと戻りしたやうである。

九日（土曜）晴（八十五度）

午前七時半起床。朝から暑い。

九時半頃に佐久間が来た。つゞいて岸井が来て、藤嶋君の戯曲でどうも面白くないから、他の物にかへて貰ひたいといふので、更に塩谷君の史劇「落武者」を渡してやる。

岸井が去ると、入れちがひに京都の森ほのほ君が来て、十一時半頃まで語る。森君は一昨日「帰」上京して、明日帰洛するといふ。

土岐善麿君から其著「蜂塚縁起」を送つて来たので、返書。静岡の山本君から郵書が来たので、返書。佐藤駒雄君からも郵書が来たので、返書。

午後、読書。一時間ほど眠る。

四時から水まき。六時半ごろ入浴。残暑があと戻りしたやうである。

読書。十時半就寝。

十日（日曜）晴（八十六度）

午前七時半起床。

十時頃に久保田米斎君来訪。来月の東京劇場で私の「村井長庵」を再演するに付、久保田君がその舞台装置を担任することになったが、同君はそれを名残りに劇界との關係を断ち、専ら作画に従事するといひ、十一時半頃まで話してゆく。「村井長庵」の初演は大正十年八月の歌舞伎座で、あしかけ十三年である。その当時に比べれば、久保田君も老いた。私も老いた。

午後、読書。けふも暑い。

四時頃から水まき。六時半ごろ入浴。

七時半頃に佐久間が来て、九時過る頃まで話して去る。十一時就寝。

十一日（月曜）晴（八十六度）

午前七時起床。

おえいは八時頃から森部同道で西大崎の津沢方へ新宅祝に出てゆく。

旧作「村井長庵」を訂正して、木村君に郵送。それと入れちがひに、木村君から一九画幅うけ取りの礼状が来た。森田から郵書が来て、月末には上京するといふ。難波幸子からも近日上京の通知が来た。

十一時頃におえい帰宅。津沢の新居、建物は古いが、

手広いといふ。

午後、読書。相変わらず暑い。

四時頃に佐久間が来て水まきを手伝ひ、六時頃に去る。

六時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

十二日（火曜）陰、雨（七十八度）

午前八時起床。今朝はやゝ涼しいので寝過した。

森部は早朝から研文社へ校正に出てゆく。額田から誌友の原稿を送つて来たので、返書。

午後一時頃に中村孝子が来て、一時間あまり話してゆく。つゞいて松竹の牧野原君が来て、〈時間の〉都合があるので「村井長庵」を少しく刈込んでくれといひ、三十分ほど話してゆく。

そのあひだに森部帰宅。読書。五時過る頃から雨。

六時半ごろ入浴。読書。暮れて単羽織をかさねる。

十時半就寝。夜半から雨やんで又蒸暑くなる。兎角に不順の気候である。

十三日（水曜）晴（八十一度）

午前七時半起床。晴れて暑くなる。

九時半頃に岸井が来た。つゞいて額田が来た。大阪の鳥江君が昨日上京、岸井はいよく大阪の松竹興行会社

へ雇ひ入れられることに内相談が決定したといふ。二人は十一時半頃まで話してゆく。

午後零時半頃に牧野原君が来て、「村井長庵」の脚本を置いて行つたので、すぐに刈込みにかゝる。

春陽堂の浅見君が来て、陸軍恤兵部編纂の日本文学全集に私の短編小説二編を採録したから、無印税で承諾してくれと云ひ、記念の巻蕈入れを届けてゆく。つゞいて慶応劇研究会の内田君と川合君が来て、十六日午後一時から慶応大講堂で松居松翁君追悼講演会を開くに付、私にも出演してくれといふ。私への課題は「作家としての松居君」といふのである。承諾。

四時頃から水まき。六時頃までに「村井長庵」の刈込みを終つて、木村君宛に発送。

七時ごろ入浴。八時頃から森部と中目黒を散歩。喫茶。九時過るころ帰宅。

読書。十時半就寝。

十四日（木曜）晴（八十度）

午前七時半起床。

おえいは八時頃から上松方へ出てゆく。森部は研文社へ出てゆく。

十時頃に島田弔両君来訪。書面の往復は格別、親しく顔を見合せるのは震災以来である。色々の昔話などあり

て十一時半頃に去る。

慶応講演のために、松居君の著作年表などを調査。午後二時頃におえい帰宅。

四時から水まき。五時頃に森部帰宅、けふで十月号全部の校正を終ったといふ。

六時半ごろ入浴。やがて佐久間が来た。明日は渋谷八幡の大祭、所々で囃子の音がきこえる。芸妓の手古舞も出るといふ。

九時過る頃に佐久間は去る。女中達は祭礼見物に出てゆく。

十一時就寝。夜半に雨の音。なんとなく暴れ模様で蒸暑く、午前一時頃から四時半頃まで眠られなかった。

十五日（金曜）雨（八十度）

午前七時起床。

渡辺梅彦君が来た。故霞亭氏の息である。画会を開くに就て上京、霞亭氏の旧知を歴訪してゐるといひ、三十分ほど話して去る。つゞいて山崎が来て会費をとゞけ、これも三十分ほど話してゆく。

南柯吟社の依頼で、故巖谷小波君の思ひ出話三枚をかく。題は「盗難の話」

午後から雨やんで陰る。森部は研文社へゆく。

午後二時頃から髪を刈りにゆく。けふは渋谷の祭礼当

日で、近所へ神輿をかついで来た。

林田君から郵書が来て、細君失明のために家事忙はしく、文芸家協会を辞任することになったといふ。気の毒なことである。取りあへず返書。

読書。六時半ごろ入浴。十時半就寝。

十六日（土曜）晴（八十度）

午前七時起床。

九時半頃に佐久間が来た。

けふは松居君の追悼講演会が慶応の大ホールで開かれるので、午後一時頃から支度して待つてゐると、一時半頃に慶応の歌舞伎研究会員二人が自動車で迎ひに来た。

慶応へ行き着くと、岡君の講演は已に終つて、河合武雄君が登壇してゐる所であつた。次に森律子、市川猿之助、それから私が登壇して「作家としての松居君」を四十分ほど講演。次に竹柴彦三、池田大伍、平田弘一の三君の講演あり。記念撮影などあつて四時四十分ごろ散会。五時半ごろ帰宅。

晚餐後、森部と道玄坂を散歩。例の夜店ばかりで別に見るものも無かつた。二幸の食堂で喫茶。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十七日（日曜）晴（八十度）

午前七時半起床。

けふから改造社の文学講座を起稿。

十時半頃に渡辺のあい子が来た。十一時半頃に中島が来た。岸井が大阪へ行くことになったので、「舞台」の編集は中島に頼むこととし、種々の打合せなどする。中島は午後一時頃に去り、あい子は一時半頃に去る。

入れ代つて、上松のおすゝが来た。慶応の学生数人が昨日の礼に来た。おすゝは姉とおえいと三人連れで道玄坂へ出てゆく。

四時過る頃に岸井が斎藤君と川名君同道で来て、川名君は自製の雛かづらを呉れたので、私の揮毫の短尺と色紙を贈る。三人は五時半頃まで話して去る。そのあひだにおえい帰宅。

夕方までに原稿五枚、来客が多かつた為に向抄取らなかつた。

六時半ごろ入浴。読書。八時頃に佐久間が来た。

十時就寝。

十八日（月曜）晴（七十八度）

午前七時起床。

森部は「舞台」の件で岸井方へ出てゆく。

けふも原稿をかきつゞける。午後二時頃に森部帰宅。

夕方までに原稿十三枚をかく。晚餐後、目黒川のほとりを散歩。ゆふぐれの空は秋の色になった。

七時ごろ入浴。読書。九時半頃に佐久間が来た。

十時半就寝。

十九日（火曜）陰（七十六度）

午前七時半起床。単羽織をかさねる。

額田の郷里から梨を送つて来たので、返書。

十時頃に佐久間が来た。つゞいて大野恵造君が来た。つゞいて岸井が来た。大野君先づ去り、岸井等は十一時半頃まで話してゆく。

〈新興キネマの森田から「相馬の金さん」を撮影したいと云つて来たので、断りの返書。〉

けふも原稿をかきつゞける。五時頃に「舞台」十月号の製本をとゞけて来たので、清水、池田、原田、林、高橋、東儀、津沢、渡辺の諸家へ発送。

六時半ごろ入浴。九時頃までに原稿十二枚をかく。佐

久間が再び来て、九時半頃に去る。

十時半就寝。夜半に雨の音。

二十日（水曜）雨（七十二度）

午前七時起床。細雨。けふは彼岸の入。秋涼いよく

加はる。単衣をぬいでセル地に着かへる。

原稿四枚をかく。あはせて三十四枚、題は「歌舞伎概

説」直ぐに改造社に郵送。額田から郵書が来て、「舞台」九月号所載の前田君作「瓦斯料請求」が大阪浪花座で上演することになったといふ。

細野多知子の戯曲「日曜日」を編集。三時頃に佐久間が来て、五時頃に去る。

森田から電報が来て、牧野の方はこちらで話をつけるから「相馬の金さん」の撮影を承諾してくれといふ。牧野に故障がなければ当方は承諾の返電を出して置く。

七時ごろ入浴。読書。暮れていよ／＼涼しくなる。十時半就寝。

二十一日（木曜）雨（七十度）

午前八時起床。細雨。

十時半頃に中野が来て、十二時頃まで話してゆく。額田に返書。

姉とおえいは午後から青山へ墓参にゆき、二時過るころ帰宅。

鳥君の戯曲「小学校教師」を編集。雨ふりつゞけて涼しく、セル地に単衣羽織をかさねる。

夕刊をみると、本日午後零時十五分、能登の七尾地方に強震があつたといふ。

六時半ごろ入浴。七時頃に佐久間が来て、九時頃に去

る。

読書。十時半就寝。

二十二日（金曜）晴（七十度）

午前七時半起床。朝から快晴。

「舞台」のアントラクトを書く。姉は紀尾井町の小林君方を訪問、午頃帰宅。

おえいは午後から森部と新宿の武蔵野館へ映画を観にゆく。

二時頃に額田夫婦が来て借金全部を返却、おえいに三越の商品券をくれる。郷里の遺産分配が決定した為である。夫婦は一時間あまり話してゆく。

四時頃におえい等帰宅。五時頃から森部同道で道玄坂を散歩。晚餐を喫して七時ごろ帰宅。

入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（土曜）晴（七十度）

午前七時半起床。秋季皇霊祭。

森部は麴町の吉岡医師方へおえいの薬を取りにゆく。そのついでに、元園町の浦岡君方へ葡萄一籠を持たせてやる。

九時頃に佐久間が来た。九時半頃に津沢の寿子が子供をつれて来た。寿子は谷中へ墓参にゆくとて、おえい同

道で出る。

十時半ごろに佐久間は去る。入れちがひに、森部帰宅。島君の「小学校教師」を編集し終る。十一時頃に植田の細君来訪、姉を相手に午後一時頃まで話して去る。

読書。三時頃におえい帰宅。谷中で渡辺のおしげと愛子に落ち合ひ、更に浅草へまはつて来たといふ。

四時頃に上松のおすゝが来て、世田谷の秋祭とて強飯をくれた。

六時半ごろ入浴。七時過る頃から森部と中目黒を散歩。上目黒一丁目の北野天神社でも廿五日が秋祭であるので、境内に掛家台などを作つてゐた。

八時頃に佐久間が来て、九時頃に去る。

読書。十時半就寝。

二十四日(日曜)晴(七十二度)

午前八時起床。

けふも快晴。森部がどこへか散歩しないかといふので、二子の多摩川へゆくことにして、佐久間にも電話をかけると、十時頃に来た。それから三人連れ立つて中目黒駅から乗車。

先づ等々力駅で下車、それから徒歩して等々力の滝を覗にゆく。やはり不動堂の境内で、周囲は頗る幽隧であるが、滝は案外に小さいものであつた。更に半里ほど徒

歩して多摩川の堤へ出ると、日曜だけにピクニックの人も多く、鮎釣りの人もなか／＼列んでゐた。

多摩川遊園地の食堂で午餐。二子橋を渡つて神奈川県の高津町へ出て、電車で三軒茶屋まで引返して、高井戸の電車に乗換へ、豪徳寺前で下車。井伊大老の墓などに参詣して、更に松陰神社に参詣。新市内とはいひながら、こゝらは未だ郊外の趣をとゞめて、至るところに芒尾花が秋風になびいてゐた。

松陰神社前から電車に乗つて、大坂上で下車。こゝで佐久間に別れて、四時半ごろ帰宅。きのふの祭日、けふの日曜、いづれも快晴であつたので、いづこにも人出が多かつたらしい。

神戸の前田君から其作「瓦斯料請求」が浪花座で上演されたといひ、併せて牛肉の味噌漬一樽を送つて来た。六時半ごろ入浴。今夜は町内の北野天神祭の宵宮で、わたしの家でも提灯をかける。囃子の音がきこえるので、坂を降りてゆくと、境内には屋台をしつらへ、神楽や獅子舞などを演じてゐた。更に中目黒の横町へ出ると、こゝの草原には例の東京音頭が賑かに踊つてゐた。旧郊外の秋らしい夜である。

八時ごろ帰宅。読書。十時半就寝。

二十五日（月曜）晴（七十二度）

午前七時半起床。

前田君に牛肉の礼状を発送。正岡君から暫く消息がないので、細君の病状を問ひ合せの郵書を送る。

読書。午後一時頃に鈴木余志子が来て、支那町の月餅をくれ、今夜のふたば会には欠席すると云ひ、二時頃まで話して去る。ついで佐久間が来て、三時頃に去る。ふたば例会で、六時頃に大村が先づ来た。ついで額田、岡田、中島、三橋、岸井、佐久間が来た。私の江戸講話があつて、例のごとく劇談、雑談、九時半ごろ散会。

それから入浴。十一時就寝。

三四日前から前歯が痛んでゐたが、時候の変り目のせみであると思つて、そのまゝに捨置いたところ、夜半から激痛、三時頃まで安眠でできなかった。

二十六日（火曜）晴（七十一度）

午前七時起床。

おえいは森部同道で、八時頃から額田方へ出てゆく。先日の貰ひ物の返礼である。十時過るころ帰宅。

中央公論社から十月号所載「浪人時代」の原稿料を送つて来たので、返書。塩谷君から郵書が来たので、返書。けふは思ひ切つて歯医師へ行くこととし、午後から支度をしてゐると、三橋が来て門口で帰る。

歯医師は近所にもあるが、やはり久しい馴染であるから、麴町山元町の小田切医師のもとへ行く。歯齦炎であるといふことで治療を受け、二時ごろ帰宅。含嗽などする。

少しく発熱、七度五分ぐらゐに上つたので、四時半頃から臥床、一時間ほど眠る。それから起きて晚餐、今夜は入浴せず、八時頃から再び臥床。九時頃に佐久間が来たといふ。

十時頃に醒めて眠られず、午前一時過る頃から安眠。

二十七日（水曜）晴（七十二度）

午前八時起床。植木屋が来て、庭の刈込みをする。

九時頃に佐久間が来た。歯痛は大に薄らいだが、口のまはり余ほど腫れた。

十時頃から小田切医師へゆく。けふはやゝ暑くなつた。十二時ごろ帰宅。慶応の学生が来て、講演会の写真をとける。

額田から昨日の礼状が来たので、返書。難波は上京して本郷森川町に落付くことになつたといふので、返書。読書。含嗽と冷罨法数回。頗るうるさい。昭和五年六月にも同じ歯齦炎に悩まされたことを思ひ出した。歯の悪いのは親ゆづりで致方がない。六時半ごろ入浴。夕から陰る。

読書。十時就寝。十一時〈頃〉から雨の音。

二十八日（木曜）晴（七十六度）

午前八時起床。雨やんで快晴。

けふも植木屋が来た。九時半頃に佐久間が来た。

額田から「舞台」八月号の成績を通知して来た。それによると、寺田君は腸出血で臥床中であるといふので、見舞状を送る。

九時四十分頃から小田切医師へゆく。歯齦の腫れもやゝ退いたやうである。十一時半ごろ帰宅。

佐久間の空地に萩が多いので、植木屋に指図して移植させる。

女中のおさきは今月かぎりで暇を取るといふ。一昨年の四月以来、あしかけ三年勤続の女である。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十九日（金曜）陰、晴（七十二度）

午前七時半起床。

十時頃から小田切医師へゆく。十二時ごろ帰宅。

及川彬君の歌劇「歌垣時雨」を編集し終る。午頃から佐久間が来て、四時頃に去る。

二時頃におさきはいよ／＼暇を取って出てゆく。おえいから慰労の金をやる。

額田から速達便が来て、これも昨日来歯痛のために、十一月号掲載の筈になつてゐる「加賀騒動」が第二幕までしか書けないといふ。それでは戯曲の原稿が少しく不足することになるので、森部に命じて、何か代りの原稿を取らせにやる。

七時ごろ入浴。八時頃に森部帰宅、誌友の原稿四編を受取つて来た。それと同時に、佐久間から電話がかゝつて、俳優学校第四回試演用の脚本を渥美君が書いたので、それを貰ふことにしてはどうかといふ。

読書。電法、含嗽、例の如くである。

十時半就寝。

三十日（土曜）晴（七十二度）

午前八時起床。

八時半頃に佐久間が来たので、渥美君の原稿を貰つて来るやうに頼む。

文芸春秋社の武内君から郵書が来たので、返書。「日の出」から原稿料を送つて来たので、返書。鈴木ふく子さんから転居の通知が来たので、返書。

けふは正午から東劇で「村井長庵」の舞台稽古にかゝるといふので、十時頃から小田切医師のもとへ行き、更に転じて東劇へ赴くと、岡君、久保田君も来てゐた。

十二時半頃から「村井長庵」第一幕の稽古にかゝる。

第三幕の終る頃に佐久間が来た、渥美君も来た。五時頃までに第四幕の稽古を終つて、五時半ごろ帰宅。やがてあとから佐久間も歸つて来た。

渥美君の原稿は謄写版で、何分わかり難いので、佐久間と森部に一幕づつ浄書して貰ふことにする。

七時半ごろ入浴。読書。佐久間と森部は十時半頃までに浄書を終る。あはせて六十三枚。

十一時就寝。

本月も殆ど纏まつた仕事をしない。へちま礼讃(日の出、三枚)歌舞伎概説(改造社文学講座、三十四枚)吉田君の独白をよみて(舞台、六枚)ほかに「舞台」の戯曲編集など。

(翻刻担当…脇坂健介)

昭和八年十月

一日（日曜）晴、陰（七十四度）

午前八時起床。

渥美君の戯曲「小さい江戸子」を編集し終る。けふは日曜日で小田切医師へ行かない。

中央公論社からシエークスピヤ全集第一回配本を寄贈して来たので、返書。額田から郵書が来たので、返書。前橋の藤嶋君からも郵書が来たので、返書。

午後一時頃に岸井と中島が来たので、中島に「舞台」の戯曲原稿六編を渡す。岸井が大阪へゆくに付、十一月号からは中島が編集することになったのである。二人は一時間ほど話してゆく。岸井に東劇初日の入場券をやる。読書。寺田君は青山のリヒト病院に入院したといふので、森部は六時過る頃から見舞に行つて、九時ごろ帰宅。寺田君頗る元氣であつたといふ。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二日（月曜）晴、雨（七十五度）

午前八時起床。

読書。感冒の気味で頭が重い。齒痛の上に感冒、イヤハヤ閉口である。十時頃に佐久間が来て、十一時半頃に去る。

午後一時頃から小田切医師へゆく。それから東劇の初日へゆくには少しく時刻が早いので、麴町の旧宅付近を散歩。そこらの様子も余り変らないやうであつた。こゝで中川君に行き逢つて、立談。

二時三十分頃に東劇へゆくと、やがて岸井が来た。つゞいて佐久間と鈴木余志子が来た。三時開演の筈が予定よりも十五分ほど早く開演。第一「ヴェニスの人」第二「二條城の清正」それが終つて、食堂で四人晚餐。第三「村井長庵」の第二幕を終つた時に喫茶。第三幕、第四幕を見物して、更に大切の「勢獅子」を中途まで見物。それから佐久間と場外に出ると、雨降りしきつてゐる。

日中は晴天、観客は大抵雨支度をしてゐないので、この雨にはみな難儀したらしい。私たちも困つたお仲間である。自動車に乗つて、十時四十分ごろ帰宅。佐久間は私の家から傘と下駄を借りて帰る。

入浴。十二時就寝。

三日（火曜）晴（七十四度）

午前八時起床。雨晴れて快晴。

けふは旧暦十五夜の前日に相当するもので、庭の芒と糸瓜を剪つて、紀尾井町の小林君方へ持参、森部も同道してゆく。

森部は一足先に小林君方を訪問、私は小田切医師〈方〉へ行つて例のごとく治療を受け、それから小林君〈方〉へ行く。夫婦ともに在宅で、一時間ほど雑談。

十一時半頃に紀尾井町を立出で、森部と道玄坂で昼餐、十二時四十分ごろ帰宅。

黒川君に「村井長庵」上演料の受領証を発送。寺田君に見舞状を送る。二時頃に佐久間が来た。

大村から京都の松茸を送つて来たので、返書。中島にも郵書を送る。

五時頃に新潮社の渡辺君が来て、同社でこのたび国民精神講座を発〈行〉するに付、私にも寄稿してくれといふ。承諾。渡辺君は三十分ほど話して去る。

姉とおえいは芒と松茸をたづさへて、上松方へゆく。七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

四日（水曜）晴（七十五度）

午前八時起床。

十時頃から小田切医師へゆく。十一時半ごろ帰宅すると、岸井が来てゐた。つゞいて森田が来た。森田は一昨日上京したといひ、新興キネマの「おさだの仇討」と「相馬の金さん」の原資料をくれた。

つゞいて大村が来て、昨夜帰京したといひ、大阪歌舞伎座の「堂島繁昌記」の初日は大入であつたなどと語る。

大村は先づ去り、私は森田と岸井同道で銀座へ赴き、例の富多葉で遅い昼飯を食ひながら雑談。

銀座で二人に別れて帰途につき、自動車で渋谷駅まで帰着、それからバスに乗込むと、恰も森部も乗合せてゐた。森部は寺田君の紹介で「舞台」の広告を取りに行つたといふ。

四時ごろ帰宅。今夜は旧暦の十五夜であるので、庭の芒を剪つて床に生ける。

読書。七時ごろ入浴。八時頃に佐久間が来たので、一緒に月を観る。去年の十五夜は雨に潰れたが、今夜は皓々たる明月である。満天の風露、満地の虫声、殊にこゝらは旧郊外であるので、良夜のおもむきが市中とは又変つて見られた。九時頃まで池のほとりを徘徊。但し一句も浮ばなかつた。十時頃に佐久間は去る。

十一時就寝。

五日（木曜）晴（七十五度）

午前八時起床。

十時頃から小田切医師へゆく。帰途、渋谷で昼餐。十二時廿分ごろ帰宅。やがて佐久間が来て、二時頃に去る。

読書。おえいは森部と共に三時頃から東劇見物に出てゆく。

五時頃に小林宗吉が来て、一昨日逗子に帰つたといひ、京都みやげの松茸をくれて、四十分ほど話して去る。

七時頃に岸井が来て、八時過る頃まで語る。

それから入浴。読書。十時五十分頃におえい等帰宅、東劇は大入であつたといふ。

十一時半就寝。

六日（金曜）陰、雨（七十四度）

午前八時起床。

九時半頃から小田切医師へゆく。小林に貰つた松茸を持参、十一時過るころ帰宅。

おえいは午後から大崎の津沢方へゆく。一時頃に岸井がバラ、ライラック、山吹のたぐひを自動車に積んで来た。大阪へゆくに付、自宅に残して行つても仕方がないから、私の庭に載えてくれといふのである。森部が、直ぐに載え込みにかゝる。私も庭に出て指図してゐると、一時半頃から細雨。

二時半頃に佐久間が来た。つゞいておえい帰宅。岸井は「四」〈三〉時頃に去り、佐久間は四時頃に去る。森部は築地小劇場を見物するとて、つゞいて出てゆく。七時過る頃までに岡本薫君の戯曲「だいやもんど」を編集し終る。それから入浴。暮れて雨降りしきる。

読書。九時半頃に森部帰宅。

十時半就寝。

七日（土曜）雨（七十六度）

午前八時起床。風まじりの雨。

天気が悪いので、けふは小田切医師へ行かない。九時半頃に佐久間が来て、十時半頃に去る。

大村と額田から郵書が来たので、返書。岡田から電話がかゝつて、来月の舞台誌友会には長谷川時雨女史の講演を頼むことにしたといふ。時事新報の堀君が来て、川村花菱君に紹介の名刺を貰つてゆく。

森部は午後から研文社へ校正に出てゆく。三橋から電話がかゝつて、父は昨夕帰朝したといふので、取りあへず祝状を発送。

小林の戯曲「恋のゴー・ストツプ」を編集。

七時ごろ入浴。森部は研文社から舞台の七日会に廻つて、九時半ごろ帰宅。雨はやまない。

読書。十時半就寝。

八日（日曜）雨（七十六度）

午前八時起床。

小林の「恋のゴー・ストツプ」を編集し終り、更に上原勲子の舞踊劇「悲恋」を編集。

森部は午後から研文社へ出てゆく。朝から細雨、折角

の日曜もさんぐである。

岩田与司一君から郵書が来たので、返書。更に森川武一君の戯曲「まぼろし日記」を編集。

五時半頃に佐久間が来て、けふは祖母三回忌の仏事を谷中の寺で営むだとして、弁松の折詰をくれた。七時頃に森部帰宅。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

九日（月曜）雨（七十二度）

午前八時起床。けふは英一の祥月命日、仏前に香花を供へて焼香。

奈良の成等君から郵書が来たので、返書。

十一時半頃に佐久間が来た。午後から雨が止んだので、姉とおえいは青山墓地に参詣するといひ、佐久間は子母沢寛君に誌友会の講演をたのみに行くといひ、森部は研文社へゆくと云ひ、一同打連れて、十二時半頃から出てゆく。

目黒区役所員が来て、日本赤十字社の社員になつてくれといふ。承諾。終身会員（廿五円）の申込をする。森川君の「まぼろし日記」を編集し終る。二時半ごろにおえい等帰宅。

読書。三時頃から中目黒へ髪刈にゆく。そのついでに

散歩。

七時頃に森部と佐久間と連れ立って帰宅。七時半ごろ入浴。佐久間は九時頃まで話して去る。

十時半就寝。

十日（火曜）晴（七十四度）

午前八時起床。

時事新報の堀君が来て、川村君紹介の礼をいふ。十時頃から小田切医師へゆく。私の歯も大抵快癒したので、今後は隔日ぐらゐに來いとのことであつた。

けふは快晴。帰途、渋谷駅で下車、道玄坂を散歩して帰る。

二時過る頃に三橋が来て、四時頃まで話して去る。額田から郵書が来たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十一日（水曜）晴（七十度）

午前八時起床。

おえいは麴町へゆく。森部は研文社へ出てゆく。

九時半頃に三瓶安之助君来訪。福島石井の叔父で、石井の父が忌日の配り物を持参、父没後の話など色々あり、一時間あまり話してゆく。つゞいて佐久間が来て、子母沢君は誌友会の講演を承知してくれたといひ、十二

時頃に去る。

十二時半頃におえい帰宅、元園町の浦岡君をも尋ねて来たといふ。けふも快晴。

大阪の小川君から松茸、山梨の河野君から栗を送つて来たので、いづれも礼状を発送。子母沢君にも礼状を出して置く。

夕刻、近所を散歩。旧郊外の秋はさすがに静である。私の庭のコスモスも一面に咲き出し、芒の穂も伸びて来た。

読書。七時半ごろ入浴。八時頃に森部帰宅。中島、岸井と三人連れで、研文社から浅草へ廻つて来たといふ。十時半就寝。夜半に雨の音。

十二日（木曜）雨（六十八度）

午前八時起床。

けふは会式であるといふに、この雨ではさんぐである。

けふから戯曲を起稿。「舞台」新年号の原稿である。二時半頃に岸井が村「野」〈井〉富男君同道で来た。鼎会の懸賞脚本に「近松とおさん」を提出して当選した人で、大阪から上京したのである。村「野」〈井〉君は大森痴雪君の紹介状を持参、一時間ほど話して去る。

山形の本間君と中村孝子から郵書が来たので、返書。

佐久間が負傷したといふので、六時頃から森部が見舞にゆくと、昨夕森部等が引揚げた後に研文社へゆき、事務所で雑談中に卒倒したのであるといふ。眼鏡を毀し、顔面に負傷したが、さしたることも無かつたさうである。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十三日（金曜）陰、雨（六十八度）

午前七時起床。

おえいは上松方へ出てゆく。私も九時半頃から小田切医師へゆく。帰途、渋谷で昼餐、十二時過るころ帰宅。それと入れちがひに、森部は研文社へ出てゆく。

額田と神戸の前田君から郵書が来たので、返書。子母沢君からも返書が来た。

戯曲をかきつゞける。一時半頃から雨。二時頃におえい帰宅。

大谷君から京都の松茸を送つて来た。

七過るころ入浴。雨ふりしきる。村井君の戯曲「流罪になつた義士の子」を編集。

佐久間が来て、わたしの写真十枚をとゞける。先ごろ岡君から送つて来た演芸世界所載の写真を複写したのである。明治三十四年六月撮影、私が三十歳当時の写真、今更懐旧の感も湧く。佐久間は十時頃まで話して去る。やがて森部帰宅。

十時半就寝。

十四日(土曜)晴(七十度)

午前八時起床。

森部は十二時頃から研文社へ出てゆく。その際、麴町の大野君と小川君方へ松茸を持たせてやる。

戯曲をかく。感冒の気味で、少しく頭が重い。

夕から村井君の戯曲を編集。六時頃に森部帰宅。十一月号は全部校正を終つたといふ。

七時半ごろ入浴。八時半頃に戯曲の編集を終る。

それから読書。十時半就寝。

十一時半頃から醒めて眠られず、夜半に起きて葡萄酒をのみ、四時過る頃から漸く眠る。

十五日(日曜)晴、陰(七十一度)

午前九時半起床。

けふは私の誕生日であるので、十一時頃から額田、中島、岸井、佐久間が来て、一同昼餐。午後二時半頃まで話して去る。森部と女中二人にも祝儀をやる。

私の還暦祝賀会が東京会館で開かれたのは、昨年の今夜であつた。今更ではないが、月日の早いには驚かされる。

午後から陰る。けふも頭が重い。脇屋君の戯曲「お母

さん」を編集。中村孝子から返書が来た。

大阪の山上から松茸を送つて来たので、森部に命じて麴町の吉岡医師方へ持たせてやる。

七時半頃入浴。読書。

九時半就寝。夜半大雨。今夜は安眠。

十六日(月曜)雨、陰(六十八度)

午前八時起床。あかつきに大雨、やがて止んで陰る。

十時頃におさだが子供をつれて来て、一時間あまり話して去る。〈その〉あひだに、佐久間も来た。

森部は大崎の津沢方へ松茸をとびけにゆく。午後から又をり／＼に雨。

戯曲をかきつゞけたが、一向に捗取らない。更に脇屋君の戯曲を編集し終る。

読書。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。今夜も夜半から醒めて眠られなかつた。

十七日(火曜)晴(七十二度)

午前八時起床。庭の菊が咲き出した。

大阪朝日新聞の同情週間係から依頼の色紙六枚に揮毫、更に北陸日日新聞から依頼の色紙一枚に揮毫。

けふは神嘗祭。朝から快晴であるので、午後から森部と散歩に出ようとする処へ佐久間が来たので、三人同道

で出る。

中目黒駅から電車に乗つて、碑文谷に下車。こゝらへは滅多に來たことも無いのであるが、案外に土地も開けて新しい住宅が続々建築されつゝある。碑文谷弁天の池へ行つてみると、こゝは東京市の公園になる筈で、職人や人夫が工事に取りかゝつてゐた。

歸路は徒歩で祐天寺に出で、更に正覚寺に參詣すると、こゝの鬼子母神は明日会式でその準備をしてゐた。落葉の下には鳩の群が遊んでゐる。いづこも同じ寺内の風景である。

中目黒で喫茶。三時ごろ帰宅。天氣が好いので、森部と庭に出て草花を栽えかへる。留守中に津沢の寿子が愛子同道で來たといふ。

読書。七時半入浴。やがて佐久間が再び來て、九時頃に去る。

十時就寢。

十八日（水曜）晴、陰（七十度）

午前八時起床。

早朝に佐久間（の女中）が來て、佐久間の待遇がよくないと訴へる。要するに、双方が悪いらしい。やがて佐久間が來たので、「佐久間」おえいから注意をあたへて置く。

九時半頃から小田切医師にゆく。十一時半ごろ帰宅。所得税六十五円八十四錢を目黒区役所に納める。

埼玉の江口福來君から郵書が來たので、返書。小田切医師へ行つた留守中に、中村孝子も來たといふ。

けふは正覚寺（の会式）であるので、午後から森部と行つてみると、境内は勿論、その付近にも露店商人が軒をならべて、想像以上の賑ひであつた。二時過るころ帰宅。

読書。五時頃から岸井が來て、七時頃まで話して去る。そのあひだに、姉とおえいは女中等をつれて、正覚寺の会式にゆき、七時半ごろ帰宅。

八時ごろ入浴。十時半就寢。夜半まで会式の太鼓が聞えた。

十九日（木曜）雨（七十度）

午前八時起床。

十時頃に額田の細君が栗めしを持參、十一時半頃まで話して去る。

戯曲をかきつゞける。秋雨瀟々、やゝ落付いた気分になる。

寺田君から十七日退院の通知が來たので、返書。

夕から読書。七時半ごろ入浴。

十時半就寢。夜半大雨。

二十日（金曜）雨（七十度）

午前八時起床。

十時頃に佐久間が亀屋原君の戯曲を持参。

戯曲をかきつけける。終日雨やまず、をり／＼に豪雨。

夕刊をみると、市内にも出水の場所がある。

七時半ごろへ入浴。読書。研文社から「舞台」「九」

「十一」月号をといて来た。

十時半ごろ就寝。雨やんで風が出た。

二十一日（土曜）晴、雨（七十二度）

午前八時起床。庭のコスモスが倒れたくらゐで、他に被害はなかった。天気快晴。

十時頃から小田切医師へゆく。帰途、渋谷で昼餐。十

二時半ごろ帰宅すると、佐久間が来てゐた。佐久間は一時過る頃に去る。

「舞台」十一号を池田、原田、林、清水、高橋、東儀、難波、津沢、渡辺の諸家に郵送。

小田原の飯野君から箱根登山の電車券を送つて来たので、返書。恩田視代子から其長女幸代の遺稿「遺る香」を送つて来たので、返書。井上良平君から転居の通知が来たので、返書。

おえいは姉同道で道玄坂へ買物にゆく。森部は額田方に勝間田会があるといふので、四時頃から出てゆく。や

がて驟雨。おえい等は雨に降られて帰る。

亀屋原君の戯曲「蹇新兵衛」を編集。

七時ごろ入浴。読書。八時頃に佐久間が再び来た。

雨やんで、星が出た。十時頃に森部帰宅。

十時半就寝。

二十二日（日曜）晴（七十度）

午前八時起床。

高橋から「舞台」の礼状が来たが、それは代筆で、高橋は過日来病臥中であるといふので、取りあへず見舞状を発送。

十時半頃に岸井が来て、鳥江君が明廿三日出京、同道して一先づ大阪へ赴く筈であるといひ、一時間ほど話して去る。

午後、森部と目黒川の上流を散歩、駒沢練兵場のあたりまで行つて、一時半ごろ帰宅。

亀屋原君の戯曲を編集し終つて、読書。

七時半ごろ入浴。十時半就寝。

二十三日（月曜）晴（七十三度）

午前八時起床。

小田切医師へゆく。十一時半頃帰宅。留守中に難波が来て菓子をくれ、又出直して来るとて立帰つたさうであ

る。

晴れてはゐるが風強く、とき／＼に陰る。

十二時頃に難波が来て、一時間ほど話して去る。難波は上京して本郷森川町に一戸をかまへ、こゝに落付くことになつたといふ。つゞいて佐久間が来た。

戯曲をかきつゞける。佐久間は夕刻に去る。

七時ごろ入浴。岸井から電話がかゝつて、今夜七時三十分発列車で鳥江君と共に下阪するといふ。

読書。十時就寝。

二十四日（火曜）晴（七十二度）

午前七時起床。快晴。

十時頃からおいと森部同道で銀座へ買物にゆく。先づ三越で岡君に贈るべき鯉節と高田君に贈るべき缶詰類の発送をたのみ、更に松坂屋へ廻つて雑品数点を買ひ、こゝの屋上で昼餐。午後一時頃帰宅。

南柯吟社から頼まれた短尺十枚に揮毫。岡君と高田君に郵書を発送して置く。

読書。六時頃に佐久間が来た。森部は友人をたづねるとして、六時半頃から出てゆく。松居君と石角君から郵書が来た。

七時半ごろ入浴。佐久間は九時頃に去る。森部は九時半ごろ帰宅。

十時半就寝。

二十五日（水曜）晴（七十度）

午前七時半起床。

十時頃から小田切医師へゆく。私の歯は慢性になつてゐるの中々癒らないさうである。十一時半ごろ帰宅。

佐久間が来て、森部と共に誌友会の通知状を発送。

戯曲をかきつゞけたが、一向に捗取らない。南柯吟社と大阪朝日新聞から短尺色紙の礼状が来た。

二時頃に麹町一丁目の小川の細君が来て、菓子をくれた。つゞいて市川左団次の使が来て、転居祝をくれた。

ふたば会例会で、六時頃から大村が来た。つゞいて石井が来た。石井は二三日滞京するとの事で、飯坂みやげの懸額と菓子をくれた。つゞいて岡田、中島、鈴木、額田、山崎が来た。佐久間をあはせて八人。例に依て私の江戸講和、それから雑談、劇談。九時五十分ごろ散会。それから入浴。十二時就寝。暮れてやゝ寒くなる。

二十六日（木曜）晴、雨（六十八度）

午前八時起床。朝は六十度。新聞をみると、日光の二荒山では一尺余の降雪があつたといふ。

額田の戯曲「加賀騒動秘記」を編集し終る。これで「舞台」十二月号の戯曲は纏まる。朝から佐久間が来た。

おえいは午後から麴町の大野君と小林君方を訪問。
海野と上松の武雄から時候見舞の郵書が来たので、返書。

三時過る頃に驟雨、忽ち止む。久保田米斎君が来て、来月五日正午から清水谷公園の皆香園で園遊会を開くといふ。久保田君の劇界引退、画会発会、養子披露を兼ねて、開会するのである。一時間あまり話して去る。そのあひだに、おえい帰宅。

田郷君の戯曲「鶏」を編集。五時頃から再び驟雨、雷鳴。

七時ごろ入浴。雷は止んだが、雨は止まない。
読書。十時就寝。雨やんで星が出た。

二十七日（金曜）晴（六十八度）

午前八時起床。

十時頃から小田切医師へゆく。十一時半帰宅。

京都の金谷文寿といふ人から其著「勝敗陣」を送つて来たので、返書。津村君から英訳「その夜」小寺君から其著「をどりの型」を送つて来たので、いづれも返書。

豊田君作「国芳の出世」が来月の東劇に上演されるといふので、よろこびの郵書を送る。岡君から先日のお礼状が来た。

午頃に佐久間が来て、三時頃に去る。大阪の岸井から廿六日付の郵書が来たが、大阪の件は余り思はしくないらしい。

女中のおせんが暇を取るようになったので、麴町の雇人請宿から代りの女中を連れて来た。

下三省三君の戯曲「垣を越えて」を編集し終る。

七時半ごろ入浴。読書。
十時半就寝。

二十八日（土曜）晴（六十八度）

午前七時半起床。朝は五十八度、俄に寒くなる。

戯曲をかきつゞける。十時半頃に佐久間が来て、昨夜の俳優学校試演会は大入であつたといふ。

十一時半頃に石井が来て、今夜帰郷するといひ、二時過る頃まで話して去る。

三時頃に斎藤君と川名君同道で来た。例のひな鬘の内容見本が出来したといひ、四時半頃まで話して去る。

夕刊をみると、今夜は郊外に初霜を見たといふ。但し目黒辺は霜らしいものも見なかつたのである。

石井の戯曲「賭けられた女」を編集。

七時半ごろ入浴。読書。
十時半就寝。

二十九日（日曜）晴、雨（六十八度）

午前八時起床。快晴。

戯曲をかきつゞける。天気が好いので、午後一時頃から森部と道玄坂へ散歩に出ようとする処へ、恰も佐久間が来たので、連れ立つてゆく。

道玄坂の家具屋で応接間用の火鉢をかひ、自宅へとゞけて呉れるやうに頼む。それから雑品二三点をかひ、栄屋百貨店で喫茶。こゝで佐久間に別れて三時頃帰宅すると、恰も三橋が来た。

留守中に俵木が来て、浦岡君の使として塩鱈を沢山とゞけて呉れた。三橋は四時半頃まで話して去る。

新しい女中の叔母が来て、奉公を頼むといふ。富山県の者で、参納おすみ、廿歳。

木村伸夫君の戯曲「生きる道」を編集。久保田から電話がかゝつて、来月五日の園遊会は都合によつて十二日に延期したといふ。

日暮れて雨。七時半ごろ入浴。

おせんは明日いよ／＼暇を取つて立去ることになつたので、おえいから銭別の金をやる。去年の六月から約一年半勤めたのである。

読書。十時半就寝。雨の音が強くきこえる。

三十日（月曜）雨（六十五度）

午前七時起床。

おせんは九時頃に暇乞ひして出てゆく。

「満洲の犬」といふ随筆六枚をかいて、神田三崎町の現代文化編集部へ郵送。黒幕座で「室町御所」の朗読をしたいと云つて来たので、承諾の返書。

関直彦氏喜寿祝賀会を来月二日上野精養軒で開くといふ通知があつたが、齒痛に付き欠席の返書。

午後佐久間が来て、四時頃に去る。

過日來起稿中の戯曲は何分意に満たない点があるので、更に他の題材を選むこととし、四枚ほど書いてみる。雨が暗いので、点灯して執筆。

七時半ごろ入浴。木村君の戯曲「生きる道」を編集し終る。

十時半就寝。

三十一日（火曜）晴（六十五度）

午前七時半起床。

十時頃から小田切医師へゆく。途中の電車で故障あり、医師方でも他の患者を待たされたので、意外に時間を費して、午後一時ごろ帰宅。

やがて中島が来て、「舞台」十二月号の戯曲原稿六編を受取り、二時過ぎ頃まで話して去る。

棚のへちまが熟したので、森部が全部取つてしまった。

戯曲をかきつけける。一二三君から郵書が来たので、返書。

七時半ごろ入浴。おえいは感冒の気味で早く寝る。

八時過る頃に三橋が来て、昭和座の脚本を書いたといふので、即座に一読。三橋は九時ごろに去る。

今夜は旧暦の十三夜、庭の芒を照らす月が明るい。十時半就寝。

本月は歯痛その他のために碌な仕事もしない。戯曲（四十枚ほど書いて中止）満洲の犬（六枚、現代文化）ほかに「舞台」原稿の編集など。

（翻刻担当…赤井紀美）

昭和八年十一月

読書。十時半就寝。

一日（水曜）陰、雨（六十八度）

午前八時起床。

戯曲をかきつゞける。陰晴定まらず、けふも薄寒い。午後佐久間が来て、三時頃に去る。

五時過る頃に岸井から電報が来て、今夜の汽車で帰京するといふ。

七時半ごろ入浴。やがて雨の音。

読書。十時就寝。雨の音いよ／＼強くきこえる。

二日（木曜）晴（七十度）

午前八時起床。快晴。

おえいは九時過る頃から大崎の津沢方へゆく。

十時半頃に岸井が来て、大阪松竹入社の件はいよ／＼決定、十日頃までに東京を引払つて下阪する筈であるといひ、十二時頃まで話して去る。

それから小田切医師へゆく。明治神宮祭で、青山辺は賑はつてゐた。午後二時頃に帰宅すると、恰もおえいも帰つてゐた。

二時半頃に大村が来て、ダリアと菓子をくれ、三十分あまり話してゆく。けふは晴れて暖い。

戯曲をかきつゞける。七時半ごろ入浴。

三日（金曜）晴（六十八度）

午前八時起床。今朝は風が寒い。明治節。

十時頃に佐久間が来て、森部同道で明治神宮祭の野球を観にゆく。

おせんの実家から礼状が来たので、返書。秋元君から転居の通知が来たので、返書。

おえいも姉同道で明治神宮参拝に出てゆく。

朝から戯曲をかきつゞける。二時半頃に新青年の横溝君が来て、新年号に掲載するのであるから何か変つた姿の写真を貸してくれといふ。そんな写真は無いので、断る。横溝君は四十分ほど話して去る。つゞいておえい等帰宅。森部も帰宅。

改造社から文芸講座の校正刷を送つて来たので、十九ページ校了、返送。六時頃に佐久間が来た。

七時半ごろ入浴。おきみとおすみも宵から明治神宮に参拝、九時頃に帰宅。

読書。十時半就寝。

四日（土曜）晴（七十度）

午前八時起床。晴れて暖い。

おえい、森部と三人づれで銀座へ買物に出ようとする

処へ、恰も佐久間が来たので、これも同道して十時半頃から出る。

銀座の三越で市川左団次と麴町の浦岡君方へ贈るべき品々の配達をたのみ、更に西洋室のカアテンその他雑品をかひ、銀座で四人昼餐。おえいと森部はすぐに帰宅。私は佐久間に別れて麴町に向ひ、小田切医師の治療を受けて、二時二十分ごろ帰宅。留守中に三十間堀の富多葉から鶏肉をとめて来たといふ。

読書。七時半ごろ入浴。やがて佐久間が来た。
十時半就寝。

五日（日曜）晴（六十八度）

午前八時起床。快晴。

十時頃に上松君が来て、十一時半頃に去る。私の家に不用の屏風があるので、上松君が帰るときに持たせてやる。

戯曲をかきつづける。午後一時半頃に三橋が吉田武三君同道で来て、三時頃まで話して去る。

四時半頃に原静雄君の紹介で長井勇君が来て、三十分ほど話して去る。保険の勧誘であるが、断つた。

読書。七時半ごろ入浴。佐久間が来た。
十時半就寝。夜半に雨の音。

六日（月曜）雨、陰（六十三度）

午前八時起床。

午頃までに戯曲をかき終る。四十四枚、題は「鎌」といふ。最初から読みかへして訂正。

午後一時半頃に岸井が来た。岸井はいよ／＼十日の夜行列車で下阪するといふ。つゞいて佐久間が来た。額田も来て魴鯽をくれた。

舞台社同人は来る八日の午後六時から銀座グリルで岸井の送別会を開くことに決定。岸井は三時頃に立去る。おえいから岸井に餞別をやる。

額田と佐久間は四時頃に去る。雨やんで陰る。戯曲を訂正、なか／＼面倒である。森部は成。

七時半ごろ入浴。読書。十時半ごろ就寝。

七日（火曜）陰（五十八度）

午前八時起床。早朝から経師屋二人が来て、障子の貼り替へにかゝる。陰つて寒い。

九時半頃から小田切医師へゆく。往来の人はみな冬支度である。帰途、渋谷で昼餐、十二時頃帰宅。佐久間が来てゐた。

午後一時頃に大村が来て、戯曲の筋書について相談あり、四十分ほど話してゆく。三時頃に岸井が母同道で来て、内祝の強飯をくれ、三十分ほど話して去る。四時頃

から中目黒へ髪刈りにゆく。

戯曲を訂正。七時半ごろ入浴。それから読書。

十時半就寝。

八日（水曜）晴（六十二度）

午前七時半起床。

大阪の村井富男君から郵書が来たので、返書。

午後一時頃までに戯曲を訂正し終る。森部は午頃から研文社へ校正に出てゆく。一時半頃に佐久間が劇評を持参、二時頃に去る。

読書。四時頃に佐久間が再び来たので、同道して出る。今夜は岸井の送別会である。

時刻がまだ早いので、佐久間と銀座を散歩。教文館へ立寄つて、新着の洋書をかひ、更に散歩をつづけてゐると、恰も中島と森部に逢つたので、四人同行して喫茶店で休憩。そこを出ると又もや中村孝子に逢ひ、五人連れになつて散歩。伊東屋で文房具などを買ひ、六時頃にグリラ銀座に行くと、額田等五六人がもう集まつてゐた。来会者は岸井のほか、舞台社同人その他十六人。六時半頃から晚餐を開き、八時四十分ごろ散会。

佐久間、森部、大野恵造君と四人連れで渋谷まで帰着。こゝで大野君に別れて、道玄坂を散歩。十時十分ごろ帰宅。留守中に鈴木余志子が今夜欠席の断りに来たといふ。

入浴。十一時廿分就寝。

九日（木曜）雨（六十度）

午前八時半起床。

土田電機商会から応接室の電気暖炉を持参、直ぐに取付けてゆく。

関直彦氏から祝賀会記念の揮毫、及び其著「七十七年の回顧」を送つて来たので、返書。おすみの兄から郵書が来たので、返書。

森部は研文社へ校正に出てゆく。

読書。雨が寒い。六時頃に佐久間が川村君の戯曲「愛児肖像」を持参したので、直ぐに編集にかゝる。同時に渡辺の愛子が来て、博は都下の工場研究のために、去七日上京、十二日に私の家へ来るといふ。六時半頃に愛子は去り、つゞいて佐久間も去る。

七時半ごろ入浴。読書。八時頃に森部帰宅。十時半就寝。

十日（金曜）晴（六十三度）

午前八時半起床。

姉とおえいは青山へ墓参に出てゆく。

十時過る頃から小田切医師へゆく。けふは晴れて暖い。十一時半ごろ帰宅。

森部は午後から研文社へ出てゆく。

一時半頃に佐久間が来た。つゞいて寺田君が亀屋原君同道で来訪。つゞいて岸井が来た。寺田君と亀屋原（君）は三時頃に去り、岸井と佐久間は四時頃に去る。そのあひだにおえい等帰宅。

読書。岸井は午後九時廿五分発で下阪するに付、八時頃から東京駅へ出てゆく。途中から雨が降り出して来た。岸井の見送人は案外に多く、家族、嫩会、友人等をあはせて四五十人、予定のごとくに出発。かうして出て行つた以上、当分は辛抱してくれなければ困ると思ふ。

佐久間、森部と同車して十時ごろ帰宅。留守中に三橋が来て、自宅の庭の柿をくれたといふ。

入浴。十一時就寝。雨はやまない。

十一日（土曜）雨（六十度）

午前八時起床。

戯曲「鎌」を再び訂正。

読書。終日来客無し。

七時半ごろ入浴。感冒の気味で服薬。

十時半就寝。

十二日（日曜）晴（六十五度）

午前八時起床。快晴。朝香宮妃殿下御送葬。

九時過る頃に渡辺博が愛子同道で来訪。博は社用で七日上京、十六日頃に旭川へ帰るといひ、十時頃からおえいと三人連れで銀座へ出てゆく。佐久間が来て、午後一時頃に去る。

けふは久保田君の園遊会が清水谷公園の皆香園で開かれるので、私も一時頃から出てゆく。三時頃から久保田君の挨拶、山崎紫紅君と私が来賓を代表して祝辞を述べ、それで式を終つて、園遊会に移ることになつたので、私はこゝを辞して、日比谷の三信ビルへ向ふ。山崎君も同行。

舞台社の誌友会は午後三時から開会、私たちの到着したのは四時、来会者はもう相当に集まつてゐた。直ぐに講演に移つて、佐久間が開会の辞を述べ、子母沢寛、長谷川時雨、山崎紫紅、森ほのほ、川村花菱の諸君の講演あり、私は子母沢君の次に登壇して「某青年に答ふるの書」といふ講演をこゝろみた。

午後七時から食卓につき、八時半ごろ散会。けふは朝から快晴であつたので、野外遠足等の人が多く、来会者は多くないかと危ぶんでゐた処、案外に多数の来会を見て、総計八十四人。

森部と九時頃にこゝを出て、帰途道玄坂で喫茶、十時過るころ帰宅。留守中に上松のおすゞが来たといふ。

入浴。十一時就寝。

十三日（月曜）晴（六十三度）

午前八時起床。

十時頃から小田切医師へゆく。帰途、渋谷で昼餐。

十二時半ごろ帰宅。佐久間が来てゐた。佐久間はこれから額田方へ行くとして、一時半頃に去る。

やがて前橋の藤嶋君が老母同道で来訪、老母は当年還暦に相当するので、色紙に何か揮毫してくれといひ、一時間ほど話してゆく。

岸井から大阪着の郵書が来たので、返書。額田にも郵書を発送。感冒のためか、頭が重い。

読書。七時半ごろ入浴。八時頃に森部帰宅、十二月号の校正を全部終つたといふ。

九時半就寝。夜半発汗。

十四日（火曜）晴（六十一度）

午前八時起床。

十時頃に佐久間が来て、十一時過る頃まで話して去る。

感冒のために、頭が重く、咳が出る、頗る不愉快である。過日来、感冒の気味であつたにも拘らず、押して外出してゐた為に、少しくコゾラせたらしい。大村と辻山春子から郵書が来たので、返書。

藤嶋君に頼まれた色紙一枚、東京朝日新聞同情週刊の色紙三枚、吉田君に頼まれた色紙と短尺に揮毫。

読書。今夜は入浴を休む。

服薬。九時頃就寝。

十五日（水曜）晴、陰（六十一度）

午前九時起床。咳はやまない。

十時頃に山崎が来て嫩会の会費をとげ、門口で帰る。十時半頃に久保田君が来て園遊会の挨拶を述べ、漆器「を」への巻簾入れをくれ、一時間あまり話してゆく。

つゞいて佐久間が来た。

渥美君から演芸画報新年号の原稿をたのんで来たので、承諾の返書。森部は午頃から研文社へ出てゆく。

けふはおえいが渡辺の博と愛子を歌舞伎座見物に連れてゆく筈であるので、おえいは午後一時頃からその支度をしてゐる処へ、小林宗吉の細君が魚と菓子を持参、いよ／＼逗子の家を片付けて京都へ移住するといふ。

つゞいて堀川肇子が菓子を持参、二人は二時過る頃に去る。そのあひだにおえいは歌舞伎座へ出てゆく。

気分が悪いので、庭を散歩。櫨、紅葉、銀杏、みな取り／＼に晩秋の色をみせて、さながら絵のやうである。六時頃に森部帰宅。小田原の飯野君が来て、梅さといふ菓子をくれ、自作原稿を持参、門口で帰る。

二の酉であるので、森部は下目黒の大鳥神社にゆき、小さい熊手を買つて九時ごろ帰宅。下目黒の酉の市は古

来有名であるが、近年あまり繁昌しないといふ。

今夜も入浴を休む。読書。十時就寝。

十一時頃におえい帰宅。かぶき座は満員であつたといふ。

十六日（木曜）雨、陰（六十二度）

午前九時起床。

咳が止まらないので、吸入を試みる。午頃から雨やむ。

午後一時頃に渡辺博が来て、昨夜の礼をいひ、四時半頃まで話して去る。博は明日午後出発、旭川へ帰るといふので、おえいから饞別をやる。

そのあひだに、松竹の黒川君から電話がかゝつて、二月の明治座に「亜米利加の使」を上演したいといふ。早川雪洲と水谷八重子の一座である。承諾。

夕刻から頭が痛む。再び吸入。佐久間が来た。

今夜も入浴せず、九時頃から就寝。

十七日（金曜）晴（六十三度）

午前八時起床。吸入。

黒川君から再び電話がかゝつて、「亜米利加の使」の舞台監督は巖谷三一君に頼むことにしたといふ。承諾。

川原小枝子が病中であると聞いたので、見舞状を発送。

寺田君から自作の戯曲を送つて来たので、返書。木村修

吉郎君の戯曲に批評を添へて返送。京都の森田から郵書が来たので、返書。

午後三時頃に小林蹴月君来訪、内裏に依頼して置いた松岡映丘君画幅の表装が出来たとて届けてくれ、一時間余り話して去る。小林君は別に氷豆腐をくれた。

飯野君の戯曲に批評を添へて返送。更に寺田君の戯曲をよむ。

七時ごろ再び吸入。今夜も入浴を休む。

十時就寝。

十八日（土曜）晴、陰（六十一度）

午前八時起床。吸入。

畳屋が来て座敷の畳がへに取りかゝつたので、茶の間に移つて執筆。

大阪の「道頓堀」から京都顔見世興行の「修禪寺物語」について何か書けと云つて来たので、「修禪寺物語雑感」五枚をかく。恰もそれを書「き終つた」へいてゐる時に、黒川君から電話がかゝつて、更に「番町皿屋敷」に変更したと云つて来たので、書きかけた原稿は無駄になつてしまつた。

寺田君の戯曲に長文の批評を添へて返送。花田房子から郵書が来たので、返書。

七時頃吸入。今夜も入浴を休む。今度の感冒はなか

く癒らないので困る。

森部は邦楽座の映画を観に行つて、九時半ごろ帰宅。
十時半就寝。夜半大雨。

十九日（日曜）晴（六十三度）

午前八時起床。吸入。

けふも畳屋二人来た。「舞台」十二月号をとどけて来た。
た。

十時過る頃に草場君が来て、緋鯉五尾をくれ、十二時過る頃まで話して去る。草場君は本所の齒科医で、舞台の誌友である。

畳がへと同時に、座敷の〈大〉掃除をする。佐久間、森部、女中等が立騒ぐ。畳がへの片付かぬ間は、何事も手に着かない。

夜も吸入。今夜も入浴を休む。

九時半就寝。

二十日（月曜）晴（六十三度）

午前八時半起床。吸入。

けふも畳屋二人来た。茶の間の畳がへである。相変わらず混雑。

「番町皿屋敷」三枚をかいて、「道頓堀」に郵送。更に自作の戯曲「鎌」を訂正。

午頃から佐久間が来た。二時頃に俵木が来て、三時頃まで雑談、それから佐久間と連れ立って「■」去る。

和田方君が来て、色紙と短尺の揮毫をたのみ、門口で帰る。

読書。吸入。今夜は入浴。十四日以来である。

八時半頃に佐久間が再び来て、俵木と共に本所から浅草を廻つて来たといふ。

十時就寝。

二十一日（火曜）晴（六十三度）

午前八時起床。けふも畳屋が来た。

寺田、飯野の両君から戯曲批評の礼状が来た。川原小枝子から病氣見舞の礼状が来た。山梨の河野君から郵書が来たので、返書。和田君の色紙短尺に揮毫して、返送。

連日快晴、庭の山茶花が今や満開である。

新潮社依頼の「綺堂一夕話」を書き始めたが、気乗りがしないので中止。老人の昔話はどうも面白くない。

読書。巖谷小波君追悼の句をかいて、松沢君に郵送。畳屋の仕事もけふで終る。冬季になつて庭に敷くための薄べりを頼む。森部は宵から神田へゆく。

吸入。七時ごろ入浴。読書。

十時就寝。

二十二日（水曜）晴（六十四度）

午前八時起床。この頃は庭にも霜が降りるやうになった。

「綺堂一夕話」をかきつゞける。吸入。

姉とおえいは豊川稲荷へ参詣にゆく。午後一時頃に中島が来て、「舞台」新年号の戯曲原稿八種を受取つてゆく。

二時半頃に岡君が来て、四時頃まで語る。つゞいて巖谷三一君が来て、「亜（米）利加の使」舞台監督について打合せあり、五時頃に去る。

中島の喜劇「女店員」を編集。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（木曜）晴（六十二度）

午前八時半起床。吸入。けふは新嘗祭。

佐久間が来て、白石君の原稿をとゞける。

「冴え返る」四枚をかいて、演芸画報社へ郵送。白石君に礼状を発送。

十菱愛彦君の戯曲「新羅の王鐘」を編集。大西君から郵書が来たので、返書。大西君の眼病いまだ快癒しないといふ。

七時半ごろ入浴。読書。

十時就寝。

二十四日（金曜）陰、雨（五十八度）

午前八時起床。

「綺堂一夕話」をかきつゞける。陰つて寒い。

佐久間が来て、額田の手紙をとゞける。

午後三時半頃に林君が自作の戯曲を持参、五時頃まで語る。恰も雨がふり出したので、林君は傘を借りてゆく。七時半ごろ入浴。けふも吸入二回。読書。十時半就寝。

二十五日（土曜）晴（六十三度）

午前八時起床。快晴。

小林宗吉から中京区御興岡町に住所を定めたといふ通知が来たので、返書。書物展望社から私の随筆集を発行したいと云つて来たが、一冊に纏めるほどの材料がないので、断りの返書。

「綺堂一夕話」をかきつゞける。一向に捗取らない。

嫩会例会で、五時半頃に額田が先づ来た。つゞいて山崎、大村、三橋、佐久間、中島、岡田が来た。鈴木は不参加。例に依て、私の江戸講話あり、それから劇談、雑談、九時四十分ごろ散会。

入浴。けふも吸入二回。

十一時廿分ごろ就寝。

二十六日（日曜）晴、雨（六十度）

午前八時半起床。朝は寒い、一面の霜。

十時四十分頃に文芸春秋社の武内君が来て、私の出世譚を聴き、午後二時頃まで話してゆく。森部は午後から研文社へゆく。

佐久間が来て、一時間ほど話して去る。長谷川時雨女史の戯曲「比丘尼長屋」を編集。

六時頃に森部帰宅、私の戯曲「鎌」の校正刷を持参したので、直ぐに十八ページ校了。

七時半ごろ入浴。八時頃から雨。
読書。十時半就寝。

二十七日（月曜）雨、陰（六十度）

午前八時半起床。

十時頃に額田の細君が強飯を持参。つゞいて正岡君が来て、十二時頃まで話して去る。

中央公論社から沙翁全集予約締切祝賀会を帝国ホテルに開くといふ案内状が来たが、不参の返書。山梨の河野君から自作の戯曲を送つて来たので、返書。

春陽堂の使が来て、「半七捕物帳」の増版五百部の捺印を求めてゆく。森部は午後から研文社へ出てゆく。

林君の戯曲を一読、その批評を添へて返送。

七時半ごろ入浴。読書。九時半頃に森部帰宅。

黒川君から明治座初日の入場券を送つて来たので、返書。

十時半就寝。

二十八日（火曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。

佐久間が来たので、明治座の入場券一枚をやる。中島と森部にも一枚づつ遣る。佐久間は昨夜十一時ごろ銀座から帰る途中で濃霧に逢ひ、自動車動かなくなつて困つたといふ。近來めづらしいことであつた。

森部は午頃から研文社へ出てゆく。朝から木枯しが強い。

午後三時頃までに「綺堂一夕話」をかき終る。併せて廿七枚。

感冒も稍や癒え、咽喉も楽になつたので、吸入をやめて含嗽だけにする。五時過る頃に森部帰宅。

読書。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。更けて風吹きやむ。

二十九日（水曜）晴（五十七度）

午前八時半起床。今朝も一面の霜。

姉と森部は庭に出て落葉を焚く。郊外初冬の風景である。

長谷川時雨女史から「舞台」新年号の戯曲を送つてくれたので、礼状を発送。帝国教育会誌から原稿をたのんで来たので、断りの返書。

読書。午後に佐久間が来た。「舞台」のアントラクト三枚半をかく。

七時半ごろ入浴。林君が来て傘をかへし、門口で帰る。十時半就寝。

三十日(木曜)陰

午前八時半起床。

十時半頃に鈴木余志子が母同道で来て、シヤコをくれた。鈴木が縁談の件である。一時間あまり話して去る。

ついで中島が来て、「舞台」の原稿を受取り、森部同道で研文社へ出てゆく。

来月十一日午後五時から例年の如く嫩会の忘年会を日比谷の陶々亭で催す筈で、その旨を会員一同に通知。ほかに川村花菱、長谷川伸、伊藤熹朔、渥美清太郎、寺田鼎、一二三淑夫の諸君にも招待状を発送。

福島きよ子の戯曲「山百合」を編集。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は鎌(舞台、四十四枚)綺堂一夕話(新潮、廿七枚)ほかに「舞台」の編集など。

昭和八年十二月

一日（金曜）雨、陰（五十八度）

午前八時半起床。

森部は朝から研文社へ出てゆく。額田から木村富子の戯曲を郵送して来たので、返書。岸井から郵書が来たので、返書。

木村富子の戯曲「五稜廓開城」を編集、百廿枚の長編である。午後から雨やんで陰る。

午「前」〈後〉六時頃に佐久間が来て、畑耕一君の戯曲「猛者」をとどけたので、直ぐに編集にかゝる。但し前半だけで、後半は明日中に脱稿するといふ。

七時頃に森部帰宅。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。午前三時頃まで眠られなかつた。

二日（土曜）晴れ（六十三度）

午前九時起床。晴れて暖い。

大村から忘年会出席の返書が来た。つゞいて丸善から書棚を送つて来た。これは大村の歳暮である。

津沢の寿子が子供をつれて来て、午頃からおえい同道で道玄坂へ出てゆく。

「相馬の金さん」の映画が道玄坂の聚楽座で上演されてゐるので、午後から森部同道で一見に出かけると、恰

も中島が来たので、三人同道でゆく。聚楽座は二時開演、しかも「相馬の金さん」は四時三十二分から始まるのといふので、それまで待つてゐるわけにも行かず、更に円タクに乗つて銀座へゆく。

快晴といひ、歳暮といひ、土曜日といひ、銀座辺はさすがに賑はつてゐた。三越と松坂屋をひやかして雑品をかひ、更に伊東屋で文房具数点をかひ、それから引返して聚楽座へゆく。こゝも殆ど満員であつた。

但し映画は甚だ詰まらないので、半途退場。道玄坂で晚餐を喫して中島に別れ、森部と共に帰宅。月が明るい。長谷川、川村、渥美、一二三の諸君から忘年会出席の返書が来た。

早稲田大学出版部から伊原君の「明治演劇史」を送つて来た。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

三日（日曜）晴（六十度）

午前八時起床。

佐久間が来て、渥美君の原稿をとどける。

長谷川君からその著「白夜低唱」を送つて来たので、返書。伊原君にも返書。岸井と難波から原稿を送つて来たので、いづれも返書。

十一時頃に大村が来て、おえい、森部、おきみ、おすみに歳暮品をくれた。植木屋が来て、花壇の霜よけの相談をしてゆく。

けふは明治座の初日。午後一時半頃に佐久間が来たので、二時頃から森部と三人連れで出てゆく。中島もあとから来た。

明治座の初日満員、補助椅子が出るほどの景気であった。第一「亜米利加の使」第二「他人の幸福」第三「新撰細君読本」第四「ハムレット」で、第四の中頃まで見物して同座を出たのは、午後十時。

佐久間、森部と自動車に乗って、十時廿五分帰宅。入浴。十一時四十分就寝。

四日（月曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。森部は朝から研文社へ出てゆく。

植木屋が来て、花壇の霜よけをする。佐久間が来たので、畑君方へ原稿を受取りに行くやうに頼む。

木村富子の「五稜廓開城」を編集し終る。午後三時半頃に佐久間から電話がかゝつて、畑君の原稿を唯今うけ取り、すぐに印刷所へ届けたといふ。

植木屋は仕事をしまつて、四時頃に去る。庭の景色もいよ／＼冬らしくなつた。

仲木君の喜劇「孔子とその弟子」を編集。七時半ごろ

入浴。

八時過る頃に森部帰宅。読書。十時半就寝。

五日（火曜）晴（六十度）

午前八時半起床。

姉とおえいは五反田の白木屋へ買物にゆく。森部は研文社へゆく。

十時半頃に佐久間が来て、午後零時三十分頃に去る。伊原君の「明治演劇史」完「全」〈成〉祝賀会を浜町の銀水で開くといふ通知が来たので、出席の返書。市川猿之助から歳暮の品をとどけて来た。おえい等は二時頃帰宅。

二時半頃から髪を刈（へり）にゆく。三時半ごろ帰宅すると、額田が来てゐて、一時間あまり話して去る。額田は山鳥一羽をくれた。

読書。七時半ごろ入浴。八時半頃に森部帰宅、「舞台」の新年号は原稿輻湊、よほど予定のページ数を越えるらしいといふ。

十時半就寝。夜半に雨の音。

六日（水曜）陰（五十八度）

午前九時起床。

森部と女中等は朝から山鳥の調理にかゝる。

けふは銀座の三越へ行つて歳暮品を買ひ調へる筈で、おえいと森部と三人づれで出ようとする処へ、十時半頃に額田の細君が来て歳暮品をくれ、森部と女中達にもおなじく歳暮をくれた。

そこへ佐久間が来て、細君等と雑談。細君は十二時頃に去り、私等三人は佐久間と共に銀座へ出てゆく。

佐久間は研文社へまはるとて、途中から下車。私たちは銀座の三越へ行つて、箱入の鮭を小林、額田、北川、管野、鈴木、渡辺、上松、山本、吉沢の諸家へ配達するやうに頼み、更に黒川、田辺、小林（徳二郎）草場、津沢の諸家へも歳暮品の配達をたのみ、ほかに雑品数点を買つて、二時（頃）に三越を出ると、恰も又、佐久間の来るのに出逢つたので、四人連れ立つて銀座で昼餐。

こゝで又、佐久間に別れて、三時ごろ帰宅。留守中に大野君が来て歳暮の品をくれ、大谷君からも歳暮の品をどけて来たといふ。

諸家へ歳暮品の送り状を発送。

読書。七時半ごろ入浴。暮れて風の音。

十時半就寝。

七日（木曜）晴（五十八度）

午前九時起床。

大野君方の文吾君が赤十字病院に入院中と聞いたので、おえいは森部同道で見舞に出てゆく。

十時半頃に鈴木余志子が北林東馬君同道で来て、十一時半頃まで話して去る。つゞいて佐久間が岩谷君の原稿を持参、更に水谷君の原稿を受取つて、研文社へとどけて来るといふ。

十二時過る頃におえい帰宅。文吾君はチ（ブ）スであるといふので、少しく驚かされた。とりあへず大野君方へも見舞状を発送。岩谷君にも原稿うけ取りの礼状を発送。

二時半頃に黒川君が来て「番町皿屋敷」の上演料をくれ、四時頃まで話してゆく。五時半頃に三橋が来て歳暮品をくれ、七時頃まで話して去る。

七時半頃入浴。読書。森部は研文社へまはつて、九時半ごろ帰宅。新年号の校正も明日で終るといふ。

十時半就寝。午前三時半ごろ強震。

八日（金曜）晴、陰（五十八度）

午前九時起床。森部は朝から研文社へ出てゆく。

吉田君から短尺の礼状が来たので、返書。清見君と横浜の高橋から郵書が来たので、返書。

明治演劇史の批評をかいて、読売新聞社に郵送。佐久間が来て、名古屋のほしうどんをくれた。

三越から浜町の山本君の歳暮品をとりけてくれたので、返書。小林、吉沢、管野、額田から鮭の礼状が来た。大阪の森田から京都に転居の通知が来た。

菅原君の戯曲「流れ木」を編集。少しく感冒の気味であるので、今夜は入浴を休む。服薬。

十時頃に森部帰宅、新年号の校正を全部終了したといふ。

十時半就寝。夜半に雨の音。

九日（土曜）雨（五十六度）

午前九時起床。

渡辺、津沢、草場の諸家から歳暮品受取りの礼状が来た。大野君からも返書が来た。

読書。新戯曲を書かうかと思ひ立つて、古いノートなど調べる。どれも余り思はしくないので、更に新材料を調査。

七時半ごろ入浴。十時半就寝。

十日（日曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。

十一時頃に渡辺のおしげが歳暮の礼に来て、十二時過る頃からおえいと一緒に出てゆく。そのあひだに、淀橋のおさだが子供をつれて来た。

午後一時頃に中島が歳暮の礼に来て、二時頃まで話して去る。やがておさだも去る。入れちがひにおえい帰宅。三時半頃から森部同道で道玄坂を散歩。二三の買物などして五時過るころ帰宅。朝から晴れて暖く、夕から陰る。

六時過るころに、鈴木の未亡人が歳暮の礼に来て、門口で帰る。

七時半ごろ入浴。読書。八時頃に佐久間が来て、九時半頃に去る。

十時半ごろ就寝。

十一日（月曜）晴、陰（六十度）

午前九時起床。

松坂屋から花岡房子の歳暮品、高島屋から草場君の歳暮品をとりけて来た。

佐久間が来た。けふは正午から午後一時までの間に、木村錦花君老母の告別式が執行されるので、十一時半頃から森部同道で出てゆく。けふも晴れて寒くない。

十二時十五分頃に浅草千束町二丁目の木村君宅に着、さすが交際の広い人だけに、なか／＼の盛儀であった。焼香を終つて退出、それから浅草公園を一巡して、広小路の奴うなぎで昼餐。

更に花川戸の松屋支店を一巡、地下鉄に乗つて上野に

出で、公園を一巡、清水堂の茶店で休息。時刻がまだ早いので、池の端を散歩。松坂屋から地下鉄に乗って京橋に出で、伊東屋文具店を一巡。恰も午後五時に近いたので、日比谷の陶々亭へゆく。小半日も歩きまはつたので少しく疲れた。

嫩会忘年会で、陶々亭には額田、大村、中島、山崎がもう来てゐた。つゞいて岡田、佐久間、鈴木、三橋が来た。招待客の川村、長谷川、伊藤、渥美、寺田、一二三の諸君もみな出席。飲食、雑談、十時ごろ散会。その節、川村君は額田と私に金沢の目ざしをくれた。

佐久間、森部と三人連れで、十時廿五分帰宅。陶々亭から買つて来た支那饅頭を家内一同に分配。
入浴。十二時就寝。

十二日（火曜）晴（五十八度）

午前九時起床。

おえいは麹町の大野君と浦岡君方へ歳暮の礼にゆく。森部の郷里から梨を送つて来たので、返書。花田房子と草場君にも礼状を発送。

大阪朝日新聞社神戸支部の同情週間係から紹地の揮毫をたのんで来たので、揮毫して返送。塩谷君と額田から郵書が来たので、返書。「舞台」原稿の件につき、浜村君にも郵書を送る。

十二時頃に佐久間が来た。改造社の使が来て文芸講座五千部の捺印を求めてゆく。私が全部をかいたわけではないが、この一巻の代表者として検印を捺すことになったのである。

二時頃におえい帰宅。三時頃に佐久間去る。
読書。七時半ごろ入浴。
十時半就寝。

十三日（水曜）晴（五十四度）

午前八時起床。今朝はやゝ寒い。

川村君、寺田君、大村から陶々亭の礼状が来たので、返書。埼玉の宮内君から郵書が来たので、返書。

十一時過る頃に佐久間が来て、午後一時頃に去る。新しい戯曲をかき始めたが、思ふやうに出来ないの中止。長谷川君からも陶々亭の礼状が来たので、返書。

暮れて寒くなる。七時半ごろ入浴。

岸井方から歳暮の品をどけて来た。静岡の山本君から鮭の礼状が（来た。）

読書。十時就寝。感冒の気味で悪寒がする。ので、夜半に起きて服薬、午前三時過る頃まで眠られなかつた。

十四日（木曜）晴（五十六度）

午前九時起床。

感冒のために頭痛、腹痛、気分が甚だ宜しくない。

読書。十一時半頃に松竹の牧野君が来て、東劇一月興行に「室町御所」を上演したいといひ、三十分ほど話して去る。

一時半頃に中野が来て、歳暮の礼をくれ、一時間あまり話して去る。三越から鉢植の梅をとりつけて来た。額田の贈物である。取りあへず礼状を発送。大阪の中島から郵書が来た。

読書。今夜は入浴を休む。
服薬。九時就寝。

十五日（金曜）晴（五十五度）

午前十時起床。

おえいは早朝から吉岡医師へゆき、十一時ごろ帰宅。佐久間が来て、十二時頃に去る。

森部に頼んで年賀郵便の宛名を書かせる。併せて六百四十枚、私も五十枚ほど書く。まだ追加がある筈である。午後一時頃に植田の細君が歳暮の礼に来て、三時頃から姉とおえいと三人づれで渋谷へ出てゆく。

大阪の山上から歳暮の礼として奈良漬一樽を送つて来たので、返書。五時頃におえい等帰宅。

「舞台」新年号出来して、その製本をとめて来た。第五年記念号であるので、二百三十余ページ、この雑誌

としては空前の大冊である。創刊当時に比べると、著るしい発展であると云つてよい。

而もそのあひだに、徳本逝き、山下逝く。今昔の感に堪へない。

その新年号を池田、原田、清水、高橋、東儀、林、渡辺、津沢、難波の諸家へ郵送。

読書。七時半ごろ入浴。子猫がへ迷つて来て、庭の霜夜に啼く。近所の山へ捨てられたものらしい。

十時半就寝。

十六日（土曜）陰、雨（五十三度）

午前八時起床。陰つて寒い。

朝日新聞の雑録をかく。午後一時半頃に植村君が来て歳暮の品をくれ、三時頃まで話して去る。

ついで黒川君が来て、「亜米利加の使」の上演料をくれ、三十分あまり話して去る。

読書。暮れて雨の音。七時半ごろ入浴。
十時半就寝。夜半大雨。

十七日（日曜）晴（五十五度）

午前八時起床。

けふは浜町の銀水で伊原君の明治演劇史完成祝賀の会が催されるので、十時半頃から出てゆく。伊原君夫妻、

坪内博士夫妻、小杉天外君夫妻、高田博士、金子馬治、中村吉蔵、池田大伍、岡鬼太郎、河竹繁俊、山田清三郎、高野博士の諸氏、私を加へて来会者十五名、劇談、雑談、三時頃に散会。私は猶居残つて雑談、四時半ごろ帰宅。留守中に小田原の飯野君が来て、自作の原稿を置いて行つたといふ。富山房の長谷川君が来て、私の「なこそ」の関を国文教科書に編入したいと云ひ置いて去つたといふ。飯野君に郵書。長谷川君に承諾の返書。七時半ごろ入浴。飯野君の戯曲「地震」をよむ。鳥渡面白い。

十時半就寝。

十八日（月曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

おえいは青山へ墓参にゆく。十二時頃に佐久間が来たので、銀水の会費を河竹君方へ届けてくれるやうに頼む。昨日差出すのを忘れて帰つて来たのである。近來の失敗。河野義博君の戯曲「籤」を編集。更に飯野君の戯曲「地震」を編集。

午後二時頃に津田梅吉君死去の通知が来た。私の家に奉公してゐたお隆の父である。午後三時が告別式であるといふので、森部に香典を持たせて出してやる。お隆の家は西巢鴨である。四時過る頃に森部帰宅。

七時半ごろ入浴。「舞台」二月号の戯曲原稿六編を取纏めて森部に渡す。新年早々は印刷所が休みであるので、戯曲だけは年内に組みあげて仕舞ふ筈である。なか／＼忙がしい。

十時半就寝。

十九日（火曜）晴（五十一度）

午前八時半起床。今朝は池に薄氷を見た。

おえいは姉と森部と三人づれで、紀尾井町の小林君方へ歳暮の礼に出てゆく。佐久間が来て、河竹君の受取をとける。

三越から岡田の歳暮品をとじて来たので、返書。寺田君、林君、額田から郵書が来たので、いづれも返書。十二時頃に額田の細君が来て、二幸の栗強飯をくれ、一時頃まで話して去る。佐久間も去る。

三時頃に姉とおえい帰宅。おえいは小田切医師方へも歳暮の礼に廻つて来たといふ。晴れてはゐるが、寒い日である。

小杉天外君から郵書が来たので、返書。大阪の岸井にも返書。

読書。七時半ごろ入浴。九時半頃に森部帰宅、「舞台」の原稿を研文社にとどけ、それから築地座の前進座を見物して来たといふ。

十時半就寝。

二十日（水曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

週刊朝日の雑文四枚をかく。あはせて六枚。「そば屋にて」と題して郵送。三十間の富多葉から歳暮の品をとじて来た。

十二時頃に丸尾君の細君が来て歳暮の品をくれ、十分あまり話して去る。取りあへず丸尾君に礼状を出して置く。やがて佐久間が来た。

「西郷山にて」四枚をかい、木太刀社に郵送。歳末は細かい仕事があるさい。

各雑誌の新年号が続々来る。皆それ／＼に工夫を凝らしてゐるのであらうが、所詮は一定の型を脱し得ないやうである。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

二十一日（木曜）晴（五十三度）

午前九時起床。

静岡の山本君から蜜柑を送つて来たので、礼状を発送。森部に命じて、その蜜柑を額田方へ持たせてやる。

町内の仕事師が来たので、門松をたのむ。目黒へ移住して第一回の歳暮である。つゞいて植木屋が鉢の梅をた

づさへて歳暮の礼に来たので、屋内のべ飾りなどを頼む。

「東京の雪」四枚をかい、モダン日本社に郵送。

十二時過る頃に、佐久間が来た。一時過る頃に森部帰宅、額田が感冒で引籠つてゐるので、その代理に松竹の本社へ赴き、「舞台」の広告料を受取つて来たといふ。三時半頃に浦岡の細君が歳暮の礼に来て、三十分余り話して去る。

山下の父から郵書が来たので、返書。平生は何かに取紛れてゐるが、歳暮などには又今更に山下の事など思ひ出されて、暗然。宝塚の坪井から郵書が来たので、返書。

大阪の村井君から郵書が来たので、同じく返書。

少しく下痢の気味であるので、服薬。七時半ごろ入浴。

「新」改造社から文学講座第十編「演劇戯曲編」を送つて来たが、これには私の「歌舞伎概説」と永田衡吉君の「岡本綺堂研究」が掲載されてゐる。

十時半就寝。

二十二日（金曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。今朝も霜が深い。

庭へ出て見ると、一尾の大鯉が池の氷に閉ぢられてゐるので、森部を呼んで氷を砕かせると、鯉はまた泳ぎ出した。浅い池に大きい鯉を飼ふのは無理であると思つた。姉に歳暮品を贈り、森部とおきみ、おすみにもボーナ

スを遣る。けふは冬至、風はやゝ寒いが快晴。

へ森部を麹町へつかはして、小川君方へ歳暮品をとぎさせ、大野君方へも見舞品をとぎさせる。へ

前田曙山君から郵書が来て、雑誌「現代」の座談会に出席してくれといふ。何分感冒の気味であるので、断りの返書。同時に「現代」の編集部にも断り状を出して置く。

新潮社から新年号の原稿料を送つて来たので、返書。湯河原の旅館から歳暮品をとぎけて来た。

姉とおえいは午後から渋谷へ買物に出てゆく。一時頃に佐久間が来た。埼玉の福島きよ子の使が来て、山鳥二羽をくれた。

三時過るころにおえい等帰宅。「現代」の鮫島君が座談会の件で来訪、おなじく断る。

読書。七時半入浴。冬至で柚湯を焚く。
十時半就寝。

二十三日（土曜）晴（五十二度）

午前八時半起床。

年賀郵便を整理して、目黒郵便局にとぎけさせる。併せて六百九十枚、まだ幾分の追加があるらしく思はれる。新聞号外が出て、今朝六時三十九分、皇へ太へ子御誕生を報道。門に祝旗をかける。晴れて暖い日である。

十二時頃に佐久間が来たので、きのふ貰つた山鳥を調理して、一緒に昼餐。佐久間は二時頃に去る。

二時半頃から髪を刈りにゆく。山梨の河野君に郵書を送る。

鈴木賢太郎君の戯曲「無怨塚由来」を編集。

七時半ごろ入浴。夕刊をみると、皇太子御降誕奉祝のために、二重橋前はいふに及ばず、銀座付近までも、おびたしい人出であつたといふ。

十時半就寝。

二十四日（日曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。日々快晴。

十時半頃に武内君が来て、松岡映丘君筆の箱書をとぎけてくれ、十二時頃まで話して去る。佐久間が来た。

秋田に滞在中の小林蹴月君から郵書が来て、同地は風雪であるといふ。林二九太君からも郵書が来た。

午後一時過る頃から森部同道で道玄坂を散歩。歳末でこゝらも流石に賑はつてゐた。文房具など買つて、三時頃帰宅。

へ五時過る頃に円地文子と岡田が来て、七時頃まで話してゆく。へ

「無怨塚由来」を編集し終る。読書。

七時半ごろ入浴。十時半就寝。

二十五日（月曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

小田原の飯野君から郵書が来たので、返書。週刊朝日から原稿料を送つて来たので、返書。十二時頃に佐久間が来た。

伊勢波切町のみさき会から俳句の選をたのんで来たので、選了。あはせて短尺四枚に揮毫。朝鮮の京城日報、富山の北陸日日新聞から色紙を送つて来たので、同じく揮毫、返送。

三時頃に東儀が来て、歳暮の品をくれ、三十分あまり話して去る。そのあひだに、雨谷君の未亡人が来て、息子の宝塚劇場入りはどうも不調で終つたらしいといふ。その節、未亡人は自宅に保存されてゐたといふ私の写真をくれた。明治三十七年、日露戦争に従軍当時、広島で撮影したものである。自家に所蔵の物は震災に焼き失つてしまつたので、これも一種の記念として複写して置くことにする。三十年前の古写真、今更それを眺めると、文字通り今昔の感に堪へない。

今夜はふたば会例会で、六時頃に大村が来た。ついで三橋、岡田、佐久間、額田、鈴木が来た。中島は大阪から帰らず、山崎は欠席。例に依て、私の江戸講話、劇談、雑談。九時四十分ごろ散会。

入浴。十一時就寝。

二十六日（火曜）晴（五十一度）

午前八時半起床。朝は四十八度。

読売新聞の清水君から巴里支局の松尾君の郵書を封送して来た。それによると、巴里の小劇場プチ・セーヌで「鳥辺山心中」を来春早々上演することになつたといふ。巴里で私の作を上演するのは「修禪寺物語」以来、二回目である。清水君に返書。松尾君にも返書。

町内の仕事師が来て、門松を立てる。寒い風が吹く。午後二時頃から森部同道で銀座へゆく。別に所用もないが、歳晩の景気を見物する為である。インフレ景気と東宮御誕生の奉祝とで京橋辺は頗る賑はつてゐた。晚餐を食つて、五時ごろ帰宅。

七時半ごろ入浴。山梨の河野君から返書が来た。

武内君の戯曲「恋愛無資格者」を編集。

十時半就寝。

二十七日（水曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。

けふは餅搗、目黒の菓子屋から供餅とのし餅をとびけて来た。春陽堂から歳暮品をとびけて来た。

雑司ヶ谷の清水政雄君から蕎麦粉を送つて来たので、返書。

森部はけふも銀座へ買物に行つて、午頃帰宅。

けふは晴れて暖い。歳晩の快晴つゞきは結構である。午後二時頃に佐久間が来て、歳暮の品をくれた。三時頃に俵木が歳暮の品を持参、つゞいて菅野君が歳暮品を持参。四時頃に三人相前後して去る。

武内君の戯曲を編集し終る。七時半ごろ入浴。

夕刊をみると、竹柴金作君今朝死去、明日午後一時から浅草馬道の自宅で告別式を営むといふ。狂言作者の故老も続々凋落、なんとなく寂しいやうな気もする。

読書。十時半就寝。

二十八日（木曜）陰（四十八度）

午前八時起床。陰つて寒い。

竹柴金作君の告別式に森部を名代に出してやる。森部は四谷の丸尾君方へ歳暮品をとゞけ、それから浅草へまはるとて、十一時頃から出てゆく。市川寿美蔵から歳暮品をとゞけて来た。

新聞をみると、昨夜九時三十八分、銀座のカフエー銀座会館から出火、同館の大建物は大半焼失、場所柄といひ、歳末混雑の折柄といひ、銀座界限は大騒ぎであつたといふ。

「明治演劇史成る」四枚をかく。「舞台」の原稿である。

午後一時過る頃に佐久間が来た。佐久間は昨夜銀座を

徘徊して、恰も銀座会館出火の混雑を目撃したといふ。三時頃に真川君が来て、五時頃まで話して去る。

山形の渡辺君から干柿を送つて来たので、返書。樋口住一君の戯曲「遊覧地停車場」を編集。

七時頃から雨の音、やがて止む。七時半ごろ入浴。

九時半頃に森部帰宅。浅草から阿佐ヶ谷へまはつて、額田方で「舞台」の帳簿を整理して来たさうである。額田方ではけふが餅搗であるとして、餡餅をくれた。

十時半就寝。

二十九日（金曜）晴（五十五度）

午前八時起床。

皇太子殿下御命名式当日、快晴。

十一時頃に佐久間が来て、午頃に去る。海野の歳暮品を三越から届けて来たので、礼状を発送。

十二時半頃に新聞号外が来た。皇太子殿下は継宮明仁親王と承はる。

一時半頃から森部と目黒を散歩。伊勢脇の喫茶店で喫茶、三時ごろ帰宅。晴れて暖く、めでたい日である。

手文庫や机の抽斗を整理、例に依て古い反古紙が沢山出る。津沢君から歳暮品を送つて来たので、返書。草場君から自作の戯曲を送つて来たので、返書。渥美君から演芸画報の原稿料をとゞけて来たので、返書。

七時半ごろ入浴。とき／＼に花火の音がきこえる。宮城前は勿論、銀座辺は定めて混雑であらうと思ひやる。

多田芳枝の戯曲「女同志」を編集。

十時半就寝。

三十日（土曜）陰、雨（五十三度）

午前八時半起床。

陰晴定らず、をり／＼に陰る。気候は寒くない。

森部に命じて、海野方へ歳暮品を持たせてやる。午後にも麴町の吉岡医師方へ歳暮品を持たせてやる。

「舞台」の雑文二編をかく。あはせて九枚。難波の歳暮品を松屋から届けて来たので、返書。丸尾君から先日の礼状が来た。

多田芳枝の戯曲を編集し終り、更に草場君の戯曲「診療日記」をよむ。

六時頃から雨の音。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。雨の音はいよ／＼強い。昨夜でなくて仕合せであつた。

喪中に付き歳末年始の礼を欠くといふ郵書の来るのは年々の例であるが、ことしの歳末は例に比して甚だ多い。知人に不幸の多かつたことが思ひ出されて、暗い心持にもなる。

三十一日（日曜）晴（五十二度）

午前八時起床。雨やんで快晴、寒くない。

姉とおえいは道玄坂へ重詰物などを買ひにゆく。

十時頃に小林蹴月君が来て、廿八日夜に秋田から帰京したといひ、歳暮の品々をくれ、十一時半頃まで話して去る。そのあひだに、おえい等帰宅。

午後、佐久間が来たので、森部と三人づれで道玄坂へ行つてみる。流石に大晦日とて、こゝらはなか／＼混雑してゐた。晦日そばを食つて、佐久間と別れ、二時半ごろ帰宅。をり／＼に陰つて、寒い風が吹き出した。

奥田君から郵書が来たので、返書。鈴木千枝雄からも郵書が来た。東京劇場から来春四日の入場券をとゞけて来たので、昼夜二枚を森部にやる。同じく二枚を俵木に郵送。

草場君の戯曲「診療日記」を編集。真川君の郷里から蒲鉾を送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。おきみとおすみは宵から道玄坂へ買物に行つて、九時半ごろ帰宅。

十一時就寝。寝ながら除夜の鐘を聴いて、午前一時頃から眠る。

今年の重なる出来事は、住み馴れたる麴町元園町の宅を引払つて、目黒に隠居したことである。私の仕事にこれはと云ふものは無い。わづかに中央公論に戯曲「浪人

時代」四幕を発表しただけである。来年はもう少し勉強しなければなるまいと思ふ。

前にもいふ通り、知人に不幸は随分あつたが、幸に私の一家は無事。女中のおさきとおせんは相前後して帰郷したが、新参のおきみとおすみは無事に勤めてゐる。森部も無事。姉とおえいと私と、一家あはせて六人、めでたく昭和八年を送り終る。

本月の仕事は西郷山にて（木太刀、四枚）東京の雪（モダン日本、四枚）そば屋にて（週刊朝日、六枚）ほかに「舞台」の編集など。

（翻刻担当…杉本裕樹）

昭和九年（一九三四年）六十三歳

昭和九年一月

一日（月曜）晴（五十度）

午前七時半起床。朝は四十二度。その割合に寒くない。快晴。

例に依て、一家めでたく屠蘇と雑煮を祝ひ、森部、おきみ、おすみに年玉をやる。森部を代理として近隣に回礼。

年賀郵便四百余通到着。十時頃に渡辺の愛子が年賀に来了。

十一時半頃に鈴木余志子が北林透馬君同道で来た。つゞいて中野、武内君、額田が来た。午後一時頃に一同立去る。つゞいて三橋が来た。

二時頃に佐久間が来た。三時過る頃に渡辺君が年賀に来て、一時間あまり語る。つゞいて鈴木千枝雄が来て、三十分ほど話して去る。

終日晴れて風無く、先づは申分のない元旦であつた。私は一歩も門外に出なかつたが、市中はなか／＼賑はつてゐるといふ。

読書。七時ごろ入浴。こゝらは元日と云つても、夜も屋も静寂で殆ど平日と変らない。

十時半就寝。

二日（火曜）晴（四十八度）

午前八時起床。庭は一面の霜である。池の鯉が一尾凍死してゐた。

年賀郵便百五十余通、例に依て未知の人が随分ある。十時半頃に山崎が年賀に来た。

午後二時頃に上松君が年賀にきて屠蘇を飲む。三橋が来て築地小劇場の入場券を受取り、門口で帰る。

三時頃に額田夫婦が子供三人を連れて来て、三十分あまり話してゆく。上松君は四時半頃に去る。

佐久間が来て、森部と共に五時頃から築地小劇場へ見物にゆく。けふは東劇の初日であるが、私は四日に見物する積りであるので、出ない。

麹町郵便局から年賀郵便百余通を回送して来た。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

三日（水曜）晴（四十九度）

午前八時半起床。今朝も一面の霜、天気快晴。

年賀郵便八十余通到着。新聞をみると、新年の市中は景気よろしく、各興行物はみな満員、浅草公園その他もおびたゞしい人出があつたといふ。

午前三時頃、草場君の戯曲「外科室」を編集し終ると、恰も草場君が年賀に来て、一時間あまり話してゆく。草場君は旧臈から上城方面へスキーに出かけて、今朝帰京

したといふ。そのあひだに東儀が年賀に来て、門口で帰る。

読書。七時半ごろ入浴。おえい、森部、おきみ、お「さき」へすみ等は姉の居間にあつまつて歌留多などしてゐる。

十時半就寝。

四日（木曜）晴（五十度）

午前八時起床。

年賀郵便百八十通余到着。

おえいは東劇の昼の部を見物する筈で、森部と共に支度をしてゐる処へ佐久間も来た。十時半頃から三人連れ立つて出てゆく。

年賀郵便の中に未知の人が随分あるので、その返書五十余通をかく。併せて知人宿所帳を訂正。新年はいつもこれが煩はしい。

和田方君の使が来て干柿をとゞけてくれた。出入の職人三四人が年賀に来た。

おえいと入れ代りに、東劇の夜の部を見物するとて、四時半頃から出てゆく。おえいはもう帰つたあとで、佐久間、森部、俵木の三人だけが残つてゐた。こゝで山崎君、木村君などに逢つて新年の挨拶をする。

夜の部は五時四十分開演の筈であつたが、廿分早めて

五時廿分開演。第一「空町御所」第二「新口村」第三「將軍江戸を去る。」第四「女尻駕」で、第三を演じ終つたのは十一時。第四を見残して、十一時廿五分ごろ帰宅。留守中に、大野君と林君が年賀に来たといふ。入浴。十二時廿分ごろ就寝。

五日（金曜）晴（五十度）

午前八時半起床。新年以来、日々快晴。

年賀郵便八十通余到着。十二時頃に佐久間が来た。

新聞をみると、裏日本各地方大風雪、その影響で寒氣加はる。

林君の戯曲「人生テレヴィジョン」を編集。三時頃に中島が来て、昨夜帰京したといひ、四時過る頃まで話して去る。

読書。七時ごろ入浴。十時就寝。

六日（土曜）晴（五十度）

午前八時半起床。この頃は毎朝四十度前後。但し快晴つゞきは結構である。けふは寒の入であるといふ。

おえいは九時頃から世田谷の上松君方へ年賀に出る。森部も十時半頃から年賀に出てゆく。

十一時頃に中村孝子が年賀に来て、三十分ほど話して去る。年賀郵便五十通余到着。麴町の小川君が年賀に来

て、門口で帰る。

けふから新に戯曲をかき始める。三時頃におえい帰宅。
七時頃に森部帰宅。紀尾井町の小林（君）と阿佐谷の
額田方へ廻礼して来たさうである。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。午前三時頃まで
眠られなかった。

七日（日曜）晴（四十八度）

午前八時起床。今朝も池の鯉が一尾凍死した。去年は
こんなことは無かつたが、今年は氷が厚いといふ。

おえいは十時半頃から年賀に出てゆく。森部も十一時
半頃から研文社へ校正に出てゆく。年賀郵便十八通到着。
大村から郵書が来たが、新年早々長崎へ行つてゐるので
ある。

戯曲をかきつゞける。晴れてはゐるが、なか／＼寒い。
午後一時頃に佐久間が来た。一時半頃に正岡君が「食
道楽」の片桐君同道で年賀に来て、一時間あまり話して
ゆく。入れちがひに、おえい帰宅。佐久間は五時頃に去
る。

植田の細君が年賀に来て、七時過る頃まで話して去る。
七時半ごろ入浴。読書。九時頃に森部帰宅。今夜の七
日会は新年にも拘らず、出席者六名に過ぎなかつたとい
ふ。

年賀郵便十一通到着。十時半就寝。

八日（月曜）陰（四十八度）

午前八時起床。霰が一としきり降る。

森部は九時半頃から研文社へ出てゆく。

戯曲をかきつゞける。陰つて寒い日である。

三時過る頃に新潮社の渡辺君が来て、かねて約束の国
民精神講座の原稿を十五六日頃までに書いてくれと云
ひ、一時間あまり話してゆく。

佐久間と三橋が劇評を持参、六時半頃まで語る。

七時半ごろ入浴。読書。年賀郵便十一通到着。鳥飼登
志子から速達便が来て、休暇で上京したので、明午前参
上するといふ。

十時半就寝。

九日（火曜）晴（四十九度）

午前八時半起床。

十時半頃に鳥飼登志子が女学「■」生二人同道で来訪。
十二時頃まで話して去る。鳥飼は昨年結婚。夫は満州の
新京へ赴任したので、自分も今学年の終るを名残りに、
函館を去つて満州へ赴く筈であるといふ。

午後一時頃に佐久間が来た。一時半頃に鎌倉の神谷と
も子が年賀に来て、一時間ほど話して去る。けふは晴れ

て、寒気弛む。

四時頃に黒川君が来て、「室町御所」の上演料をくれ、三十分あまり話してゆく。新年の各劇場は噂ほどでもなく、正月としては成績が思はしくないとふ。

年賀郵便六通到着。七時半ごろ入浴。

夕刊をみると、旧暦から新年にかけて、感冒が非常に流行するさうである。殊に今回の感冒は性質があまり宜しくないといふ。

読書。十時半就寝。

十日（水曜）陰、雨（四十八度）

午前八時起床。

森部は九時頃から研文社へ出てゆく。

新潮社の国民精神講座の原稿を起稿、題は「入鹿誅戮」午後佐久間が来た。雑司ヶ谷の清水君から蕎麦粉を送つて来て、短尺をかいてくれといふ。

七時ごろ入浴。波多謙治君の戯曲「饅頭と武士道」を編集し終る。

暮れて雨の音。八時過る頃に森部帰宅。
十時半就寝。

十一日（木曜）晴（五十度）

午前八時半起床。快晴。森部は研文社へ出てゆく。

新潮社の原稿をかきつづける。一向に捗取らない。

午後佐久間が来た。額田から郵書が来たので、返書。武内君から「オール読物」二月号を送つて来たので、返書。

六時頃に佐久間が再び来た。八時頃に森部帰宅。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十二日（金曜）晴（四十八度）

午後八時半起床。今朝は寒い。

十時半頃からおえいは森部をつれて麹町方面へ年始廻りに出てゆく。

新潮社の原稿をかきつづける。十二時頃におえい帰宅。小川、大野、浦岡の諸家を訪問して来たさうである。やがて佐久間が来た。

新聞をみると、流行感冒いよ／＼猖獗、元旦から七日までの間に死亡者七百五十人に達したといふ。

福島石井から郵書が来て、十四日に上京するといふ。大阪の岸井も近日上京するとのことである。

七時半ごろ入浴。八時過る頃に森部帰宅。森部は額田の書面を持参したが、それによると「舞台」の誌友林鉄之介君「は」へも／＼流感のために去九日死亡したといふ。流感の猖獗、怖るべきである。

読書。十時半就寝。午前二時過る頃まで眠られなかつ

た。

十三日（土曜）晴（五十度）

午前九時半起床。快晴。

新潮社の原稿をかきつづける。午前一時頃に佐久間が川村君の原稿を持参したが、もう締切後であるので、次号に廻すやうに云ひ聞かせる。

晴れて風無く、寒気も弛む。

三時頃までに原稿をかき終る。題は「入鹿誅戮」廿五枚。

林鉄之助君の戯曲が手もとに来てゐるので、遺稿として三月号に掲載することゝし、その編集にかゝる。

七時半ごろ入浴。九時半頃に佐久間が再び来て、十時頃に行く。

十時半就寝。

十四日（日曜）晴（五十度）

午前八時半起床。

晴れて暖いので、庭に出て一時間ほど散歩。森部は研文社へ出てゆく。

午前一時頃に小田原の飯野君が来て、三時頃まで話してゆく。

大阪の岸井から電報が来て、十五日午前八時三十分上

京するといふ。

七時半ごろ入浴。八時頃に森部帰宅、二月号の校正を全部終つたといふ。岸井上京のことを電話で額田に通知。

林君の戯曲を編集し終る。

十時半就寝。今夜は眠られず、咽喉や鼻が痛む。今朝庭を散歩して感冒にかゝつたらしい。

十五日（月曜）晴（五十度）

午前十時起床。

吸入をこゝろみて、再び臥床。やがて岸井が来て、脚本の用件で上京したといひ、午餐を喫して午後まで話してゐると、佐久間が来た。つゞいて額田、中島が来た。私も床の上に起き直つて語る。

二時半頃に岸井と中島は連れ立つて去る。気賀君子が年賀に来たが、私は病中で面会せず、額田とおえいが応接間で応対、三十分ほど話して去る。山崎が会費を持参、門口で帰る。額田と佐久間も三時頃に行く。四時頃に石井が来た。

夜も吸入一回、今夜は入浴せず、八時頃から再び寝る。安眠。

十六日（火曜）陰、雨、雪（四十八度）

午前九時起床。

感冒がまだ癒えないので、今朝も吸入を試み、床の上に座つてゐる。陰つて寒い日である。

気賀君子に昨日の礼状を発送。北川千代子から寒見舞の郵書が来たので、返書。「衆文」の野村君に郵書を發して、病氣のために原稿は間に合ひ兼ねる旨を申送る。

松本錦吉から郵書が来て、幸四郎門下、梅幸門下等の青年俳優等が若草座といふのを組織し、廿七、廿八日の両日間、築地小劇場で試演会を催すに付、私の「白虎隊」を上演したいと云つて来たので、承諾の返書を出して置く。近來はこの種の試演会が流行するらしい。

午後一時頃に三橋が来て、一二三君と共同で作劇術の翻訳をすると云ひ、一時間ほど話して去る。そのあひだに佐久間も来た。

床の上で「舞台」誌友の原稿をよむ。あまり面白いものは無い。佐久間は五時頃まで森部の部屋で話して去る。その頃から微雪。

雪は曇となり、更に雪となり、庭の花壇の霜よけも白くなる。

五時過る頃に岸井が来て、今夜十時十五分の汽車で帰阪するといひ、七時頃まで話して去る。四月頃には再び上京するといふ。

今夜も入浴を休み、吸入、服薬。十時就寝。

十七日（水曜）晴（五十度）

午前八時起床。感冒はまだ完全に癒えないが、けふは床払ひをして起きる。昨夜の雪は差しても降らず、今朝は快晴。

鳥飼登志子に頼まれた短尺三枚と色紙一枚に揮毫、清水政雄君にたのまれた短尺四枚に揮毫、いづれも返送。讃岐の大西君から私が旧作の随筆を送つてくれと云つて来たので、「十番随筆」を郵送してやる。

午後一時頃に三橋が来た。やはり翻訳の件である。つゞいて佐久間が来た。三橋は二時頃、佐久間は三時頃に去る。

金子洋文君の戯曲「魚河岸の朝」を編集。七時ごろ入浴。

けふも吸入二回。十時就寝。

おきみは宿下りにゆき、九時半ごろ帰宅。

十八日（木曜）晴（五十度）

午前九時半起床。けふはお「ふ」へすみが宿下りに出てゆく。

十一時頃に大村が来て、長崎みやげの唐船の模型をくれた。大村は六日に九州から帰京、それから感冒に仆れてゐたといふ。

けふも午後一時頃に三橋が来た。つゞいて佐久間が来

て、けふは祖父の誕辰に相当し、殊に本年は喜寿に相当するといふので、扇子と菓子をくれた。

二時頃から森部同道で渋谷へゆき、佐久間の祖父に贈るべき祝物をかひ、二幸の食堂で喫茶。三時過るころ帰宅。

金子君の「魚河岸の朝」を編集し終る。

七時半ごろ入浴。けふも吸入二回。服薬。九時頃におすみ帰宅。

十時就寝。

十九日（金曜）雨、陰、雨（四十二度）

午前八時起床。朝は微雪を飛ばし、やがて雨となる。

森部に命じて、佐久間方へ祝物を持たせてやる。

読書。午後三時頃に「舞台」二月号の製本をとぎけて来たので、高橋、林、清水、原田、難波、東儀、池田、津沢、渡辺の諸家へ発送。

終日陰つて寒い。日暮れて又もや雨。

七時頃に佐久間が来て、八時半頃に去る。

けふも吸入二回、服薬。十時半就寝。

二十日（土曜）晴（四十八度）

午前八時起床。快晴。

姉、おえい、森部の三人は東宝劇場見物のために、午

前十時半頃から出てゆく。

雑用が片付いたので、過日來中止してゐた新戯曲を再び書きつづける。

午後二時頃に中島が来た。つづいて石井、佐久間が来た。三人は四時頃まで話して去る。四時半頃におえい等帰宅。

大阪の岸井から郵書が来たので、返書。政界往來社から原稿を頼んで来たので、断りの返書。

読書。七時半ごろ入浴。けふから吸入を休み、単に服薬。

十時半就寝。

二十一日（日曜）晴（五十度）

午前八時起床。十時頃に上松の武雄が年賀に来た。

戯曲第一幕が略ぼ脱稿したので、兎も角も訂正しながら清書。

快晴、午後から寒い風が吹き出した。四時過る頃に佐久間が来て、川崎の初大師へ参詣して来たといひ、三十分ほど話して去る。

巢鴨の津田、浅草の木村の両家から、いづれも四十九日の配り物を届けて来たので、いづれも返書。

改造社の塩谷君が近火に逢ひ、森部から夕刻から見舞にゆくといふので、私からも見舞物を持たせてやる。

読書。七時半ごろ入浴。

八時半頃に森部帰宅。塩谷君の自宅は幸いに焼失を免れたが、近隣十六戸焼失のために、同家もさんぐに踏み荒され、老母は負傷したといふ。とんだ災難であった。

十時半就寝。

二十二日（月曜）晴（五十度）

午前八時起床。

植木屋が来て、庭の樹木に寒肥をやる。

新聞をみると、中央公論社の松本篤造君が奥利根のスキー場で大風雪のために断崖から墜落、遂に絶命したといふ。これは又、塩谷君以上の惨禍で、なんとも云ふべきやうが無い。年は三十二歳、少壮の身で突然死去、まことに惜むべきことであつた。取りあへず中央公論社の嶋中君まで悔み状を発送。

小田原の飯野君から箱根の絵ハガキ等を送つて来たので、返書。昼餐頃に佐久間が来た。

戯曲の浄書をつける。訂正しながら浄書するので、一向に捗取らない。

夜は小洪光君のラヂオ・ドラマ「強く生きる」を編集。七時半ごろ入浴。

八時過る頃に佐久間から電話がかゝつて、東劇の昼の

部は長谷川君の「別れ囃子」と、私の「鎌」に決まつたといふ。誰から聞いたのか判らない。

木村富子から「舞台」に脚本掲載の礼状が来た。

十時半就寝。

二十三日（火曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。けふも快晴。天気よく続くことである。

塩谷君から近火見舞の礼状が来た。難波から「舞台」二月号の礼状が来た。

戯曲の浄書をつける。午後三時過る頃から髪を刈りにゆき、四時過る頃帰宅すると、佐久間が来てゐて、私の「鎌」はいよいよ東劇の二月興行上演に決定したといふ。

夜は小洪光君のラヂオ・ドラマを編集。「舞台」の編集もなか／＼煩はしい。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。

二十四日（水曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。

戯曲の浄書をつける。一向に捗取らない。

午後一時頃に佐久間が来た。けふは中央公論社の松本君の告別式があるので、森部に香典を持たせてやる。

二時半頃に大村が来て、三十分あまり話して去る。松竹の黒川君から電話が来て、東劇二月興行昼の部に「鎌」を上演することに決定したといふ。

小寺君、藤嶋君、花田房子から寒見舞の郵書が来たので、返書。

七時半ごろ入浴。夜は読書。
十時半就寝。

二十五日（木曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。けふも快晴。

戯曲をかきつけける。

岸井から郵書が来て、大阪は面白くないから帰京したいといふ。それは先頃も聞いたことであるが、大阪へ行つて二月半に過ぎないのであるから、もう少し辛抱してはどうかと思ふ。

今夜は嫩会例会で、六時頃に大村が先づ来た。ついで三橋、鈴木、中島、額田、佐久間が来た。石井と岡田は感冒で欠席、山崎も欠席。

その際、額田を別室に招いて、岸井の一件に付き相談、結局本人の意思の自由に任せることに決定。それから例に依て、私の江戸講話、劇談、雑談。九時過るころ散会。

入浴。十一時廿分就寝。

二十六日（金曜）晴（五十度）

午前九時起床。

岸井に郵書を発して、大阪に辛抱が出来れば、結構。どうしても辛抱が出来なければ帰京も已むを得まいと云ひ送る。

午後に佐久間が来た。晴れて暖い。

「舞台」の喫煙室の原稿四種をかく。ほんの埋め草である。

近所の徳川家に告別式があるので、朝から往来が多い。

七時半ごろ入浴。読書。

十時就寝。

二十七日（土曜）晴（四十八度）

午前八時起床。

大阪毎日新聞から一枚の随筆を頼んで来たので、書いて送る。一枚ではどうにも書きやうが無い。

森部は十一時頃から額田方へ出てゆく。晴れてはゐるが、風が寒い。

午後一時頃に佐久間が来て、三十分ほどで去る。

戯曲第一幕を浄書し終る。あはせて四十枚。最初から読み直して訂正。案外に長くなりさうである。

七時半ごろ入浴。森部帰宅、額田は不在で、更に中島方へまはつたといふ。

八時過る頃に木村好文君が久しぶりで来訪。横浜の歌舞伎座で私の「白虎隊」を上演したといひ、三十分あまり話して去る。

十時半就寝。

二十八日（日曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。

読書。午後に佐久間が来た。

雨谷未亡人が来て、私が満洲従軍当時の写真の引伸し二枚をみせ、その一枚を私にくれ、他の一枚にサインしてくれといふ。

けふは快晴。森部と女中等が池の氷を砕いて、門前の溝に捨てる。

二時頃に上松のおすゝが年賀に来て、三時過る頃から姉とおえいと三人づれで道玄坂方面へ出てゆく。

読書。五時頃におえい等帰宅。藤田君の戯曲「玩具」を編集。

七時半ごろ入浴。十時半就寝。

二十九日（月曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。

戯曲をかきつゝける。此頃になつて、戯曲のむづかしい事がだん／＼に判つて来たやうな気がする。

午後に佐久間が来た。「舞台」の誌友岩田君から「金瓶樓今紫」の筆写を送つて来た。大正二年の都新聞の切抜きである。山形の本間君からも郵書が来た。函館の鳥飼登志子から短尺の礼状が来た。

七時半ごろ入浴。その際、長湯をしたせゐか、湯氣にあがつて困つた。

読書。十時半就寝。

三十日（火曜）陰（四十八度）

午前九時起床。

東劇から電話がかゝつて来て、明日正午から舞台稽古にかへるといふ。

額田から郵書が来たので、返書。岩田君と本間君にも返書。大阪の岸井から郵書が来た。

午後に佐久間が来た。「舞台」三月号の戯曲原稿を取纏めて森部に渡して置く。

読書。七時ごろ入浴。

「六」「八」時頃に佐久間が再び来て、自作戯曲について相談あり、九時過る頃まで話して去る。

十時半就寝。

三十一日（水曜）晴（五十三度）

午前九時起床。

東京劇場の舞台稽古があるので、十一時頃から出てゆく。

十二時廿分頃から第一「鎌」の舞台稽古にかゝる。配役は兄（小太夫）妹（ひとし）妻（多賀之丞）士官（柳）脱宮兵（簀助）で、約五十分で終る。

二時頃に劇場を出て、銀座を散歩。けふは晴れて暖い。三越と伊東屋で雑品文房具などを買つて、三時半ごろ帰宅。

森部のところへ下山省三君が来てゐたので、私も挨拶にゆく。ほかに中島も来て、「舞台」三月号の原稿を受取つて行つたといふ。

六時頃に佐久間が来て、九時頃まで話して去る。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。この頃の癖で、十二時頃から午前三時過る頃まで眠られなかつた。

本月の仕事はこれといふ事もない。入鹿誅戮（国民精神講座、廿五枚）新戯曲五十枚余、ほかに「舞台」の編集など。

（翻刻担当…阿部菜々香）

昭和九年二月

入浴。十時半就寝。今夜は安眠。

一日（木曜）晴（四十八度）

午前九時起床。

十時半頃に黒川君が来て、三十分あまり話してゆく。

戯曲をかきつけける。どうも巧く行かない。

夜は吉田君の戯曲「岩見重太郎」を編集。

七時半ごろ入浴。十時半就寝。午前四時頃まで眠られなかった。

二日（金曜）雨（四十七度）

午前九時起床。

やがて佐久間と中島が来た。けふは東劇の初日であるので、森部と四人連れで十時頃から出てゆく。朝から細雨。

東劇の初日は十一時開場。昼の部は「鎌」「松平長七郎」「上陸第一歩」「別れ囃子」で四時半頃に終る。

夜の部は「仇討心中噺」「頼もしき求縁」「燕」「鉄の街」の四種であるが、朝からの観劇に少しく疲れたので、第三以下を見残して、佐久間、森部と共に八時頃に同座が出る。雨降りしきる。

八時三十分ごろ帰宅。寺田君から桜島の蜜柑を送つて来た。ほかに花田房子も来たといふ。

三日（土曜）雪、陰（四十八度）

午前九時起床。夜半から雨は雪と変つて、七八寸も積つてゐた。

十時頃から雪やんで陰る。黒川君に脚本料受取の郵便。渥美君にも郵便。寺田君（へ）も蜜柑の礼状を発送。

戯曲第二幕を訂正しながら浄書。

三時頃に俵木が自作の戯曲を持参、四時半頃まで話して去る。

六時半頃に講談社の鈴木君が来て、講談倶楽部に「半七捕物帳」を寄稿してくれといひ、八時頃まで話して去る。但し私は考へて置くといふのみであつた。

入浴。浅野君の戯曲「チャルメラ」「」の河岸」を編集。

十時半就寝。

四日（日曜）晴（五十度）

午前九時起床。

静岡の山本君から郵便が来て、細君が産後に感冒にかゝり、危篤の重態であるといふ。取りあへず見舞の品を小包み便で発送。石角君から戯曲を送つて来たので、返書。

けふは初午、姉とおえいは豊川稲荷へ参詣にゆく。

十二時頃に額田は自作の戯曲「義経記新釈」を持参、あはせて魚類をくれ、午後一時半頃まで話して去る。あとから佐久間も来た。

額田の戯曲を編集。和田方君から竹の子をくれた。

三時頃におえい等帰宅。やがて大磯のおさきが来て乾魚類をくれ、本月末に他へ縁付くことになったと云ふので、おえいから祝物をやる。

四時頃に山本未亡人が辰治君同道で来訪、五時頃に去る。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

五日（月曜）晴（四十八度）

午前九時起床。晴れて暖く、家根の雪しきりに解ける。

戯曲第二幕を訂正しながら浄書。

三時頃に大野文吾君夫婦が子供をつれて来て、床揚げの祝物をくれた。文吾君大いに元氣よろしく、全快の体であるのは目出たい。

文吾君等は四時頃まで話して去ると、それと入れちがひに大野の細君が来た。こゝで待合せる約束が間違つたのである。細君は廿分ほど話して去る。

七時半ごろ入浴。吉田君の戯曲「岩見重太郎」を編集

し終る。

十時半就寝。

六日（火曜）晴（四十八度）

午前九時起床。トタン屋が来て、家根庇を繕つてゆく。

戯曲第二幕を浄書し終つて、更に第三幕を浄書。

午後佐久間が来て、三十分ほど話して去る。

七時半ごろ入浴。八時頃に三橋が「舞台」の原稿を持参、門口で帰る。

読書。十時半就寝。

七日（水曜）晴（五十度）

午前八時半起床。

おえいと森部は紀尾井町的小林君方を訪問。

戯曲を訂正しながら浄書。十二時過る頃におえい帰宅。

一時過る頃に佐久間が来て、二時頃に去る。

三時頃に石井が来て、中野区桃園のアパートに移転したといひ、五時頃まで話してゆく。大阪の岸井からも転居の通知が来た。

七時半ごろ入浴。読書。森部は印刷所から「舞台」の七日会にまはつて、十時頃帰宅。

十時半就寝。

八日（水曜）晴（五十二度）

午前八時半起床。森部は早朝から研文社へ出てゆく。

戯曲第三幕の後半を起稿。慶応の学生が内田君同道で来て、三田歌舞伎研究第一巻をといてゆく。

午後一時頃に三橋が来て、これから研文社へ校正のスケに行くといひ、三十分ほど話して去る。つゞいて佐久間が来た。

けふは草稿頗る捗取る。六時半頃に森部帰宅。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

九日（金曜）晴（五十五度）

午前八時半起床。

森部は「舞台」の広告取りに出てゆく。

戯曲第三幕の後半を訂正しながら浄書。午後一時頃に佐久間が来た。四時頃に森部帰宅。終日晴れて春意あり。

水谷君が「舞台」の広告を周旋してくれたので、礼状を発送。静岡の山本君から見舞物の礼状が来て、細君いよ／＼絶望であるといふ。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十日以後、十日余りは、戯曲の執筆に追はれて、日記は型ばかりに付けて置く。～

十日（土曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

随筆「雪夜漫録」六枚をかいて、衆文社に郵送。午後佐久間が来た。寒い風が吹く。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

十一日（日曜）晴（五十四度）

午前八時起床。晴れて暖い。けふは紀元節。

戯曲第四幕を起稿。

午後一時過る頃に大村が自作の戯曲「小式部人形」を持参、二時半頃まで話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十二日（月曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

戯曲第四幕をかく。午頃に佐久間が来た。

午後六時半頃に松村松僊君来訪、十時半頃まで話して去る。

それから入浴。十一時半就寝。

十三日（火曜）晴（五十一度）

午前八時半起床。

戯曲第四幕をかく。午後一時頃に佐久間が来た。

七時半ごろ入浴。読書。八時頃に森部は研文社より帰宅。「舞台」三月号は校正済みになったといふ。

静岡の山本君から郵書が来て、細君は去十一日遂に死去したといふ。四児を残して早世、実に気の毒である。十時半就寝。

十四日（水曜）晴（五十二度）

午前八時半起床。

十時頃に前進座文芸部の宮川君が来た。つづいて河原崎長十郎夫妻が来た。前進座は来月九州地方を巡業、更に大阪で興行するに付、私の「唐人塚」を上演したいと云ひ、一時間あまり話して去る。

静岡の山本君に悔み状と香典を郵送。大村から伊豆の蜜柑を送つて来たので、返書。

戯曲第四幕をかく。その第一場は面白くないので、全部書き換へることにした。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十五日（木曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

戯曲第四幕を訂正しながら浄書。午後に佐久間が来た。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十六日（金曜）晴（五十一度）

午前九時起床。

戯曲第四幕を訂正しながら浄書。更に第三「三」〈五〉幕をかく。

六時過る頃に松村君が来て、私が揮毫の半折と短尺をうけ取り、十時頃まで話して去る。

それから入浴。十一時半就寝。

十七日（土曜）晴（五十二度）

午前九時起床。河原崎長十郎と宮川君が来た。

戯曲第五幕を脱稿し終る。

蒲田の渡辺から電話がかゝつて、津沢の寿子は今朝男児を分娩したといふ。

森部は亡父七回忌で今夜帰郷するといふので、仏前の供へ物及び土産物を持たせて遣る。森部は午後六時頃から出てゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十八日（日曜）晴（五十五度）

午前八時半起床。

おえいは早朝から品川の津沢方へ誕生祝に出てゆく。戯曲第五幕を訂正しながら浄書。十時頃に佐久間が来た。

十二時頃に紀尾井町の小林の細君が来たので、姉と私が相手になつて雑談。二時頃におえい帰宅。小林の細君は三時過る頃まで話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十九日（「火」）（月）（曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

大村の戯曲「小式部人形」と、佐久間の戯曲「犠牲」を編集。いづれも「舞台」の原稿である。それがために、けふは戯曲の浄書を中止。

新潮社から国民精神講座の原稿料を送つて来たので、返書。

午後一時半頃に小田原の飯野君が来て、三時頃まで話して去る。

六時頃までに大村等の戯曲の編集を終る。七時半ごろ入浴。

読書。十時半就寝。

二十日（火曜）晴（五十三度）

午前九時起床。

戯曲第五幕を訂正しながら浄書。午後三時半頃に終る。やがて中島が来たので、「舞台」四月号の戯曲原稿六種を渡してやる。印刷所が来月初旬に活字の入れ換へを

するので、四月号の原稿は例月よりも早く渡さなければならぬのである。中島は三十分ほど話して去る。

六時過る頃に佐久間が来て、額田から山崎紫紅君の戯曲原稿を託されたといふ。就いては山崎君の原稿も四月号に編入することゝし、印刷所へ明朝とゞけて呉れるやうに、佐久間に頼む。

七時半ごろ入浴。佐久間は九時頃まで話して去る。
十時半就寝。

二十一日（水曜）晴（五十二度）

午前八時半起床。

戯曲を再び訂正。帰郷中の森部から郵書が来て、勝間田町は十八日夜より十九日にかけて降雪、寒気が強いといふ。

夕刻までに戯曲第一幕と第二幕を訂正し終る。

額田から郵書が来て、啓三は武蔵野高等尋常中学校の入学試験をパスしたといふので、返書。横浜の山崎君にも寄稿の礼状を発送。

「舞台」三月号を高橋、東儀、清水、難波、池田、原田、林、津沢、渡辺の諸家に発送。

五時半頃に講談社の中村博君が来て「富士」に何か寄稿してくれといふ。直ぐには書けないが、そのうちに寄稿してもよいと答へて置く。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十二日（木曜）晴（五十七度）

午前八時半起床。

戯曲を訂正。十一時頃に佐久間が来た。

岡君から電話がかゝつて、明治座の三月興行に「相馬の金さん」を上演するに付、自分が舞台監督を引受けたといふ。何分よろしくお願い申すと答へる。

終日南風強く、温度は俄に昇つたが、砂塵舞ひあがる。

夕刻までに第三幕と第四幕を訂正（へし）終る。第四幕は殊に訂正が多いので、少しく疲れた。

六時頃に佐久間が来た。七時半ごろ入浴。佐久間は九時頃に去る。

十時半就寝。午前四時頃まで眠られず、起きてパンなどを食ふ。

二十三日（金曜）晴（五十度）

午前九時起床。きのふに引きかへて、けふは寒い風が吹く。

静岡の山本君から香典返しの茶を送つて来たので、返書。

午後三時半頃までに戯曲第五幕を訂正し終る。第一幕四十枚、第二幕廿六枚、第三幕三十八枚、第四幕三十九

枚、第五幕四十二枚、あはせて百八十五枚。題は「第一日の午前」といふ。苦勞の割合に成績が挙げなかつたやうであるが、兎も角も「舞台」四月号に掲載の筈である。四時半頃に森部帰宅、郷里から色々のみやげを持つて来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十四日（土曜）晴（五十三度）

午前八時半起床。

森部は私の戯曲原稿を印刷所へとゞけに行き、十一時ごろ帰宅。

大村の筋書「菖蒲前」に批評を添へて返送。武内君から郵書が来たので、返書。森部の兄から礼状が来たので、返書。

十日頃から日記を怠つてゐたので、心覚えだけ記入して置く。

松沢君から短尺の揮毫をたのんで来たので、揮毫、返送。

三時半頃から中目黒へ髪刈りにゆく。四時半ごろ帰宅すると、佐久間が来てゐた。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十五日（日曜）晴（五十三度）

午前八時半起床。

新聞をみると、直木三十五君は昨夜十一時四分、帝大病院で遂に死去したといふ。病を努めて奮闘、実にめざましいものであつたが、生きる力もいよ／＼尽きたと見える。一種悲壮の感も湧く。

十時頃に草場君が来て、十一時半頃まで話して去る。

午後一時頃に淀橋のおさだが子供をつれて来て、三時過ぎまで話してゆく。それと入れ違ひに、上松のおすが来て、三十分ほど話してゆく。

今夜は嫩会例会で、岡田と鈴木からは欠席の通知が来た。

四時頃に三橋が来た。つゞいて山崎、大村、中島、佐久間、額田が来た。例に依て私の江戸講話、それから劇談、雑談、十時ごろ散会。

それから入浴。十一時半ごろ就寝。

二十六日（月曜）晴、陰（五十一度）

午前九時起床。感冒のせゐか、頭が重い。

けふは直木三十五君の葬儀が文芸春秋社で執行される筈であるが、何分にも感冒で気分が悪いので、森部を代理に出してやる。「舞台」四月号の校正がけふから始まるので、森部は早朝から研文社へゆき、中途から葬儀

に廻るといふ。

読書。小田原の飯野君から「舞台」に戯曲掲載の礼状が来た。

午後一時頃に石井が来て、四五日前に帰郷、今朝帰京したといひ、三時半頃まで話して去る。明治座から初日の入場券を送つて来た。

頭が重く、頻りに咳が出る。熱を測ると、七度三分。今夜は入浴を休んで、服薬。

六時頃に佐久間が来た。七時過ぎ頃に森部帰宅。直木君の葬儀は盛大であつたといふ。

十時就寝。

二十七日（火曜）晴（五十二度）

午前九時起床。けふも咳が止まない。頭も重い。

星野君から木太刀の十句選をたのみ、併せて宇治の茶を送つて来たので、返書。直ぐに十句を選び、短尺に揮毫して返送。

武内君から郵書が来た。おえいは午後から津沢方へ行って、三時ごろ帰宅。能島君が来て、門口で帰る。

気分が悪いので、読書も身にしない。唯ぼんやりと半日を暮らしてしまつた。明治座から明日舞台稽古の電話がかゝつて来たが、病氣不参の返事をして置く。

今夜も入浴を休む。九時頃に佐久間が来て、親戚の子

供が死去したといひ、三十分ほど話して去る。

十時就寝。夜半に発汗、安眠。

二十八日（水曜）晴（五十六度）

午前九時起床。森部は研文社へ出てゆく。

咳はやゝ軽くなつたが、やはり気分はよくない。

来年九日の燦々会に講演にゆく筈であつたが、右の次第であるので何分にも咽喉を痛めてゐるので、岡田宛に断りの郵書を発送。偕行社から陸軍記念日の案内状が来たが、これにも不参の返書。

「舞台」の喫煙室の原稿二種をかく。四時頃に三橋が来て、門口で帰る。

六時過る頃に佐久間が来て、額田から頼まれたとて小さき柳を持参。八時過る頃に森部帰宅、これも印刷所から額田方へ廻つて来たといふ。

今夜も入浴を休む。服薬。十時半就寝。

本月の仕事は雪夜漫録（衆文、六枚）第一日の午前（前月のつゞき三幕、約百枚）ほかに舞台原稿の編集など。

（翻刻担当…阿部菜々香）

昭和九年三月

一日（木曜）晴（五十四度）

午前八時起床。

岩田君から私がこれまで諸新聞に連載した小説の題名を調べて来てくれたので、返書。額田に柳の礼状を出して置く。

午後一時半頃に佐久間が来た。けふは明治座の初日であるので、二時頃から森部と三人連れで出てゆく。俵木もあとから来た。石井も舞台社から来た。

三時開場。第一「里見八犬伝」中幕上「東郷平八郎閣下」中幕下「慶安太平記」第二「相馬の金さん」大切喜劇「素人芝居舞台稽古」で、第二の終りまで見物して、十一時頃帰宅。

私の咳はよほど軽くなつたが、咽喉を痛めたとみえて、声がスツカリ哑れてしまった。それがために、劇場内で種々の人々と挨拶するのに頗る困つた。

十二時就寝。

二日（金曜）晴、陰（五十二度）

午前九時起床。森部は研文社へ出てゆく。

十一時過る頃に佐久間が来て、午後一時頃まで話して去る。

咽喉がどうも悪いので、けふから吸入を始める。

大阪の岸井から郵書が来たので、返書。星野君から十句選の受取状が来た。

読書。六時頃に森部帰宅。今夜は五日目で入浴。

十時半就寝。夜半に霰の音。

三日（土曜）雪、陰（五十度）

午前八時起床。暁から雪、庭は白くなつてゐた。

けふは雛祭。十一時半頃に佐久間が来たので、白湯を飲ませ、午飯を食はせる。雪は差しても降らず、十時頃から止んで陰る。

大村から「菖蒲前」の筋書を訂正して来たので、批評を添へて返送。

藤田草之助君の戯曲「玩具」を編集し終る。

築地小劇場の薄田君が来て、同劇場で「修禪寺物語」を上演したいといふ。右は杏花十種に編入されてゐるので、左団次の承諾を求めてくれと答へて置く。講談社の鈴木君が来て、例の「半七捕物帳」は是非寄稿してくれと念を押してゆく。どうしても書かなければならない事になるらしい。

七時半ごろ入浴。けふも吸入二回。咳はよほど楽になつた。

十時半就寝。

四日（日曜）晴（五十二度）

午前八時起床。朝は一面の霜。

十時半頃に四谷伝馬町の江川台の番頭林福太郎君が来た。先代の主人大沢音吉は大正十四年中死去、今度その石碑を独力で連立するといふ。大沢はその昔、わたしの父に漢籍を習ひに来たことがあるので、その碑文中に漢籍を岡本半溪に学ぶと記入したいといふのである。勿論承諾。林君は三十分ほど話して去る。

読書。香川県引田町の寺島耕村君から「独吟」の寄贈を受けたと云つて来たので、一部郵送。

「■」〈四〉時頃に三橋が劇評を持参、門口で帰る。
六時半頃に佐久間が来た。七時半ごろ入浴。
けふも吸入二回。十時半就寝。

五日（月曜）晴（五十度）

午前八時半起床。森部は研文社へ出てゆく。風が寒い。
大阪の岸井から中井泰孝君の戯曲を送つて来たので、返書。

感冒がまだ全快せず、春寒料峭、なんとなく元気がない。終日読書。

額田から郵書が来たので、返書。午後に岸井から又もや郵書が来て、どうも健康を害したやうに思はれるので、七日の朝帰京、東京の医師の診察を受けるといふ。

二時半頃に森部帰宅。昨日が休日であつた為に、校正が多く出なかつたとの事である。

四時頃に木村君が来て、「舞台」四月号に掲載する私の戯曲「第一日の午前」の略筋を聴き、そのグラ刷が出来たらば送つてくれといひ、「四」五時半頃まで話して去る。

六時頃に佐久間が来て、七時頃まで話して去る。七時半ごろ入浴。

八時頃に中島が来て、四月号は何分ページ数が増加するので、額田と相談の上、特価七十銭に決定したといひ、九時頃まで話して去る。

けふも吸入二回。十時半就寝。

六日（「水」〈火〉曜）晴（五十一度）

午前八時起床。森部は研文社へ出てゆく。

十時半頃に佐久間が来て、十一時半頃に去る。読書。けふも寒い。吸入二回。

七時半ごろ入浴。読書。十時頃に森部は酔つて帰る。中島と銀座で飲んで来たといふ。

十時半就寝。

七日（水曜）晴（四十八度）

午前八時起床。感冒再発の気味で頭が重い。

森部が昨夜「第一日の午前」の校正刷を持参したので、
廿ページほど校了。

十時過る頃に岸井が来て、今朝上京したといふ。脚氣の気味だといふが、見たところでは元気が好い。午餐を喫して、一時半ごろまで話して去る。そのあひだに佐久間が来たので、校了の分を研文社へ届けてくれるやうに頼む。

岸井が去つた後、更に廿ページほど校了。三時頃に額田の細君が来て、啓三が中学入学祝「■」への強飯をくれ、四時頃まで話して去る。つゞいて岡田が来た。佐久間が引返して来た。二人は今夜の七日会に出席するとて、五時頃に連れ立つて去る。

今夜は入浴を休む。体温を測ると、七度三分。吸入二回。

九時頃に森部帰宅。七日会には岸井も出席したといふ。服薬。十時半就寝。

八日（木曜）陰、晴（五十度）

午前九時起床。陰つて細雨、やがて晴れる。

「第一日の午前」廿九ページ校了。森部は午後から研文社へ届けにゆく。

午後一時頃に佐久間が来た。一時半頃に俵木が来て、一時間ほど話して去る。つゞいて小田原の飯野が来て、

四時頃まで話して去る。

花田房子から別府の温泉懷炉を送つて来たので、返書。塩谷君から郵書が来たので、返書。岸井から電話で、今夜帰阪するといふ。

読書。今夜も入浴を休む。吸入二回。
十時半就寝。

九日（金曜）晴（五十一度）

午前九時起床。

十一時頃に佐久間が来た。十二時半頃に中村孝子が私の見舞に来て、門口で帰る。

電機商会の職人が来て、応接間の暖炉を修繕してゆく。東儀の姉が死去したといふので、森部を代理として会葬させる。葬式は午後二時、寺は浅草の行安寺である。新聞をみると、演芸画報社の三島君も死去したといふので、渥美君まで悔み状を発送。三時頃に中島が来て、三十分ほど話して去る。

読書。今夜は仁寿講堂で燦々会発企の演劇講話会があつて、私も講演に出る筈であつたが、感冒のために欠席、額田が代理として出演の筈である。

四時過る頃に森部帰宅。東儀の葬式は頗る盛大であつたといふ。

武藤山治氏遭難の記事が夕刊に委しく報道された。本

十一日（日曜）晴（五十三度）

午前十時起床。

十一時頃に佐久間が来た。

読書。終日来客無し。けふも吸入二回。

七時半ごろ入浴。北尾君の戯曲「手紙でんかん」を編集。

十時半就寝。

十二日（月曜）陰、雪（五十度）

午前九時起床。森部は研文社へ出てゆく。

午頃から雪。佐久間が来た。

「舞台」の雑文三枚をかく。雪は雨となり、更に又雪となる。

感冒が癒えないので、今夜は入浴を休む。吸入二回。七時半頃に森部帰宅。大坪君の戯曲「大阪築城記」を編集。

十時半就寝。その頃には雪紛々と降りしきつて、庭一面に白くなつてゐた。

十三日（火曜）雨（五十一度）

午前九時起床。雪は雨に変わつてゐた。

読書。午後一時頃に佐久間が来た。二時半頃に俵木が来て、三十分ほど話して去る。雑誌の広告の件である。

日午前九時十分頃、同氏は神奈川県大船町山内台八五一の自宅を出て上京の途中、ピストルにて射撃せられ、書生の青木茂は即死、武藤氏は重傷を負つたのである。犯人は荒川区上尾久五丁目一二〇八福島新吉、四十一歳。七時半ごろ入浴。けふも吸入二回。十時頃に研文社から「第一日の午前」のゲラ刷を速達便で郵送して来た。十時半就寝。

十日（土曜）晴（五十度）

午前九時起床。

十時頃に佐久間が来て、昨夜の仁寿講堂は盛会であつたといふ。

「第一日の午前」のゲラ刷を松竹本社の黒川君へ郵送。午後二時頃に俵木が来て、自分も嫩会に入会させてくれと云ひ、一時間ほど話して去る。けふは風吹いて砂塵舞ひあがる。

読書。感冒が癒えないので、仕事も手に着かない。

夜は中村孝子の戯曲「心ごころ」を編集。

七時半ごろ入浴。けふも吸入二回。

十時半就寝。今夜は午前三時過る頃まで眠られなかつた。

額田に郵書を送る。今夜も入浴を休む。吸入二回。
十時半就寝。雨は夜に入るも止まない。今夜へは午
前四時頃まで眠られなかった。

十四日（水曜）晴、陰、雨（五十八度）

午前十時起床。森部は研文社へ出てゆく。

越後の円山、伊予の和田といふ人々に頼まれた短尺に
揮毫、併せて八枚。昨夜不眠のために頭が重い。

三時頃に大村が自作の戯曲「菖蒲前」を持参、十分
ほど話して去る。大村に従軍当時の写真一枚をやる。

水谷君から芸術座再興十年の記念品を送つて来たの
で、返書。大阪の岸井から郵書が来たので、返書。

今夜も入浴せず。森部は七時半ごろ帰宅。校正はまだ
終わらないといふ。

宵から又もや雨の音。十時就寝。

十五日（木曜）晴（五十三度）

午前九時起床。

山崎が来て、ふたば会の会費をとぎ、門口で帰る。
おえいは八幡通りへ買物に出て、草花の鉢を買つて来た。

雑誌「若草」から随筆をたのんで来たので、二枚ほど
書きかけた処へ、午後二時頃に松竹の楨野君が来て、東
京劇場の四月興行に「第一日の午前」を上演することに

決定したといひ、三十分ほど話して去る。

楨野君は「第一日の午前」のグラ刷を置いて行つたの
で、多少の訂正を加へることにする。直ぐに筆を執つて、
六時頃に終る。

森部は夕刻から下山君を訪問すると出てゆく。八時
頃に中島が来て、森部不在と聞いて、そのまゝに去る。

今夜も入浴を休む。吸入一回。
十時半就寝。

十六日（金曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。

「第一日の午前」のグラ刷を速達便で松竹事務所へ発
送。森部は午頃から研文社へ出てゆく。

「若草」の随筆三枚をかく。あはせて五枚、題は「英
国の五月」

大村の戯曲「菖蒲前」を訂正。午後一時頃に佐久間が
来た。

四時頃に岡倉書房の主人が平山芦江君の紹介状を持
参、何か私の随筆集を発行したいといひ、三十分ほど話
して去る。

六時頃に佐久間が再び来た。七時頃に森部帰宅、全部
校了になったといふ。

今夜も入浴を休む。吸入一回。

讀書。十時半就寢。

十七日（土曜）晴（五十「三」〈五〉度）

午前八時半起床。

岡倉書房の随筆原稿をあつめる為に、古い書き捨ての原稿などを調べてみる。反古同様の物は沢山あるが、これはといふ物も見出されないもので少しく困った。

「舞台」の雑文三枚をかく。陽気は春めいて来たが、風が寒い。

今夜も入浴を休む。吸入一回。

夜は大隈俊雄君の戯曲「西郷隆盛の死」を編集。

おえいが廿日に明治座を見物するといふので、森部は同座へ入場券を買ひにゆくと、連日満員で好い椅子は買ひ得なかつたといふ。

十時就寢。

十八日（日曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。

けふは彼岸の入。姉とおえいは青山へ墓参に出てゆく。

随筆の原稿を訂正。十二時頃に佐久間が来た。

午後一時過る頃におえい等帰宅、新宿へ廻つて買物をして来たといふ。つゞいて渡辺の愛子が津沢の子供を連れて来て、三時頃まで遊んでゆく。

三時頃に中野が来て、四時半頃まで語る。

随筆を訂正し終る。およそ二百枚以上であらうと思はれる。余り面白いものも無い。

七時半ごろ入浴。吸入一回。

讀書。十時半就寢。南風が強く吹き出して、雨戸をゆるする音に屢々眼がさめた。これで気候は暖くなるであらう。

十九日（月曜）晴（六十五度）

午前八時半起床。晴れて春めく。

「現代」に頼まれた百字文を起稿して郵送。

午頃に佐久間が来たので、森部と三人連れで道玄坂付近を散歩。栄屋で喫茶。日中あるくと、汗ばむくらいである。

随筆を再び訂正。四時頃に松竹の岩谷君が来て、一時間ほど話してゆく。東劇四月興行の「第一日の午前」は岩谷君が演出を担当してくれるのである。

七時半ごろ入浴。吸入一回。三橋が来て、一時間ほど語る。

讀書。九時頃から俄に胸が悪くなつた。道玄坂で喫茶の際、焼林檎を食つたせみではないかと思はれる。

十時半就寢。寝苦しいので、夜半に幾たびか眼をさました。

二十日（火曜）晴（六十二度）

午前八時半起床。今朝も気分が悪い。

随筆のはしきを書き、目次を書く。題は「猫柳」

三時頃に中島が来て、おえい同道で明治座見物に出てゆく。森部も東劇見物に出てゆく。額田と海野から郵便が来たので、返書。

読書。八時ごろ入浴。製本屋から「舞台」四月号をとびけて来た。

十時四十分ごろにおえい帰宅。十一時頃に森部帰宅。十一時半就寝。夜半から南風が強く吹き出した。

二十一日（水曜）風雨（六十一度）

午前八時半起床。陰晴定まらず、風はいよ／＼吹き暴れる。

十一時頃に佐久間が来た。風には雨もまじつて来たので、雨戸を閉め切り、点燈して読書。佐久間は雨に降り籠められて、午後三時半頃に去る。

岸井から郵便が来たので、その返書をかいてみると、恰も岸井の父からも湯河原の干うどんを郵送して来たので、これにも返書。

宵から風雨やうやく衰へる。七時半ごろ入浴。

読書。十時就寝。けふの祭日は風雨のためにさん／＼であつた。

二十二日（木曜）晴、陰、晴（五十六度）

午前九時起床。

けふは彼岸の精進揚げを作ったので、姉は上松方へ持参、森部は額田方へ持参。

新聞号外によると、函館市は大火、全市四分の三は消失したといふ。取りあへず鳥飼登志子に見舞状を発送。感冒いまだ全快せず、その上に胃腸を害して、頗る不愉快。

午後一時頃に東京火災の黒田君が来て、現住宅六千円に対する保険金十三円廿銭を受取り、色紙の揮毫をたのんでゆく。

二時半頃に森部帰宅。ついで佐久間が来た。

三時過る頃に岡倉書房の主人が来て、随筆集「猫柳」の原稿を受取つてゆく。額田から風雨見舞の郵便が来た。読書。今夜は入浴を休む。十時就寝。

二十三日（金曜）晴（五十四度）

午前七時半起床。

新聞によると、函館市の大火の被害は焼失戸数二万三千余、死傷一千余名であるといふ。

原田君と北川千代子から風雨見舞の郵便が来たので、返書。木村富子から舞踊劇「花見奴」の原稿を送つて来

たので、返書。

佐久間が来て、長谷川君方へ原稿の催促に行つたところ、長谷川君は湯タンポで足部に火傷を負ひ、臥床中であつたといふので、取りあへず見舞状を発送。植木屋が来て、池の霜除けなどを取除け、来月初旬にへちまの棚を修繕に来るといふ。

平凡社の古河君が来て、佐々木味津三全集を発行するに付、私にも推薦文をかいてくれと云ひ、門口で去る。夕刻から気分が悪くなつたので、試みに熱を測ると、七度五分。

入浴を休んで、七時半頃から就寝。夜半に発汗。

二十四日（土曜）晴、風（五十五度）

午前九時頃に一旦起床して顔を洗ひ、再び寝る。

明日は嫩会例会であるが、何分この始末であるので、会員一同に電話又は郵便を以て明日休会の旨を通知。それを知らずに額田が来たが、私が睡眠中であるので、門口で帰る。

晴れて折々に陰り、強い風が吹く。兎角に気候不順である。

午後一時頃に植村君が来て烟草をくれ、俳句の選をたのみ、これも門口で去る。銀座の富多葉から鳥味噌と佃煮をとどけて来た。

夕刻に石井が見舞に来て、枕元で三十分ほど話して去る。

服薬。今夜も発汗。

二十五日（日曜）晴（五十三度）

午前八時頃、私の睡眠中に薄金兼次郎君来訪、病中と聞いて門口で去る。

けふも床の上に寝たり起きたりしてゐる。

午後二時頃に新妻君の細君と清水君の細君同道で来訪、応接間でおえいと話して去る。北林透馬君と鈴木余志子結婚の件である。いよ／＼来る二十日午後三時から横浜の伊勢山太神宮で結婚式を挙行するといふ。

佐久間が来た。大村、三橋、中島が見舞に来た。上松のおすゞも来た。

難波から「舞台」の礼状が来た。九州巡業中の前進座から大入袋を郵送して来た。

今夜も早く枕に就く。

二十六日（月曜）陰（五十六度）

けふも床の上に寝たり起きたりしてゐる。

おえいは三越へ買物に出てゆく。十一時頃に佐久間が来た。つづいて額田が「鮓を」へ来た。二人は一時間「■」（へほど）話して去る。同時におえい帰宅、北林君

と鈴木に贈るべき祝物と額田の啓三入学祝の贈物の配達を頼んで来たさうである。

終日陰つて寒い。

午後二時頃に大坂の岸井から電報が来て、明朝上京するといふ。

今夜も早く寝る。今度の感冒はどうも癒り切れない。

二十七日（火曜）陰、雨（五十四度）

床の上に起き直つて、佐々木味津三全集の推薦文をかき、平凡社へ郵送。北林君と鈴木に結婚祝の郵書を発送。

俵木が佐久間同道で見舞に来た。

午後一時頃に岸井が来て午飯を食ひ、三時半頃まで話して去る。岸井が上京の用件は、川村花菱君の「涙の四辻」に関する紛糾問題であるといふ。これは大阪側が不利であるらしい。

床の上で読書。四時半頃から雨。

今夜も早く寝る。

二十八日（水曜）陰、雨（五十六度）

午前八時頃起床。顔を洗つて又寝る。

岡田から電話で病氣見舞を云つて来た。岡田の叔父夫婦も感冒から肺炎を併発、一日ちがひで夫婦ともに死去したといふ。これには驚かされた。氣候不順のために感

冒患者が多いらしい。

横浜の北林君から病氣見舞の郵書が来たので、三十日の結婚式には病中参列し難いといふ断り状を出して置く。大阪の北村君から郵書が来たので、返書。京都の小林から自作の戯曲原稿を郵送して来た。長谷川君から返書が来て、火傷も大抵全快したといふ。

陰つて寒い日である。七時頃から雨。岡倉書房から随筆集「猫柳」の校正刷を速達便で送つて来た。

二十九日（木曜）雪（四十九度）

雨は夜半に雪と變つて、九時頃には紛々と降りしきる。春に入つて第一の大雪である。

床の上に起き直つて、随筆の校正にかゝる。十一時頃に佐久間が来た。

額田と啓三から祝物の礼状が来た。北林君と鈴木からも礼状が来た。

東京劇場から速達便で三十一日の舞台稽古を通知して来た。

夕刻までに初校四十八ページ校了。五時頃に岸井が来て、大阪からは鳥江君も上京したが、川村君との交渉は結局不調に終るらしいと云ひ、六時半頃まで話して去る。その頃には雪やむ。

八時ごろ入浴。廿三日以来である。直ぐに寝る。

三十日（金曜）晴（五十四度）

けふも床の上に坐つてゐる。

本年は父の三十三回忌、母の十三回忌に相当するので、それを兼ねて来月七日、即ち父の祥月命日に仏事を営むこととし、嫩会一同にはその速夜の六月に青山墓地へ参詣して貰ふことにしたので、その旨を一同に通知。

前田喜朗君作「平家の人々」を編集。これにて「舞台」五月号の戯曲編集を終る。

午後二時頃に新妻の細君が私の迎ひに来て、これから伊勢山太神宮に「参詣」〈案内〉するといふ。私が病中不参のことを知らないと見える。おえいが面会してその断りをいふ。路の悪いのに気の毒であつた。

七時半ごろ入浴。すぐに寝る。

三十一日（土曜）陰（五十度）

今朝から床払ひをする。陰つて寒い。

東劇の舞台稽古に付、午前十時半頃から出てゆく。

十二時頃から「第一日の午前」の稽古にかゝつて、五幕全部を終つたのは、五時半頃であつた。帰り際に恰も楽屋口で佐久間に出逢つたので、自動車に同乗して六時ごろ帰宅。留守中に中島が来て、五月号の原稿を受取つて行つたといふ。

七時半ごろ入浴。随筆集の校正刷到着。

十時就寝。

本月は兎角病氣のために、これといふ仕事もしなかつた。英国の五月（若草、五枚）その他は「舞台」の編集、随筆集の編集など。

（翻刻担当…加瀬桃子）

昭和九年四月

一日（日曜）雨（五十度）

午前九時起床。

額田から郵書が来て、横浜の結婚式は滞りなく終つたといふ。返書。

午頃に佐久間が来た。終日雨降りしきる。

六時頃までに随筆集の初校八十ページ校了。

七時半ごろ入浴。十時就寝。

二日（月曜）陰（五十度）

午前八時起床。

十時半頃に中島が来た。つゞいて佐久間が来た。森部と四人づれで十一時頃から東劇の初日見物に出てゆく。

東劇は昼夜二月興行で、昼の部は「相馬大作」「鏡山」

「お夏狂乱」夜の部は「花見奴」「第一日の午前」「小言幸兵衛」

午後十一時十五分帰宅。けふは随分寒い日であつた。

額田と大村から六日参列の通知が来た。大阪の岸井から郵書が来て、本日大阪を引払つて帰京するといふ。川村君の問題破裂の結果であるらしい。

今夜は入浴せず。十二時、就寝。

午前二時頃に門を叩いて、岡倉書房の速達便をとどけ

て来た。随筆集の校正刷である。やがて又、三時頃に門を叩いて、和田方君の姪が来て、突然に金を貸してくれといふ。おえいが出て断り、自動車賃をあたへて帰してやる。

夜半に二度も叩き起されたので、曉まで眠られなかつた。

三日（火曜）陰、雨（五十一度）

午前八時半起床。けふは神武天皇祭。

十時半頃に北林君と鈴木夫婦、清水万寿美君（北林君の義兄）と清水君の子ども二人、あはせて五人連れで挨拶に来た。清水君は私の撮影などして、十一時半頃に去る。その頃から細雨。

つゞいて岸井が来て、大阪退去の事情を陳述、已に松竹に退社届を提出して帰京した以上、今更何とも云ひやうもない。岸井は一時間あまり話して去る。雨はいよ／＼強くなる。気候も寒い。日曜といひ、祭日といひ、いつも不天気でさん／＼である。

目黒の在郷軍人会から函館大火の義援金募集に来たので、相当の寄付をして置く。俵木から六日参列の返書が来た。

夕刻までに随筆集の初校八十ページ校了。六時頃に佐久間が来た。

八時ごろ入浴。十時半就寝。

四日（水曜）晴、陰（六十五度）

午前八時半起床。南風強く、温度昇る。

十時半頃からおえいと森部同道で、銀座の三越へ買物にゆく。七日の仏事に付、森部や女中等に遣る反物類を買ふ為である。つひでに私の夏物その他を買ひ、銀座で昼餐。更に銀座のふたばへ立寄り、来る六日に十人ばかり来会のことを通知。午後一時半ごろ帰宅。

植村君に頼まれた俳句を選了、あはせて短尺七枚に揮毫。

黒川君の使が来て、東劇の上演料をとめて呉れたので、返書。キングの室井君が原稿をたのみに来たが、断る。

岡倉書房から随筆集の校正刷を送つて来た。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半ごろ就寝。枕に就くと、忽ちに鼻血が流れ出して困つた。

夜半におびたゞしく発汗。やはり感冒が癒えないと見える。

五日（木曜）晴、陰、雨（五十五度）

午前九時起床。昨夜はおびたゞしく発汗、寢床の敷蒲

団一枚を透して、二枚目までが湿れてゐたには驚いた。森部に命じて、下谷筆筒町の菰野彦三郎君方へ香典を持たせて遣る。菰野君の父市蔵は左団次方の久しい番頭で、先ごろ八十歳を以て死去したのである。

随筆の校正五十六ページ校了。あはせて二百八十ページの初校全部を終つたのである。二百ページぐらゐと予想してゐたのが、案外に長くなつた。

午後佐久間が来た。五時半頃に三橋が来て、仏前に香料をとゞけ、一時間あまり話して去る。大村からも仏前に野菜の籠をとゞけて来た。

七時頃から雨。今夜は入浴を休む。
十時就寝。

六日（金曜）陰（四十九度）

午前八時起床。

床の間に父母の写真をかざり、野菜、果物、菓子のごひを供へて、一家焼香。姉と森部、おきみ、おすみに志の品をやる。

十時頃に三橋が来た。つゞいて佐久間が来「てい」た。

十時半頃から森部と四人づれで青山墓地へ出てゆくと、茶屋の岡野には大村、額田、岸井、石井、山崎、俵木等がもう待受けてゐた。中島もつゞいて来た。

私をあはせて十一人、墓前に参拜。嫩会からは生花一

対を供へてくれた。昨夜の雨は幸に止んだが、陰つて寒く、今にも再び降り出しさうな空模様であつた。例年今頃は墓地の横も六分通り開くのであるが、今年は殆ど花を見ない。気候がよほど遅れたのである。

十一時半頃から一同自動車をつらねて、銀座七丁目の富多葉に着き、こゝにて昼餐、雑談。三時頃にこゝを出る。

銀座で思ひ／＼に解散、私は森部と共に三時半ごろ帰宅。

菰野君から昨日の礼状が来た。草場君から自作戯曲の原稿を送つて来た。ほかに京都の森田と大阪の鳥江君から郵書が来た。これは岸井が大阪引揚げの件であるので、取りあへず返書を出して置く。

今夜も入浴を休む。七時頃から雨。

十時就寝。午前四時頃に強震、おどろいて起きた。

七日（土曜）晴、陰（五十一度）

午前八時起床。

姉とおえいは青山へ墓参にゆく。けふも陰つて風が寒い。

山梨の河野君が来て菓子をくれ、門口で帰る。十一時半頃に佐久間が来た。

京都の小林から竹の子を送つて来たので、返書。

森部は午後から研文社へ校正に出てゆく。おえい等は一時頃帰宅。

読書。今夜も入浴を休む。宵からひどく眠くなつたので、八時頃から就寝。今夜も少しく発汗、感冒がまだ癒えないと見える。

新聞によると、今晩の地震は福島県の沖合であるといふ。

八日（日曜）晴（六十度）

午前九時起床。森部は朝から研文社へ出てゆく。

植木屋が来て、樹木を植え換へ、入口に飛び石を敷く。

午後一時頃に塩谷君が来て、先頃の火事見舞の礼をいひ、一時間あまり話して去る。つゞいて額田が子供三人を連れて来て、三時半頃まで話して去る。そのあひだに、大村も劇評の原稿を持参。佐久間も来た。

上松武雄から郵書が来たので、返書。岡倉書房に郵書を発して、随筆集の再校はそちらで見えてくれるかと問合せてやる。

七時過る頃に森部帰宅。今夜は八時ごろ入浴。

夕刊をみると、花はまだ五分ほど開かないが、けふの日曜はいづこも花見客で非常に賑はつたといふ。

十時就寝。

九日（月曜）晴（六十度）

午前九時半起床。風が吹く。

けふも植木屋が来て、へちまの棚を釣りかへる。

静岡の山本君から郵書が来たので、返書。草場君にも返書。前橋の藤嶋君から郵書が来て、先頃転居したといふ。これにも返書。

午頃に佐久間が来て、胃腸を害して困つてゐるといふ。

藤沢の遊行寺から色紙の揮毫をたのんで来たので、二枚揮毫。

七時半ごろ入浴。やがて佐久間が再び来た。

岡倉書房から速達便で再校三十二ページを送つて来たので、校了。

おきみは宵から巢鴨の植田君方へ行つて、九時ごろ帰宅。

一十時就寝。

十日（火曜）晴、陰（六十二度）

午前九時起床。けふも植木屋が来た。

おえいは早朝から四谷の丸尾君と紀尾井町の小林君を訪問、十一時頃帰宅。佐久間が来て、これから額田方へゆくと云ひ、三十分ほど話して去る。森部は研文社へ校正に出てゆく。

「滑稽な怪物」二枚半をかく、「現代」の原稿である。

「関羽の芝居」三枚をかく、「舞台」の原稿である。

中井泰孝君の戯曲「竺志舟物語」を編集。午後二時頃に津沢の寿子が出産祝の礼に来て、三時半頃に去る。

今夜は入浴を休み、八時頃から寝る。やがて佐久間が再び来て、長谷川君の原稿と三共製薬会社の広告料をとる。

十一日（水曜）陰（六十二度）

午前十時起床。

十一時頃に佐久間が来て、十二時頃に去る。

中井君の「竺志舟物語」を編集。三時半頃に岸井が来て、二時間ほど話して去る。

夕刊をみると、瀬戸英一君が今朝零時三十分急性肺炎で死去したといふ。突然の訃音におどろかされた。瀬戸君は四十三歳、いかにも惜いことであつた。取りあへず明朝森部を使として、香典を届けさせることにする。十六日の告別式には私が参列する筈である。

六時半頃に佐久間が再び来て、これも瀬戸君の訃報に驚いてゐた。

今夜も入浴を休む。丸尾君から昨日の礼状が来たので、返書。

十時半就寝。夜半より南風が吹き出して、午前四時頃より雨の音もまじつて聞えた。

十二日（木曜）陰（六十八度）

午前九時起床。陰晴定まらず、南風が強い。

十一時過る頃に蒲田の渡辺君が来た。愛子結婚の件である。

午後一時半頃に東京毎日新聞の佐藤君が来て、同新聞創刊六十五年に相当するとして、私が在社当時の昔話を聞いてゆく。

額田から郵書が来たので、返書。小田原の飯野君から転居の通知が来たので、返書。

小林の戯曲「海浜日記」を編集。七時頃に佐久間が来た。

八時ごろ入浴。森部は瀬戸君方へ悔みに行き、それから研文社へ廻つて、八時ごろ帰宅。

十時半就寝。風の音が止まない。夜半に発汗、起きて寝まきを着かへる。

十三日（金曜）雨（六十度）

午前十時起床。雨は八時頃から降り出してゐた。

平凡社から佐々木味津三全集を送つて来たので、返書。小林の戯曲「海浜日記」を編集し終る。何か新らしく書いてみたい気があるながら、どうも取りかゝる気力もない。

八時ごろ入浴。岡倉書房から「猫やなぎ」奥付の印紙

を送つて来たので、森部に命じて捺印させる。

十時就寝。

十四日（土曜）晴、陰（五十九度）

午前八時起床。雨は晴れたが、風が寒い。

額田から返書が来て、瀬戸君の葬儀は舞台社から花環を送るといふ。森部は研文社へ出てゆく。

大村の戯曲「菖蒲前」を訂正、その批評を添へて返送。午後一時頃に佐久間が来「た。」て、これから神田へ行くといふので、原稿紙を買つて来るやうに頼む。

「舞台」の雑文三枚をかく。晴又陰、氣候がまだ本順でない。

八時ごろ入浴。佐久間が再び来て、文房堂の原稿紙をとどけてくれた。つゞいて森部帰宅。「舞台」五月号の校正を終つたといふ。

十時半就寝。

十五日（日曜）陰（六十二度）

午前九時起床。

世田谷警察署から呼出し状が来て、和田方の件に付、十六日午前九時出頭せよとある。和田君が何事かを仕出したとみえる。

来る十八日「■」は山下の一週忌である。月日の早い

のが今更に驚かれる。山下が郷里の父に郵書を発送。山下の墓は東京に無いので、墓参も出来ないのである。

十二時過る頃に草場君が緋鯉と金魚を持つて来てくれた。昨年貰った緋鯉が寒気に斃れたが為である。草場君は二時頃まで話して去る。

ついで額田が来た。額田も和田君の一件で、今朝世田谷署へ召喚されたのである。和田君は演劇史編集の資料として諸家より書籍を借出し、それを売却又は質入れしたのであるといふ。額田は多少の書籍を貸したさうであるが、私には何の被害もない。被害がなければ代人出頭でも差支へないといふので、明日は森部を代理に出すことにする。額田はこれから瀬戸君方へ生花を供へにゆくと云ひ、三時過る頃に去る。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十二時頃から醒めて眠られず、夜半より風の音、雨の音。

十六日(月曜)雨(五十九度)

午前九時起床。雨ふり頻る。

やがて森部が世田谷署から帰つて来た。当方に被害が無いといふので、取調べも簡短に済んださうである。

大村から原稿うけ取りの返書が来た。小田原の飯野君からも病氣見舞の礼状が来た。

十一時頃に佐久間が来たので、十二時半頃から同道して青山墓地斎場へ出てゆく。瀬戸君の告別式である。葬儀は新派更新会で担任、いはゆる新派葬といふべきものであるから、なか／＼の葬儀であつた。こゝで岩谷君に逢ひ、「劇と評論」に短い追悼記事をかいてくれと頼まれた。一時半ごろ帰宅。

雨は一旦小降りとなつたが、又降りしきる。

「瀬戸君の死」三枚をかいて、岩谷君に郵送。

読書。八時ごろ入浴。九時半就寝。

十七日(火曜)晴(六十一度)

午前九時起床。雨は晴れたが、風が寒い。

おえいは私の起きぬ間に、世田谷の上松方へゆき、十二時半ごろ帰宅。そのあひだに佐久間が来て、一時間ほど話して去る。

崎村君の細君死去の通知があつたので、悔み状に香典を添へて郵送。越後の円山君から俳句の選をたのんで来たので、選了、返送。

午後三時頃からおえい、森部と三人連れで渋谷へ行き、宮益坂の興農園で草花類の種子をかひ、道玄坂で晚餐。五時廿分ごろ帰宅すると、恰も岸井が来た。岸井は自作の戯曲を持参、六時半頃まで話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。暁まで不眠。

十八日（水曜）晴、陰（六十二度）

午前十時起床。けふも風吹く。

私の起きない間に、大山功君が来て「芸術殿」に寄稿をたのんで行つたので、承諾の返書。神戸の前田君から郵書が来たので、返書。

午頃に佐久間が来た。森部が花壇に草花の種子を播く。私も庭に出て手伝ふ。陰晴定まらず、風もやまない。読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

十九日（木曜）晴（六十五度）

午前八時起床。

九時半頃に佐久間が来て、祖父の容態よろしからず、午後には葡萄糖の注射を行ふ筈であるといふ。所詮回復の望みはないらしい。

十時頃に渡辺の愛子が来て、いよく結婚の相談整ひ、六月初旬に横浜の児玉家へ縁付くことに決定したといひ、一時間ほど話して去る。

晴れて風無く、氣候も漸く本順に向つたらしい。庭に出て散歩。二時半頃から髪を刈りにゆく。久しぶりでサツパリした。

「舞台」五月号の製本出来して届けて来た。六時頃に佐久間が再び来て、祖父はいよく絶望であるといふ。七時頃に岡倉書房の主人が来て、「猫やなぎ」の製本

十部をとゞけ、三十分ほど話して去る。十部では不足であるので、更に廿部とゞけて呉れるやうに頼む。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十日（金曜）晴、雨（六十六度）

午前八時起床。

十一時頃に久保田君が来て、画会の揮毫が出来したと云ふので、既定の会費を渡す。久保田君は明日松島へ旅行するといひ、十二時過る頃まで話してゆく。

午後一時頃に難波が菓子を持参、二時過るまで話して去る。

「猫やなぎ」を長谷川、北林、中村、草場の諸家へ郵送。「舞台」五月号を原田、池田、清水、難波、東儀、林、高橋、津沢、渡辺の諸家へ郵送。額田から郵書が来たので、返書。

読書。六時頃に佐久間が来て、祖父は依然昏睡状態をつゞけてあるといふ。夕刻から雨、又やむ。

八時ごろ入浴。十時就寝。夜半大雨。午前四時頃まで眠られなかつた。

二十一日（土曜）雨、陰（六十四度）

午前八時起床。雨降りしきる。

新聞をみると、市川左団次の母は昨廿一日午前十一時

廿分死去、その告別式は廿三日であるといふ。菰野君から亡父七々日の配物を送つて来たので、返書へ。木村富子から舞踊劇「春日物狂ひ」を送つて来たので、返書。

額田の細君が臥病中であるといふので、十一時頃から森部に菓子折と「猫やなぎ」一部を持たせて遣る。午頃に佐久間が来た。

読書。昨夜不眠のためか、頭がぼんやりしてゐる。二時半頃に森部帰宅、額田の細君の病場はデブテリア類似の物であるといふ。

夕刊をみると、関直彦氏が本日午後一時四十分死去したとある。氣候不順のせゐか、いつ方にも不幸が多い。

七時頃に佐久間が再び来た。八時ごろ入浴。

十時半就寝。今夜は安眠。

二十二日（日曜）晴（七十度）

午前八時起床。

北林君から感冒見舞の郵便が来たので、返書。誌友の岩田君から郵便が来たので、返書。三橋が自作の戯曲を持参、一時間ほど話して去る。

晴れて暖く、近來の好天気であるので、十一時半頃から道玄坂付近を散歩。渋谷駅前には忠犬ハチ公の銅像が建設され、昨日その除幕式を挙行したので、駅前には見物人が混雑してゐた。道玄坂で昼餐、一時ごろ帰宅。

氣候が暖くなつたので、花壇に播いた草花の種子がおひ／＼に発芽、自我に発芽したのも随分ある。

三時頃に岸井が来た。つゞいて佐久間が来た。上松のおすゑが来た。

おすゑは姉とおえいと三人連れで道玄坂へ出てゆく。岸井は五時過る頃まで話して去る。六時過る頃におえい等帰宅。

七時半ごろ入浴。八時頃に佐久間は去る。

読書。十時半就寝。十二時頃から醒めて四時頃まで眠れなかつた。

二十三日（月曜）陰、晴（六十八度）

午前八時半起床。陰つて雨模様である。

十時頃に佐久間が来て、祖父もいよ／＼けふ一日ぐらゐの余命であらうといふ。左団次の母の告別式が十一時から駿河台の自宅で営まれるので、十時半頃から出てゆく。神田へ行き着く頃には細雨。

式の如くに焼香して帰途に着くと、途中から雨やんで晴れかゝる。渋谷で昼餐。十二時半ごろ帰宅。

岸井の戯曲「一緒には」を読む。晴れて風が吹き出した。

七時半頃に佐久間から電話がかゝつて、祖父は七時十五分遂に死去したといふので、取りあへず森部同道で出

てゆく。

佐久間方には近所の人々及び出入りの職人が来て立働いてゐた。高崎君の細君も来てゐた。細君は見舞に来て、恰も臨終の間に合つたのであるといふ。つゞいて額田も来た。電話又は郵便で、嫩会員一同にも通知。

森部は佐久間方に一泊することゝし、額田と私は十時半頃に出る。生暖い風が強く吹いてゐる。

入浴。十二時就寝。

二十四日（火曜）雨、陰（六十五度）

午前八時起床。暁より雨も加はつて、なんとなく暴れ模様である。

長谷川君から「舞台」の戯曲原稿を送つて来（てくれ）たので、返書。大村は感冒臥床中であるといふので、見舞状を発送。

草場君、北林君、中村孝子から「猫やなぎ」の礼状が来た。

森部は午前中に一度帰宅して、再び佐久間方へ出てゆく。おえいも香典と供へ物をたづさへて、佐久間方へゆく。

関直彦氏の告別式で、午後一時半頃から青山墓地斎場へ出てゆく。雨天ながら参列者おびたゞしく、流石は政界の名士であつたことを思はせた。二時半ごろ帰宅。改

造社から「修禪寺物語」増版の捺印を頼みに来た。

やがて岸井が来たので、同道して佐久間方へゆく。雨やんで陰る。

佐久間方には三橋がもう来てゐた。つゞいて額田も来た。他の悔み客も七八人来た。七時ごろに遺骸を納棺。告別式通知のハガキが出来たので、岸井、三橋、森部等がその宛名をかく。

私は額田等と共に、十時半頃にこゝを出る。十一時過る頃に森部も帰宅。

入浴。十二時就寝。

二十五日（水曜）晴（六十五度）

午前八時起床。森部は朝から佐久間方へ出てゆく。

大村が「見」病臥中といふので、見舞状を発送。

午後二時頃に岡田が嫩会の会費を持参、これから佐久間方へ行くとして去る。つゞいて北林余志子が来て、これ「から」も佐久間方へ行くとして去る。

講談社の記者が来ておえいに面会、原稿の催促をして行つたといふ。

長谷川君の戯曲「切支丹電信」を編集し終つて、四時頃から佐久間方へ出てゆく。恰も大村が悔みに来て帰るのに出逢つた。大村は廿三日から起床することになつたといふ。先づは結構である。

佐久間方には親戚その他が七八人あつまつて居た。岸井、額田、三橋、山崎、中島、俵木等もつゞいて来た。岡田と北林をあはせて八人、石井だけは数日前から行方不明で不参。六時頃からおえいも来た。

今夜は通夜であるので、菩提寺の僧が来て読経する。但し我々は半通夜といふことにして、十一時過るころ退散。私もおえいと共に帰宅。入浴。十二時頃に森部も帰宅。

午前一時就寝。

二十六日（木曜）晴（六十五度）

午前八時起床。晴れてはあるが、風が冷たい。

佐久間方では午前十一時から十二時まで告別式を営む筈であるので、十時頃から出てゆくと、嫩会員もみな来てゐて、受付その他の手伝ひをする。姉もおえいもあとから来た。他の会葬者は余り多くなかつた。

十二時に式を終つて、十二時半頃から出棺。親戚一同、嫩会一同も自動車で桐ヶ谷の火葬場へ向ひ、無事に骨揚げを済ませて、三時頃に佐久間方へ帰着。岸井等が会葬者への礼状をかく。

これで一先づ片付いて、五時半頃に退散。私も帰宅。七時過るころ入浴。やがて森部も帰宅。

それからそれへと葬式がつゞいて、少しく疲れた気味

である。

十時半就寝。

二十七日（金曜）晴、陰（六十八度）

午前九時起床。

私の寝てゐるうちに、渡辺の愛子が来てゐて、「十一」〈十〉時頃に去る。つゞいて佐久間が挨拶に来た。佐久間は大阪の親戚を案内して、これから多摩陵参拝に赴くといふ。

陰晴定まらず、温度やゝ昇る。頭の重い日である。雑誌「富士」の中村君が来て、原稿を催促してゆく。

読書。山形の本間君から郵書が来たので、返書。額田にも郵書を發して、細君の病状を問ひ合せてやる。

庭の草花がおひ／＼に発芽、氣候不順と云つても、やはり初夏である。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十八日（土曜）晴、陰（六十四度）

午前九時起床。庭を散歩。

額田から電話がかゝつて、細君の容態が余り宜しくないので、明日の佐久間の初七日墓参には出向き兼ねるといふ。取りあへず森部を見舞にやる。それからそれへと事件が続くのは困つたものである。

「芸術殿」の原稿六枚をかく。陰晴定まらず、薄寒い風が吹く。

二時半頃に森部帰宅、額田の細君は全身にムクミを生じ、或は心臓麻痺を起すかも知れぬといふ。どうも心配なことであるが、何とも致方がない。

六時過る頃に佐久間が来た。七時半ごろ入浴。

読書。十時半就寝。今夜も十二時頃から醒めて眠られなかつた。

二十九日(日曜)陰、雨(六十度)

午前八時起床。けふは天長節。朝から陰る。

佐久間家初七日の仏参に付、九時四十分頃から森部同道で出てゆく。寺は谷中上三崎北町の安立寺である。佐久間の親戚、出入りの職人等のほかに、嫩会員は中島、三橋、岡田、俵木、山崎等参会、額田と岸井は不参加。

本堂にて式の如く読経、焼香。十一時半頃に終る。それから一同は自動車を進んで、上野の精養軒に赴き、こゝにて昼餐。雨が降り出した。

二時頃にこゝを出て、佐久間、中島、岡田、森部と自動車に同乗。途中で岡田に別れ、他は私と共に帰宅。雨はいよ／＼降りしきる。

中島に「舞台」六月号の戯曲原稿七種を渡す。三時半頃中島と佐久間は去る。

けふは日曜と祭日を兼ねて、所々に人出が多かつたであらうに、午後からの雨は気の毒であつた。

七時半頃に東京日日新聞の志田君が来て、東京の昔話を聴かせてくれと云ひ、九時頃まで話して去る。それから入浴。

小田原の飯野君から郵便が来て、入院中の父は去十七日遂に死去したといふ。いづ方にも不幸の多いことである。

十時半就寝。雨はやまない。

三十日(月曜)雨、陰(六十度)

午前八時半起床。細雨。

森部に果物を持たせて、額田方へ見舞にやる。十時半頃に佐久間が来て、葬儀の跡始末も先づ一埒あいたといふ。

悔み状に香典を添へて飯野君に発送。「衆文」編集局にあてゝ原稿料受取りの返書。

十二時過る頃に森部帰宅。額田の細君は先づ現状維持であるといふ。

「芸術殿」の原稿二枚をかく。あはせて八枚。「大劇場を憂ふ」と題して、大山君に郵送。

午後から雨やんで陰る。気候も薄寒い。

岸井と中島の戯曲をよむ。七時半ごろ入浴。

八時頃に佐久間が再び来て、九時頃に去る。

十時半就寝。

本月は何かゴタ／＼して、殆どこれといふ仕事もしなかつた。来月は少しく勉強しなければなるまいと思ふ。

(翻刻担当…加瀬桃子)

昭和九年五月

一日（火曜）晴

午前八時起床。朝の風が寒い。まことに不順の氣候である。

おえいは蒲田の渡辺方へ愛子嫁入りの祝物を持参。森部は床の間に五月人形を飾る。

大村から原稿と会費を送つて来たので、返書。大村の手紙によれば、弘津千代子の父が死去したといふので、悔み状を発送。実に不幸の多いことである。

十時頃に佐久間が来た。十二時過る頃におえい帰宅。愛子は六月七日結婚式を挙げることに決定したといふ。

午後一時頃に岸井が来た。つゞいて東京火災の黒田君が菓子を持参、私が揮毫の色紙を受取つて二時頃まで話して去る。岸井はあとに残つて三時頃に去る。

読書。五時半頃に三橋が「舞台」の原稿を持参、一時間ほど話して去る。

七時ごろ入浴。読書。八時頃に佐久間が再び来た。十時半就寝。

二日（水曜）晴、陰、雨（六十二度）

午前八時起床。

九時頃に佐久間が来て、これから永田衡吉君と三田村

鳶魚君に誌友会の講演をたのみに行くといふ。

十時半頃「に」へから「おえいと森部同道で、銀座の松坂屋へ買物にゆく。今月は津沢の次男の初の節句であるので、武者人形の発送をたのみ、他に雑品数点を買つて食堂で昼餐。更に三越の支店へまはつて、こゝでも少しばかりの買物をして帰る。空は陰つて雨を催して来た。十二時四十分頃帰宅すると、恰も三橋が来た。三橋は昨夜の原稿を少しく訂正したいと云ひ、森部の部屋で訂正して去る。私も三越から座敷用の鯉幟などを買つて来たので、床の間にかざる。ついでに書棚の玩具類を整理。

三時頃に渡辺の博が来て、妹の結婚と自分の縁談とに就て昨日上京したといひ、二時間ほど話して去る。

大山君から「芸術殿」の原稿うけ取りの返書が来た。

五時半頃から驟雨、雷鳴。

七時半ごろ入浴。読書。八時半頃から雨やむ。九時頃に佐久間が再び来て、永田君は承諾、三田村君は不在であつたといふ。

十時半就寝。

三日（木曜）晴（六十四度）

午前九時起床。森部は朝顔の種をまく。

十時頃に佐久間が来て、十一時頃に去る。弘津千代子から返書が来た。

講談社から春來依頼されてゐる「半七捕物帳」をいつまで打捨てゝ置くわけにも行かないので、今朝から材料を調査、試みに六枚ほど書いてみる。

午後三時半頃に東京日日の志田君が来て、再び東京の昔話を聴き、一時間あまり話して去る。

京都の新興キネマ白君から竹の子一籠を送つて来たので、返書。

渡辺の愛子から祝物の礼状が来た。岸井から舞台の原稿を送つて来た。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

四日（金曜）晴（六十五度）

午前九時起床。

十時頃から森部同道で新宿へゆき、興農園でダリヤ其他の草花の苗をかひ、三福の食堂で昼餐。十三時四十分ごろ帰宅。

北林君から其著「港の日本娘」を送つて来たので、返書。気賀君子から富山の鱒鮓を送つて来たので、返書。

二時頃に石井が来て、先月末から信州へ旅行してゐたと云ひ、一時間ほど話して去る。三時半頃に佐久間が来て、五時半頃に去る。

津沢の寿子から電話で武者人形の礼をいひ、明日の節句には午後からおえいに来てくれといふ。

読書。七時半ごろ入浴。九時頃に佐久間が再び来た。十時半就寝。十二時頃に眼がさめて、午前四時頃まで眠られなかつた。

五日（土曜）晴（七十一度）

午前九時起床。

十時頃に佐久間が来た。つゞいて正岡蓉君が来て、十一時半頃まで話して去る。正岡君に「猫やなぎ」一部を贈る。

津沢方の節句で、おえいから午後から出てゆく。

晴れて漸く初夏らしい天気となる。庭のつゞじも今が盛りである。

昨夜不眠のために頭が重く、庭などを散歩して半日を暮らしてまつた。三時頃におえい帰宅。

七時頃に佐久間が再び来た。八時ごろ入浴。今夜は菖蒲湯。

十時半就寝。

六日（日曜）晴（七十度）

午前九時起床。

三橋が来て、再び自作の戯曲を訂正して去る。つゞいて草場君が来て、鉢植のさつきをくれ、門口で去る。

菅原寛君が神戸の長谷川善雄君同道で来訪、一時間あ

まり話して去る。そのあひだに、佐久間の親戚藤井銀之介君が森川君同道で来訪、佐久間家葬儀について厄介になつた礼を述べてゆく。

午前中、来客が多かつたので少しく疲れた。庭へ出て散歩。緑樹薫風、まつたく初夏らしい気分である。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

七日（月曜）晴（七十二度）

午前九時起床。快晴。

十一時頃に佐久間が来た。「若草」と「現代」から原稿料を送つて来たので、返書。秋庭君から私の写真を返送して来たので、返書。

森部は午後から神田へ行き、二時半ごろ帰宅。

庭のつゝじ、鳶尾草、胡蝶花、山吹など盛に開く。

四時頃に麹町の大野君来訪、五時過る頃まで話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。不眠。

八日（火曜）晴（六十九度）

午前九時起床。森部「から」へ「は」今日から研文社へ校正にゆく。

朝から南風強く、殊に昨夜睡眠不足のために頭が重い、午後から勉強して「半七捕物帳」を書き始めると、

一時頃に大村が戯曲の筋書を持参、三十分あまり話して去る。

つゞいて俵木が自作の戯曲を持参、一時間半ほど話して去る。

山形の本間君から郵書が来たので、返書。庭へ出て水まきの手伝ひなどする。風は止まない。

六時半頃に黒川君が来て、八時頃まで話して去る。岸井が鮓を持参、十時頃まで話して去る。

大阪の山上から神戸の牛肉を送つて来て、十日頃に上京するといふ。

入浴。十一時半就寝。

九日（水曜）晴（七十度）

午前九時半頃起床。森部は研文社へ出てゆく。

十一時頃に佐久間が来た。「半七捕物帳」六枚をかく。

午後二時頃に額田が細君の快気祝の品を持参、一時間あまり話して去る。けふも南風が強い。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

今夜も眠られず、午前三時頃からやうやく眠つて、五時頃に眼をさますと、腹痛。

十日（木曜）晴（七十一度）

腹痛が癒えないので、朝から寝てゐる。

十時半頃に佐久間が来たので、知合ひの医師を呼んでくれるやうに頼む。十二時頃から、とくと眠る。

午後一時頃に大阪の山上が夫婦づれで尋ねて来たが、私があひにくに病臥中であるので、おえいが代つて応接。そのあひだに瀬戸医師来診。瀬戸氏は渋谷駅のほとりに泰山堂医院を開いてゐる人で、そこには二十年以上も開業してゐるといふ。

私の腹痛は寧ろ神経性のものであると瀬戸医師はいふ。山上夫妻は一時間ほど話して去る。

けふも南風が吹きつゞける。五月に入つて、こんなに風の吹くのは珍しい。

午後六時頃から九時頃まで安眠。腹痛はやうやく癒えたが、今夜も午前四時頃まで眠られなかつた。

十一日（金曜）晴（七十四度）

けふも寝たり起きたりしてゐる。

森部は研文社へ出てゆく。風やんで温度騰る。

坪内士行君上京歓迎会の通知が来たが、病中不参の返書。神戸の長谷川善雄君から郵書が来たので、返書。

現在の住宅は元来控家として建てたものであるので、どうも手狭で困ると平生から云ひ暮らしてゐたが、病中設計して更に四畳半一間を増築し、これを私の書齋に宛てることにする。今度は幾分か茶室風に設計する積りで

ある。

六時過ぎる頃に佐久間が来た。つゞいて森部帰宅、中島も同道で見舞に来た。

八時過ぎるころ入浴。朝から粥を食つて服薬、なんだか氣力が無い。

今夜も眠られず、夜半に雨の音。午前五時頃から眠る。

十二日（土曜）陰（七十度）

けふも寝たり起きたりしてゐる。

森部を大工の倉持方へ遣はして、増築の相談をしたいと云ひやる。

午頃に三橋が見舞に来て、自作の戯曲原稿を受取つてゆく。岸井から電話で私の病状を問ひ合せて来た。

午後一時頃に倉持が来て設計図を受取り、三十分あまり話して去る。二時頃に瀬戸医師が来て、病氣は差したることもないが、服薬をつゞけて三四日間安静にしてゐるといふ。瀬戸氏は話好きで、一時間ほど話して去る。床の上で読書。七時半ごろ入浴。今夜は午前二時頃から眠る。

十三日（日曜）風雨（七十度）

けふも床の上に起坐。昨夜半から風まじりの雨。

昨日倉持に渡した書齋の設計図は少しく面白くない

所があるので、更に訂正する。

けふは「舞台」の誌友会であるが、私は病中で出るこ
とが出来ない。午後二時頃に佐久間が来て、森部同道で
出てゆく。風は衰へたが、雨はやまない。

福島県勿来町の坂本浅次郎といふ人が来て、おえいに
面会。岡町の青年団員が私の「なこそこの関」をラヂオで
放送したいと云ひ、門口で帰る。

芝山俊二君の戯曲「無知なる者」を編集。読書。

七時半ごろ入浴。夕より雨やむ。

九時頃に森部帰宅。けふの誌友会は雨天にも拘らず、八
十各余の出席をみたといふ。先づは結構であつた。

今夜も午前三時頃まで眠られなかつた。

十四日（月曜）晴、陰、雨（七十度）

午前六時頃に起きて再び寝る。森部は研文社へ出てゆ
く。

十一時頃に佐久間が来た。十二時頃から雷鳴。をり
く。に驟雨。

午後一時頃に大村が見舞に来て、門口で帰る。二時頃
に額田が来て、三時半頃まで話して去る。山上は帰途、
熱海へ廻ることになったので、今朝東京を去つたといふ。
六時半頃に佐久間が再び来て、七時頃に去る。八時ご
ろ入浴。

九時半頃に倉持が来て、書斎建築の見積り書を提出。
四畳半一間で、八百廿八円九十銭である。近來建築はよ
ほど廉くなつたといふが、少しく注文を出すと、やはり
廉くない。

今夜は午前二時頃から眠る。

十五日（火曜）晴（七十二度）

けふも床の上に起坐。山崎が会費を持参、門口で去る。
森部は研文社へ出てゆく。そのつひでに、紀尾井町の
吉岡医師方へ果物を持たせてやる。十一時頃に佐久間が
来た。

北林君から病氣見舞の郵書が来たので、返書。病中諸
方から郵書が来てゐるので、その返書十一通をかく。少
しく疲れた。

午後二時頃に岸井が自作の戯曲を持参、四時頃まで話
して去る。

五時頃に森部帰宅。六月号は全部校了になつたといふ。
読書。八時ごろ入浴。

今夜は午前三時頃から眠る。

十六日（水曜）晴（七十三度）

床の上に起坐。
おえいは紀尾井町の吉岡医師の診察を受けに行き、そ

のつひでに元園町の浦岡君方を訪問、十二時ごろ帰宅。
十一時頃に佐久間が来た。

熱海の山上から郵書が来た。誌友の池田君から病氣見舞の郵書が来たので、返書。額田から郵書が来たので、返書。

午後二時半頃に岸井が来た。今度の増築について、花壇を一つ取除けなければならないので、三時半頃から森部に指図して、草花の移植にかゝる。岸井も手伝ふ。四時半頃に岸井は去る。五時半頃に移植を終る。

読書。八時ごろ入浴。今夜は十一時頃から眠る。

十七日（水曜）晴（七十一度）

午前七時起床。けふから床払ひをする。

大工二人が来た。何分私の家の裏手は狭いので、佐久間の空地で切組みをする事になった。植木屋も見に来て、明日から仕事に来るといふ。

十時半頃に佐久間が来た。晴れて夏らしくなる。

宝塚の坪井から郵書が来たので、返書。大阪の山上にも郵書を送つて、病中面会を得なかつたのは遺憾であつたと云ひやる。瀬戸君の未亡人から五七日の配り物を送つて来たので、礼状を発送。

夏季大掃除は明日であるが、天気がよいので今日から座敷や茶の間の掃除にかゝる。家内混雑。

けふも少しく花壇をいぢくる。六時頃に佐久間が再び来た。

八時ごろ入浴。八時半頃に大工の倉持が来て、増築の前金二百円を受取つてゆく。九時頃に強震、少しく驚かされた。

十時半就寝。

十八日（金曜）晴、陰（七十四度）

午前八時起床。大掃除。

大工一人、植木屋二人が来た。大工は切組み、植木屋は樹木を植えかへ、ヘチマの棚を移す。森部も手伝ふ。午頃に佐久間も来た。

午後二時過る頃に中島が来て、今度自分が出身の立正大学英文科の研究生として通勤することになったといふ。研究生と云つても、幾らかの手当をくれるさうである。先づは結構。中島は一時間ほど話して去る。

四時頃に北林君夫婦来訪。新婚旅行として今夜出発、朝鮮から満州の一部を漫遊して来るといひ、五時半頃まで話して去る。北林君は仲見世の人形をみやげに呉れた。朝から前歯が痛む。やはり氣候のせみと見える。

読書。八時ごろ入浴。

十時半就寝。

十九日(土曜)晴(七十四度)

午前八時起床。

「舞台」六月号の製本をとどけて来た。舞台叢書の校正が始まったので、森部は朝から出てゆく。けふも大工が来た。

十時半頃に佐久間が来た。袷をぬいでセルの単衣を着る。

「半七捕物帳」をかきつづける。午後二時頃に岡倉書房の使が来て、「猫やなぎ」の製本十部をとどけ、更に読者の希望によつて六部にサインしてくれといふので、直ぐに署名してやる。

四時頃までに原稿六枚、一向に捗取らない。

七時頃に佐久間が再び来た。八時ごろ入浴。九時過る頃に森部帰宅。

十一時就寝。

二十日(日曜)晴、陰(七十四度)

午前八時起床。

「猫やなぎ」一部を大村に郵送。「舞台」六月号を高橋、難波、原田、林、清水、東儀、池田、津沢、渡辺の諸家に発送。

九時半頃に佐久間が来た。森部は額田方へ出てゆく。

「半七捕物帳」をかきつづける。午後二時過ぎに宮内君が来て、門口で帰る。前進座の長十郎等が帰京の挨拶に来て、これも門口で帰る。

三時頃に三橋が一二三君同道で来て、三十分あまり話して去る。そのあひだに森部帰宅。陰つて、風が吹き出した。

六時半頃に岸井が来た。中島は明日から立正大学の方へ通勤することになったので、代つて舞台業書を取纏めるやうに頼むと、岸井も承諾、八時頃まで話して去る。入浴。読書。十時半就寝。

二十一日(月曜)陰、雨(七十二度)

午前八時起床。森部は研文社へ出てゆく。

「半七捕物帳」をかきつづける。陰晴定まらず、折々に雨。

おえいは持病で臥床。四時頃に佐久間が来た。

八時ごろ入浴。八時半頃に森部帰宅、岸井も校正の手伝ひに来たといふ。

十時半就寝。

二十二日(火曜)陰、雨(七十二度)

午前八時起床。おえいは今日も臥床。

「半七捕物帳」をかきつゞける。十時半頃に佐久間が来た。

けふも陰晴不定、をり／＼に驟雨。

四時過る頃に矢沢弦次郎君が久しぶりで来訪、二時間ほど話して去る。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（水曜）晴、陰（七十三度）

午前八時起床。おえいはけふも臥床。

森部は研文社へ出てゆく。十一時頃に佐久間が来た。

「半七捕物帳」をかきつゞける。晴れて風吹く。夕より陰る。

六時過る頃に佐久間が再び来た。八時ごろ入浴。九時に森部帰宅。

読書。十時半就寝。

二十四日（木曜）晴、豪雨（七十二度）

午前八時半起床。おえいもけふから起きる。森部は研文社へ出てゆく。

「半七捕物帳」をかきつゞけて、兎も角も脱稿。更に最初から読み返して訂正。

午頃に大村が来て、昨日伊豆から帰京したとて沼津の

みやげをくれ、三十分話して去る。小田原の飯野が来て、父が五七日の配り物をくれ、門口で去る。

西郷侯爵邸の庭園が公開され、本日から四日間、明治天皇行幸御座所の拝観を許されるといふので、午後一時過る頃から姉とおえいは佐久間同道で出てゆく。午後から陰る。

「捕物帳」の訂正がなか／＼面倒である。三時頃におえい等は三橋と共に帰宅。三橋は三十分ほど話して去る。やがて驟雨、雷鳴。

森部帰宅、岸井がおえいの見舞にくれたとて西瓜を持参。

八時ごろ入浴。読書。をり／＼に雨。

十時半就寝。

二十五日（金曜）晴（七十四度）

午前八時半起床。

早稲田の演劇博物館から「猫やなぎ」の寄贈を求めて来たので、一部発送。そのついでに、飯野、気賀、丸尾、大西、岩田、長谷川の諸家へも各一部を発送。

「半七捕物帳」を訂正し終る。併せて五十六枚、題は「十五夜御用心」

けふは嫩会例会で、佐久間、大村、岸井、中島、三橋、

岡田、額田、俵木等出席。石井と山崎は欠席。わたしの江戸講話があつて、劇談、雑談、十時ごろ散会。

入浴。十一時半就寝。

二十六日（土曜）晴（七十二度）

午前九時起床。

北林君夫妻から朝鮮着の絵ハガキを送つて来た。

十時半頃に佐久間が来た。けふは増築の建前をするといふので、職人等がぐたぐたする。

大村の筋書に批評を加へて返送。飯野にも郵書を送る。市川左団次から母三十五日の配り物をとめて来た。

終日快晴。建前は午後三時頃から始めて七時頃に終る。

職人等に祝儀をやる。

八時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。例の歯痛、午前三時頃まで眠られなかつた。

二十七日（日曜）晴（七十五度）

午前九時起床。森部は内務省へ舞台叢書 of 出版届にゆく。

朝から歯痛を忍んで、喜田純樹君の「万年筆」角田恒君の「秋風帖」中島の「湘南の秋」を編集。舞台七月号の原稿である。

額田の娘が時事講堂で踊るとかいふので、姉とおえいは午後から出て行かうとする処へ、上松のおすゝが来た。おすゝは三十分ほど話して、おえい等と共に去る。

歯痛いよ／＼激しく、とき／＼にペンを捨て、横臥。

明日は歯科医を訪はなければなるまいと思ふ。四時過ぎ頃におえい等帰宅。

午後佐久間が来た。松屋から佐久間の祖父五七日忌の配り物を届けて来た。

八時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。歯痛のために眠られず、午前二時頃から漸く眠る。

二十八日（月曜）陰、晴、雨（七十四度）

午前八時起床。

午前十時頃から家を出て、紀尾井町の小田切医師へゆく。朝から陰つて蒸暑い日である。

小田切医師診察の上、前歯二本と右の上歯一本を抜くことになる。けふは先づ右の上歯一本をぬく。歯の治療は兎かく不愉快である。

十二時半ごろ帰宅。歯痛はまだ癒えないので、一時間ほど横になつてゐる。それから起き直つて、大村の戯曲「菖蒲前」を編集。

森部は午前から額田方へ舞台叢書の発送にゆき、午後

四時ごろ帰宅。

読書。七時半ごろから雨、一時間ほどにて止む。八時ごろ入浴。

十時半就寝。

二十九日（火曜）陰、晴、雨（七十五度）

午前九時起床。

けふも小田切医師へゆく。十二時半ごろ帰宅。

丸尾、長谷川、岩田の諸君から「猫やなぎ」の礼状が来た。

大村の戯曲を編集し終る。二時頃から雷鳴、驟雨、三時頃から晴れる。三橋が来て、自作の戯曲を受取つてゆく。

神戸の長谷川善雄君から戯曲原稿と牛肉の味噌漬を送つて来た。

七時過る頃から又もや雷鳴、驟雨。八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三十日（水曜）晴、陰（七十二度）

午前八時起床。

大阪松竹の高橋君から南座の大入袋を送つて来たので、返書。神戸の長谷川君にも返書。渋谷の泰山堂医院に薬価を持たせてやる。

蕉影会に頼まれた短尺五枚に揮毫。三橋が来て、自作の戯曲をとりけて行く。十一時頃に佐久間が来た。

第二の齒をぬくには、少しく時間を置かなければならないので、けふは小田切医師へ行かない。陰晴定まらず、梅雨めいた天候である。

東郷元帥、今朝七時逝去。わが海軍の偉人を失つた。午後三時頃に岸井が来て、舞台七月号の戯曲原稿を受取り、四時半頃まで話して去る。家根屋が来て、四畳半の家根を茸く。

今夜は前進座が「室町御所」をラヂオで放送する筈であつたが、東郷元帥逝去のために延期となつた。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三十一日（木曜）陰（七十度）

午前八時起床。髪を刈りにゆく。

十時半頃に佐久間が来た。瓦屋が来て、四畳半の家根を茸く。壁の木まひ掻きも来た。」

「半七捕物帳」第一回「十五夜御用心」を速達便で講談社へ郵送。

読書。午後三時頃に額田が来て、三十分ほど話して去る。四時頃に佐久間が再び来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

本日の仕事は十五夜御用心（講談倶楽部、五十六枚）ほ

かに「舞台」の編集など。

（翻刻担当…中坪有羽）

昭和九年六月

一日（金曜）晴、驟雨（七十五度）

午前七時起床。

けふは大工のほかに、瓦屋、ブリツキ屋、木まひ掻きが来た。

講談社から原稿受取りの返書、早稲田演劇博物館から「猫やなぎ」受取りの返書が来た。

志摩の清風吟社から俳句の選をたのんで来たので、選了。あはせて短尺四枚に揮毫。午後一時頃に雷鳴、驟雨。この頃の天気癖である。

四時過る頃に佐久間が来た。五時頃に中島が来て、一時間ほど語りて去る。中島に「猫やなぎ」一部をやる。

瓦屋は家根を葺き終り、木まひも終る。

八時ごろ入浴。植田の細君が来て、菓子と亀をくれる。

亀は差当り金魚鉢に放して置く。

読書。十時半就寝。

二日（土曜）晴、陰（七十二度）

午前七時起床。けふは左官屋が来て、あら壁を塗る。

八時頃におさきの父が来て乾魚をくれ、三十分ほど話して去る。

静岡の山本君から例年の如く新茶を送つて来たので、

返書。前進座から三週年記念の灰皿を送つて来たので、これにも返書。

十一時過る頃に額田の細君が鮎を持参、三十分ほど話して去る。十二時半頃に大村が蓐を持参、これも三十分あまり話して去る。

おきみの実家から蚕豆を送つて来た。けふは種々の物を貰ふ日である。

あまりに貰ひ物が多いので、姉とおえいは乾実と蚕豆をたづさへて、午後二時頃から品川の津沢方へ出てゆく。佐久間が来て、これから明治座見物にゆくといふ。

読書。七時ごろ入浴。

八時頃に倉持が来て、仕事の内金三百円を受取つてゆく。

十時半就寝。夜半に雨の音。

三日（日曜）雨（七十二度）

午前七時半起床。

家根に瓦を葺いてしまつたので、雨天ながら大工が来て床板を張る。

十二時過る頃に岸井が来て、一身の都合上、「舞台」の編集は七月号だけで罷めたいといふので、承諾。岸井は一時間ほど話して去る。就ては当分は「舞台」の編集を森部に一任、下山省三君を助手に頼むこととし、その

旨を額田にも通知。

「半七捕物帳」第二回の材料を調査。宝塚の堀から郵便物が来たので、返書。森部は三時頃から前進座見物に出てゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時頃に森部帰宅。
十時半就寝。

四日（月曜）晴（七十六度）

午前七時起床。

池田君から郵便物が来たので、返書。中央公論社から写真をくれと（云つて来たので、郵送。）

「富士」の原稿をかき始めたが、頭が重いので中止。渡辺の愛子が来て、いよ／＼来る七日に横浜へ縁付くといひ、おえいと一時間ほど話して去る。午頃に佐久間が来た。

森部に指図して、花壇の周囲に石を置きかへる。

午後四時頃に講談社の鈴木君が来て、「半七捕物帳」第一回の原稿料をくれ、三十分ほど話して去る。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

五日（火曜）陰（七十四度）

午前七時起床。東郷元帥国葬の当日、吊旗を掲げる。新聞をみると、区画整理のために麹町区内の町名変

「■」更、旧家の元園町一丁目は麹町二丁目に編入されたといふ。

けふも「富士」の原稿をかきかけたが、やはり頭が重いのので中止。

午頃に佐久間が来た。三時過る頃に「富士」の中村君が来て、原稿の催促。就ては現在書きかけてゐる歴史小説を中止して、更に怪談を起稿することにする。気候のせみか、どうも頭がよくないので困る。

瀬戸医師が来て先日のお礼をいひ、門口で帰る。横浜の清水君が来て、写真の審査をたのんで行く。

夕刊をみると、東郷元帥の葬儀は午前十時日比谷公園に於て執行、盛儀であつたといふ。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

六日（水曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

けふは勉強して「富士」の原稿をかき始める。

午後三時頃に宮内君が来たが、私は執筆に忙がしいので、おえいが代つて応接、額田に脚本をたのむ件である。

夕方までに原稿十六枚をかく。八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

七日（木曜）晴（七十六度）

午前七時起床。

けふも「富士」の原稿を書きつづける。十時頃に佐久間が来た。

崎村君から細君五十日祭の配り物をとどけて来たので、返書。

夕方までに原稿十四枚をかく。頭が少しく重い。

「舞台」の誌友会で、森部は五時半頃から出てゆく。

八時ごろ入浴。読書。十時頃に森部帰宅。

十時半就寝。

八日（金曜）晴（七十八度）

午前七時起床。

「富士」の原稿一枚をかく。あはせて三十一枚、「経帷子」「」の秘密」と題して、すぐに郵送。

森部は校正に出てゆく。十時半頃に佐久間が来た。

清水君から頼まれた横浜写真材料商組合の懸賞写真を選了。大型三十六枚、小型五十八枚が入選。私は素人であるから正当の審査は出来ないものである。

大西（君）から郵書が来たので、返書。岡倉書房から「猫やなぎ」の製本廿部をとどけて来た。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

九日（土曜）晴（七十八度）

午前七時起床。快晴。

春陽堂から「半七捕物帳」第九卷九百部の捺印を頼んで来た。

十時頃からおえい同道で銀座の三越へゆき、額田と藤井君、矢沢君方へ贈物の配達をたのみ、更に松屋へまはつて、静岡の山本君への贈るべき単衣地をかひ、ほかに雑品数点をかひ、食堂で昼餐。十二時四十分ごろ帰宅。晴れて暑くなる。

一時過る頃に蒲田の渡辺君が来た。渡辺君は博の結婚について旭川へ赴き、四五日前に帰京したのである。それらの話に時を移して、三時過る頃に去る。そのあひだに前進座の長十郎等が来て、来月京都の南座へ乗込むに付、私の「とん平地蔵」か「浪人時代」を上演したいと云ひ、おえいが代つて応接した。

読書。八時頃に横浜の清水君が同業の安藤君同道で来訪、審査の写真を受取つてゆく。

それから入浴。八時半頃に森部帰宅。
読書。十時半就寝。

十日（日曜）晴（七十二度）

午前六時半起床。

静岡の山本君に単衣地を郵送、あはせて郵書を送る。

改造社から「修禪寺物語」増版の印税を郵送して来たので、返書。河原崎長十郎に郵書を発して、「とん平地蔵」の方を上演するやうに云ひ送る。

下省三君の「物々交換会」姉川泰君の「街」を編集、「舞台」八月号の原稿である。

四時頃に、渡辺の愛子が新夫の小玉清君同道で挨拶に来て、三十分ほど話して来た。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十一日（月曜）陰（七十二度）

午前六時半起床。森部は研文社へ出てゆく。

十一時頃に川村花菱君が来て、いよ／＼大阪の松竹と和解することになったと云ひ、それにつき岸井の処置の話があり、十二時半頃に去る。

岡本薫君の戯曲「鳩の来る日」を編集。五時頃に佐久間が来た。

読書。八時ごろ入浴。九時頃に森部帰宅。

元園町旧宅の中野家から杉原の住所を電話で問ひ合せて来たので、返事をして置く。何か修繕工事に取りかゝるのであるらしい。

十時半就寝。

十二日（火曜）陰、晴（七十一度）

午前六時半起床。けふは入梅であるといふ。

藤井君、矢沢君と額田から三越配達の礼状が来た。額田に郵書を送つて、昨日川村君来訪の一件を通知。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後二時頃に畑喜代司君来訪、門口で帰る。レコード吹き込みの件である。夕刻に佐久間が来た。八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十三日（水曜）雨、晴（七十四度）

午前七時起床。けふは大雨のほかに左官屋が来た。

講談社の鈴木君から電話がかゝつて、「半七捕物帳」第二回の予告をかいてくれといふので、十行ほど書いて郵送。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午頃に佐久間が来た。

朝は微雨、やがて晴れる。けふは職人大勢で混雑。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

蚊が出て来たので、夜半に起きて蚊帳を吊る。

十四日（木曜）晴（七十六度）

午前六時半起床。けふも大工と左官屋が来た。

「半七捕物帳」をかきつゞける。森部は研文社へ出てゆく。

午後一時頃に河竹繁俊君の紹介で、河出書房の水野久

雄君が来て、「日本精神文化」特別号に「明治以後の歌舞伎」をかくれといふ。ついで前進座の宮川君と長十郎、翫右衛門が来て、来月の京都市は更に大阪行に変更、狂言も「とん平地蔵」をやめて「室町御所」に換へたいといふ。承諾。長十郎等は三十分ほど話して去る。

岡倉書房から郵書が来たので、返書。静岡の山本君から単衣地の礼状が来た。三時過る頃に佐久間が来た。

七時半ごろ入浴。読書。八時過る頃に森部帰宅。七月号の編集も今日で終つたといふ。

十時半就寝。

十五日（金曜）晴（七十三度）

午前七時起床。

旭川の渡辺博から結婚の通知が来たので、祝状を発送。

「半七捕物帳」をかきつづける。けふは大工と左官屋とブリツキ屋が来た。

午前一時過る頃に中島が来て、三十分余り話してゆく。

氣候のせみか、頭が痛む。

三時頃に北林君夫妻が来て、九日の朝帰浜したとて朝鮮のみやげをくれ、二時間ほども話して去る。そのあひだに、佐久間が来た。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十六日（土曜）雨（七十二度）

午前六時半起床。

陰、やがて雨。それでも大工、左官屋、ブリツキ屋が来た。

「半七捕物帳」をかきつづける。勿来の町長から「なこそこの関」放送の礼状が来たので、返書。

終日雨降りしきる。けふは応接室の壁を切り抜いて、新築の書斎への通路を作る。建具屋が来て、ドアを取付ける。

夕刻に佐久間が来た。読書。八時ごろ入浴。

十時半就寝。十一時頃に雨やむ。

十七日（日曜）晴（七十四度）

午前六時半起床。けふも大工、左官、ブリツキ屋が来て混雑。

十時半頃に渡辺のおしげが愛子結婚の内祝を持参、一時間ほど話して去る。午頃に佐久間が来た。

「半七捕物帳」をかきかけたが、頭が重いので中止。二時頃に林君来訪、門口で去る。

大工の仕事はけふで片付いた。先月廿六日の棟上げ以来、廿三日目である。そのなかでも中野から来た大橋といふ大工はよく働いたので、おえいから別に心付けをやる。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十八日（月曜）晴（七十五度）

午前七時起床。けふは左官屋が来て上塗りをする。

「半七捕物帳」をかきつゞける。職人が這入つて毎日ごた／＼してゐるので、今度の原稿は一向に捗取らない。

中村孝子から郵書が来たので、返書。

左官屋は外部の上塗りを終る。室内は一週間ほどの後
に上塗りをするさうである。

晚餐後、森部と道玄坂を散歩。二三の買物をして八時
ごろ帰宅。

入浴。読書。十時半ごろ就寝。この頃は毎夜安眠。

十九日（火曜）晴（七十二度）

午前七時起床。

仙台放送局から「なこそこの関」の放送料を送つて来た
ので、返書。気賀君子から郵書が来た。

十時頃に佐久間が来た。建具屋が来て、新築書齋の雨
戸を入れる。

「半七捕物帳」をかきつゞける。森部は午後から私の
添書をたづさへて、改造社の山本君を訪問。

午後二時頃に下山省三君が来た。岸井は本月かぎり
で「舞台」の編集を罷めることになり、下山君がそのあと

を引受けたのである。一時間ほど話してゐるうちに、森
部帰宅。下山君は更に森部の部屋で話して去る。

晚餐後、森部と中目黒の伊勢脇へゆく。馬頭観音の縁
日である。草花数種を買つて来て、花壇に栽え込む。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。夜半から雨。

二十日（水曜）雨、風（七十二度）

午前七時起床。風まじりの雨。

「半七捕物帳」をかきつゞける。

風やまず、雨やまず、梅雨中にはめづらしき暴れ模様
となる。新築書齋の雨戸が全部出来ないので、下地窓
には板片などを当てゝ置く。

おきみの郷里から枇杷を送つて来たので、返書。午後
三時頃に雨は小歇みとなつたので、庭に出て花壇の草花
などに杖をあたへる。

「舞台」七月号の製本出来して、製本屋から配達して
来た。

日暮れて雨は又もや強くなる。風もやまない。
七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十一日（木曜）晴（七十八度）

午前七時半起床。雨は止んだが、風は吹きつゞけてゐ
る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

「舞台」七月号を池田、林、原田、東儀、難波、高橋、清水、津沢、小玉の諸家に郵送。植木屋が来たので、庭の手入れを頼む。植木屋は仕事の都合で二三日後に来るといふ。

二十三日（土曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

佐久間が来て、三十分ほど話して去る。経師屋の職人が来て、襖の骨を置いてゆく。晴れて暑くなる。

書斎も近日落成して、私の机を移すに付、床の間に隣る地袋棚を整理。九時半頃に佐久間が来た。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後一時半頃に額田が来て鮎の鮎をくれ、三時頃まで話して去る。そのあひだに三橋が来て、額田よりもあとに残つて三十分ほど話して去る。

午後にも書庫と書棚を整理。三時頃に石井が来て、明日一先づ帰郷するといひ、菓子折とアメリカの亀をくれた。亀は三越で買つて来たのであるといふ。取りあへず金魚鉢へ入れて置く。

その節、三橋に「猫やなぎ」を遣るのを失念したので、小包み便にして発送、あはせて一二三君にも一部をとゞけてくれるやうに頼む。寺田君と塩谷君にも各一部を発送。大隈君から女兒死去の通知が来たので、悔み状を発送。

寺田君から「猫やなぎ」の礼状が来て、過日来腹出血で寝てゐたといふので、見舞状を発送。講談社の鈴木君にも「捕物帳」第三回の予告を郵送。大村から舞台七月号の受取状が来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

書棚整理の際、海野の旧稿を発見したので、返送。

二十二日（金曜）陰、晴（七十五度）

午前七時起床。

六時半頃には佐久間がラヂオの機械を持参、今夜は前進座の一座が「室町御所」第三幕を放送するためである。八時ごろ入浴。放送を聴き終つて喫茶、佐久間は九時頃に去る。

十一時頃に菅野君が来て、十二時頃まで話して去る。

読書。十時半就寝。

姉はそれを送りながら、道玄坂まで一緒に出てゆく。

「半七捕物帳」第二回を書き終る。あはせて五十七枚、題は「金の蠟燭」といふ。午後四時頃までに訂正し終る。

二十四日（日曜）陰、小雨（七十度）

午前七時起床。

経師屋の職人が来て、襖の下張りをして行く。

「幽霊花火」三枚をかいいて新潮社に郵送。「半七捕物帳」第二回を講談社に郵送。

午後には畳屋が来て、四畳半の畳を入れてゆく。陰つて風が冷い。

「室町御所に就て」三枚をかいいて、大阪の道頓堀編集局へ郵送。小田原の飯野から郵書が来たので、返書。館山の鈴木なか子から枇杷を送つて来たので、返書。

午後三時頃から小雨。やがて止む。建具屋から下地窓の雨戸をとじて来た。

七時半ごろ入浴。瓶田君の戯曲「明石候行状記」を編集。

十時半就寝。夜半に雨の音。

二十五日（月曜）陰、雨、陰（七十二度）

午前七時起床。朝は陰。やがて細雨。

ブリツキ屋が来て、窓の樋を入れる。午後一時頃に中島が来た。

瓶田君の戯曲「明石候行状記」を編集し終つて、更に羽月君の「時雨の夜話」を編集。

五時頃から雨やむ。五時半頃に河原崎長十郎夫婦が来て、今夜の汽車で大阪へ乗込むといひ、庭先で話して去る。

嫩会例会で六時頃に三橋が来た。つゞいて岸井、岡田、大村、額田、佐久間、北林、俵木が来た。例に依て私の江戸講話、それから劇談、雑談。九時過る頃散会。入浴。十一時半就寝。

二十六日（火曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

けふは植木屋が三人来た。ほかに大工も建具屋、左官屋も来て混雑。

誌友の喜田君が来て、自作が「舞台」に掲載された礼をいひ、門口で帰る。塩谷君と一二三君から「猫やなぎ」の礼状が来た。

職人が大勢来てゐる為に、仕事も手に着かない。

七時半入浴。夕方に一旦陰つたが、宵から又晴れて、陰暦五月十五日の月が鮮かに出た。浴後、庭へ出て散歩。読書。十時半就寝。

二十七日（水曜）晴、雨、晴（八十五度）

午前六時半起床。陰晴定まらず、蒸暑い。

けふは植木屋三人とペンキ屋が来た。

気賀君子の戯曲「種子島」武石紀美君の「婿入外道」を編集、これで八月号の戯曲編集を終る。

午後一時過るころ驟雨、間もなく止む。日中の温度八

十五度、近來の大暑である。梅雨中にこんな暑気はめづらしい。

坪井から電話がかゝつて、東宝劇場の用事で上京したから、近日訪問するといふ。「富士」の中村君からも電話で、明日訪問するといふ。

四時頃から目黒の通りへ髪刈りにゆく。佐久間が来た。六時頃に岸井が来て、川村君が大阪松竹と和解したに付、岸井にも大阪復歸の相談があつたといふ。私は賛成でないが、家庭の事情已むを得ないとあれば拠らない。岸井は更に額田を訪問すると去る。森部は下山君を訪問すると、一緒に出てゆく。

八時ごろ入浴。読書。九時頃に森部帰宅。

十一時就寝。日が暮れても暑い。

二十八日(木曜)晴、陰、晴(八十八度)

午前六時半起床。朝から暑い。

書齋の工事落成。今月中に移転する筈であるので、書架などを整理。

午後には「半七捕物帳」第三回を四枚ほど書いてみる。

三時頃に「富士」の中村君が来て「経帷子の秘密」の原稿料をくれ、更に何か書いてくれと頼んでゆく。「芸術殿」の大山君が来て果物をくれた。

四時頃から建具屋二人が来て、書齋の障子、ガラス窓

などを入れ、六時半頃に去る。

七時半ごろ(入浴)読書。十時半就寝。

二十九日(金曜)晴(八十七度)

午前七時半起床。

八時過る頃に経師屋二人が来て(書齋の)襖を入れ、障子を貼り、十時頃に去る。そのあひだに佐久間も来た。おえいは朝から麴町の吉岡医師へゆき、それから銀座へまはつて、十二時半ごろ帰宅。けふも引きつゞいて暑い。

午後一時頃から森部と共に書籍及び手まはりの道具類を書齋に移す。大工が来て、湿縁先の踏み股を据える。ケヤキの切株である。この書齋、五月十七日から切組みを始めて、やうやく引移ることになつたのである。

三時過る頃に文芸春秋社の蔵野君が来て、「オール読物」に小説を寄稿してくれといひ、三十分ほど話して去る。

四時半頃に静岡の山本君が来て、みやげ物(の)品々をくれ、晚餐を喫して八時頃まで話して去る。山本君は今春細君を亡つてより家庭の事情面白からず、実父とも折合ひが悪いといふ。気の毒なことである。

そのあひだに放送局の小林君が来て、「室町御所」の放送料をくれ、門口で話して去る。三橋も来て、森部と

話して去る。

八時過る頃から森部と目黒の大通りを散歩、今夜は観音の縁日で頗る繁昌してゐた。草花二三種を買って帰る。入浴。読書。十一時二十分就寝。

三十日（土曜）雨、晴（八十四度）

午前七時起床。

今朝から書斎に机を移して、いよ／＼引移る。母屋から離れてゐるので、落着いた気分になる。この夏はこゝに閉ぢ籠つて、少しく勉強する積りである。

大阪の山上が戯曲集「出発前」を出版するといふので、その序文三枚をかいて郵送。山形の渡辺君から桜桃を送つて来たので、返書。あはせて「猫やなぎ」一部を郵送。草場君から郵書が来たので、返書。

午前中は驟雨模様の雨、午後から晴れて又暑くなる。森部は午後から研文社へ八月号の戯曲原稿をとゞけにゆき、三時ごろ帰宅。

読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

本月の仕事は経帷子の秘密（富士、三十二枚）金の蠟燭（講談倶楽部、五十七枚）幽霊花火（新潮、三枚）室町御所に就て（道頓堀、三枚）出発前のはしがき（三枚）ほかに舞台八月号の戯曲編集など。

（翻刻担当…中坪有羽）

昭和九年七月

一日（日曜）陰、晴（八十四度）

午前七時起床。朝は陰る。

「オール読物」の原稿をかき始める。

十一時頃に岸井が来て中元の品をくれ、家庭の都合もある、この際再び大阪の松竹に復帰するといふ。これも已むを得ない。岸井は午餐を喫して、十二時半頃に去る。

午後から晴れて又暑くなる。寝ころんで読書するうちに、一時頃から一時間ほど眠る。これが当夏午睡の始めである。呵々。

起きて再び原稿をかく。四時頃までに六枚。真川君が来て門口で帰る。つゞいて上松のおすが中元の礼に来た。

草場君が中元の礼に来て、六時頃まで語る。つゞいて佐久間が来た。

八時ごろ入浴、読書。十時半就寝。

二日（月曜）雨、晴（八十五度）

午前七時起床。陰つて折々に細雨。

演芸画報社の安部君が来て「舞台の団十郎」一部をくれ、門口で話して去る。つゞいて佐久間が来た。

中元用の買物をするために、おえいと森部同道で十時半頃から出る。先づ銀座の松坂屋で雑品数点をかひ、食堂で昼餐。それから三越へまはつて中元用の品々をかひ、直接に配達を頼むもあり、持帰るもあり、午後一時五十分ごろ帰宅。午頃から晴れて暑くなる。

二時半頃に山本君が来て、今夜帰郷するといふので、おえいから土産物を贈る。私からは「猫やなぎ」一部を贈る。ほかに山本君の所望で、私の写真に署名して贈る。山本君は三十分あまり話して去る。

大村が来て中元の品々をくれ、これも三十分ほど話して去る。そのあひだに、鈴木未亡人も中元の礼に来た。森部に命じて額田方へ中元の品々を持たせてやる。先刻わたしの留守中に、宝塚の坪井がたづねて来て、大阪のみやげを呉れたので、郵書を発送。

書斎の戸棚を整理。七時半ごろ入浴。

九時頃に森部帰宅。九時半頃に倉持が来て、工事の残金を受取る。おえいから別に慰労金をやる。これで工事の件も一先づ片付く。倉持は三十分あまり話して去る。十一時就寝。

三日（火曜）陰、晴（八十八度）

午前六時半起床。

大阪の山上から序文の礼状、山形の渡辺君から「猫や

なぎ」の礼状が来た。

「オール読物」の原稿をかきつゞける。植木屋が来て、庭の飛び石を据え、樹木の刈込みをする。

十時過る頃に春陽堂の木呂子君が来て、「半七捕物帳」増版の捺印を求め、一時間あまり話して去る。けふも暑い。

おえいは品川の津沢方へ中元の礼にゆき、午後二時半ごろ帰宅。市川猿之助の使が来て中元の品をとゞける。

七時半ごろ入浴。読書。庭に螢が高く飛ぶ。
十時四十分就寝。

四日（水曜）晴（八十八度）

午前六時起床。朝から暑い。

「オール読物」を書きつゞける。草場君から中元の礼状が来た。武内君から時候見舞の郵書が来たので、返書。

おきみの実家と館山のおなか方へ中元として単衣地を発送。

晩餐後、森部と中目黒を散歩。夕刊をみると、斎藤内閣総辞職、後継内閣は岡田海軍大將が組織することになったといふ。

七時半ごろ入浴。入浴後なか／＼汗が納まらないので、庭に出て散歩。急に暑気を催したせいか、蚊が著るしく殖えた。

読書。十一時就寝。

五日（木曜）晴（八十八度）

午前七時起床。

「オール読物」をかきつゞける。十時頃に佐久間が来た。

静岡の山本君から帰郷の通知が来たので、返書。市川升六君から中元の品受取りの礼状が来た。

連日の暑気には少々閉口、午後三時頃から一時間ほど眠る。

七時ごろ入浴。読書。

十一時就寝。

六日（金曜）晴（九十度）

午前七時起床。

「オール読物」をかきつゞける。午後佐久間が来た。午後四時頃に花田房子が中元の礼に来て、門口で話して去る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

七日（土曜）晴、陰、晴（八十八度）

午前六時半起床。けふも暑い。

「オール読物」を訂正し終る。題は「怪獣」三十七枚、

すぐに文芸春秋社に郵送。安部君から「猫やなぎ」の礼状が来た。

午後零時半頃に中島が中元の品を持参、三十分ほど話して去る。ついで三橋が中元の品を持参。

暑氣に疲れて三十分ほど眠る。おえいは世田ヶ谷の上松方へ中元の礼にゆき、三時半ごろ帰宅。陰つて折々に遠雷の声を聞く。

五時頃に黒川君が来て、六時頃まで話して去る。七時ごろ入浴。森部は夕刻から舞台社の七日会に出席、九時半ごろ帰宅。銀座辺には驟雨があつたといふ。

読書。十時半就寝。

八日（日曜）晴（八十七度）

午前六時半起床。森部は研文社へ校正に出てゆく。森部とおきみ、へおすみに中元の金をやる。〈

「弥次喜多見物の思ひ出」七枚をかく。演芸画報の原稿である。

午頃に植村君が来て中元の品をくれ、門口で帰る。京都の小林から中元の品を送つて来たので、返書。市川左団次からも中元の品を送つて来た。

二時半頃に石井が来て、二時間ほど語る。石井に「猫やなぎ」一部をやる。

晚餐後、道玄坂を散歩。盆前といふのに、あまり活氣

がないやうである。講談社の鈴木君が来て、「金の蠟燭」の稿料をどけてくれた。

七時半ごろ入浴。読書。十時半ごろに森部帰宅。十一時就寝。

九日（月曜）陰、雨（八十七度）

午前六時半起床。

おえいは八時頃から麹町の大野君、小林君方へ中元の品を持参。森部も研文社へゆくとて、途中まで同道。

浦岡の細君が中元の品を持つて来てくれたが、あひにくにおえい不在であるので、門口で帰る。十時過る頃におえい帰宅。

関直彦氏の息盛雄氏より関氏遺墨を郵送して来たので、返書。森部の兄から時候見舞の郵書が来たので、返書。石井と鈴木おなかから単衣地の礼状が来た。

十二時過る頃に津沢の寿子が中元の礼に来た。ついで額田夫婦が中元の礼に来た。ついで坪井正直が来た。渡辺のおしげが来た。

額田夫婦は先づ去り、おしげと寿子はおえい同道で道玄坂へ出てゆく。坪井はあとに残つて、三時過る頃まで話して去る。入れ違ひにおえい帰宅。盆前は何かと混雑。読書。六時頃から驟雨。七時ごろ入浴。三越から缶詰をどけて来へた。額田の贈物である。〈

八時ごろに森部帰宅。八時半頃に雨やんで、却て蒸暑くなる。

十時半就寝。

十日（火曜）陰、晴（八十九度）

午前六時半起床。森部に命じて、駒沢の鈴木家へ中元の品をとゞけさせる。

「半七捕物帳」をかきつゞける。朝は陰、晴れて暑くなる。

午後一時頃に岡田が来て、中元の品をくれ、歌舞伎劇について問合せあり。あとから岸井が来て、いよゝ／＼十一日午後十時五十分発で大阪へ赴くといふ。岡田は三時頃に去り、岸井は四時頃に去る。

庭のヘチマの蔓が伸びて、棚の上まで這ひあがつた。暑気の強いために、例年よりも早く伸びたやうである。

七時ごろ入浴。読書。十一時就寝。

十一日（水曜）陰、晴、雨（八十八度）

午前七時半起床。

九時過る頃に小田原の飯野が来て、中元の品をくれ、一時間ほど話して去る。

つゞいて大野君が中元の品を持参、丸尾君が同じく中元の品を持参。物集芳子が来て、自作の探偵小説集を出

版するに付、私に序文をかいとくれと云ひ、午後零時三十分頃までに相前後して去る。

午後一時頃に海野が中元の品を持参、三時頃まで話して去る。海野に「猫やなぎ」一部をやる。大谷君と難波から中元の品をとゞけて来た。

暑気甚しく、朝から来客つゞきで少しく疲れた。一時間ほど眠る。

加納君の俳句雑誌「野うめ」が第六巻第一号に相当するといふので、祝辞をかいて郵送。大阪の山上から「猫やなぎ」の礼状が来た。

七時ごろ入浴。驟雨。読書。この二三日来、俄に藪蚊が殖えた。蚊やり線香ぐらみでは防ぎ切れない。

十一時就寝。雨はやまない。

十二日（木曜）雨（七十二度）

午前七時起床。森部は朝から研文社へ出てゆく。

物集芳子の探偵小説「むかでの足音」の序文をかいて郵送。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後淀橋のおさだが子供をつれて中元の礼に来て、三時間ほど遊んでゆく。

三時頃に佐久間が来て、感冒のために三四日寝てゐたといふ。黒川君から電話がかゝつて、八月の東劇で「利

根の渡」を上演したいといふ。承諾の返事をして置く。
四時過る頃に中野が中元の品を持参、一時間あまり話して去る。

終日雨やまず、温度も俄に下る。午後から単羽織を着る。新聞をみると、北陸地方は大出水であるといふ。

読書。七時ごろ入浴。やがて森部帰宅。暮れていよく冷氣加はる。不順の氣候である。

十時半就寝。

十三日（金曜）雨（七十一度）

午前七時起床。細雨。

森部は研文社へ出てゆく。おえいは早朝から麴町の浦岡君と小田切医師方へ中元の礼に行つて、九時ごろ帰宅。

気賀君子から中元の品を郵送して来たので、返書。流山の高梨花人君から短尺の揮毫をたのみ、併せて味淋を送つて来たので、返書。

松居桃多郎君から明日は松翁君一週忌に相当するとて、遺筆の扇面を送つて来た。松居君逝いて一年、月日は早い。

「半七捕物帳」をかきつゞける。今度のはどうも抄取らない。

加納君から郵書、物集芳子から郵書、いづれも原稿の礼状である。

終日細雨、恰も梅雨のやうな天候である。

七時ごろ入浴。七時半頃に俵木が中元の品を持参、九時頃まで語る。

森部は夕刻帰宅したので、額田方へ水蜜桃を持たせてやる。これも九時ごろ帰宅。

十時半就寝。

十四日（土曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

森部は研文社へ出てゆく。その途中、松居君方へ仏前の供物をとゞけさせる。おえいは渋谷の瀬戸医師方へ中元の品を持参。

「半七捕物帳」をかきつゞける。十一時頃に佐久間が来て中元の品をくれた。

終日陰つて折々に細雨。温度は依然として低い。

七時半頃入浴。読書。森部は八時ごろ帰宅、八月号の校正も全部終了したといふ。市川寿美蔵から中元の品をとゞけて来た。

額田から昨夜の礼状が来た。岸井から大阪着の郵書が来た。

十時半就寝。

十五日（日曜）陰（七十度）

午前七時起床。

「半七捕物帳」をかきつゞける。山崎が来て嫩会の会費を納めてゆく。

流山の高梨君に頼まれた短尺に揮毫、返送。中野に「猫やなぎ」一部を郵送。

夕刻、中目黒を散歩。冷氣依然、恰も梅雨があと戻りの体である。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

十六日（月曜）陰（七十度）

午前七時起床。五時過るころ強震。

十時頃に上松の武雄が来て、一時間ほど話して去る。

「半七捕物帳」を脱稿、更に訂正にかゝる。畑喜代司君から「鳥辺山心中」レコード吹込みの件に付、郵書が来たので、返書。

午後二時ごろから道玄坂を散歩、四時ごろ帰宅。暑中見舞の郵書五通到着、いづれも返書。

夕刊をみると、この天候は当分回復しまいといふ。困ったものである。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

十七日（火曜）陰、晴（七十二度）

午前六時半起床。

おえいは銀座へ買物に出てゆく。十時頃に佐久間が来た。

つゞいて紀尾井町の小林の細君が中元の礼に来た。細野多知子が中元の礼に来た。

おえいは午後零時半ごろ帰宅。小林の細君は三時頃まで話して去る。

二時頃から晴れて、めづらしく日光を見る。二時半頃に東儀が中元の礼にきて、一時間ほど話して去る。東儀に「猫やなぎ」一部をやる。

「半七捕物帳」を訂正し終る。題は「ズウフラ怪談」四十五枚。

暑中見舞の返書五通を発送。読書。ひぐらしの声きこゆ。

七時半ごろ入浴。佐久間が又来て九時頃に去る。十時半就寝。夜半に又もや雨の音。

十八日（水曜）雨（七十五度）

午前八時起床。おすみは宿下りで朝から出てゆく。けふから「日の出」の小説を起稿、このごろは雑誌の仕事に取りかゝったので、なか／＼忙がしい。

終日細雨。午後二時頃に下山省三君と赤堀佐平君が来

て、一時間ほど語る。両君は更に森部と一時間あまり話して去る。

額田から郵書が来たので、返書。七時頃に佐久間が来た。

七時半ごろ入浴。読書。おすみは九時ごろ帰宅。
十時半就寝。

十九日（木曜）晴（八十五度）

午前八時起床。けふはおきみが宿下りに出てゆく。

「日の出」の小説をかきつけける。晴れて暑くなる。
五時頃に佐久間が来た。淀橋のおさだが来て野菜類をくれた。

晚餐後、森部と中目黒を散歩。観音の縁日で賑ふ。草花二三種を買って帰る。

八時ごろ入浴。読書。九時半頃におきみ帰宅。
十時四十分ごろ就寝。

二十日（金曜）晴、陰（七十五度）

午前七時半起床。けふは土用の入であるといふ。

「日の出」の原稿を訂正し終りて郵送。題は「海亀」
廿四枚。

三重県志摩の清風吟社に頼まれた俳句を選了、短尺四枚をかく。

「舞台」八月号の製本出来して届けて来た。暑中見舞のハガキ五十枚を郵送。それから読書。

おえいと森部は午後四時過る頃から明治座見物に出てゆく。夕より陰つて温度降る。

七時半ごろ入浴。八時半頃に佐久間が来て葛餅をくれ、十時過る頃まで話して去る。中島から帰阪の通知が来たので、返書。

十一時十分頃におえい等帰宅。十二時就寝。

二十一日（土曜）雨、陰（七十五度）

午前八時起床。細雨。

「舞台」八月号を林、原田、池田、清水、難波、高橋、「林、」東儀、津沢、小玉の諸家へ郵送。

「明治以後の歌舞伎劇」をかく。「精神文化」の原稿である。

森部は午後から塩谷君を訪問。一時頃に佐久間が来た。晴れんとして晴れず、陰又雨。温度も低い。今夜の両国川開きは〈延期〉。

読書。暑中見舞の郵書八通到着。
七時ごろ入浴。十時就寝。

二十二日（日曜）陰、雨（七十六度）

午前八時起床。

「明治以後の歌舞伎劇」をかきつづける。

午後二時頃に北林君夫妻が暑中見舞に来て、四時頃まで話して去る。

終日陰又雨。夕刊によると、両国の川開きは本日挙行したといふ。

暑中見舞の郵書五通到着。夕より読書。

七時ごろ入浴。暮れて雨ふりしきる。

十時半就寝。

二十三日（月曜）陰

午前八時起床。

「明治以後の歌舞伎劇」をかきつづける。あはせて廿八枚、午後二時頃までに脱稿し終る。それから読書。

夕方に佐久間が来た。暑中見舞の郵書十一通到着。そのうちに元園町の旧宅隣家の近藤君の郵書もあつて、元園町の町名は七月以来いよ／＼消滅、旧宅付近は麹町二丁目に編入されたといふ、かねて承知のことではあるが、元園町消滅はなんとなく心ざびしい。

七時過るころ入浴。読書。三橋が来て九時頃まで話して去る。

十時半就寝。夜半に強風が吹き出した。

二十四日（火曜）陰、驟雨（八十三度）

午前七時半起床。

中目黒へ髪を刈りに行く。十時過るころ帰宅すると、やがて鎌倉の神谷とも子が来て蝦をくれ、一時間ほど話して去る。

をり／＼に驟雨。午後二時から松崎天民君の告別式があるので、森部に香典を持たせて遣る。アメリカの亀も午後死んだ。

十二時半頃に畑喜代司君が来て一時間あまり話して去る。

読書。七時半ごろ入浴。暑中見舞の郵書六通到着。

十一時就寝。

二十五日（水曜）陰（七十五度）

午前七時起床。

講談社から「ズウフラ怪談」の原稿料を送つて来たので、返書。あはせて次回の予告を郵送。大村から郵書が来て、今夜は欠席するといふ。これにも返書。

午後一時半頃に麹町の理髪店永田の主人がたづねて来て、半時間ほど話して去る。三時半頃に巖谷三一君が来て「利根の渡」監督について一時間ほど話して去る。暑中見舞の郵書八通到着。

今夜は嫩会例会で、佐久間が先づ来た。ついで山崎、三橋、額田、俵木、岡田、北林が来た。石井は無断欠席。

例に依て私の江戸講話、劇談、雑談。九時半ごろ散会。
それから入浴。十一時就寝。夜半に雨の音。

二十六日（木曜）雨（七十五度）

午前八時起床。

十一時頃に雑誌「銀座」の西村酔香君が来て、雑説へ何か寄稿してくれと云ひ、一時間ほど話して去る。

暑中見舞の郵書十一通到着、その返書四通を発送。

「銀座の思ひ出」六枚をかく。夕方に佐久間が来た。

七時ごろ（入浴。）読書。十時半就寝。

二十七日（金曜）陰、驟雨（八十度）

午前七時半起床。

十時頃から家を出て、先づ牛込神楽坂の第一銀行へ行つて、富士印刷会社の配当金をうけ取り、それから銀座の三越へ行つて巖谷君への贈物の配達をたのみ、銀座で昼餐。伊東屋で文房具などを買つて、十二時十五分帰宅。留守中に中村孝子が来たといふので、郵書を出して置く。暑中見舞の郵書八通到着、その返書三通をかく。

午後二時頃から驟雨、間もなく止む。

「舞台」十月号の戯曲を起稿するために、樺太の地理などを調査、今度は現代劇である。

七時半頃入浴。九時頃から森部と中目黒を散歩。旧暦

十六夜の月が出た。天候もおひ／＼回復するらしい。
十一時就寝。

二十八日（土曜）晴（八十二度）

午前八時半起床。晴れて暑くなる。

おえいは朝から麹町の畑、小川、永田の諸家へ暑中見舞にゆき、十二時過るころ帰宅。婦人之友の婦人記者が来た。

「舞台」の戯曲を起稿。どんなものが出来るかよく判らない。

暑中見舞の郵書六通到着、その返書二通をかく。

七時ごろ入浴。佐久間が来た。

読書。十一時就寝。

二十九日（日曜）晴（九十一度）

午前七時半起床。けふも晴れて暑い。

戯曲をかきつゞける。

十二時半頃に草場君来訪、けふは土用の丑の日であるといふので鰻をくれ、一時間ほど話して去る。つゞいて佐久間が来た。

歌沢寅右衛門が暑中見舞に来了。東京劇場から初日の入場券をとりけて来たので、その一枚を三橋に郵送。

暑気は俄に騰つて、日中は九十度を越えた。当夏に入

つて第一の暑気である。執筆に倦んで読書。暑中見舞の郵書十通到着、その返書六通をかく。

七時ごろ入浴。読書。夕から陰る。

十時半就寝。

三十日（月曜）陰（七十五度）

午前八時起床。

森部が研文社へ戯曲の原稿を持参するといふので、その途中、海野方へ暑中見舞の品をとげさせる。

「舞台」の戯曲は思ふやうに書けないので、一旦中止、更に「半七捕物帳」第四を起稿。

けふは陰つて又もや涼しくなる、不順の気候である。

東劇から速達便が来て、明日の舞台稽古は午前十時から始めるといふ。岩谷からも同様の電話がかゝつて来た。

四時頃に佐久間が来た。つゞいて三橋が来た。四時半頃に黒川君が来て、一時間ほど話して去る。

暑中見舞の郵書八通到着、返信無し。暮れて雨の音。七時過るころ入浴。読書。十時半就寝。

三十一日（火曜）雨（七十二度）

午前八時起床。細雨。

東劇の舞台稽古で、十時半頃から出てゆく。第一の「廿四孝」の中途であつた。こゝで渥美「君■」〈君等〉に

逢つた。

「利根の渡」の稽古は午後一時頃から始まつて、四時頃に第三幕を終る。こゝで黒川君から上演料を受取る。四時半ごろ帰宅。新潮社から随筆の原稿料を送つて来たので、返書。暑中見舞の郵書八通、その返信五通をかく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は怪獣（オール読物、三十七枚）弥次喜多見物の思ひ出（演芸画報、五枚）ズウフラ怪談（講談倶楽部、四十五枚）海亀（日の出、廿四枚）明治以後の演劇（日本精神文化、廿八枚）銀座の思ひ出（銀座、六枚）ほかに舞台の戯曲編集など。

（翻刻担当…田茂山史恵）

昭和九年八月

一日（水曜）雨、晴、雨（七十八度）

午前八時起床。気候は再びあと戻りがしたらしい。これでは農作物の成績がどうかであらうか、頗る不安である。米価は正に騰貴した。

「半七捕物帳」をかきつゞける。暑中見舞の郵書四通到着、その返書三通。

二時過る頃に佐久間が来た。雨晴れて温度騰る。

三時半頃から佐久間と森部同道で東劇へ出てゆく。初日満員。額田夫婦も来てゐた。三橋もあとから来た。

四時開演。第一「廿四孝」第二「利根の渡」第三「お染久松」第四「仇討兄弟鑑」で、第四の一幕まで見物して、十時過る頃に同座を出ると、いつの間にか雨が降り出してゐた。

十時三十分ごろ帰宅。入浴。

十二時就寝。雨の音が強くきこえた。

二日（木曜）晴（八十五度）

午前八時半起床。

けふは母の祥月命日であるので、姉とおえいは早朝から青山へ墓参にゆく。自宅でも仏前に供物などして、焼香。

新潮社から「日の出」の原稿料を送つて来たので、返書。

暑中見舞の郵書十一通到着、その返書七通をかく。

「半七捕物帳」をかきつゞけたが、午頃から頭痛はげしく、中止。

三時半頃に岩谷君が来て「利根の渡」第二幕の幕切れについて相談あり、三十分ほど話して去る。

つゞいて額田夫婦が来た。細君は先づ去り、額田はあとに残つて歌舞伎座十月興行の脚本について相談。あとから佐久間も来て、五時半過るころに二人打連れて去る。そのあひだに上松のおすゐも来たといふ。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三日（金曜）晴（八十五度）

午前八時起床。

姉とおえいは滝野川の管野君方へ暑中見舞にゆく。

長谷川君に郵書を発送、「舞台」に戯曲寄稿の礼状である。暑中見舞の郵書十通到着、その返信六通をかく。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後二時ごろにおえい等帰宅。

七時ごろ入浴。読書。九時廿四分ごろ強震。

十時半就寝。

四日（土曜）晴（八十八度）

午前七時半起床。

九時頃に佐久間が来た。

「半七捕物帳」をかきつゞける。一向に捗取らない。

「郵書」〈暑中〉見舞の郵書八通到着、その返信五通をかく。

七時半ごろ入浴。やがて佐久間が再び来て、坪内士行君に舞台寄稿をたのんで来たといふ。

読書。十一時就寝。

五日（日曜）晴（八十八度）

午前六時半起床。

「半七捕物帳」をかきつゞける。おえいは十一時頃から東劇のマチネー見物に出てゆく。

晴れて暑くなる。オール読物から「怪獣」の原稿料を送つて来たので、返書。暑中見舞の郵書五通到着、その返信三通をかく。

二時頃からペンを措いて読書。五時半頃におえい帰宅。七時ごろ入浴。八時頃から森部と目黒を散歩。

十時半就寝。

六日（月曜）晴（九十度）

午前七時起床。森部は研文社へ出てゆく。

「夕顔の家」三枚をかいて、謡曲界の真川君に郵送。

佐久間が来て、東劇の劇評を置いてゆく。小田原の飯野の使が来て、箱根の産物といふ花籠一對をとゞける。

暑中見舞の郵書八通到着、その返信五通をかく。

「半七捕物帳」をかきつゞける。この両三日は暑気大いに加はる。ペンを措いて読書。ひぐらしの声がしきりに聞える。

七時ごろ入浴。読書。八時過る頃に森部帰宅。

十時半就寝。此頃は藪蚊が著るしく殖えた。

七日（火曜）陰、驟雨（八十九度）

午前六時半起床。森部は研文社へ出てゆく。

姉は時候中りで臥床。少しく熱もあるらしいので、瀬戸医師の来診を求めることにする。

岸井から電話がかゝつて、社用で昨夜上京、明日訪問するといふ。

陰つて折々に驟雨、蒸暑い日である。

十二時頃に瀬戸医師来診、姉は胃腸を害してゐるのであるといふ。おきみはあとから薬を取りにゆく。

松竹の吉沢君が来て、七月かぎり松竹を引退することになったとて、引祝ひの扇子その他をくれた。吉沢君は七十一歳、即ち満七十歳に相当するのである。私も二十余年来の長い馴染であつたので、引退と聞けば名残惜し

いやうに思はれる。おえいも名残を惜んでゐた。

大阪の山上から奈良漬を送つて来たので、返書。暑中見舞の郵書六通到着。その返信五通をかく。

四時頃に黒川君が来て「利根の渡」を新興キネマで撮影するかも知れないと云ひ、三十分あまり話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。八時半頃に森部帰宅、下山君帰郷中に付、三橋が校正を助けに来たといふ。

十一時「半」就寝。

八日（水曜）晴、驟雨（九十度）

午前六時半起床。

暑中見舞の郵書八通到着、その返信五通をかく。

十時頃に佐久間が来た。おえいは吉沢君への贈物を買ひに銀座へゆくと、けふは八日で各デパートは休業であつたといふ。

十一時頃に岸井が来て、妹の縁談について上京したといひ、昼餐を喫して三時過る頃まで語る。

けふは立秋といふのであるが、残暑はこれから強からうと察せられる。

六時頃から森部同道で神田へゆき、樺太に関する著書を探しあるいたが、思はしい物も見当らなかつた。兎も角も三種を買つて、九時ごろ帰宅。その留守に俵木が来たといふ。

大阪の山上から「舞台」の広告料と嫩会々費を送つて来たので、返書。

十時半頃から驟雨、雷鳴。
十一時就寝。

九日（木曜）晴、陰（八十五度）

午前八時起床。朝は陰つて蒸暑い。

大阪の坪井から郵書が来たので、返書。深川図書館の岩田君に郵書を発して、同図書館に何か樺太に関する著書はないかと問ひ合せてやる。暑中見舞の郵書六通到着、その返信三通をかく。おえいは今日も銀座へ出てゆく。

午後には「半七捕物帳」をかきつゞける。

姉は「やはり」容態がよくないので、瀬戸医師を呼びにやる。五時頃に瀬戸氏来診、やはり胃腸がよくないのであるといふ。

七時ごろ入浴。今夜は観音の縁日であるので、八時頃から森部と出てゆく。伊勢脇の通りなどは往来が出来ぬほどに雑踏してゐた。

歸つて読書。十一時就寝。

十日（金曜）陰（八十度）

午前六時半起床。

「半七捕物帳」をかきつゞける。森部は研文社へ出て

ゆく。

額田から郵書が来て、沼津市外静浦村本能寺に滞在中であるといふので、返書。ほかに暑中見舞の郵書八通到着、その返書五通。

終日陰つて温度が高くない。不順の気候である。

七時ごろ入浴。読書。更けて風が吹き出した。
十一時就寝。

十一日（土曜）晴（八十九度）

午前七時起床。森部は研文社へ出てゆく。

岩田君から郵書が来たので、返書。十時頃に佐久間が来た。

姉はおきみ同道で泰山堂医院へ診察を受けにゆく。

「半七捕物帳」をかきつづける。今度は少し長くなるので困った。

四時頃に森部帰宅、九月号は全部校了になったといふ。

四時半頃に上松君来訪、晚餐を喫して六時過る頃まで話して去る。その間に驟雨、間もなく止む。

七時ごろ入浴。読書。庭に出ると、満天の星。

十一時就寝。

十二日（日曜）晴（九十度）

午前七時起床。快晴、朝から暑い。

先日飯野に貰った箱根の花籠と大阪の奈良漬とを森部に持たせて、紀尾井町の小林君方へと届けさせる。

「半七捕物帳」をかきつづける。午後にはいよ／＼暑くなる。へ上松のおすゝが姉の見舞にへ来た。

四時頃に三橋が来て、明治座初日の入場券を受け取つてゆく。四時半頃に佐久間が来た。つゞいて森部帰宅、額田の留守宅へまはつて郵便物などを整理して来たといふ。

七時ごろ入浴。八時頃から森部と目黒を散歩。風鈴と西瓜を買つて来た。

読書。十一時就寝。

十三日（月曜）晴（八十九度）

午前七時起床。

暑中見舞の郵書五通到着、その返書四通をかく。

「半七捕物帳」を脱稿、更にその訂正にかゝる。

十一時頃におさだが子供をつれて来て、午後一時半頃まで話して去る。

三時頃に佐久間が来た。森部は午後から研文社へ表紙の校正にゆき、三時半ごろ帰宅。

四時半頃までに「半七捕物帳」を訂正し終る。題は「大坂屋花鳥」七十枚。今度は少し長へく／＼なつてしまつた。

七時ごろ入浴。読書。十一時就寝。

十四日（火曜）晴（九十度）

午前七時起床。

「半七捕物帳」を再び訂正。暑中見舞の郵書三通到着、いづれも返書をかく。

午後は山崎の戯曲「牧場の黄昏」と北林余志子の戯曲

「開港女気質」をよむ。北林は四幕の大作である。

四時半頃に佐久間が来た。岸井から帰阪の通知が来た。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十五日（水曜）晴（九十度）

午前七時半起床。

「半七捕物帳」を速達便で講談社に発送。暑中見舞の郵書六通到着、いづれも返書。

北林の戯曲に批評を添へて返送。中江草一君の戯曲「首所望」を編集。晴れて暑氣いよ／＼加はる。

午後三時過る頃に瀬戸医師来診、姉の胃腸はやうやく回復したが、尿に糖分を見るといふ。

おえいと森部は夕刻から目黒へゆき、ラヂオの機械を買ふ。やがて職人が来て、取付けにかゝる。

七時ごろ入浴。八時頃に俵木が来て、九時半頃まで話して去る。

十時半就寝。更けても暑い。

十六日（木曜）晴、陰（八十九度）

午前七時半起床。

「半七捕物帳」第五を書きつゞける為に、材料を調査。陰晴定まらず、夕刻には遠雷の声がきこえた。

朝顔、紅蜀葵など盛に開く。棚のへうたんも追々に実を結んだ。残暑が強いとは云ひながら、郊外の秋が近い。

暑中見舞の郵書七通到着、その返書五通をかく。伊坂君から転居の通知が来たので、返書。

七時ごろ入浴。今夜からラヂオをかける。読書。十時半就寝。

十七日（金曜）陰（八十八度）

午前七時半起床。

暑中見舞の郵書五通到着、その返書四通をかく。

午後から新に戯曲を起稿、舞台十月号の原稿である。午後三時頃に小林の細君が姉の見舞に来て、一時間ほど話して去る。

四時過る頃に改造社の高平君が来て、維新小説全集十二巻を発行するに付、私にもその一卷を担当してくれといひ、三十分ほど話して去る。

六時頃に佐久間が来た。七時ごろ入浴。

改造社の全集なか／＼面倒であるので、高平君まで断りの郵書を発送。近來老衰、短時日のあひだに五六百枚の原稿を纏めるのは難儀である。

読書。十時半就寝。機織虫が鳴く。

十八日（土曜）晴（八十五度）

午前七時半起床。

戯曲をかきつゞける。午後一時頃に佐久間が来た。

三時頃までに戯曲を脱稿、スケッチ風の一幕物であるから早く片付いた。それを訂正しながら浄書。

「舞台」九月号の製本が出来したので、高橋、林、東儀、難波、原田、清水、池田、小玉、津沢の諸家へ郵送。

七時ごろ入浴。やがて石井が来て、父の一週忌で帰郷するといひ、九時頃まで話して去る。庭へ出ると、秋らしい夜風が吹く。

十時半就寝。

十九日（日曜）晴（八十四度）

午前七時起床。

戯曲を訂正しながら浄書。

午後一時頃に麴町の小川の細君が来て菓子をくれ、門口で帰る。二時半頃に上松のおすゞが来た。晴れてはゐるが、風が涼しい。

三時頃に寺田君が来た。そのあひだに佐久間も来たので、庭に出て森部と共に撮影、寺田君は写真機を持参したのである。

五時過る頃に寺田君は去る。寺田君はこれから田端の塩谷君方を訪問するといふので、森部も一緒に出てゆく。ついで岩田与司一君が来て、深川図書館備付の書籍十四部を貸してくれる。いづれも樺太に関する著書である。岩田君は三十分ほど話して去る。

七時半ごろ入浴。夕方から単羽織を着る。暑中見舞の郵書三通、いづれも返書。

読書。九時半頃に森部帰宅。十時半ごろ就寝。

二十日（月曜）晴（八十三度）

午前七時起床。

九時頃に四谷の江川堂の林福太郎老人が来て、先代主人の謝恩碑が竣工したとて、その石刷りを見せる。独力にて主人の碑を建立、今の世に奇特といふべきである。林君は三十分ほど話して去る。それから目黒へ髪刈りにゆく。

戯曲を訂正しながら浄書。残暑見舞の返書四通をかく。

二時過る頃に帝劇の山本君が来て、河村瑞賢の戯曲起稿について相談があつた。松竹側で果して上演するや否や未定である。

六時頃から森部と目黒を散歩。七時ごろ帰宅。入浴。
読書。佐久間が来た。陰曆十二日の月が明るい。
十一時就寝。

二十一日（火曜）晴（八十四度）

午前七時起床。

戯曲を訂正しながら浄書。よほど改訂を加へる個所がある。で、浄書も頗る暇取る。〈残〉暑見舞の郵書五通到着、いづれも返書。

午後一時頃に中島が来て、昨日帰京したといひ、十分ほど話して去る。

七時ごろ入浴。読書。八時過る頃に佐久間が来た。
十一時就寝。

二十二日（水曜）晴（八十六度）

午前七時起床。

額田に電話をかけて帰京の有無を問合せると、出先で娘が発病、それがために帰京がおくれるといふ。取りあへず見舞状を送る。川村君にも郵書を送る、十月号原稿の件である。

十二時頃までに戯曲を訂正浄書し終る。あはせて四十四枚、題は「狐の皮」我ながらどうも佳作でないらしく思はれるので、少し困った。

講談社から「大坂屋花鳥」の原稿料を送つて来たので返書、あはせて次回の予告をかいて送る。

額田から郵書が来た。私の見舞状と行きがちひになったのである。それに拠ると、健吉と弥栄子が大腸加答児に罹つたので、直ぐに帰京することは出来ないといふ。返書。

それについて、森部を額田の留守宅につかはし、到着の原稿類を取寄せることにする。舞台十月号の編集はこちらで担任しなければなるまい。

森部は夕刻から出てゆく。

七時ごろ入浴。読書。九時半頃に森部帰宅。
十時半ごろ就寝。

二十三日（木曜）陰、晴（八十五度）

午前七時起床。

小田原の飯野から大阪みやげを送つて来たので、返書。大阪の山上からその戯曲集「出発前」を送つて来たので、返書。伊勢の小村君から鯉節を送つて来たので、これにも返書。

長谷川君と松居君に郵書を送る。これも「舞台」十月号の件である。残暑見舞の郵書三通着、いづれも返書。午後には黒川君から電話がかゝつて、下加茂の撮影所から「江戸は移る」のシナリオを送つて来たが、それは「相

馬の金さん」を脚色したやうに思はれるから、一度読んでくれといふ。

「半七捕物帳」第五を起稿するために、材料を調査。目黒町防護団から明廿四日の夜、燈火管制予行を試みるといふ通知が来た。

七時ごろ入浴。黒川君から速達便でシナリオを送つて来たので、一読。

十時半就寝。

二十四日（金曜）陰、驟雨（八十五度）

午前七時起床。

額田から郵書が来て、子供はおひ／＼快方に向つたが、帰京は少しく延引するといふ。残暑見舞の郵書四通到着、いづれも返書。

中江草一君の戯曲「首所望」と、飯野の戯曲「晴夜」を編集。十時頃に三橋が来て、自作の戯曲を受取つてゆく。

陰つて蒸暑く、をり／＼に驟雨。頭の重い日である。

額田の留守宅から電話がかゝつて、長谷川君と森ほのほ君の原稿が届いてゐるといふので、森部は四時半頃から受取りにゆく。

六時半ごろ入浴。今夜は燈火管制の予行で、家内も消灯。読書も出来ない。

九時頃に森部帰宅。つゞいて佐久間が来た。

九時半頃に予行演習を終つて、家内明るくなる。庭に出ると、今夜は旧暦の七月十五日、盆の月が皎々と冴えてゐた。草むらには虫の声。而も何となく蒸暑い夜である。

十一時就寝。

二十五日（土曜）陰、雨（八十二度）

午前六時半起床。

おえいは麹町の小林君方を訪問、先日細君が姉の見舞に来てくれた挨拶である。十時ごろ帰宅。

長谷川君に原稿うけ取りの返書。寺田君から郵書が来て、腸出血のために帝大病院に入院したといふ。

「半七捕物帳」をかきつゞけたが、筆が進まないのので中止。時に蒸暑く、時に涼しく、なんだか不愉快の日である。

飯田九一君から自画の絵絹に讃句をたのんで来たので、揮毫、郵送。残暑見舞の返書三通。

福永君が来て、大倉燐子探偵小説集の序文校正刷を見せてゆく。

今夜は嫩会例会で、六時頃に俵木が来た。つゞいて北林、三橋、佐久間が来た。他は種々の事情で全部欠席。したがって雑談のみで、九時半ごろ散会。をり／＼に細

雨。

入浴。十一時就寝。雨の音。

二十六日（日曜）陰（八十度）

午前八時起床。

大村から嫩会の会費を郵送して来たので、返書。ほかに残暑見舞の返書、三通。

小玉の愛子が来て、午後まで話して去る。森部が寺田君の見舞にゆくといふので、私も見舞を持たせてやる。研文社から校正刷をとどけて来たので、私の戯曲「狐の皮」だけを校了。四時過る頃に森部帰宅。寺田君は案外に元気が好いといふ。

終日陰つて涼しく、夕から晴れる。

七時ごろ入浴。読書。月明かに、虫の声。

十時半就寝。

二十七日（月曜）晴（八十度）

午前七時半起床。

額田から電話がかゝつて、昨夜帰京したといふ。大村から静岡の梨を送つて来たので、返書。十時半頃に佐久間が来た。

志摩の小村竹山君から俳句の選をたのんで来たので、選了、返送。

午後零時半頃に三橋が来て、自作の戯曲を訂正して去る。春陽堂から「今古探偵十種」の増版五百部を頼んで来たので、捺印。

二時頃から一時間ほど眠つてしまった。晴れて秋らしい風が吹く。

読書。七時ごろ入浴。森部は夕方から額田方へゆき、八時半ごろ帰宅。額田の子供等も大かた快方に向つたといふ。

寺田君から見舞の礼状が来た。ほかに残暑見舞の郵書四枚、いづれも返書。岡君が眼病であるといふので、見舞状を発送。

夜も読書。機織虫が燈下に飛んで来る。

十時半就寝。

二十八日（火曜）晴（八十五度）

午前七時半起床。

九時半頃に佐久間が来て、これから巖谷三一君の戯曲の原稿を貰ひにゆくと云ひ、三十分ほど話して去る。

「半七捕物帳」をかきつゞける。おえいは上松方へ行つて、午後一時半ごろ帰宅。

残暑見舞の郵書三通到着、いづれも返書。坪内土行君から転居の通知が来たので、返書。渥美君から郵書が来て、時事新報の劇評をやめたといふので、これにも返書。

七時ごろ入浴。八時頃に俵木が自作の戯曲を持参、ついで佐久間が巖谷君の戯曲「新東京見物」を持参。そこへ又、松居君が松翁君の遺稿を速達便で送つて来た。俵木と佐久間は九時廿分頃に去る。

十一時就寝。

二十九日（水曜）陰、晴（八十五度）

午前七時起床。

巖谷君の原稿は何分にも書き直しが多いので、森部が全部浄書することにする。松居君に原稿うけ取りの返書。おえいは大崎の津沢方を訪問、午ごろ帰宅。

陰晴定まらず、蒸暑い日である。「半七捕物帳」をかきつけたが、筆が進まないので中止、更に松居松翁君の戯曲「義人の死」をよむ。

三時頃に佐久間が来た。ついで額田が来て、修善寺みやげの夜叉王の竹細君^{あさひ}をくれた。子供等はます／＼快方に向つてゐるといふ。二人は四時半頃まで話して去る。入れちがひに岡君が来た。岡君は鬼太郎と号して劇評その他に執筆してから四十年、今度の眼病を機会に筆を絶つといふ。私も岡君と同年であるから、それに対して無量の感がある。種々の昔語りなどして、岡君は六時頃に去る。

七時頃から森部と観音の縁日にゆく。日が暮れて風が

吹き出した。八時ごろ帰宅すると、佐久間が来てゐた。

入浴。佐久間は九時半頃に去る。

十時半就寝。十二時頃から驟雨、雷鳴。

昨年は松居君逝去、今年は岡君引退、私と同年配の人々が次第に文壇劇壇「■」（から）姿を消してゆく。青年時代の懐旧に半夜を送つた。

三十日（木曜）陰、雨（八十四度）

午前七時半起床。

文芸春秋社で今夜の六時から「物故文人をしのぶ会」を紅葉館で開くから出席しろといふ。歯痛のために断つたのであるが、推して出席しろといふので、よんどころなく承諾。

岩田君から郵書が来たので、返書。前橋の藤嶋君から郵書が来て、男児出生したといふ。これにも返書。

「午後■」瀬戸半眠君の葬儀が浅草新谷町の幸龍寺で執行されるので、森部を代理にやる。

午後十二時半頃に佐久間が来た。陰つて蒸暑く、なんとなく頭が重いので、二時頃から一時間ほど眠る。

五時半頃から紅葉館へ出てゆく。来会者は千葉亀雄、江見水蔭、佐藤春夫、佐々木信綱、戸張竹風、長谷川天溪の諸氏、文芸春秋社側から斎藤龍太郎君等数名出席。明治時代の文士、劇作家等の昔話などありて、九時半ご

ろ散会。宵から雨。

入浴。十一時四十分就寝。雨の声、虫の声。

三十一日（金曜）陰（七十八度）

午前七時半起床。

「半七捕物帳」をかきつゞける。陰つて涼しい。

午後に佐久間が来た。坂東寿三郎から上京のみやげを届けて来た。

森部をつかはして、瀬戸医師方へ葉礼をとゞけさせる。

二時頃に久保田君が来て、揮毫の画幅の表装が出来したとて届けてくれ、一時間あまり話して去る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は大坂屋花鳥（講談倶楽部、七十枚）狐の皮（舞台、四十四枚）夕顔の家（謡曲界、三枚）ほかに舞台の戯曲の編集など。やはり暑中は怠け勝である。

（翻刻担当…田茂山史恵）

昭和九年九月

一日（土曜）雨（七十二度）

午前八時起床。今朝は単羽織をかさねる。

飯田君から揮毫受取りの礼状が来た。中野からも郵書が来た。大阪の岸井からも郵書が来たので、返書。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後佐久間が川村君の戯曲「心の笛の音」を持参。

けふは東京、川崎、横浜の航空防衛演習の当日である。朝から雨やまず、をり／＼に砲銃の音がきこえる。

六時ごろ入浴。今夜は燈火管制で、内外暗黒。雨降りしきる。ラデオで種々の警報が発せられる。

十一時半就寝。

二日（日曜）陰、雨（七十一度）

午前七時起床。

川村君に戯曲の礼状を送る。けふも陰つて涼しい。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後一時頃に俵木が自作の戯曲を持参、三十分ほど話して去る。佐久間も来た。

七時ごろ入浴。読書。佐久間が再び来た。

八時頃から雨。十時半就寝。

三日（月曜）陰（七十二度）

午前七時半起床。森部は朝から研文社へ出てゆく。

岡君から明治時代の文芸倶楽部二冊を郵送してくれた。いづれも私の原稿が掲載されてゐるのである。一読、実に隔世の感がある。取りあへず礼状を送る。

川村君から電話がかゝつて、自作の歌舞伎座上演は見合せになつたといふ。つゞいて速達便で「旗洗荘漫談」を送つて来たので、返書。

「半七捕物帳」をかきつゞける。陰つて折々に細雨。午頃に佐久間が来た。

放送局の小林君から電話で、来る七日の夜に「筑摩の湯」を放送するといふ。訥子、荒次郎等である。

「豪華顔是非」四枚をかいて、演芸画報社に郵送。

七時ごろ入浴。夜は読書。九時頃に森部帰宅。十時半就寝。

四日（火曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

鈴木万里子（泉三郎未亡人の長女）から教科書に出てゐる私の戯曲「なこそこの関」について問合せがあつたので、返書。あはせて綺堂戯曲集第四巻を郵送。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後佐久間が来た。けふも陰つて涼しい。謡曲界発行所から原稿の謝礼を

送つて来たので、返書。

東宝劇場から招待券を送つて来たので、森部を代理にやる。森部は夕方から出てゆく。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。やがて森部帰宅。

五日（水曜）陰（七十一度）

午前七時起床。

猿之助のせがれ三四助死去、本日告別式を行ふことが新聞紙上に見えたので、速達便で悔み状を発送。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後に佐久間が来た。けふから市電従業員の総罷業始まる。

四時頃に文芸春秋社の千葉君が先日の座談会の速記原稿を持参、一読して訂正、随分誤謬がある。

七時ごろ入浴。大阪の岸井から飛行郵便を送つて来て、「近松半二の死」を借りたいといふ。あの戯曲は大阪に向くまいと思はれるが、兎も角も発送して置く。

宵から雨。読書。十時半就寝。

六日（木曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

額田から「舞台」の戯曲原稿二編を送つて来たので、返書。大村から帰京の通知が来たので、返書。岸井にも

返書。

けふも陰つて涼しい。午後に佐久間が来た。三時頃に前進座の長十郎等が帰京の挨拶に来た。

四時頃までに「半七捕物帳」を訂正し終る。あはせて七十枚、題は「正雪の絵馬」

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

七日（金曜）陰、晴、陰（七十五度）

午前七時起床。森部は研文社へ出てゆく。

久保田君に依頼された紫陽花の漢詩七言絶句を作り、地紙に揮毫して郵送。帰郷中の岡田から郵書が来たので、返書。

十時頃に佐久間が来た。

午後二時頃から目黒を散歩、三時ごろ帰宅。その留守中に北林君夫妻が来て、支那の月餅をくれた。

静岡の山本君から梨一箱を送つて来たので、返書。

読書。七時ごろ入浴。今夜は八時五十分から訥子、荒次郎、左升等が私の「筑摩の湯」を放送、佐久間も聴きに来た。九時三十分を終る。

やがて森部帰宅。十時四十分就寝。

八日（土曜）陰、雨（七十八度）

午前七時半起床。森部は研文社へゆく。

前橋の藤嶋君から男児出生の祝物を頼まれてゐるので、短尺に揮毫。ついでに諸方から依頼の短尺十七枚に揮毫。あはせて島田弔雨君に頼まれた絹地にも揮毫。それがために半日を費した。

午後は読書。片岡十蔵が五代目市蔵襲名の挨拶に來た。四時過る頃に淀橋のおさだが子供をつれて來て、栗をくれた。

七時ごろ入浴。森部帰宅。
読書。雨の音。十時半就寢。

九日（日曜）陰、晴、風（八十三度）

午前七時半起床。をり／＼に驟雨。

森部は研文社へ出てゆく。その途中、麴町の小林、大野、小田切の諸家へ静岡の梨をとどける。

岩田君から借用の樺太に関する書籍をよむ。あはせて十四種、なか／＼読み切れさうもない。

陰晴定まらず、をり／＼に驟雨、風強く、蒸暑く、暴れ模様である。

二時半頃に上松のおすゞが來て、一時間ほど話して去る。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寢。雨の音、風の音、蒸暑くて眠られなかつた。

十日（月曜）陰（八十二度）

午前七時起床。

池田君から雑誌「ひと」を送つて來たので、返書。久保田君から地紙揮毫受取りの返書が來た。「半七捕物帳」を講談社へ郵送。揮毫の短尺を前橋の藤嶋君に郵送。

樺太に関する書籍をよむ。森部は昨日小林君方から焼物の大きい蝦蟇を貰つて來たので、庭の木の下に置く。昨日來の強風で花壇の草花が吹き倒された。けふも陰晴定まらず、暴れ模様である。

午後二時頃に川出書房の水野君が來て、「精神文化」十月号の原稿料をくれ、門口で歸る。三時半頃に放送局の小林君が來て、先夜の「筑摩の湯」の放送料をくれ、更にラヂオ・ドラマを新作してくれといひ、一時間あまり話して去る。

岸井から郵書が來たので、返書。七時ごろ入浴。

読書。十時半就寢。十二時頃に門を叩いて速達便を配達して來た。二宮君が「舞台」十月号の広告原稿を送つて來たのである。

十一日（火曜）陰（八十三度）

午前八時起床。

森部は二宮君の広告原稿をたづさへて研文社へゆき、十時ごろ帰宅。佐久間が來た。

けふは二百廿日、差したる風も吹かないが、陰り勝である。

十二時半頃に文芸懇話会の婦人記者広瀬千香子が来て、物故文人吊慰会について問合せがあつた。つゞいて春陽堂の木呂子君が来て、大日本文庫百冊を予約で発行するに付、私にも賛助員の名を貸してくれといひ、三十分ほど話して去る。

けふから新戯曲「樺太島」を起稿。

七時ごろ入浴。読書。秋の蚊が燈下にあつまる。佐久間が再び来た。俵木が自作の戯曲を持参、九時頃に去る。

十時半就寝。

十二日（水曜）陰、晴（八十四度）

午前八時起床。

十時頃に佐久間が来た。樺太に関する書籍の中、読了の分八冊を書留小包便にして岩田君に返送。あはせて礼状を送る。

十一時過る頃に改造社の塩谷君が来た。維新歴史小説全集の執筆は内裏に断つたのであるが、その推薦文をかくてくれと云ひ、十二時半頃まで話して去る。それから直ぐに四百字ほどの推薦文をかくて郵送。

「樺太島」をかきつゞけたが、頭が重いので中止。

七時ごろ入浴。佐久間が再び来た。今夜はラヂオの演芸放送に、東劇の二番目「盗人と親」の序幕の舞台放送があつたが、ラヂオで舞台放送するのは無理である。

十時半就寝。虫の声が夜ごとに殖えて来た。

十三日（木曜）晴（八十二度）

午前八時起床。

武田鶯塘君から六法詞、モサ詞について問合せがあつたので、返書。岸井から「近松半二の死」の原稿を返送して来たので、返書。

森部は研文社へ広告の校正に出てゆく。

「樺太島」をかきつゞける。山下の父から山下の石碑建立に付、私に一句かいてくれと云つて来たが、俳句も面白くないので「風雨詩人墓、山河故国秋」の一連を作つた。但し私は字が拙いので、誰かに揮毫して貰ふやうに、淀橋の山下石美君まで云ひ送る。

三時頃に森部帰宅。研文社から大学病院の寺田君を見舞に廻ると、寺田君もおひ／＼全快、今夕退院することになったといふ。

七時ごろ入浴。読書。夕から陰る。

十時半就寝。今夜は午前四時頃まで眠られなかつた。風の音、をり／＼に雨の音。

十四日（金曜）雨、陰（七十八度）

午前六時半起床。

山形の本間君から郵便が来たので、返書。寺田君から退院の通知が来た。

島田弔雨君に頼まれてゐた絹地を郵送、あはせて郵便を送る。

大阪の岸井から郵便が来たので、返書。

「樺太島」をかきつゞける。どうも面白くない。

岩田君から書籍うけ取りの返書が来た。武田君からも返書が来た。

山上の「出発前」〈出版〉記念祝賀会が今夕五時半から大阪道頓堀の丸万楼上で開かれるといふので、祝電を発送。

けふも陰晴定まらず、この天気がいつまで続くか判らない。

七時ごろ入浴。読書。この頃は蚊も殖え、虫の声も殖えた。虫の声を聞きながら読書するのはよいが、蚊の群に襲はれるの〈は〉困る。

旧郊外の生活も一得一失である。
十時半就寝。

十五日（土曜）陰、雨（七十八度）

午前八時起床。

前橋の藤嶋君から内祝の品を送つて来たので、返書。

渋谷八幡の大祭で、太鼓の音などがきこえる。けふも天気定まらず、折々に細雨。十一時頃に佐久間が来たので、東宝劇場の入場券をやる。

午後一時頃に神戸の長谷川君が来て、一時間ほど話して去る。

姉とおえいは午後から八幡の祭礼を見物にゆく。

「樺太島」の戯曲はまだ少し調査することがあるので、中止。更に「半七捕物帳」第六を書きはじめる。大村に郵便を発送。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

十六日（日曜）晴（八十四度）

午前七時半起床。

「半七捕物帳」をかきつゞける。十時半頃に佐久間が来た。

けふはめづらしく快晴。十二時半頃から森部同道で神田辺を散歩。

古本、原稿紙、文房具などを買つて、三省堂で喫茶。三時半ごろ帰宅。

留守中に大村が来て、信州みやげなどを呉れたので、礼状を出して置く。額田から脇屋君の戯曲原稿を送つて

来たので、返書。

読書。気賀君子から越後の梨を送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。庭には月光、虫声。

十時半就寝。少々感冒の気味であるので、服薬。

十七日（月曜）雨、陰（七十五度）

午前八時起床。細雨。長続きのしない天気である。

「半七捕物帳」をかきつゞける。

雨は折々に止んで、又降りつゞける。温度も降つた。

夜は読書。七時ごろ入浴。

十時半就寝。雨の声、虫の声。

十八日（火曜）雨（七十五度）

午前八時起床。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午頃に佐久間が来た。

日本俳優学校から郵書が来て、来月十四日、日比谷の音楽室で「蟹満寺縁起」を上演するといふ。承諾の返書。

午後四時半頃に山下の弟正美君が来た。山下の墓碑の

件である。一時間ほど話して去る。正美君は官報課に無事勤続、その傍らに明治大学の夜学に通つてゐるといふ。

結構である。

そのあひだに三橋が来て、東宝劇場今夜の入場券を受取つてゆく。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十九日（水曜）雨（七十二度）

午前七時起床。

講談社から「半七捕物帳」第五の原稿料を送つて来たので、返書。

島田君から揮毫の礼状が来たので、返書。大阪の山上から出版記念会の景況を報じて来たので、返書。

「半七捕物帳」をかきつゞける。けふも雨。十時頃に佐久間が来た。植田の細君が来て、午後まで話して去る。

森部は三時頃から額田方へ出てゆく。三時半頃に松竹の木村君が来て、一時間あまり話して去る。

七時ごろ入浴。七時半頃に小田原の飯野が来て、九時過ぎる頃まで話して去る。そのあひだに森部帰宅。

「舞台」十月号は昨日製本出来、例に依て高橋、難波、東儀、清水、林、原田、池田、津沢、小玉方へ郵送。十一時就寝。

二十日（木曜）雨（七十三度）

午前八時半起床。

寺田君から先日の写真の現像出来しとて郵送して来たので、返書。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後佐久間が来た。

額田次郎君から梨を送つて来たので、返書。鈴木千枝雄君から郵書が来たので、これにも返書。

終日雨ふりしきる。七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。夜半大雨。

二十一日（金曜）風雨、晴（七十二度）

午前七時半起床。

雨はやゝ衰へたが、西南の風が激しく吹きつゞけてゐる。

植木屋と大工があらし見舞に来た。家根瓦が吹き落され、庭の草花は片端から吹き倒された。

その強風の最中に、午前十一時過る頃、岸井が来た。社用で今朝上京したといふ。恰も新聞の号外が出て、京都大阪は今朝暴風雨、倒潰家屋おびたゞしく、多数の死傷者を出したと報じて来た。岸井は恰もそれと行き違ひに上京したのであつた。

岸井は明夜帰阪するさうで、午餐を喫して二時半頃まで話して去る。午後から雨やんで風ばかり吹く。

森部と庭に出て、倒れた草花を扶け起してゐるところへ、佐久間が来た。

夕刊をみると、京阪の被害は想像以上に激しく、死傷四千余人に達したといふ。取りあへず大阪方面の大森、和氣、豊岡、小川、山上、堀、坂井、鳥江の諸家へ見舞

状発送。

七時ごろ入浴。読書。宵から風やみ、空晴れて、旧暦八月十三日の月があざやかに懸つてゐた。虫声満地。

十時半就寝。

二十二日（土曜）陰（七十二度）

午前七時半起床。

姉とおえいは青山へ墓参に出てゆく。

わたしは中目黒へ髪刈りに行つて、十一時ごろ帰宅すると、額田が来てゐた。額田は彼岸のぼた餅をくれ、一時間ほど話して去る。

午後一時頃におえい等帰宅。「富士」の中村君が来て、新年号の原稿を頼んでゆく。

頭が重いので、近所を散歩。をり／＼に細雨。

三時ごろ帰宅すると、松田青風君が待つてゐて、自画の小幅に俳句の讚をしてくれと云ひ、一時間ほど話して去る。

小田原の飯野から風雨見舞の郵書が来たので、返書。神戸の森田、前田、京都の森田、小林に風雨見舞の郵書を発送。

七時ごろ入浴。読書。八時過る頃に大雨、やがて小降りとなる。

十時半就寝。

二十三日（日曜）晴（七十二度）

午前六時半起床。今夜は旧暦の中秋であるので、庭の芒を切つて生ける。朝から快晴。

松田君の画幅三枚に俳句を揮毫、小包み便にて発送。「半七捕物帳」をかきつゞけて、午後四時頃までに脱稿。最初から読み返して訂正。

晚餐後、目黒川のあたりを散歩。橋の上から見あげると、東の森の上に明月が皎々と昇つてゐた。申分のない良夜である。

七時ごろ入浴。松田君から電話で画幅受取りの挨拶があつた。

読書。庭に出ると、満地の虫声。

十時半就寝。

二十四日（月曜）陰、晴（七十二度）

午前八時起床。けふは秋季皇霊祭。

明廿五日は当所の天神社の秋季大祭であるので、軒提灯をかける。社頭では太鼓の音がきこえる。午後に佐久間が来た。

「半七捕物帳」を訂正し終る。併せて四十九枚、題は「大森の鶏」

朝は陰、後に晴。秋日和がつゞいて結構である。

鳥居清忠君から風雨見舞の郵書が来たので、返書。

森部は夕刻から創作座見物に出てゆく。姉とおえいは天神社へ供物奉納にゆく。

七時ごろ入浴。読書。十時半頃に森部帰宅。

十時半就寝。午前一時頃に戸を叩いて電報を配達して来た。岸井帰阪の通知である。

二十五日（火曜）陰（七十度）

午前七時起床。

歌舞伎座十一月興行の脚本をたのまれてゐるので、その材料を調査。菅原道真のことを書いてみる積りである。けふは天神の大祭当日で、町内の若い者が神輿をかついで来た。午後三時頃に中目黒の大通りへ出てみると、祭礼で幾分か賑はつてゐた。

大阪の山上、鳥江、京都の小林の諸家から風雨見舞の礼状が来た。北林余志子から今夜の嫩会観席の通知が来た。

ふたば会例会で、六時過る頃に中島が来た。つゞいて三橋、額田、大村、佐久間、俵木が来た。例に依て私の江戸講話、それから劇談、雑談。九時半ごろ散会。

入浴。十一时就寝。

二十六日（水曜）雨（七十度）

午前八時起床。

脚本の材料を調査。午後から試みに六七枚かいてみる。彼岸のいなり鮓を作ったので、森部は午後から額田方へ持参。一時頃に佐久間が来て、これから神田へ原稿紙をかひに行くといふので、私にも買つて来てくれるやうに頼む。

終日雨ふりしきる。七時ごろ入浴。読書。
十時半就寝。

二十七日（木曜）晴、陰（七十度）

午前七時起床。

植木屋が来て、庭の樹木の手入れをする。

脚本をかきつゞける。午後から頭が重くなつたので、近所を散歩。

一時半頃に佐久間が来て、原稿紙をとゞける。大阪の堀と坪井から風雨見舞の礼状が来た。神戸の前田君からも同様の返書が来た。

三時半頃に岡田が来て越後の竹細「■」工をくれ、一時間ほど話してゆく。岡田は帰京の船中で先日の暴風雨に逢つたといふ。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十八日（金曜）晴（七十二度）

午前七時起床。

大阪の大森君、小川君から風雨見舞の返書が来た。脚本をかきつゞける。どうも思はしくない。午後、近所を散歩。

一時半頃に津沢の寿子が子供をつれて来て、一時間あまり話して去る。

四時過ぎる頃に久保田満明君が来て、これも一時間ほど話して去る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日（土曜）陰（七十四度）

午前七時起床。

脚本をかきつゞける。一向に捗取らない。何分にも主人公の菅相丞を勤める歌右衛門が少しも体を動かすことが出来ないの、どうにも仕様がないのである。

山下の父から碑文の礼状が来た。午頃に佐久間が来た。額田から戯曲を送つて来たので、返書。演芸画報社から原稿料を送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。草場君の戯曲「木津川物語」をよむ。日暮れて雨の音。十時半就寝。

三十日（日曜）雨、陰（七十二度）

午前八時起床。

草場君の戯曲に批評を添へて返送。森部の兄から風雨

見舞の礼状が来た。

戯曲をかきつゞける。終日陰つて、をり／＼に雨。

松沢君の使が来て、色紙短尺の揮毫をたのんでゆく。
森部は「舞台」十一月号の戯曲原稿を研文社へとゞけにゆく。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は正雪の絵馬（講談倶楽部、七十枚）大森の鶏（同上、四十九枚）戯曲菅相丞の前半（廿枚）ほかに「舞台」の編集。豪華顔是非（演芸画報、五枚）など。

（翻刻担当…勝倉明以）

昭和九年十月

一日（月曜）晴、陰（七十二度）

午前八時起床。おえいは上松方へゆき、十一時ごろ帰宅。
戯曲をかきつゞける。午後一時頃に佐久間が来て、こ

れから歌舞伎座の初日見物にゆくといふ。
二時過る頃に山本君が来て、先日相談のあつた「河村

瑞賢」の脚本をいよ／＼起稿してくれと云ひ、三十分ほど話して去る。森部は寺田君を訪問、三時過る頃に帰宅。
松沢君依頼の短尺八枚と色紙七枚に揮毫。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。夜半に風が吹き出した。

二日（火曜）晴、陰（七十度）

午前八時起床。朝は六十一度、木がらしの吹き過ぎた跡のやうである。けふから袷羽織を着て、書齋に手あぶりの火鉢を出した。

十時頃に俵木が父と叔母同道で来た。俵木は近來身持不良、私方へ出入りを差止めてくれといふ父と叔母との訴へである。それに就て俵木も一言も無いらしい。結局、今後一年間は出入を差止め、そのあひだの様子をみて、更に出入を許すことにした。三人は十一時半頃まで話し

て去る。

つゞいて佐久間が来て、歌舞伎座の初日は不入であつたといふ。

午後は戯曲をかきつゞける。文芸春秋社から先日の座談会の謝礼を送つて来たので、返書。草場君から返書が来た。

神戸の前田君から郵書が来て、来る六日に「舞台」の関西支部大会を開き、京阪のふたば会員は全部出席するといふ。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。夜半に雨の音。

三日（水曜）雨（七十度）

午前七時半起床。

戯曲をかきつゞける。午頃に佐久間が来た。

雨は終日やまない。岸井から森部宛の郵書が来て、今回の暴風雨被害に付、東京からの援助が不十分であるといふので、大阪側では頗る不評判で「江戸子はアキマへんな」と云つてゐるさうである。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

四日（木曜）陰（六十八度）

午前七時半起床。

姉は小田切医師方へ齒の療治にゆくといふので、おえいも同道して紀尾井町の小林君方へゆく。

十時頃に額田が三好次郎をつれて来た。額田の細君の親戚で、私の門下にくれといふのである。その叔父といふ人も一緒に来て、何分頼むといふ。三人は一時間あまり話して去る。今朝も陰つて薄寒い。

三人が帰ると、佐久間が来た。つゞいておえい等帰宅。木村富子から舞踊劇「芦刈」の原稿を送つて来たので、返書。

午後四時頃までに兎も角も戯曲を脱稿し終る。あまり佳作でないには困つた。森部にその浄書をたのむ。

岸井に郵書に発送、大阪人に対して「江戸子はアキません」の弁明をしてやれと云つてやる。呵々。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

五日（金曜）雨、陰（六十五度）

午前八時起床。

森部が戯曲の浄書を終つたので、訂正にかゝる。

十一時過る頃に三橋が来て、その作「冬の惨劇」が大阪南座で上演することになったと云ひ、一時間ほど話して去る。

午後一時過る頃に久保田君が来て、これも一時間あまり話して去る。

三時頃に「日の出」の渡辺君が来て、原稿の依頼があつたが、断る。つゞいてサンデー毎日の辻君が来て、これも原稿の依頼、この方は日限が長いので承諾。

五時頃までに戯曲を訂正し終る。四十二枚、題は「菅相丞」

六時半頃に坂東弥三郎君が若い俳優と二人連れで来て、しうか門下、幸四郎門下等で組織する若草会で「能因法師」を上演したいといふ。今月末に飛行館で開会するさうである。二人は七時過る頃まで話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。

終日陰又雨。十時半ごろ就寝。夜半に雨の音が強く聞えた。

六日（土曜）雨（六十度）

午前七時半起床。雨が降りつゞけてある。

大村の戯曲「ビゴー」に批評を添へて返送。松竹の大谷君から京都の松茸を送つて来たので、返書。

けふからラヂオ・ドラマを書き始める。何分最初のこ

とであるから手探りである。
おえいは上松のおすゝと誘ひ合せて歌舞伎座見物にゆくとして、午後二時頃から出てゆく。温度降つて、秋冷

いよ／＼加はる。

今夜六時半から神戸で舞台関西支部大会を開く筈であるので、盛会を祈るといふ電報を発送。

七時ごろ入浴。読書。おえいは十時十分ごろ帰宅、二番目を一幕見物して帰ったといふ。土曜日に拘らず、歌舞伎座は七分ぐらゐの不入であつたさうである。

十一時就寝。

七日（日曜）雨（六十度）

午前八時半起床。今朝も雨ふりしきる。

新聞によると、市電従業員の罷業再び始まる。

ラヂオ・ドラマをかきつゞける。午後に佐久間が来た。五時頃から停電三十分余、蠟燭をとぼして執筆。森部は「舞台」の七日会に出席するとて、六時頃から出てゆく。

七時ごろ入浴。雨には少しく風が加はつて来た。

読書。十時頃に森部帰宅。十時半就寝。

八日（月曜）雨（六十度）

午前八時起床。けふも雨。

森部は研文社へ校正に出てゆく。大阪の岸井から郵書が来た。草場君から郵書が来て、郷里から柿を送らせたといふので、返書。

ラヂオ・ドラマを訂正しながら浄書。普通の戯曲と違って、どうも書きにくいので困つた。

終日雨やまず、冷気も加はる。七時ごろ入浴。読書。九時頃に森部帰宅。十時半就寝。

九日（火曜）晴（六十五度）

午前七時半起床。朝から快晴。

ラヂオ・ドラマを訂正しながら浄書。午頃に佐久間が来た。

草場君の郷里から柿を送つて来たので、礼状を発送。戯曲「菅相丞」を松竹の木村君へ、小説「大森の鶏」を講談社の鈴木君へ、いづれも速達便で発送。

午後四時頃までにドラマの浄書を終る。あはせて三十四枚、題は「書画屋の半時間」といふ。森部にそのコピーを頼む。

晚餐後、森部と目黒の大通りを散歩。今夜は観音の縁日である。古本と鉢植の菊を買つて帰る。

七時過る頃入浴。読書。

十時半就寝。午前一時頃まで眠れなかつた。

十日（水曜）晴（六十八度）

午前八時半起床。

おえいは朝から品川の津沢方へ出てゆく。

森部がラザオ・ドラマを浄書してくれたので、一読訂正し終り、更にモダン日本の随筆をかく。

午後一時頃に下山省三君が来て、郷里の松茸をくれ、森部の部屋で話してゐる。一時半頃におえい帰宅、ついで蒲田のおしげが来た。

二時頃に額田が来て、「舞台」同人の秋季遠足は箱根の強羅行に決みたいといひ、一時間あまり話して去る。森部と下山君は新橋演「■」舞場の前進座を見物するとして、五時頃から出てゆく。

モダン日本の随筆四枚をかく。題は「年賀郵便」

七時ごろ入浴。読書。九時半頃に森部帰宅、演舞場は五分ぐらゐの不入であつたといふ。今月の各劇場はいづれも不成績であるらしい。

十時半就寝。

十一日（木曜）雨（六十五度）

午前八時起床。けふも細雨、兎角に長続きのしない天気である。

北林君から大衆倶楽部十一月号を送つて来たので、返書。京都の小林から転居の通知が来たので、返書。

「富士」新年号の原稿をかくために、材料を調査。大阪の山上から松茸を送つて来たので、返書。

午後零時半頃に額田の細君が来た。その親戚の三好が

わたしの門下となつた挨拶である。一時間あまり話して去る。そのあひだに佐久間も来た。雨はをり／＼に止んで陰る。

大阪の岸井から郵書が来た。「舞台」掲載の戯曲を大阪で上演の件である。それには山上も絡んで、多少の面倒があるらしい。兎も角もその旨を額田に通知してやる。七時ごろ入浴。読書。雨の音。夕刊をみると、又もや台風が襲来するかも知れないといふ。

十時半就寝。

十二日（金曜）陰（六十七度）

午前七時起床。

森部が研文社へゆくので、その途中、紀尾井町の小林君方へ大阪の松茸を持たせてやる。植木屋が来て、家根の落葉などの掃除をする。

「富士」の原稿をかき始めたが、どうも気乗りがしない。

午後零時半頃から目黒の大通りを散歩。正覚寺へ行つてみると、三沢初子の銅像は正に竣工、但し除幕式がまだ済まないのので白い切れに包まれてゐた。芝居の政岡の銅像といふので、これも一つの名物になるのであらう。一時半頃に帰宅すると、中村孝子が来てゐた。佐久間も来た。中村は三十分ほど話して去る。

森のはほ君脚色の「混血児無頼」を編集、北林透馬君の原作である。放送局の小林君からラヂオ・ドラマ受取りの返書が来た。

六時半頃に講談社の鈴木君が「大森の鶏」の原稿料を持参、一時間ほど話して去る。

七時半過るころ入浴。読書。ラヂオの放送によれば、今夜の池上は会式の参詣者で大混雑であるといふ。

十時半就寝。

十三日（土曜）晴（六十八度）

午前八時起床。森部は研文社へ出てゆく。快晴。

十時頃に佐久間が来た。けふも植木屋が来て刈込みをする。

午後一時頃から神田を散歩。文房具などを買つて、三時過る頃帰宅。留守中に大村が来て、十八日不参の断りがあつたといふ。

脇屋君の笑劇「大島行」を編集。大村に返書。大阪の岸井にも返書。草場君にも返書。

七時ごろ入浴。今夜はラヂオで東劇のベルスの舞台放送を聴く。それから読書。

十時半就寝。

十四日（日曜）晴（六十八度）

午前七時半起床。

十時頃に小田原の飯野が来て、十八日の箱根行について打合せがあり、一時間あまり話して去る。飯野はこれから額田方へも廻るといふ。

一昨日書き始めた「富士」の原稿は面白くないので、中止。更に他の材料を調査。

午後二時頃に上松のおすが来て、三時過るまで話して去る。

けふも快晴、すっかり秋らしい日和となつた。

牧野萩雄君の戯曲「父と娘」を編集。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十五日（月曜）晴（七十五度）

午前八時起床。

森部は研文社へ出てゆく。連日快晴。

けふは私の誕辰であるので、赤の飯を焚き、森部や女中等にも祝儀をやる。

十時過る頃に中野が来て果物をくれ、一時間あまり話して去る。午後には佐久間が来た。

「富士」の原稿を新に書き始める。わたしの書斎は日当りがよいので、少しく逆上せるくらゐである。

坂本猿冠者君から誕辰祝の郵便が来たので、返書。額田から箱根登山電車のパスを送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

十六日（火曜）陰、雨（七十度）

午前八時半起床。

私の起きないうちに、おえいは横浜へ出てゆく。津沢の寿子と誘ひ合せて、横浜の愛子を訪問する筈である。佐久間が来て、昨日数馬英一君に面会、数馬君は中村福助同道で私の家へたづねて来ると云つたさうである。「富士」の原稿をかきつづける。十二時過る頃に果して数馬君が福助同道で来た。歌舞伎座十一月興行に、私の「菅相丞」上演と決定、福助が父の代理として挨拶に来たのである。三十分ほど話して去る。

午後二時頃から雨。三時頃におえい帰宅。

草場君と京都の森田から松茸を送つて来たので、返書。その松茸を菅野君と横浜の愛子方へ発送。

七時ごろ入浴。八時半ごろに森部帰宅、十一月号の校正を終つたといふ。

十一時就寝。午前二時頃まで眠られなかつた。

十七日（水曜）雨（六十五度）

午前八時半起床。けふは神嘗祭。あひにくの雨。

片岡仁左衛門、昨十六日午前八時廿分大阪南区宇右衛

門町で客死、七十八歳。老優次第に凋落は是非もない。

「富士」の原稿をかきつづける。午後三時頃に三橋が来て、一時間ほど話して去る。

七時ごろ入浴。読書。

十時就寝。今夜も眠られず、午前二時頃から漸く眠る。

十八日（木曜）陰

午前四時頃に眼がさめた。どうで今朝は早起をしなればならないので、そのまゝ起床。

嫩会の遠足会で、けふは箱根へ行く筈であるので、六時頃に朝飯を食つて支度をしてゐると、七時頃に佐久間が来た。森部と三人づれで新宿停車場へゆくと、額田はもう来てゐた。

つゞいて中島、下山、三好、三橋が来た。一行八人、小田原急行電車に乗込んで、八時出発。沿線の風光が余り面白くないのと、昨夜不眠の爲とて、途中から眠くなつた。

十時頃に小田原に着くと、飯野が迎ひに来てゐた。その案内で駅前の喫茶「■」店に休憩。こゝで「銀座」の西村君に逢つた。それから自動車で湯本着。更に登山電車に乗りかへて、十一時過る頃に強羅着。一福旅館に入る。それから又、飯野の案内で、小田原電鉄経営の観光旅館とヒュッテなどを巡覧。こゝらの紅葉はまだ早かつ

た。

昼餐後、一行は飯野の案内で芦の湖方面へ登る。私ひとり旅館に残つて、近所を散歩。みやげ物などを買つて、二時ごろ帰宿。

風呂にゆくと、風呂番は湯河原で馴染の男であつた。入浴の後、別室に床を敷かせて一睡。四時過ぎる頃に眼をさました。

陰りながらも幸に雨ともならず。但し折々に霧が出て、箱根山中は流石に寒い。

一行は六時過る頃に歸つて来たので、六時過る頃に宿を出て下山の途に就く。湯本から自動車に乗つて小田原へ着、〳〵駅前の茶屋で晚餐。こゝで飯野に別れて、九時発の小田原急行に乗込む。この電車はレールがよくないと見えて、かなりに動揺する。

十時五十分ごろ新宿着。こゝで解散。私は佐久間、森部と自動車に乗つて、十一時十五分ごろ帰宅。

入浴。十二時過るころ就寝。日帰りの汽車旅行は疲れる。

十九日（金曜）晴（六十六度）

午前九時起床。

佐久間が来た。小田原の飯野に昨日の礼状を出して置く。

黒川君が来て、八重子、小太夫等が来月大阪の歌舞伎座へ乗込み、「鎌」を上演するといひ、三十分あまり話して去る。春陽堂の使が来て、「探偵夜話」増版の奥付捺印を求めゆく。

「富士」の原稿をかきつけて、午後四時ごろ脱稿、あはせて三十八枚、題は「恨の蝶螺」

きのふに引きかへて、けふは快晴。おえいは午後から品川の津沢方へ箱根へみやげを届けにゆく。〳〵

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十日（土曜）晴、陰（六十三度）

午前八時半起床。

おえいは箱根みやげを携へて、世田ヶ谷の上松方へゆく。佐久間が来た。

額田と三好から一昨日の礼状が来たので、返書。大阪の岸井にも箱根の絵ハガキを送る。

「富士」の原稿を訂正。陰晴定まらず、寒くなる。

六時頃に佐久間が再び来た。「舞台」十一月号の製本をとどけて来たので、高橋、難波、林、東儀、原田、池田、清水、津沢、小玉の諸家へ発送。

八時頃に「富士」の中村君が来て、「恨の蝶螺」の原稿を受取り、二十分ほど話して去る。それから入浴。

十時半就寝。

二十一日（日曜）晴（六十八度）

午前八時起床。快晴。

「サンデー毎日」の原稿を書くに就て、午前は材料を調査、午後から書き始める。

三時頃に草場君が自作の戯曲を持参、三十分ほど話して去る。六時頃に佐久間が来た。

正岡君から郵書が来たので、返書。竹柴梅松君から電話がかゝつて、十一月の新宿劇場で八百蔵、亀蔵等が「唐人塚」を上演したいといふ。承諾の返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十二日（月曜）晴、陰（六十六度）

午前八時起床。

「サンデー毎日」の原稿をかきつづける。午頃に佐久間が来た。

小田原の飯野から返書が来た。三時頃に東京朝日新聞の伊藤君が来て、歌舞伎座上演の「菅相丞」の作談を聴いてゆく。

京都の小林から郵書が来て、森田が盲腸炎で京都病院に入院したといふ。取りあへず見舞状を発送。額田にもその次第を通知してやる。

四時過る頃までに「サンデー毎日」の原稿をかき終る。あはせて十八枚、題は「夢のお七」

草場君の戯曲「木津川物語」を一読、その批評を添へて返送。志摩の小村竹山君から俳句の選をたのんで来たので、選了、返送。

七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

二十三日（火曜）陰、雨（六十八度）

午前八時起床。

十時頃に歌舞伎新聞の吉田君が来て、「菅相丞」の作談をかいてくれといひ、三十分あまり話して去る。つゞいて長谷川蝶松君が来て、画帖に揮毫してくれといひ、一時間あまり話して去る。その頃から雨。

佐久間が来た。「菅相丞」の作談三枚をかく。

静岡の山本君から郵書が来たので、返書。額田と岸井から郵書が来た。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十四日（水曜）陰、雨（六十八度）

午前八時起床。晴れんとして晴れず、十時頃から雨。髪を刈りにゆく。帰る頃には雨が強くなつた。

森田は午後から創作座見物に出てゆく。佐久間も同行。「申訳の散髪」四枚をかい、講談社に郵送。額田から郵書が来たので、返書。浜松の土屋君から郵書が来たので、返書。清見君からその著「岡倉天心」を送つて来

たので、返書。東儀から転居の通知が来た。

草場君の戯曲「就職戦線」を編集。

七時ごろ入浴。やがて森部帰宅。雨いよ／＼降りしきる。

読書。十時半就寝。

二十五日（木曜）陰、雨（六十八度）

午前八時起床。

読書。十二時頃に河原崎長十郎、瀬川菊之丞、前進座支配人が三人連れで来訪、明夜出発、大阪へ乗込むといひ、一時間あまり話して去る。をり／＼に陰又雨。

「鎌のこと」二枚をかく。「道頓堀」の原稿である。サンデー毎日の辻君から原稿受取りの返書が来た。

五時三十分頃に三好が来た。つゞいて額田が来て、今夜は所用あつて欠席するといふ。つゞいて大村、佐久間、岡田、中島、三橋、北林が来た。例に依て劇談、雑談。九時過るころ散会。雨が降つてゐる。

入浴。十一時廿分就寝。

二十六日（金曜）陰（六十二度）

午前九時起床。陰つて寒い。

姉とおえいは豊川稲荷へ参詣にゆく。佐久間が来た。大阪魚市場で「魚」といふ書物を発行するに付、何か

書いてくれと云つて来たので、「外国の魚屋」三枚をかりて郵送。

大阪朝日の同情週刊係から例年の如く揮毫を頼んで来たので、大色紙五枚に俳句をかく。

額田から電話がかゝつて、三橋の「冬の夜の惨劇」を新国劇で上演するといふ。つゞいて木村君から電話がかゝつて、明治座の「源氏物語」が上演不許可となつたので、更に私の「曾我物語」に変更したいといふ。承諾。

六時過る頃に竹柴梅松君が来た。新宿歌舞伎座で私の「唐人塚」を上演の件である。梅松君は三十分ほど話して去る。つゞいて林二九太君が来て、八時頃まで話して去る。

入浴。読書。十時半就寝。

二十七日（土曜）陰（六十三度）

午前八時半起床。おひ／＼に冬らしくなつて来た。

佐久間が来た。つゞいて三橋が来た。三橋は新国劇の件である。

「半七捕物帳」第七を起稿、兎角同じやうになつて困る。

福井の窪田といふ人から菜花糖を送つて来たので、返書。

歌舞伎座から初日の入場券を送つて来た。明治座から

も送つて来たが、初日が同日であるので、他の日に取換へてくれるやうに云ひやる。

七時ごろ入浴。七時半頃に飯野が来て、大阪の松茸をくれ、一時間ほど話して去る。

森部は夕方から研文社へ原稿をとどけに行き、九時半ごろ帰宅。

十時半就寝。

二十八日（日曜）晴（六十八度）

午前八時起床。

佐久間が来た。「野崎村懷旧」三枚をかく。「舞台」の原稿である。

けふは快晴。午後から森部と神田を散歩。古本類を買つて五十余円散財、四時半ごろ帰宅。

森部はそれから築地小劇場へ見物にゆく。今夜は七時半から大阪の中継放送で「修善寺物語」の義太夫を聴く。作詞者は大森痴雪君で、節付は豊沢広助、太夫は竹本鏡太夫。

入浴。読書。八時頃に森部帰宅。

十時半就寝。

二十九日（月曜）晴、陰（六十五度）

午前八時起床。

岸井から大阪の松茸を送つて来た。岸井は今月から百二十円に増給したといふ。

佐久間が来た。十時頃からおえい、佐久間、森部と四人づれで銀座へゆき、本所の草場君方へ焼海苔の配達をたのみ、ほかに雑品数点をかひ、更に松屋へまはつて屏風、置時計その他をかひ、丸見屋で昼餐、午後一時半ごろ帰宅。

小田原の飯野方へも焼海苔を小包み便で発送。岸井に返書。額田にも郵書。

放送協会から「書画屋の半時間」の原稿料を送つて来たが、意外に少いのみならず、著作権まで譲渡しとあるので、それでは迷惑の旨を放送局の小林君まで云ひ送る。松竹の黒川君から明治座初日の入場券を五日付にかへて送つて来たので、返書。

六時半頃に三橋が来て、八時半頃まで話して去る。それから入浴。

読書。十時半就寝。

三十日（火曜）晴（六十三度）

午前八時起床。けふは晴、やや寒くなる。

佐久間が来た。つゞいて三橋が来た。

北林余志子の戯曲「開港女気質」を編集。読書。七時頃入浴。

十時半就寝。

三十一日（水曜）晴（六十五度）

午前八時半起床。

佐久間が来た。三橋が来た。三橋は例の「冬の夜の惨劇」上演の件である。草場君から海苔の礼状が来た。

けふは歌舞伎座の舞台稽古で、午頃から出てゆく。

その途中、銀座の三越へ立寄つて、岩田与司一君と長谷川蝶松君へ贈るべき海苔の配達をたのむ。

歌舞伎座の稽古は一時半頃から始まる。私の「菅相丞」が第一である。それでも五時頃までかゝつた。晚餐を終つて、六時ごろ帰宅。留守中に大村が来て、山百合と自然薯をくれた。

紀尾井町の小林君の細君から郵書が来て、蹴月君は廿二日夜九時ごろ麹町六丁目停車場で円タクに衝突負傷したといふ。近來交通事故頻繁、蹴月君もその犠牲者の一人となつた。明日は早速見舞に行かなければなるまい。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。午前三時過る頃まで眠れなかつた。

本月の仕事は菅相丞（歌舞伎座、先月の後半）書画屋の半時間（ラヂオ・ドラマ、三十四枚）年賀郵便

（モダン日本、四枚）恨の蝶螺（富士、三十八枚）夢のお七（サンデー毎日、十八枚）菅相丞作談（歌舞伎新聞、三枚）外国の魚屋（魚、三枚）申訳の散髪（講談倶楽部へ、四枚）ほかに舞台原稿の編集など。

（翻刻担当…鈴木彩）

昭和九年十一月

一日（木曜）雨（六十六度）

午前九時過る頃に起床。雨降りしきる。

佐久間が来た。小田原の飯野から海苔の礼状が来た。十二時頃から森部同道で、紀尾井町（今の麴町五丁目）の小林君方へ見舞にゆく。小林君は自動車に衝突して、右大腿骨に負傷、全治五週間以上を要するさうであるが、横臥しながら談笑、案外に元気が好いので先づは安心した。午後一時半頃にこゝを出る。

雨はいよ／＼強い。森部と麴町通りから自動車に乗つて歌舞伎座へゆくと、佐久間はもう来てゐた。額田も三好もあとから来た。

初日満員、二時半開演。こゝで色々の人に逢つた。

第一「菅相丞」第二「源太勘当」第三「保名」第四「勧進帳」第五「一太刀土俵入」第六「どんつく」で、第五まで見物して出ると、雨は依然として降りしきる。

十一時十五分ごろ帰宅。留守中に北林君夫婦が来て支那饅頭をくれたといふ。

入浴。午前一時就寝。更けて風雨の音いよ／＼強く聞えた。

二日（金曜）晴（七十二度）

午前九時起床。今朝も風やまず、温度騰る。

佐久間が来た。十二時頃に松竹の木村君が来て、一時間話して去る。

北林余志子に昨日の礼状、大村に一昨日の礼状を発送。長谷川蝶螺「午頃に木村君」君から海苔の礼状が来た。資文堂から原稿の催促が来たので、「江戸の捕物」五枚をかく。

京都の小林から郵便が来て、森田は経過よろしく、不日退院するといふ。先は結構である。

七時ごろ入浴。風やむ。

読書。十時就寝。

三日（土曜）晴（六十八度）

午前八時半起床。けふは明治節。

姉とおえいは麴町の小林君方へ見舞にゆく。若草座の俳優等が先日のお礼を云ひに来て、門口で帰る。

「富士」から原稿料を送つてきたので、返書。額田から郵便が来たので、返書。

午頃に竹柴梅松君が来て、新宿歌舞伎座の「唐人塚」の上演料をくれ、三十分ほど話して去る。

二時頃におえい等帰宅。同時に佐久間が来て、自分の縁談の件について、媒酌人の渡辺といふ人が今夜わたしの家へ来るから、逢つてくれといふ。

福井の窪田といふ人から短尺の揮毫をたのんで来たので、五枚揮毫。岩田君から文房具を送つて来たので、返書。京都の小林にも返書。

北林余志子の戯曲を編集。

七時頃に佐久間が渡辺憲君同道で来た。渡辺君は一時間ほど話して去る。嫁は海軍省の事務官の娘であるといふ。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

四日（日曜）陰（六十三度）

午前八時起床。佐久間が来た。

「半七捕物帳」をかきつゞける。けふは陰つて寒い。

江見水蔭君昨日死去。伊予道後の旅館で客死したのである。昨年は岩谷小波君逝き、今年は江見君は逝く。硯友社の故老も凋落し尽した。

讃岐の大西君から郵書が来た。大西君は眼病の上に喘息に悩んでゐるといふ。取りあへず返書。

佐久間の劇評を添削。七時半入浴。読書。

十時半就寝。今夜は四時頃まで眠れなかつた。

五日（月曜）晴（六十八度）

午前九時起床。

新聞をみると、尾上梅幸は昨夜五時半ごろ歌舞伎座の

「盛衰記」に出演中、舞台で仆れたといふ。病症は脳溢血、今度は三回目の発病である。恐らく再起は不可能ではないかと危ぶまれる。

片岡仁左衛門告別式が本日午前十一時から芝明舟町の自宅で執行されるので、森部を代理に出してやる。

京都の森田から郵書が来て、病氣いよ／＼快方に向ひ、近日退院するといふ。

午後一時頃に佐久間が来たので、連れ立って出る。けふは明治座見物であるが、時刻がまだ早いので、渋谷の東横デパートを見る。七階の建物でさのみ広くはないが、先づ一通りの雑貨は備へられてあるらしい。それから自動車で明治座へゆく。

つゞいて森部も来た。下山君も来た。三時開演。第一「曾我物語」第二「石切梶原」第三「福沢諭吉」第四「法海佐渡旦」第五「星の夜渡り鳥」第六「明烏六花曙」

第五まで見物して、十時ごろ帰宅。入浴。十一時半就寝。今夜は安眠。

六日（火曜）陰（六十五度）

午前九時起床。

佐久間が来た。中島が病氣だといふので、森部は見舞にゆく。そのついでに額田方へまはつて、内裏に借受の江戸叢書四冊を返却させることにする。併せて菓子折を

とゞけさせる。

中島病気で明治座劇評が書けないといふので、私が代つて三枚ほど書く。秋元君から英文の日本案内記を送つてくれたので、返書。

三時頃に菅野君が来て、一時間あまり話して去る。五時過る頃に森部帰宅。銀座の富多葉から鴨をとゞけて来た。

七時ごろ入浴。読書。八時頃に佐久間が来て、縁談も大抵纏まるといふ。

十一時就寝。夜半大雨。

七日（水曜）陰（六十五度）

午前八時半起床。佐久間が来た。

「半七捕物帳」をかきつづけたが、頭が重いので中止。おえいは午後二時頃から歌舞伎座見物に出てゆく。

日本俳優学校から郵書が来て、同劇団は東劇で来月開演するに付、私の「狐の皮」を上演したいといふ。それは先日歌舞伎座で柳沢氏からも聞いてゐたので、承諾の返書。就ては多少改訂したい個所もあるので、直ぐに改訂にかゝる。

八時ごろ入浴。読書。

十時頃におえい帰宅。佐久間も銀座へ行つたとて、同道して来た。

十一時就寝。

八日（木曜）晴（六十二度）

午前九時起床。佐久間が来た。森部は研文社へ出てゆく。

東京日日新聞から電話で梅幸の話聞きに来た。梅幸は今朝遂に死去したさうである。松竹の黒川君からも電話が来た。

つゞいて改造社から電話で仁左衛門と梅幸の追憶談をかいてくれと云つて来た。就ては取りあへず四五枚かいてみたが、簡にして要を尽すことはむづかしい。

「狐の皮」七枚ほどを改訂、浄書。晴れてはあるが、風が寒い。

夕刊をみると、梅幸は今午前七時五十分死去、十二日午前十一時芝増上寺に於て告別式を営むといふ。

七時半入浴。やがて森部帰宅。

十時半就寝。暮れてから寒くなる。

九日（金曜）晴（六十度）

午前九時起床。

森部は研文社へ出てゆく。佐久間が来た。

「仁左衛門と梅幸」をかきつづける。午後零時半頃に俳優学校の加藤長治君と佐原包吉君が来た。「狐の皮」

上演の件である。

姉とおえいは青山へ墓参にゆき、午後一時過るころ帰宅。

黒川君の使が来て「菅相丞」その他の上演料をとげたので、返書。

七時過るころ入浴。読書。

十時半就寝。

十日（土曜）晴（六十五度）

午前九時起床。佐久間が来た。

「仁左衛門と梅幸」をかき終る。あはせて十五枚。すぐに改造社に郵送。

天氣が好いので、午後一時頃から森部同道で渋谷へゆき、興農園でチューリップ、ヒヤヒンス、水仙、百合、クラツカス等の球根を買ふ。けふは初西で、宮益坂の大鳥神社大祭、それにも参詣して小さい熊手をかひ、更に東横デパートで喫茶、こゝでもテーブル掛け、文房具など買つて、三時半ごろ帰宅。

読書。おえいと森部は四時過る頃から新宿歌舞伎座見物にゆく。

七時半ごろ入浴。九時半頃におえい等帰宅。
十時半就寝。

十一日（日曜）晴（六十三度）

午前九時起床。森部は研文社へ出てゆく。

十時半頃に額田が来た。けふは佐久間が結納取交しの日であるので、媒酌人の渡辺君に面会、諸事の打合せを済ませたといふ。額田はこれから再び佐久間方へゆくとて、十二時頃に去る。

それからおえい同道で渋谷へゆき、東横デパートで小林君方へ持参の土産物をかひ、おえいが雑品をかひ、こゝでおえいに別れて麹町五丁目へゆく。

小林君はまだ臥床中であるが、経過よろしく、元気よろしく、三時頃まで枕もとで語る。それから日比谷の三信ビル地階の東洋軒へゆく。けふは舞台社の誌友会で、来会者六十余名、嫩会員をあはせて「■」七十名ほどであつた。

四時頃に佐久間が開会を宣し、額田の開会の辞、水谷竹紫君の「芝居五もく噺」坪内土行君の「英吉利の思ひ出」永田衡吉君の「新劇の話」村松梢風君の「支那の劇場と俳優」川村花菱君の「旗洗莊漫談」等の講演があつて、六時半頃から食事につき、八時ごろ無事に散会。

森部と共に八時五十分ごろ帰宅。留守中に飯野が原稿を持参、ほかに植田の細君と上松のおすゝが来たといふ。入浴。十時半就寝。更けてなか／＼寒くなつた。

十二日（月曜）晴（六十三度）

午前八時起床。

尾上梅幸告別式で、午前十時半頃から出る。式場は芝公園の増上寺、おびたしい会葬者であつた。

帰途、渋谷の東横デパートで昼餐。それからバスの乗り場へ来ると、恰も三橋の来るのに出逢つた。同車して十二時ごろ帰宅。三橋は新橋演舞場の初日に私たち夫婦を招待するといひ、一時過る頃まで話して去る。晴れてはゐるが、風が寒い。

おえいは私と入れちがひに麹町へゆき、二時ごろ帰宅。

「■」（つゞ）いて佐久間が来た。佐久間は川村、水谷、森ほのほの（諸）君、額田、三好等と東洋軒から銀座セレクトルへ廻り、十二時頃まで話してゐたといふ。

「明治時代の春芝居」五枚をかく。文芸春秋の原稿である。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

午前一時頃から俄に下痢三回、起きて服薬、懐炉で腹部を温めなどする。一昨日の誌友会で冷えたせいであらうかと思はれる。

十三日（火曜）陰、雨（六十度）

午前十時起床。今朝も服薬。佐久間が来た。

森部を黒川君方へ使にやる。朝から陰つて寒い。

（河合醉茗君が来て、田井洋子を舞台の誌友にしてくれと頼み、門口で帰る。）

「半七捕物帳」をかきつゞける。今度の原稿は途中で幾たびか休んだので、何だか気乗りしない。

帝劇の山本君から電話がかゝつて、彼の河村瑞賢劇化の件に付、廿八日の夜に会見したいといふ。承諾。宵から雨。

八時ごろ入浴。入浴を終つて着物をきてゐると、眩暈、流汗。湯氣にあがつたらしい、直ぐに臥床。

服薬。安眠。

十四日（水曜）晴（六十五度）

午前八時起床。今朝は快晴。森部は研文社へ出てゆく。服薬。まだ気分がよくないが、起きて書斎に入る。

朝鮮の林紫芳といふ人から俳句の選を頼んで来たので、選了。あはせて短尺三枚に揮毫。東京朝日新聞の同情週刊係から大色紙三枚の揮毫をたのんで来たので、これにも揮毫。

午後一時頃に三橋が来て、今夜の演舞場入場券をとゞけてゆく。佐久間も来た。午後二時過る頃から佐久間、おえいと三人づれで新橋演舞場へ出てゆく。

額田夫婦、大村、岡田、三好、下山、森部もあとから来た。三時開演。第一「高田屋嘉兵衛」第二「冬の夜の

出来事」第三「である。第二まで見物して、九時「■」十分ごろ帰宅。

入浴。十一時就寝。午前三時頃まで安眠できなかった。

十五日（木曜）晴、陰（六十度）

午前九時起床。

森部は研文社へ出てゆく。佐久間が来た。

久しく無沙汰をしてゐるので、午後から田園調布の岡君方をたづねると、夫妻ともに不在、みやげ物を差置いて帰る。帰路は渋谷まで引返して、東横デパートで喫茶。二時半ごろ帰宅。陰つて遠雷の声きこゆ。

三時頃に黒川君が来て、京都の顔見世に魁車が「勾当内侍」を上演するといひ、一時間あまり話して去る。

山形の渡辺君から「郵書が」へ葡萄を送つてゝ来たので、返書。小田原の飯野から郵書が来たので、これにも返書。

七時半ごろ入浴。読書。八時頃に森部帰宅。十一時就寝。

十六日（金曜）晴（六十三度）

午前八時起床。

佐久間が来て、昨夜も演舞場へ行つてみたが、「冬の夜の出来事」は好評であるらしいといふ。大村と三好か

ら一昨夜の挨拶が来た。いづれも返書。

十一時頃に津沢の寿子が来て、午後一時頃からおえいと共に渋谷へ出てゆく。森部は午後から研文社へ出てゆく。

「半七捕物帳」をかきつゞける。一向に捗取らない。三時半頃におえい帰宅。つゞいて三橋が来て一時間ほど話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。佐久間が再び来て、額田と共に雅叙園へ行つて交渉、結婚式はいよいよ十二月七日に決定したといふ。

十時半就寝。

十七日（土曜）陰（六十度）

午前九時起床。森部は花壇に球根の種をまく。

俳優学校から郵書が来て、「狐の皮」を廿七日の夜に放送するといふ。

午後一時頃に山本の辰治が来て、一時間ほど話して去る。

「半七捕物帳」をかきつゞける。荒川区の斎藤錦風君から俳句の選をたのんで来たので、選了。あはせて短尺三枚に揮毫。

八時ごろ入浴。佐久間が来た。大阪の岸井から明日上京の電報が来た。

読書。十時半就寝。

十八日(日曜)晴(六十三度)

午前八時半起床。

諸新聞をみると、三橋の「冬の夜の出来事」好評、結構である。

額田から郵書が来た。佐久間結婚式の件である。返書。

「半七捕物帳」をかきつづける。十一時頃に淀橋のおさだが子供をつれて来た。

午後一時頃に岸井が来た。来月の角座で池田君の戯曲を上演するに付、その打合せに来たといひ、三時頃まで話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。

佐久間が来た。今夜は歌舞伎座の「勸進帳」の中継放送があるので、家内が集まって聴く。雨が降り出した。十時半就寝。夜半に眼がさめて眠られなかつた。

十九日(月曜)陰、晴(六十二度)

午前九時起床。

「半七捕物帳」をかきつづける。佐久間が来た。

午後に大村が来て、伊豆の柿と蜜柑をくれ、門口で帰る。

夕刻までに兎も角も「捕物帳」を脱稿。

岸井から電話がかゝつて、今夜帰阪するといふ。
七時半ごろ入浴。読書。
十時半就寝。

二十日(火曜)晴(六十二度)

午前九時起床。

「半七捕物帳」を訂正。所々書き直す個所があるので、暇取る。

午後に佐久間が来た。ついでに北林君夫妻が来た。三好が来た。北林君等は二時頃に去り、三好は二時半頃に去る。

夕方までに「捕物帳」を訂正し終る。五十七枚、題は「妖狐伝」

製本屋から「舞台」十二月号をとびけて来た。

七時半ごろ入浴。佐久間が再び来た。
十一時就寝。

二十一日(水曜)晴(六十三度)

午前八時起床。

「半七捕物帳」を速達便で講談社へ発送。「舞台」十二月号を原田、池田、林、清水、難波、東儀、高橋、津沢、小玉の諸家へ発送。

「少年時代の回礼」六枚をかいて、双雅坊へ発送。「狐

の皮雑誌」二枚をかいて、日本俳優学校へ発送。

中央公論記者が来て、新年号の随筆を頼んでゆく。二時過ぎに久保田君が来て、一時間あまり話して去る。

「勾当内侍のこと」三枚をかいて、大阪の「道頓堀」へ発送。同じやうな作談である。但しこの戯曲は嘗て台湾人劇のレパートリーに加へられただけに思ひ出が多い。

七時半頃に佐久間が来た。八時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

二十二日（木曜）晴（六十三度）

午前八時起床。

星野君から木太刀新年号の原稿を頼んで来たので、返書。門野重九郎氏から廿八日夜木挽町の蜂龍へ来てくれといふ案内状が来たので、出席の返書。

改造社の使が来て「修禪寺物語」増版の捺印をたのむ。

おえいは例の持病で四五日来ブラ／＼してみたが、けふは終日臥床。

三時頃から森部と道玄坂を散歩。東横デパートで買物をして、五時過ぎるころ帰宅。

七時半ごろ入浴。読書。佐久間が来た。

十時半就寝。

二十三日（金曜）陰、晴（六十四度）

午前九時起床。

おえいはけふも寝てゐるので、泰山堂医院へ電話をかけて、瀬戸医師の来診を求める。就ては廿五日のふたば例会は休会することとし、嫩会一同に電話又は郵便で通知。

佐久間が来た。岡山新聞社から頼まれた白紙に揮毫、飯野に頼まれた短尺五枚に揮毫。

午後零時半頃に瀬戸医師来診、おえいの血圧二百十二、安静にしてゐるやうに注意された。つゞいて額田夫妻がおえいの見舞に来て、一時間ほど話して去る。

放送局の小林君から電話で、廿七日の夜に日本俳優学校劇団が「狐の皮」を放送するといふ。

藤島一虎君の戯曲「薩摩隼人」を編集。

七時半頃に佐久間が再び来た。入浴。

私も少しく感冒の気味であるので、服薬。十一時就寝。今夜は午前五時頃まで眠られなかつた。

二十四日（土曜）陰、雨（六十度）

午前九時半起床。佐久間が来た。

三橋から電話でおえいの病状を問ひ合せてきた。

藤島君の戯曲を編集し終る。これで「舞台」新年号の原稿も半分は纏まる。更に小林君の戯曲「酒場の女」を

編集。

午後二時頃に中島がおえいの見舞に來た。つゞいて大村も來た。

讀書。七時半ごろ入浴。佐久間が再び來た。宵から雨。

十時半就寢。雨の音が強く聞える。

二十五日（日曜）陰（六十度）

午前九時起床。佐久間が來た。

改造社から十二月号の原稿料を郵送して來たので、返書。

中央公論の隨筆をかくために、参考書などを調べる。

午後二時頃に三好がおえい見舞の果物を持参、一時間ほど話して去る。春陽堂の使が來て、「今古探偵十話」の増版八百部の捺印を求めゆく。

隨筆四枚ほど書く。五時頃に瀬戸医師來診、おえいの容態に變化無し。

七時半ごろ入浴。今夜はふたば会例会の夜であるが、おえい病中のために休会。

讀書。十時半就寢。やがて雨の音。

二十六日（月曜）雨（六十三度）

午前九時半起床。佐久間が來た。

隨筆をかきつゞける。細雨、氣候も暖い。

岸井、森、喜田の人々から郵書が到來。大村に郵書を送つて、おえいの容態を通知。

七時半ごろ入浴。讀書。十時半就寢。

二十七日（火曜）雨、陰（六十二度）

午前十時起床。佐久間が來た。

目黒の通りへ髪刈りにゆく。晴れんとして晴れず。

岸井、森、喜田の人々に返書。隨筆をかきつゞける。

午後五時半頃に瀬戸医師來診。おえいの血圧百四、さしたる變化もない。

今夜は日本俳優学校劇団が八時から「狐の皮」を放送するので、佐久間も聴きに來た。それが終つて入浴。

讀書。十一時就寢。十二時頃から醒めて眠られず、此頃は又もや不眠症が兆したとみえる。四時頃に起きて葡萄酒を飲む。五時頃からやうやく眠る。

二十八日（水曜）晴（六十一度）

午前十時起床。晴れて風吹く。

佐久間が來て卓上日記をくれた。額田から郵書が來て、研文社の支払ひに困るから五十円ほど貸してくれといふ。

額田は同時に自作の戯曲「破船」を送つて來たので、すぐに編集し終る。

今夜は河村瑞賢の件で、門野氏の招待を受けてゐるので、五時過る頃から出てゆく。茶屋は木挽町の蜂龍、来会者は門「■」野氏のほかに、竹城、山本の両氏、松竹の大谷、城戸、木村の三氏。兎も角も私が脚本執筆の件を承諾。それから雑談、九時ごろ帰宅。風やむ。入浴。十一時就寝。

二十九日（木曜）晴（六十度）

午前九時起床。

森部は物置に入れて置いた靴を盗まれたといふ。昨日の昼か夜か判らないが、兎も角も歳末に近くと物騒である。

晴れてはゐるが、寒い。新聞をみると、東北及び上越地方は吹雪であるといふ。

随筆をかき終る。あはせて廿三枚、題は「怪奇一夕話」

大阪朝日新聞神戸支部から同情週間の揮毫をたのんで来たので、絹地二枚をかく。信州上伊那の佐藤雪洞君から短尺の揮毫をたのんで来たので、これにも俳句をかつて返送。

文芸家協会から文芸年鑑の材料を問合せて来たので、返書。雑誌「随筆」から私の著書を問合せて来たので、これにも返書。

けふは瀬戸医師の代診が来た。おえいの容態に変化無

し。

七時半入浴。読書。

十時半就寝。

三十日（金曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。今朝はよほど霜が降りた。四十八度。森部は研文社へ原稿をとりに行く。新年号の戯曲原稿はこれで締切である。

十一時頃に額田が来て、研文社支払の不足分五十円を受取「つてゆく。」り、十二時半頃まで話して去る。

「琴平と弥次喜多」四枚をかつて大西君に郵送、雑誌「ことひら」の原稿である。

四時頃に黒川君が来て、京都顔見世の「勾当内侍」の上演料をとゞけ、一時間ほど話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。佐久間が来た。

十時半就寝。

本月の仕事は妖狐伝（講談倶楽部、五十七枚）仁左衛門と梅幸（改造、十八枚）明治時代の春芝居（文芸春秋、五枚）少年時代の回礼（随筆、六枚）怪奇一夕話（中央公論、廿三枚）琴平と弥次喜多（四枚）

（翻刻担当…三浦達尋）

昭和九年十二月

場券をやる。

読書。十一時就寝。

一日（土曜）晴（五十八度）

午前八時起床。

十時頃に瀬戸医師来診、おえいの病状変化無し。

十一時頃に浜村君が久しぶりで来訪、十二時半頃まで話して去る。

黒川君がけふも来て、東京劇場の「狐の皮」の上演料をとげ、門口で帰る。大村からおえい見舞の郵書が来た。

旭川の渡辺博からシヨシヤムといふ北海道の干魚を送つて来たので、返書。

二時半頃から森部同道で道元坂へゆく。新井白石の「折焚く柴の記」を買ふためである。途中で佐久間に逢つたので、これも同道。道玄坂の書店をさがし歩いたが、見当らず、さらに神田まで行くことになった。

そこでも容易に見当らず軒別に古本屋をさがし歩いて、やうやく一誠堂で探し当てた。それから三省堂で喫茶。文房堂で原稿用紙などをかひ、五時廿分ごろ帰宅。あたりは已に真暗になる。冬の日の短いのが今更のやうに感じられた。

東京劇場から初日の入場券をとげて来た。

七時半ごろ入浴。やがて佐久間が来たので、東劇の入

二日（日曜）晴（五十八度）

午前八時起床。今朝も霜が深い。併し快晴続きは結構である。

「西郷山房随筆」六枚をかく。「舞台」の原稿である。

午後一時頃に植松のおすが来た。佐久間が来て、年賀ハガキ一千枚の印刷をとげてくれた。

二時頃から佐久間、森部と三人連れで、東京劇場の初日見物に出てゆく。時刻が少しく早いので、銀座通りを散歩。十二月に入つて日が浅いせるか、まだ歳末らしい景気も見えなかつた。

三時頃に劇場に行き着くと、第一「阿難と呪術師の娘」が序幕を明ける所であつた。下山君も来てゐた。こゝで麹町の大野君夫妻にも逢つた。

第二「船弁慶」第三「狐の皮」第四「金子市之丞」である。第四の序幕だけ見物して、十時ごろ帰宅。

入浴。十二時就寝。

三日（月曜）陰（五十度）

午前八時起床。陰つて寒い。

十一時過る頃に細野多知子が歳暮の礼に来て、四十分

ほど話して去る。つゞいて佐久間が来た。

午後一時頃に大坂聞支社長の佐藤君が来て、来春から連載小説を書いてくれとの事であったが、新聞小説は引き受けないことにしてゐるので、断る。佐藤君は三十分ほど話して去る。

つゞいて福島石井源一郎が来て、昨日上京、明日帰国するといひ、一時間ほど話して去る。石井にも縁談があるといふ。

新潮社の渡辺君が来て、「日の出」に小説をかいてくれといふ。これも断る。瀬戸医師の代診が来て、おえいを診察。

森部に年賀郵便の表書を頼むために、知人宿所帳を訂正。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

四日（火曜）雨（五十度）

午前八時起床。今朝も陰つて寒い。

十一時頃に大村が来て、家内一同に歳暮品をくれ、三十分あまり話して去る。帰る頃に雨が降り出した。

「舞台」新年号の原稿が不足だといふので、水木君の戯曲「松虫鈴虫」を編集。大西君から原稿うけ取りの返書が来た。

午後一時半頃に額田が来て、佐久間の嫁の里方から荷物を送つて来たといふ。つゞいて佐久間も来て、無事に嫁入荷物を受け取つたといひ、二人は三時半頃まで話して去る。午後から雨降りしきる。

六時頃までに「松虫鈴虫」の編集し終る。

七時半ごろ入浴。読書。

十一時就寝。

五日（水曜）雪、陰（四十五度）

雨は昨夜半から雪となつて、庭も家根も一面に白い。この冬の初雪である。

十一時頃に中野が来た。中野は、東劇の初春興行に「河内山」を書くことになつたに付、その相談に来たのである。一時間半ほど話して去る。

朝から雪は止んだが、終日に陰つて寒い。

「サンデー毎日」から原稿料を送つて来たので、返書。

松坂屋から花田房子の歳暮品として膝蒲団をとどけて来たので、返書。市川猿之助の使が来て歳暮品をどける。

「半七捕物帳」第八をかき始める。

五時頃に瀬戸医師来診。おえいの血圧は百七十余に降下、この分ならばもう心配はない。六時半頃に佐久間が来た。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

六日（木曜）晴（五十度）

午前九時起床。

佐久間が来た。早稲田大学出版部の武田君から伊原君著「団十郎の芸」一部を送つて来たので、返書。安藤捷次郎君から郵書が来たので、返書。大村が来て干鮎をくれた。

午後一時頃から森部同道で東横デパートへ行き、雑品数点を買つて、二時四十分ごろ帰宅。

それから顔を剃つてゐる処へ、新国劇の樋口君が来た。つゞいて北林君夫妻が来て、四人雑談。樋口（君）等三人は四時半頃に去る。

原富次郎君の舞踊「押絵をどり」を編集、「舞台」原稿の追加である。此頃は毎日来客が絶えないので、殆ど仕事着手に着かない。

八時ごろ入浴。読書。暮れて寒くなる。

十時四十分就寝。

七日（金曜）晴（五十度）

午前八時半起床。一面の霜、但し快晴。

けふは佐久間が結婚式、天気が好くて結構である。草場君から自作の原稿を送つて来たので、返書。

午後一時頃から支度をして待つてゐると、二時頃に額田夫妻が迎ひに来たので、車を同じうして目黒の雅叙園へゆく。

佐久間の嫁は千恵子、父は中島敏成。時頃から同園内の式場で結婚式を挙げ、結婚撮影などを終つて、六時頃から披露会に移る。列席者は双方の親戚。友人等あはせて三十七名。舞台社と私からは祝ひの生花を贈る。媒酌人側の渡辺君と額田の挨拶、来客側代表として川村君と私の挨拶などあつて、八時頃散会。

森部と同車で八時廿分ごろ帰宅。風はないが、寒い日であつた。「■」而も結婚式も無事に終つて、先づは結構であつた。

入浴。十一時就寝。終日ごた／＼したせめか、眼が冴えて眠られず、午前四時頃からやうやく眠つた。

八日（土曜）陰（四十九度）

午前八時起床。陰つて寒い。

森部はけふから研文社へ校正に出てゆく。十時二頃に鈴木富久子さんが歳暮の礼に来て、門口で話して去る。

「半七捕物帳」をかきつゞける。樋口君に頼まれた「新国劇」新年号の原稿四枚をかいて郵書。題は「既定の方針第一」

七時半ごろ入浴。読書。森部は八時半ごろ帰宅。出が

けに麴町五丁目の小林君を見舞つた処、やはり臥床中であつたといふ。

十時四十分就寝。

九日（日曜）晴（五十八度）

午前九時起床。きのふに引きかへて快晴、寒気ゆるむ。額田から郵書が来たので、返書。雅叙園では額田はよほど疲れたらしい。

「半七捕物帳」をかきつゞける。午後四時頃に瀬戸医師来診、おえいの血圧は百七十を持續、先づこれで床扨ひをしても好からうといふ。

植田の細君が歳暮の礼に来て、一時間ほど話して去る。

へ六時頃に三橋が来て、一時間あまり話して去る。へ七時半ごろ入浴。読書。佐久間の女中が原稿を届けて来た。

十一時就寝。今夜も四時過る頃まで眠られなかつた。

十日（月曜）晴（五十八度）

午前九時半起床。けふは晴れて暖い。

森部は研文社へ校正に出てゆく。植木屋が来て、庭に霜よけの筵などを敷く。

午後一時頃から家を出で、先づ日比谷の陶々亭に立寄つて、嫩会忘年会の期日を十七日午後五時と決定。

それから銀座の三越へ行つて、黒川君、小林（徳次郎）君、市川升六君に歳暮品の発送をたのむ。今夜は北林余志子に招かれて、新橋演舞場を見物の筈であるが、時刻がまだ早いので、伊東屋、松屋などを一巡し、松屋の地下室で喫茶。

四時半頃に演舞場へゆくと、額田、大村、その他の嫩会員は相前後して来た。下山君と森部も研文社から廻つて来た。五時開演。第一が北林の「牛を喰ふ」第二が長谷川君の「心中越路の雨」第三が平田君の「天保六花撰」で、第三の序幕まで見物して、八時頃に出る。

帰路、佐久間、森部と銀座で晚餐。それから自動車で九時半ごろ帰宅。

留守中に放送局の小林君が来て「狐の皮」の放送料をくれ、中島が来て歳暮品をくれ、岡田がおえいの見舞物をくれ、大村が蜜柑をくれたといふ。本日の留守の間に数人も来たのである。

入浴。十時半就寝。

十一日（火曜）陰（六十度）

午前八時半起床。おえいは今朝から床を出る。

十時半頃に麴町三丁目の浦岡の細君が歳暮の礼に来て、四十分ほど話して去る。つゞいて麴町三丁目の大野君が歳暮の礼に来て、一時間あまり話して去る。歳末の

習で、来客の多いには閉口。

嫩会忘年会の期日が決定したので、嫩会一同に通知、例に依て川村、長谷川、渥美、松田、一二三、寺田の諸君にも案内状を発送。

小田原の飯野から郵書が来て、父の遺骨を大阪に収めて帰宅したといふので、返書。静岡の山本君からも郵書が来たので、返書。

三時ごろに佐久間が来た。陰りながらも寒くない。

山下の父から郵書が来て、山下の石碑もいよ／＼竣工、去六日その建立奉告祭を執行したといふので、返書。ほかに雑信の返書七通、少しく疲れた。

九時ごろ入浴。読書。十一時就寝。一時頃に起きて眠られず、起きて葡萄酒を飲む。

十二日（水曜）晴（五十二度）

午前九時半起床。

おえいは昨日から床払ひをしたので、今朝は渋谷へ髪結ひにゆく。そのあひだに、横浜の愛子が歳暮の礼に来たので、私が相手になつて話してゐる中に、おえい帰宅。やがて又、渡辺のおしげが歳暮の礼に来た。

おしげ母子は昼餐を喫して、午後二時頃に去る。

それからおえいと森部と三人連れで銀座の三越へ赴き、額田、大村、小林、浦岡、津沢の諸家へ歳暮品への

配達をたのみ、更に松屋へまはつて、箱入の鮭十本をかひ、額田、小林、渡辺、鈴木、菅野、北川、上松、山本の諸家へ配達をたのみ、自宅へも二本をとげさせる。銀座の竹葉で晚餐。五時半ごろ帰宅。

留守中に中野の細君が歳暮品を持参したので、礼状を出して置く。黒川君と升六君から歳暮品の礼状が来た。寺田君から十七日出席の返書が来た。弘津千代子から郵書が来たので、返書。

ポリドールの会社から「句当内侍」のレコード三枚をとげて来た。歌右衛門、羽左衛門、友右衛門、時蔵、家橘等の吹込みである。

七時ごろに一二三君と三橋が来て、新国劇上演の礼をいひ、菓子折と記念の巻葉入をくれた。

八時ごろ入浴。試みに「句当内侍」のレコードをかけてみたが、一幕を三枚に収める都合上、五分の二ぐらゐをカットしてあるので、単に俳優の声を聞けばかりで興味が無い。

読書。十一時就寝。

十三日（木曜）晴、陰（五十度）

午前八時半起床。

森部は研文社へ出てゆく。そのついでに瀬戸医師方へ歳暮品を持参、講談社から「狐妖伝」の原稿料を送つて

来た。

一二三君に昨夜の礼状を発送。中村歌右衛門から来る十五日正午自宅で忘年会を開くといふ案内状が来たので、出席の返書。長谷川、渥美、三好の人々から陶々亭出席の返書が来た。

朝から「半七捕物帳」をかきつづける。

姉「からへは」午後から瀧野川の菅野君方へ歳暮の礼にいく。松屋から昨日の鮭二箱をとどけて来た。

陰晴定まらず、終日寒い。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十四日（金曜）晴（五十三度）

午前八時半起床。

森部は研文社へ出てゆく。

川村君と一二三君から陶々亭出席の返書が来た。上松君と浦岡君から鮭受取りの礼を電話で申越した。

「半七捕物帳」をかきつづける。

三越から私に紅梅の盆栽、森部にシヤツ、女中等に下駄をとどけて来た。額田の歳暮品である。

瀬戸医師から相州豚肉をとどけて来た。京都の小林から酢ぐき一樽を送つて来た。

三時頃に額田夫妻来訪、三十分あまり話して去る。北林から陶々亭出席の返書が来た。

六時半頃に三橋と岡田が来て、十六日正午から銀座の明治製菓喫茶店の楼上で「牛を喰ふの会」を開き、前進屋俳優も出席するといふ。歌右衛門から電話で、明日の宴会は午後五時に延期したといふ通知があつた。

八時ごろ入浴。読書。森部は十時五十分ごろ帰宅。

十一時就寝。十二時頃から醒めて眠られず、午前四時頃から再び眠る。

十五日（土曜）陰（四十八度）

午前十時起床。山崎が来て嫩会の会費をとどける。

宇治山田市役所から歳末同情週間の短尺を送つて来たので、五枚揮毫、郵送。京都の小林に酢ぐきの礼状を発送。

午頃に淀橋のおさだが歳暮に来た。大村から陶々亭出席の返書。渡辺、津沢、小林、鈴木、山本の諸家から歳暮の礼状が来た。

けふは歌右衛門宅に忘年会があるので、午後四時半頃から出てゆく。歌右衛門宅は千駄ヶ谷五丁目、来会者は伊原、松岡、小村、芳村、木村、長谷川、藤波、野本の人々で、焼鳥の饗応あり。それから雑談。

十時廿分ごろ散会、同四十分ごろ帰宅。

留守中に松田青風君が来て、昨夜帰京したといひ、金沢の菓子をくれた。山上から大阪の奈良漬を送つて来た。

入浴。十二時就寝。やがて雨の音。

十六日（日曜）晴（五十五度）

午前十時起床。森部は研文社へ出てゆく。

十時半頃に植村君が来て歳暮品をくれ、四十分ほど話して去る、つゞいて佐久間が舅の中島敏成君同道で来て、三十分ほど話して去る。

麹町の畑氏未亡人が歳暮の礼に来て、おえいと話して去る。つゞいて上松のおすゝが歳暮の礼に来た。

物集芳子が福永君同道で来て、大倉燐子のペンネームで著作の探偵小説集「踊る影絵」の製本出来したとて一部をくれた。それには私の序文が添へてある。

津沢君が歳暮の礼に来て、門口で話して去る。歳末だけに来客が多い。

「半七捕物帳」をかきつゞける。来客が多いので、一向に抄取らない。

八時半ごろ入浴。やがて森部帰宅。

読書。十一時就寝。午前一時頃に醒めて五時頃まで不眠。

十七日（月曜）陰（五十五度）

午前九時半起床。

植村君に頼まれた短尺四枚に揮毫、神田婦人会に頼ま

れた短尺二枚に揮毫、いづれも郵送。

星野君からおえい見舞の郵書が来たので、返書。大阪の山上にも奈良漬の礼状を発送。岸井から郵書が来たので、返書。

経師屋二人が来て障子の貼替へをする。陰つて寒い。午後二時頃に佐久間が新婦同道で挨拶に来て、三十分ほど話して去る。おえいから祝物をやる。三好と三橋が歳暮の礼に来た。松竹の大谷君からも歳暮の品々をとゞけて来た。

二時四十分頃から森部同道で出る。私は先づ麹町五丁目の小林君方へ歳暮の礼にゆく。小林君はおひ／＼快方に向ひ、元氣は殆ど例の如くであるが、門外の歩行はまだ不自由であるといふ。こゝで暫く話してゐるうちに、森部は大野、畑、小川の諸家へ歳暮をとゞけて帰つて来たので、四時廿分頃からこゝを出る。

今夜は日比谷の陶々亭で例年の如く忘年会を開くことになつてゐるので、直ぐに自動車で乗着けると、下山君と山崎はもう来てゐた。つゞいて額田、大村、岡田、北林、（佐久間、）三好、三橋が来た。来客は長谷川、川村、松田、一二三、寺田の五氏、渥美君は不参。六時頃から食卓に着き、雑談、劇談頗る賑ふこと例の如く、十時四十分ごろ散会。

いつの間にか雨が降り出したとみえて、往来は濡れて

みた。但しもう止んで、空は晴れかゝつてみた。いはゆる時雨であらう。

入浴。十二時就寝。

十八日（火曜）晴（六十二度）

午前九時起床。森部は研文社へ出てゆく。

おえいは四谷の丸尾君方へ歳暮の礼にゆく。松竹の黒川君から電話で、来春の東京劇場で「鳥辺山心中」を上演するといふ。

「半七捕物帳」をかきつゞける。けふは晴れて暖い。草場君から蜜柑、浜町の山本方から砂糖を送つて来たので、いづれも返書。大村から膝蒲団を送つて来たので、これにも返書。

四時頃に松竹の植木君が来て、廿九日歌舞伎座で森田勘弥の夕を催すに付、私にも講演を頼むとの事であつたが、齒が悪いので断る。六時頃に中野が来て、来春東京劇場で上演の筈であつた「河内山宗春」が中止になつたと云ひ、一時間ほど話して去る。

松田君と三好から昨夜の礼状が来た。

七時半ごろ入浴。読書。九時半頃に森部帰宅、「舞台」新年号の校正はまだ終らないといふ。印刷所多忙のためである。

十一時就寝。

十九日（水曜）晴（五十四度）

午前九時半起床。森部は研文社へ出てゆく。

丸尾君の細君が歳暮の礼に来て、門口で話して去る。森部の実家から梨を送つて来たので、返書。静岡の山本君から鮭の礼状、麴町の畑君から歳暮品の礼状が来た。

「半七捕物帳」を脱稿、更に訂正にかゝる。

諸方から喪中に付き年賀欠礼の郵書が続々来る。例年に比べて非常に多い。

四時頃に中野が来たので、その作「河内山宗春」について私の批評を云ひ聞かせる。中野はこれから松竹へゆくと云ひ、五時頃に去る。

中央公論の小森田君が私の「怪奇一夕話」の校正刷を持参、門口で去る。額田から一昨夜の礼状が来た。

「半七捕物帳」を訂正し終る。題は「新カチ／＼山」六十一枚。歳末来客等の多かつた為に、案外に時日を費やした。

七時半ごろ入浴。読書。九時頃に森部帰宅。やうやく校正を終つたといふ。つゞいて佐久間が来て、三十分ほど話して去る。

十一時就寝。午前五時頃まで眠られなかつた。

二十日（木曜）晴（五十三度）

午前十時起床。

「怪奇一夕話」を校正して、中央公論社に発送。「半七捕物帳」を講談社に発送。

午後一時頃に下山君が来て、歳暮品をくれた。

木太刀社依頼の短尺十枚に揮毫。旭川の渡辺博に歳暮品を発送。

北林余志子の戯曲「開港女気質」の後半を編集し終る。更に三宅大輔君の戯曲「崖」をよむ。いづれも「舞台」二月号の原稿である。

市川左団次から歳暮品をとどけて来た。大阪の岸井から郵書が来た。

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

二十一日（金曜）晴（五十四度）

午前十時起床。

おえいは品川の津沢方へ歳暮の礼に行き、それから青山へ墓参に廻つて、午ごろ帰宅。

喪中年賀欠礼を申越した人々に対して、当方からも年賀差控への返書をかく。あはせて三十八枚。

佐久間から結婚祝物の返礼をとどけて来た。

黒飛功君の戯曲「嫁」を編集。文芸家協会から本年度の年鑑に私の戯曲を掲載したいと云つて来たので、「鎌」を郵送。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。今夜も午前四時頃まで眠られなかった。

二十二日（土曜）陰（五十一度）

午前十時起床。

けふは冬至、例に依て姉と森部、おきみ、おすみにボ―ナスを遣る。

森君の舞踊劇「鶯の井」を編集し終る。午後一時頃に佐久間が来た。中村孝子が歳暮品を持参、門口で帰る。けふも喪中年賀欠礼の郵書が五枚到着、その返書をかく。

読書。七時半ごろ入浴、例のごとく柚湯である。十一時就寝。

二十三日（日曜）晴、陰（五十一度）

午前十時起床。けふは皇太子殿下御誕辰

十時半頃に海野の細君が歳暮の礼に来た。植木屋が盆栽の梅を持つて来た。朝は晴、やがて陰る。

額田から郵書が来たので、返書。静岡の山本君から蜜柑を送つて来たので、返書。

黒飛君の戯曲「嫁」を編集し終り、更に「西郷山房隨筆」五枚を書く。「舞台」新年号本日出来して届けて来た。

五時頃に三橋が来て、六時頃に去る。その頃から雨。

読書。九時ごろ入浴。十一時就寝。

二十四日（月曜）陰（五十六度）

午前十時起床。町内の仕事師が来て門松を立てる。

流山の高梨君から女兒出生の通知があつたので、祝の短尺をかいて送る。木太刀社から十句選を頼んで来たので、選了。あはせて短尺十枚に揮毫して返送。

午後、目黒の通りへ髪刈りにゆく。陰りながらも寒くない。今年の歳晚は例年よりも寒気が緩いやうである。

「舞台」新年号を林、池田、清水、原田、東儀、難波、高橋、津沢、小玉の諸家へ発送。

岡田から歳暮品をとどけて来た。長谷川君から陶々亭の礼状が来た。

四時頃に三橋が来て昨夜の傘をかへし、門口で話して去る。五時頃に黒川君が来て、一時間あまり話して去る。八時ごろ入浴。読書。九時半頃に佐久間が来て歳暮品をくれ、併せて亀屋原君の喜劇の原稿をとどける。

十一時就寝。

二十五日（火曜）陰（五十四度）

午前十時起床。

難波から歳暮品をとどけて来たので、返書。長谷川君にも返書。佐久間方へ蜜柑を持たせてやる。

森部に手伝はせて、座敷や応接間の掛地、額、置物などをかへる。これで春の準備は出来たのである。

年賀郵便七百五十余通を目黒郵便局に差出す。例年よりも少しく多いやうである。

大工の職人が来て、風呂場のあゆみの板の修繕をする。「西山房随筆」をかきつづける。一昨日の分をあはせて十一枚。

今夜はふたば会例会で、五時半頃に大村と三橋が来た。つづいて佐久間、三好、北林、岡田、額田が来た。北林は支那菓子を持参。私の江戸講話があつて、それから劇談、雑談。九時四十分ごろ散会。

それから入浴。十一時半就寝。

二十六日（水曜）晴（五十六度）

午前十時起床。

森部に命じて、吉岡医師、小田切医師と海野方へ歳暮の品をとどけさせる。

清水君と福島きよ子から歳暮品を送つて来たので、返書。宇野信夫君からその戯曲集を送つて来たので、返書。渥美君から郵書が来たので、返書。

「西郷山房随筆」を訂正。中野から郵書が来たの、返書。

帝劇の山本君から依頼の「河村瑞賢」の脚本、いつま

でも延引してゐるので、このごろ小閑を得たので起稿にかゝる。腹案はまだ纏まらないが、兎も角も第一幕の小田原木賃宿の場から着筆。どんな物になるか、まだはつきりとは判らない。

七時半ごろ入浴。読書。
十一時就寝。

二十七日（木曜）晴（五十六度）

午前九時起床。

脚本をかきつゞける。けふは餅搗きである。

午後一時頃に麴町の小川君の細君が歳暮品を持参、門口で話して去る。三時頃に東儀が歳暮の札に来て、四時頃に去る。

六時頃に講談社の鈴木君が「新カチ／＼山」の原稿料を持参。「半七捕物帳」は来年五月号を以て完結の筈であるが、少くも来年一杯ぐらゐは書き続けてくれといひ、三十分ほど話して去る。材料は幾らでもあるが、これにばかり囚はれてゐると、他の仕事の邪魔になつて困る。
八時頃入浴、読書。十一時就寝。

二十八日（金曜）陰（五十三度）

午前九時起床。

十時半頃からおえいと森部と三人連れで銀座の三越

へ赴き、中野と岡田へおえい床払ひの内祝の品配達をたのみ、更に横浜の小玉愛子方へも歳暮品の配達をたのみ、更に松屋へまはつて雑品数点をかひ、食堂で昼餐。午後二時四十分ごろ帰宅。

私の家の坂上はいよ／＼道路取広げに着手した。工事落成の上は、よほどの広い道路になるらしい。

三時頃に小田原の飯野が歳暮の札に来て、一時間ほど話して去る。つゞいて久保田君が菓子を持参、これも一時間余り話して去る。

湯河原会館の番頭から歳暮品を送つて来たので、返書。春陽堂からも歳暮品をとゞけて来た。

八時ごろ入浴。読書。十一時就寝。夜半に雨の音。

二十九日（土曜）晴（四十八度）

午前十時起床。雨はいつか雪となつて、家根も庭も一面に白い。

管野君から須賀川の葱を送つて来たので、返書。

戯曲をかきつゞける。午前中は牡丹雪ふりしきり、午後から止んで陰る。雪の日だけに寒い。

午後三時頃に佐久間が来た。

八時頃に入浴。読書。十時半就寝。家根の雪の落ちる音が頻りに聞える。

三十日（日曜）晴（五十八度）

午前九時半起床。快晴。雪の解ける音。

戯曲をかきつける。午後一時頃に佐久間が来た。おえいは女中を連れて渋谷へ新年用の買物にゆく。

大村から伊豆の蜜柑を送つて来たので、返書。大阪の岸井から郵書が来て、過日來感冒で寝てみたといふので、見舞の返書。

おきみとおすみは夕方から銀座へ買物にゆく。

今夜は六時廿五分から私のラヂオ喜劇「書画屋の半時間」を寿美蔵、左升、薙升、紅梅が放送するので、佐久間も聴きに来た。

感冒の気味であるので、今夜は入浴を休み、八時半頃から臥床。毎年のことながら、歳末は兎角感冒に罹り易いので困る。

三十一日（月曜）雨（五十一度）

午前十時起床。

姉とおえいは今朝も渋谷へ買物に出てゆく。

十一時頃に額田が来て鶏一羽をくれ、三十分ほど話して去る。

ついで麹町の小林の細君が歳暮品を持参。午餐を喫して、二時頃まで話して去る。小林君の依頼で、色紙五枚と短尺五枚に揮毫。

三時頃に松竹の木村君が来て、例の河村瑞賢の脚本を一中旬までに脱稿してくれといひ、四十分ほど話して去る。新年早々から仕事を急がなければならない事になった。

外出が出来ないので、自宅で年越しの蕎麦を祝ふ。雨が降つて寒い日である。大晦日にこの天気では、さなぎだに不景気の歳の暮、諸商人の難儀が思ひやられた。

戯曲をかきつける。森部等は額田に貰つた鶏を調理。

真川君から例年の如く富山の蒲鉾を発送して来たので、返書。

日暮れて、雨の音がいよ／＼強く聞える。除夜にこんなな降るのは珍しいことである。

感冒が癒えないので、今夜も入浴を休んで、服薬。

岡田から速達便で、内祝の礼状が来た。

十時就寝。十一時半頃から眼がさめて、曉まで眠られなかった。

姉と私夫婦、森部とおきみ、おすみ、一家六人無事に昭和九年を送り終る。

（翻刻担当…今藤晃裕）

書 名 岡本綺堂日記 昭和八年一月～昭和九年十二月

岡本綺堂日記研究会編（横山泰子監修、赤井紀美編集）

早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点 二〇二四・二〇二五年度

公募研究課題「岡本綺堂旧蔵資料に関する基礎的研究」（代表：横山泰子）

発行日 二〇二六年二月二八日

発行 早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点

代表 児玉竜一

〒一六九―八〇五〇

東京都新宿区西早稲田 一―六―一

早稲田大学早稲田キャンパス六号館

<https://prj-kyodo-enpaku.w.waseda.jp/index.html>

※本書にかかわる研究の一部はJSPS科研費23K12047の助成を受けたものである。